

昭和三十四年三月二十日印刷
昭和三十四年三月一日発行

(第十三卷 三月号
第四号 通巻第百二十号)

(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1959年 3月号

3月号



懸賞入選作品

乳房に火をつけるな 藤木仙治

未来幻想小説

『家畜人ヤプー』 沼正三

縛写真とその妖美を競う!!

グラビア 緊縛写真特集
(マニヤ垂涎の秘蔵写真、百十四葉
収載!)

【内容紹介】

- | | |
|----------------|----------------|
| ○妖精 (ニンフ)..... | 絹川 文代 |
| ○三ツ葵のプロファイル | 田代 悠子 |
| ○誘拐..... | 絹川 文代 |
| ○羅致..... | 絹川 文代 |
| ○プレイ..... | 浜本 喜美
三木 敬子 |
| ○木洩れ陽..... | 大塚 啓子 |
| ○夢路..... | 益田 房子 |
| ○競花..... | 絹川 文代 |
| ○首縄..... | 愛川 悦子 |
| ○シユミーズ..... | 田中 芳代 |
| ○放心..... | 愛川 悦子 |
| ○間諜成敗..... | 村井知可子 |
| ○三処締め..... | 大塚 啓子 |
| ○黒タイツ..... | 益田 房子 |
| ○観念..... | 花坂 道子 |

縛写真特集号 堂々完成!

臨時増刊号



昭和三十四年度、特集号の第一弾、こゝに放つ!

本誌が号を追うて、その内容を充実し昭和二十七年の揺籃期を経て次第に上り坂となってきた昭和二十八年度。今では、その頃の雑誌は中々入手することが出来ずやっとな探しても定価の幾倍かの値段を示しています。ここで読者の要望にこたえ、昭和二十八年発行中の雑誌から、特に悦虐小説として優秀な作品を選び出し、四馬馬孝氏を煩して、全部新しく挿画を描いて頂いて再録したものであります。

口絵では、四馬孝氏の八葉の華麗な責絵に加えて、最近の撮影緊縛写真百十数葉を一挙に発表いたしました。「サド特集号」では、ヌード写真を混ぜました為、いささか、その点不評でしたので今回は全部緊縛写真ばかりと致しました。口絵、本文共々相俟つて、必ずや皆様の期待にそうことが出来ると信じております。どうか、是非一冊を皆様の座右の宝典として末永く可愛がつて下さるよう、御願致します。

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

◎賞金

優作	壹万円	若干篇
秀作	五千元	若干篇
佳作	三千元	若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 本誌に適當した題材を扱ったもの
三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)

締切 但し多少の増減は差支えありません。
当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶつ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思

い出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊	(送料共)	二百円
三月分三冊	(送料共)	六百円
半年分六冊	(送料共)	千二百円
一年分十二冊	(送料共)	二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第四号
毎月一回一日発行
定価二百円

三月号

昭和三十四年二月二十日印刷
昭和三十四年三月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

昭和三十四年二月二十日印刷
昭和三十四年三月一日發行
昭和三十一年四月二十日發行
第三重郵更勿認可
三月号(第十三卷第四号)
(每月一回一日發行)

Osaka Japan



IBM. 2805

☆昭和二十八年度の総決算／当時満天下の読者を魅了

流麗／四馬孝・画集

(巧緻な画風が描破する名場面の数々！)

○白魚の閃え (「燐光」より)

○苦悶の前奏 (「女奴隷の手記」より)

○鉄鎖のきしみ (「続・囚衣」より)

○籠の白鳥 (「縛られた妻以前」より)

○宙に踊る (「妻は縛らず」より)

○アクロバット (「色狼」より)

○濡れる朱唇 (「長期刑」より)

○土蔵の花 (「夕の朝顔」より)

表紙……オフセット
五色刷

口絵……写真版刷八頁
グラビヤ
二十四頁

本文……悦虐小説満載
百八十数頁

奇譚グラス

緊と小説悦虐限定版

なつかしの「悦虐小説集」

(昭和二十八年度中の傑作、茲にアンコール登場！)

○雌獣の手記……近見 啓

○妻は縛らず……岡田 圭介

○夕の朝顔……那須不二雄

○続・囚衣……古川 裕子

○私の主題……岡田 咲子

○色狼……児島 光

○女奴隷の手記 北山カオル

○受難記……岡田 咲子

○怪奇曼陀羅教 緑 猛比古

西田琴江傷害致死事件調査より

○呪縛……辻村 隆

○悦虐の旅役者 青山三枝吉

○長期刑……古川 裕子

○私の想い出……岡田 咲子

○片耳伝奇……窪村 弘

○縛れた妻以前 早川新二郎

○燐光……久留木 栄

○地獄絵行脚……長岡愛一郎

○鉄格子の中に 小坂多美枝

臨時増刊号

「悦虐小説と緊縛写真」特集号

定価 三百円 (送共)

只今発売中

「サド特集号」は絶賛の中に売切れとなりました。『悦虐小説と緊縛写真』特集号も売切れとならないうち、早くお求め下さい。予約の方々には製本完成と共に、いち早くお届け致しました。

お申込は

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天星社

振替口座大阪第五〇〇四二番

御注文略号 (悦 特)



奇譚クラブ 復刊第四十号 三月 号 目次

絵口頭巻

縛り絵 お茶室……………滝 れい子・画

特写真「豆しほりと黒の下着」……………愛川悦子嬢

俊平戯画傑作集……………南村俊平・画

◎泣き笑い (操りマシンの構想)

◎そのポスターのように

四馬孝傑作集 ミンミン蟬……………四馬 孝・画

豪士の娘の火焙り(目次裏)……………浜 毅・画

縛り映画研究「五八年の時代劇を回顧」南方 佳男……………18

随想〓猿轡雑考……………嵯峨 紀世……………23

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

「奈緒美(なおり)」……………蒼野 礼……………26

告白「私のノロケ」……………田井 恍……………35

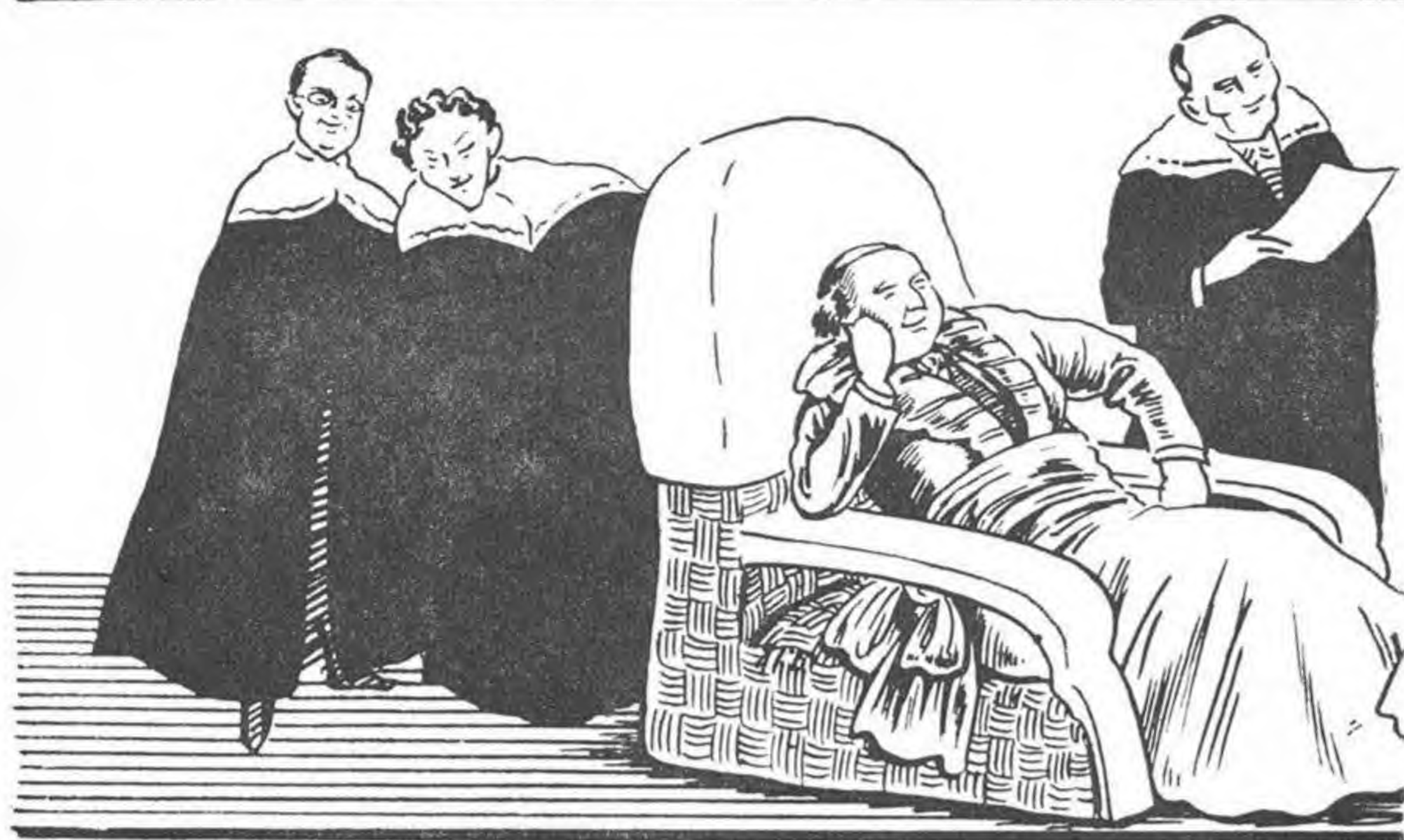
復讐奇談——生体轢断……………楨村 奏……………36

告白 病に臥しつゝ……………柴崎 黎子……………45

フエティズム抄私の切抜きから……………須藤 律夫……………50

創作〓異説大江山……………三条 卓史……………52

未来幻想マゾ小説「家畜人ヤプー」……………沼 正三……………60



緊縛映画スナツプ・シリーズ／大映映画／紹介

黄水仙の巻「花太郎呪文」「穴」……………牧 高志……………70

愛好者の記録……………とやま・かつひと……………76

映画通信 今月の縛られ女優達……………大河原珠樹……………78

私のイメージ「悶える女」……………近藤 一……………80

乗馬ズボン・シリーズ落穂集……………藤山 秀緒……………90

マゾヒズム百景……………馬場 好男……………98

「体験告白」赤い着物と白い縄……………桜井 良美……………100

「手記」女性のお腹に関して……………影浦 栄……………106

現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正……………109

体験記「逃亡徴用工」……………真金鍛二郎……………112

創作／旅 情……………藤川 力行……………120

追想告白 想い出の男優達……………菅 良太……………126

スクラップ・レポ……………真木不二雄……………128

新稿 ある夢想家の手帖から……………沼 正三……………130

サツポーター随想……………山口 幸一……………136

セミ体験記「暗い部屋」……………南方 佳男……………138

手帖雑報欄……………沼 正三……………143

創作 スリルの報酬……………久留木 栄……………144

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

乳房に火をつけるな……………藤木 仙治……………150

通信 「悦・特」読後感……………近藤 一……………160

読者通信…………………………167

豪士の娘の火焙り

荒くれ男の野武士達に襲われた野性的な豪士の娘が激しく抵抗した為、腰巻一枚に剥れて火焙りの私刑に遭おうとしているところ。



浜 毅

(案並に画)

お茶室

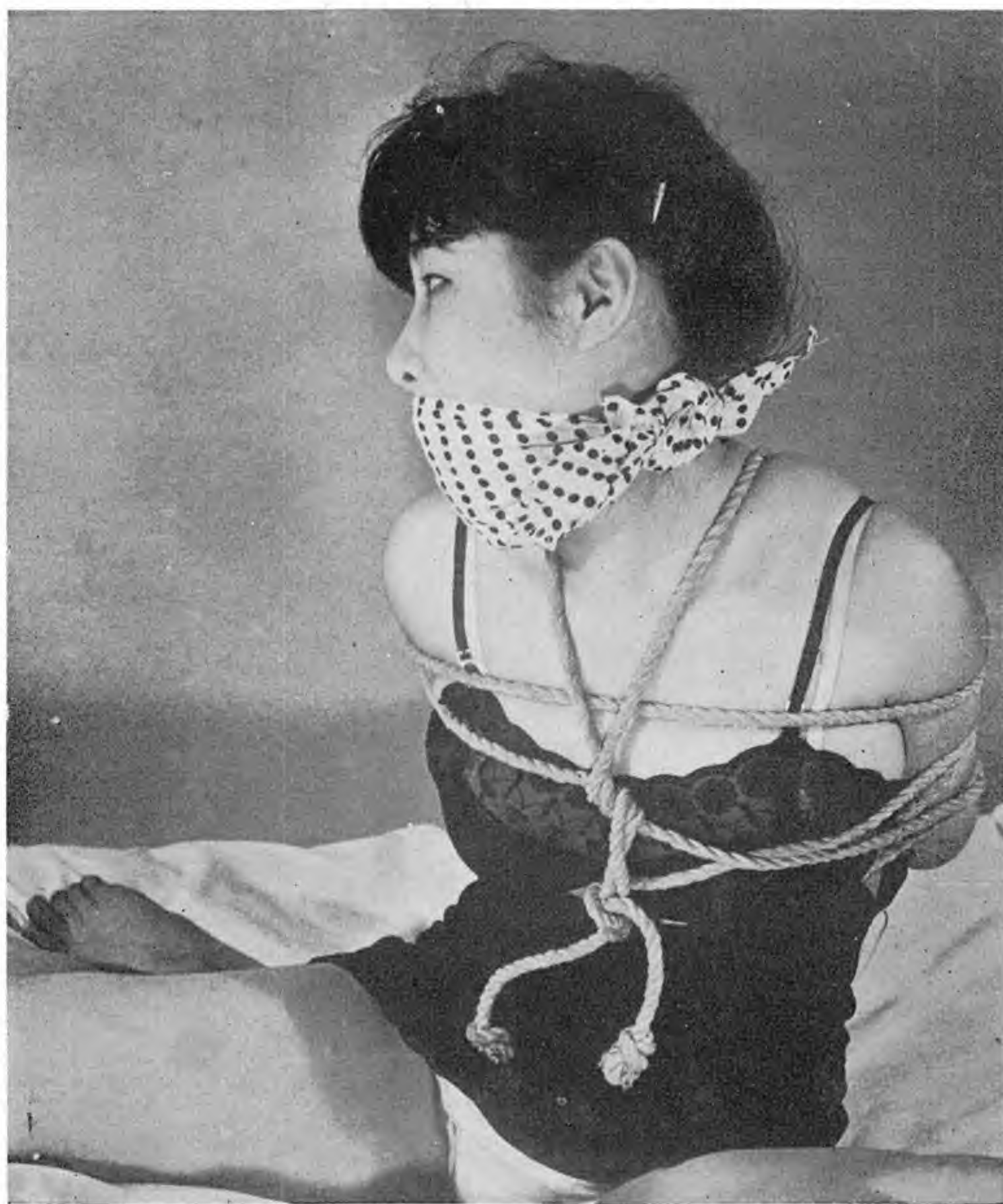
夕闇迫る茶室に、ひとり取り残された盛装の美女。掛樋の水の音だけが耳に淋しく響いてくる。



滝
れい子・画

<特 写 写 真>

豆しぼりと黒の下着





モデル 愛川悦子



モデル 愛川悦子

＜特 写 写 真＞

豆しぼりと黒の下着



泣き笑い

(揉りマシンの構想)

この機械にかけられると、どんな強情な者でも忽ち
白状してしまうそうです。



南村俊平・画

お前は、そのポスターの女役が好きなんだろう。
これから、それと同じ様にしてやるぜ、どうだ、と
もたのしみだろう。

南村俊平・画



そのポスターのように

ミンミン蟬

四馬孝・画

「さあ、これから、お前は美しい蟬になるんだッ。俺の云う通り
鳴き声を上げてみな」



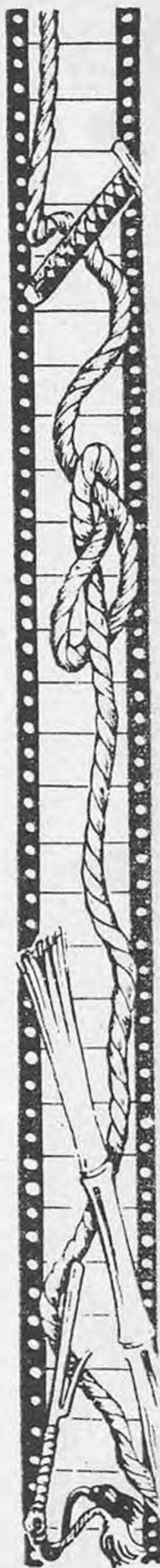
新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1959年3月号

(第十三巻 第四号 通刊第百二十号)





▽ 縛り映画の研究△

五八年の時代劇を回顧

南 方 佳 男

昨年はいじめて「一九五七年の時代劇映画から」二月号所載Ⅱを投稿してから丁度一年が参りました。今年もまた、縛りシーン回想の総決算の時期かと心得て、とりとめの無いながらも一筆書かせていただきます。

この一年の間には縛られ女優に、随分と変化が御座いました。少くとも新人の素晴らしい抬頭には、目を瞠らざるを得ない、と思います。

私は今年は昨年よりも時代劇を多く見てお

ります。月平均十二、三本、おそらく今年製作された時代劇映画の八〇%以上を見ている勘定になるでしょう。このように作品の良否にかゝらず多数の時代劇映画を見ることに、いまの私の仕事の一端なのです。無精者ですが、年に一度くらいはこうして皆様方に、自分の縛りへの研究を発表しなくてはならないような気になるわけです。

昨年と同じ様なスタイルで発表するのは、

あまりにも芸が御座いませんが、浅学ゆえに御容赦をお願いいたします。今回もやはり各社が、この一年間に製作致しました作品中から、優秀な女優の縛りシーンをそれぞれ抜き書きしてみよう。

(一) 東映の巻

どうしても時代劇映画なら東映を見る機会が多いようだ。私もこの社の作品は九五%以上もみている。

そこで今年の代表作は——「神変麝香猫」

大川恵子。「千両獅子」千原しのぶ。

「丹下左膳」長谷川裕見子、美空ひばり。「少年三国志」花園ひろみ、「月の輪族の復讐」

桜町弘子、「怪傑黒頭巾」大川恵子。

「旗本退屈男」長谷川裕見子。「紅顔無双流」

大川恵子などが目ばしい作品だろう。この会社は最近とみに女優の縛りシーンを避けているようだ。今年は製作数の四〇%しか女優の縛りを扱っていない。われわれにとっては憂うべきことだ。この四〇%のシーンの中にも、くだらない縛り方が多くなっている。前記の作品だけが、そのうちから甘い合格点を

いただけるものだろう。しかし、おしむらくは傑作、優秀作は一本もなかった。

昨年、私は東映へ次のような要望を持った。

①長谷川裕見子に苦悶する女の美を表現してもらいたい。②千原しのぶ、丘さとみなど中堅女優達の責め場面を求める。③桜町弘子、大川恵子、円山栄子など新人を活用すること。

でその成果は、

①②は完全に裏切られた。もっとも千原、丘にはこの一年の間ですっかり魅力を失ってい

るからどうでも良い。さて③だが、これだけは満足させてもらった。今年のうちに大川恵子はすっかり東映の縛られ女優NO1に座ってしまった。「神変麝香猫」の柱つなぎ「謎の蛇姫屋敷」の後手折檻「怪傑黒頭巾」の後手連行、鎖吊り「紅顔無双流」の後手連行、柱つなぎ等、昨年までは小生意気に見えたマスキに、あわれみの訴え、特に眼でそれを示す演技が巧くなったような気がする。

次に新人花園ひろみのデビューも私は非常に期待の注目をひいている。東映黄金時代に導いた三大縛られ女優のうち、田代百合子、高千穂ひづる、が松竹に去り、千原しのぶまた盛りを過ぎた現在、大川恵子は物静かな性格を買われて田代的な役割へ、また可憐型の花園ひろみは高千穂的な役割へ活用されるのではないかと想像される。花園ひろみは今年は「少年三国志」で本縄縛り馬上の引廻し、さらに後手で打首寸前(十二月号のスクリーン参照)変幻胡蝶の雨は誤りである(鳴門飛脚)で後手柱つなぎ等の縛られ方をしている。

これらの新人出現抬頭の中にも長谷川裕見子、千原しのぶの両ベテランの年期の入った演技はやはり違う。私の要求こそ通らなかった

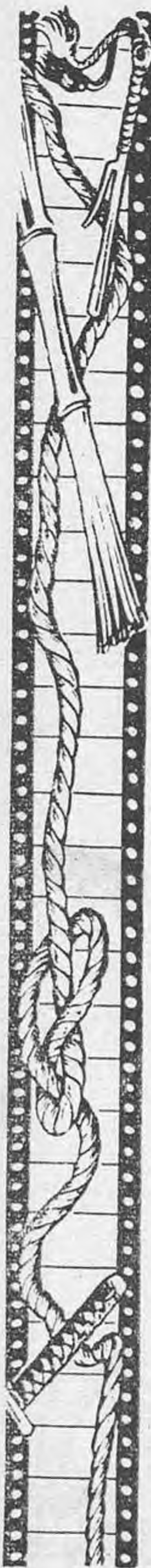
だが「丹下左膳」旗本退屈男ではほんの1カットだけでも縄目からのがれようとする長谷川裕見子の色気充滿した悶えの巧さ、また「千両獅子」での千原しのぶの特異な縛られポーズ、やはり若手とは違ふところがある。

そこでもう一人、新人から中堅へ、そして大川、花園と共に新しい東映の縛られ女優のホープへ桜町弘子が着々と座を占めようとしていることも今年の実績からのがせられない。

「月の輪族の復讐」「旗本退屈男」で共にグルグル巻の後手に縛られ座ったポーズで、かなり長い間セリフをしやべっていたが、その縄目の嚴重さ、高手小手に肌へ食い込んだ縄の締め加減は「彼女はマゾ?」とさえ疑いたくなる。本格的に縛らせる女優の代表だ。

長谷川裕見子が結婚、千原しのぶが役幅の限界、それに丘さとみの現代劇進出、円山栄子の伸びなやみ等が考えられている現在、以上の大川恵子、花園ひろみ、桜町弘子と、さらに現代劇から時代劇へ移りつつある中原ひとみを加えて彼女達がどのように可愛がられるかが新しい年への私の希望である。

(二) 大映の巻





「上品振って縛りが少い」——と私は昨年このように書いたと記憶する。その大映が、今年にはむしろ東映よりも女優をよく縛った。

「桃太郎侍」——木暮実千代、「花太郎呪文」

「近藤美恵子」、「怪猫呪いの壁」——近藤美恵子、「花の遊侠伝」——女優名不詳、「人肌孔雀」——浜世津子、三田登喜子、「血文字船」——浦路洋子などの作品は次第点ものだし、特に「桃太郎侍」のお暮の出来は優等生。

この会社には私の要望が最も忠実にとどいたような気がする。というのは、私は

①若手女優連をいまのうちにウントコいじめて今後の成長に役立てる。②阿井美千子、浜世津子など年増級も活用して画面をひきたてる。③子供向き映画の利用……等を求めた。

①は実に喜しいことに私の意に完全になかった。その代表女優が近藤美恵子だった。昨年暮の「おけさ鴉」で若女房の役で後手にされて以来、「花太郎呪文」で後手折檻、「三つ目の鳥人」で後手「怪猫呪いの壁」で死体となって板ハリツケ等たて続けに縛られた。女性らしい柔か味を縛りシーンにみせる点では映画界で最も巧いのではなからうか。この二人は昨年も「女狐屋敷」で巫女姿の素晴し

い縛られシーンを見せてくれたし、今後増々楽しみを加えて来た。

近藤に次いで三田登喜子もよく縛られた。「空飛ぶ若武者」で後手首を縛られて立姿で鉄砲の的にされたり「人肌孔雀」で後手柱つなぎ「山を飛ぶ狐姫」では板壁の鉄輪に両手を水平に開いて縛られ「鉄の処女」の刑へと……等いずれも型の違った縛られ方をしている。巧い演技とはいえずとも恐怖の表現力はかなり富んでいる。

近藤美恵子も三田登喜子も共通していえることは、これら縛られ役を通して出演数が多くなったことだ。共にミス日本、準ミス日本の肩書付きでその美貌は申すまでもないが、彼女達も長い間の不振時代を脱してそろそろ芽をふいてよい頃だ。

もう一人収穫がある。松竹から転籍して、加賀ちか子を改名した岸正子。まだ「鬼火灯籠」「山を飛ぶ狐姫」でラフな後手の座り縛りをみただけだが、小柄で可憐なマスクは、いままでこんな役ばかり受け持っていた中村玉緒よりずっと美人だから、今後重宝がられることだろう。

昨年まで縛られ役だった浦路洋子と中村玉

緒はこのところスランプ気味だ。

浦路洋子は「怪猫呪いの壁」で立檻縛りにあったが、ダラシない縛られ方だった。せめて「血文字船」の後手で、不振振回の態で捲土重来を期待。

中村玉緒は「天馬小太郎」の素晴らしいハリツケにあつてすぐに「遊侠五人男」では舟の中に後手グルグル巻にされ転がされたり、出足は悪くなかったが、後半で岸正子にお株を奪われたり、ドル箱の赤胴シリーズも子役の浅野寿々子にキヤストがえで気の毒なほどである。あのウイウイしさのただよう縛られポーズはイけるのだが。

年増級では木暮実千代の「桃太郎侍」は前に記したので省略、「八人の花嫁」で阿井美千子の前手「人肌孔雀」の浜世津子の雁字搦目の後手転がし（これは佳作だった）があり、橘公子の「女狐風呂」を合せて私の②の要望も多少は加味されていたと自己満足。

さてその上に特異な存在でグラマー毛利郁子が色っぽい縛られ役に頭をもたげ「消えた小判屋敷」で後手の吊し「執念の蛇」でも裸で蛇に巻かれて死ぬる役になるそう。縛りの新分野開拓に興味をそそる。

このように一段と縛りシーンに成長している大映へ、私はさらに新しい年への期待を最も多くよせている。

(三) 松竹の巻

歌舞伎座プロという傍系会社が新東宝モノに似かよった作品を量産する。福田公子という演技力のある女優を手に入れた。この二つのことで今年の松竹の縛り映画はクローズ・アップされて来た。

そこでまず、今年の名縛り場面を拾う。何といっても「江戸群盗伝」―福田公子、「七人若衆誕生」―佐乃美子、「大江戸の鐘」―嵯峨三智子、それに女優名はわからないが、「螢火」などである。このうち「江戸群盗伝」の福田公子の本縄(一寸珍しい縛り方だったが)縛りの拷問シーンは今年最高演技賞もなかったと回顧させられる。

福田公子の名は宝塚時代の「尾上さくら」の頃から映画によく出演するので知っていたが、彼女は不思議に縛られ役が無かった。一度「火の玉小僧」で、翼ひかると間違われて本誌を賑わせたことがあったが、実質、この「江戸群盗伝」が初縛られ役。演技も確かな

上に、年増どころに向くマスクもきいているから、今年の縛られ役はこの一本きりだったが楽しみは深いことだ。

そういえば今年の松竹の時代劇女優陣はすっかり変わった。せいぜい可憐な伊吹友木子が残っている程度だ。従来あまり縛られなかった伊吹も「清水の佐太郎」で後手に細引で縛られたが、余り感心しなかった。

そこで芽を吹いた女優というのは、佐乃美子、泉京子らの二線級、それにN・T・V所屬だが松竹映画だけは出演している富士真奈美というところだろう。

佐乃美子は「七人若衆誕生」で後手にぎっしり縛られ、雨にうたれたり、石籠詰の刑にされたりでまずまずの及第点をとっている。泉京子も「大盗小盗」では囚衣姿で本縄を掛けられ馬上引廻しの上にハリツケにされ、おまけに槍で突かれて死ぬところまで演じるそう。さだめし大胆不敵に見せるだろう。

可愛い清純な町娘役の富士真奈美は「七人若衆誕生」で後手に縛られ、モミクチャに動かし廻された。「大盗小盗」でも泉京子同様にハリツケの運命(救われる)だというのが興味がひかれる。クリクリした眼の芝居が予

供っぽくてよい。それにしても昨年まで活躍していた紫千代、山鳩くるみ等が一步退いているのは心残りだ。

忘れてならないのが「大江戸の鐘」で久々に嵯峨三智子が見せた縛り、意外に色気も乏しく縄目に精彩が無かったが、灰色の囚衣姿で本縄縛りにされ、かなり長い時間、引廻しの場面をみせた。松竹らしい真面目なシーンだったので甘い採点をした。

この社の作品は今年も昨年と同様に、一発必中型の縛りシーンが多かった。要は女優を縛る機会を増やす事だろう。その点で冒頭に書いた歌舞伎座作品に今後の期待がかけられよう。

そうそうもう一つ、歌舞座作品で欠かされない「螢火」での仕出し女優が付き放されてよろめきながら捕吏に連行されて行く場面は秀逸だった。

(四) 新東宝の巻

特有のマニヤ向き映画の製作は一段と磨きをかけている。反面、縛らない映画も多かったが……まあピックアップすれば「朱桜判官」―若杉嘉津子、「花嫁殺人魔」―野々村



律子、「サタン城の花嫁」―女優名不詳、これは現代劇になるが「戦雲アジャの女王」―高倉みゆき、「憲兵と幽霊」―久保菜穂子などいづれ採点は悪くない。

さてこの会社の縛られ女優NO1は何といっても年増役で円熟した演技をみせる若杉嘉津子だ。今年は「朱桜判官」で吊り責め、後手縛り、「毒婦高橋お伝」で前手縛り連行の二本きりだったが、「朱桜判官」の迫力満ちた縛られ方はまず今年の優等候補になると思う。

ところが昨年は本数なら同社のNO1だった可憐娘の北沢典子が、このところ縛られなくなった。かろうじて「サタン城の魔王」で化粧縄をかけられた程度。縛りの巧い山田監督の演出としては不満。同じ映画の仕出し女優二人の磔縛りに比較して疑念がわく。

まあまあそこらは一步譲って嬉しかったのは、まだ縛られ姿を見たことのなかった日比野恵子が「浮世風呂の死美人」で後手縛り折檻を受け、久保菜穂子が現代劇ながら「憲兵と幽霊」で刎状のベッドへ雁字搦目にゆわえられ拷問を受けるなど、好みの女優だけに非常に有難かった。それにしても期待した「毒

蛇のお蘭」で小畑絹子は片手首に捕縄を巻いてピストルで立廻りするが、縛られるシーンを見せなかったのは大きなミスティックだ。

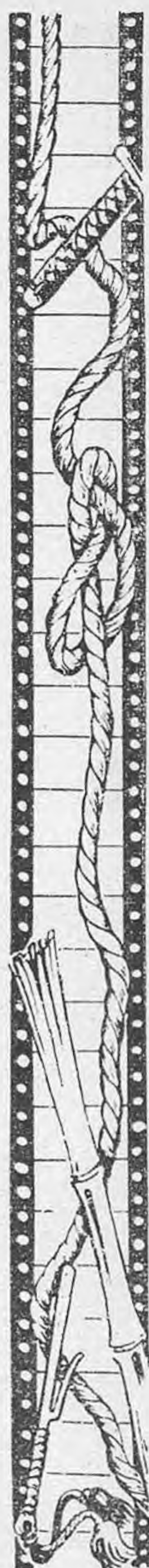
ついでに「緋ぢりめん女大名」で後手に縛られた田原知佐子のそれはよいとしても、牢内で上半身裸の娘を俯伏せにして両手を横木にひろげて縛り、肌に入墨をするシーンはゲテ物もグロすぎてあまりいただけなかった。

最後に同社は今年、製作本数の三五%程度しか縛りをあつかっていない事を追加、同時に私個人の感想として、どこか一貫したもののなかったことを書きたしておく。

(五) 東宝の巻、日活の巻

日活は今年は私の念願も空しく、ついに一本も時代劇を作らなかった。ギャングものや太陽族ものの嫌いな私は、だから日活映画を見る機会を失っている。これじゃ書く事がないので来年廻しだ。

東宝映画もいまのところ縛りのあるものをまだ一本も見えていない。しかしここには大きな希望を胸に抱いて待っている。「隠し砦の三悪人」の上原美佐が馬上に後手に縛られて引廻しにあうそれだ。黒沢明監督の厳しいお



眼がねにかなったという彼女が野性と気品を兼ね備えているというそのマスクで、どのような強烈な印象を与えて呉れるか待遠い。

勝手きままに書きたくってしまいました。ところで、いまフトこんな事を考えつきました。今年の縛られ女優ベスト10を選んだら

- ① 福田公子 (江戸群盗伝)
 - ② 若杉嘉津子 (朱桜判官)
 - ③ 木暮実千代 (桃太郎侍)
 - ④ 大川恵子 (紅顔無双流、神変麝香猫など)
 - ⑤ 近藤美恵子 (花太郎呪文、怪猫呪いの壁)
 - ⑥ 桜町弘子 (月の輪族の復讐など)
 - ⑦ 長谷川裕見子 (丹下左膳、旗本退屈男)
 - ⑧ 嵯峨三智子 (大江戸の鐘)
 - ⑨ 花園ひろみ (少年三国志、鳴門飛脚など)
 - ⑩ 三田登喜子 (人肌孔雀、山を飛ぶ狐姫)
- 次点 佐乃美子 (七人若衆誕生)

但しこの選考には「大盗小盗」「血文字船」など未観賞映画は加えておりません。これら映画が今年作品の最後の追い込み、ガラリ順位を違えるほど出来ばえの良し事を念じて筆を置きましょう。

猿 轡 雑 考

嗟 峨 紀 世

私は非常に映画が好きである。だが、居住地が、僅かだが都会から離れた地域である為め、観たいと思う映画を観損う事もある。それでも何かにかこつけて、月に二、三本は観ているのだが、私の観る映画はその殆どが緊縛場面のある、又はありそうなものばかりで従って、邦・洋画、時代劇、現代劇を問わない訳であるが、唯、期待外れで緊縛場面のない映画であった場合は、至極がっかりする。こんな具合だから、緊縛場面が現われた時の私の胸のときめきは非常に大きい。特に猿轡を嵌められた女優の現われた時の私の状態は、冷静な第三者が見たら、きっと異様に思うであろう程激しい。それ程、私は猿轡を好む。そして、緊縛状態には猿轡が付く物と迄思っているのである。だから、映画にしる、小説の挿絵にしる、当然緊縛状態に猿轡もされていなければならぬ筈の場面に、それがされ

ていないと丁度出枯らしのお茶を飲んだ時のような味気なさ、物足りなさを感じる。勿論猿轡が必要ない場合、又は嵌めてあつては都合の悪い場合もあるのだが、私としては無茶かも知れないが、そんな場合でも出来るだけ猿轡を試みたい、と思う事すらある。例えば、何かを白状させる為め拷問を加える場合など、猿轡をさせた上で責め上げ、白状するしないの意志表示は首の振り方で知らせ、縦に振ったら猿轡を外して白状させる、といったようなやり方でも別におかしくはないように思うのである。それ程、猿轡を嵌めた緊縛態が好きなのである。そんな具合だから、時折り猿轡そのものについて、その方法、種類、材料のようなものを色々と考えてみる事がある。それらを思いつく儘に次に纏めてみたいと思う。

一、目的

御承知のように、猿轡は「声を出させない」事を目的としたものである。だから、声を出しては都合の悪い場合、例えば、強盗が侵入先の家人に嵌めたり、私刑や折檻をする時、それを加えられる者に噛ませたりするのである。又、誘拐する時などもよく噛ませるが、こんな時は前記の場合と違って、出来るだけ手早くなされるようである。

二、方法

よく映画では、布でただ口を覆うだけで、ウンともスンともいわなくなるが、あれは全くの嘘であつて、布で口を覆うだけならば幾分低くはなつても、声どころか、言葉も聞えうとすれば、必らず口中にものを詰め込み、それを吐き出せぬように上から押えるようにしなければならぬ。その為めには、布などで口を覆うか、口唇を割って口にくわえるように布などを噛ませるかしなければ用を為さない。

三、種類

よく猿轡を嵌めるとか噛ませるとかいう表現が使われるが、嵌めると噛ませるは同じようであるが、実は外見上に相違があると思う。そこで、その各々を区別して考えてみると、

1、嵌める

これは、口中に詰め込んだものを吐き出さ

せない為めに、布や皮などで、顔の下半面を覆う場合であつて、その覆い方に、更に次の二通りが考えられる。

イ、口と共に鼻も覆う
口中にものが詰め込まれば、舌を動かす事が出来ないからものはいえない。つまり言葉はいえない。だが、声はのどから出て来、鼻腔と通じている為め、その声が鼻から洩れて出る。そこで、口を覆うと同時に鼻も一緒に覆ってしまうと、その鼻から洩れる声が幾分消されて低くなり、「ム、ム、ム」という呻くような声にしかならない。だから、猿轡

の目的からいえば最も効果的といえるわけであるが、普通覆い方がゆるければ効果がない為め、鼻が潰れる程きつく覆う。その為め、非常に息苦しい。ましてや、そんなにして責め上げるなどは不可能である。だから、こんな覆い方は監禁などには向くが、他には用いられない。

ロ、口だけを覆う

この覆い方は、前記のように鼻から声が洩れるが、息苦しさがないから長く嵌めておく事も出来るし、私刑や折檻にも嵌めていてよいと思う。外見上、次の様な二通りの覆い方が



ある。

○狭い巾の布で覆う場合は、本当の口だけを覆う事になる。

○広い巾の布、又は皮の嵌口具などの場合は鼻の直ぐ下から顎の下、時として咽喉の方迄を広く覆う事になる。

2、噛ませる

前記の嵌めるが覆うのに反して、これは、馬に轡をするのと同じように、口中に詰め込んだものを押えるように、口唇を割り、上下の歯の間に布などを噛ませた上、その布などを頬から後首すじで結ぶというやり方で、前記の覆ったものが、何かにこすりつけ、又顎を動かす事によって外れる事があるのに反して、結び目を解かぬ以上どうしても外されない点、有利と思う。だが、鼻の他に大きく開いた口の隙間からも「ア、ア」という声が洩れて出るし、顔も幾分みにくくなる恐れがある。

四、材料

猿轡は、口中にものを詰め、その上を押え覆うものである以上、材料もその各々について考えてみなければならぬ。

1、詰めるもの

普通、布切れやハンカチ、綿などを丸めたものが多いようだが、私はスポンジの小さい珠などもよいように思う。これだとそれに布をつけるか、布で包むかすると、両端が噛ませる猿轡にも直ぐする事が出来る。要するに

舌の運動を止める為めのものだから、何でもよい事にはなるが、映画「羅生門」(芥川竜之介の藪の中といった方がよいかも知れないが)のように枯葉を詰め込むとか、私の居住地の近くの都市であった殺人事件のように新聞紙を詰め込むというのは、私は好まない。2、覆うもの

日本では昔から布が多いようである。特に手拭が多く使われたらしい。他に同じ布でもハンカチ、三尺帯などもよく使われている。布以外では、よく小説に出てくる皮の嵌口具、これなどは口の中にものを詰め込まなくても充分猿轡としての役目を果たしてくれると思う。私はこれに似たもので、自転車のチューブを切り開いたものや、ビニールの風呂敷などを考えた。これはゴムやビニールであるから鼻迄覆うわけにはゆかないが、声は充分遮断して外へは洩れないと思う。この他に口唇を割って噛ませるのに皮バンドも用いられるようだが、これは口角に傷がつくようでは好まない。

以上、私なりの猿轡考ともいうべき事項を並べてみた訳であるが、要するに猿轡が声を立てさせない為めに嵌めたり、噛ませたりするものである点から考えると、日本の映画などは全く出たら目だと思ふのである。単に手拭で口を、而かも軽く覆う程度で、中には下へずり下がりそうになったものを口で支えて



いるように見えるもの迄ある。もっと真実感のあるようにきっちり嵌めて欲しいものである。洋画では、全くうらやましい程、きっちり嵌めている。「ボワニー分岐点」にする「殺人狂想曲(時代だったかも知れない)」にしろ、真実感溢れる嵌め方である。猿轡から洩れる声にしてもそうである。邦画では、猿轡の中からはウンともスンとも声が出ないが、洋画では「ボワニー分岐点」など「ウー、ウー」と本当に口中にものを詰められているような声を出している。如何に国柄が異なる

とはいえ、余りにも嘘であっては馬鹿々々しくなる事さえある。その点、奇巧の誌上に於ける写真でも、口絵でも、真実感おう溢した猿轡の嵌め方で全く嬉しい。唯、惜しいのは別に拷問している場合でも、又されているポーズでもないのに猿轡のないものがあり、何となく物足りなく感じさせられる事がある点である。この点、今後の編集上御配慮願いたいと思っている。

◎ 本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品 ◎

奈
(な)
緒
(お)
美
(み)

蒼 野 礼

一

夫の四十九日が済むと、奈緒美は虚ろな殻と化していたかのよう
な体が、息吹くのを覚えた。息吹いて、悶えるのだ。

瀬崎の遺品である織い革鞭を胸に抱き締めて、歯咬みして哭いて
夜を明すこともあった。

「なぜ死んだの……」

漏らす声は、それである。

この体を責めてくれる人は、もういないのだ。この若い美しい体
を……

せつなさが、胸に溢れた。

瀬崎が、出張に発つ前夜の責めが最後になって、翌日、飛行機事
故に遇い彼は不帰の人となっていたのである。

あの夜の責めは、劇しく凄かったと、奈緒美は懷しむ。幾度か氣
を喪って、風呂場へ運ばれ、水を浴びせられて正氣に返ると、又引
き立てられて行った——

責めの仕上げの、臀責めが始まる頃には、もう夜が少し白みかけ
てさえた——

「ううッ……」

円く張り出した白い臀部へ、縫針が突立っていつていた。

——夫は満ち足りて発って行った。譬え、死出の旅であったとし
ても、その満足があったことが永久のものとなって、残された者よ
り却って倅せともいえるだろう……

奈緒美は二階の部屋を他人に貸そうと思った。四つある室が全
部、個室の体裁になっているので、貸間にするには詭向きだった。

町へ行って、周旋屋に世話を頼んだ。相場も知らないの、貸賃も適当に任せた。

周旋屋は早速翌日、一人の希望者を伴って来た。

「こんな大きなお屋敷でしたとは」

と、周旋屋は来て見て吃驚したようで、深い木立を囲らし、築山や広い池のある庭構えに眸を瞪り、

「君。ここにきめなさいよ。室代も安いし、こんな静かな環境だったら申し分ないだろう。え？」

「はあ」

希望者は大学生だった。今居る処が雑騒な場所で、勉強に差支えるから変りたい意向らしかった。

「お願いします」

と、喜色を浮べていった。

「こちらこそ」

奈緒美は頭を下げた。

「僕、小島三郎といいます。K大の法科、二年生です。早速、明日移って来たいのですが？」

翌日、小島が越して来ると、奈緒美は早目に風呂を立て、汗を掻いた彼を先に這入らせた。ついでに、夕食も振舞った。

「毎日、外食ばかりしてますから、実に美味しい」

といって、小島は健啖に奈緒美の手作りの料理を平げた。

「こんなことして貰って、済みません」

満腹したあとに、そういった。

奈緒美は笑って、

「特別に。お引越し祝ですわ」

が、奈緒美はそれから毎日、小島の食事の面倒をみた。朝も夜も一緒に食卓に向う。初めの間は、小島は恐縮していたが、段々慣れ

て来て、時にはお菜の不平をいうようにすらなった。

「肉はもう飽いちやったな」

「だって、お魚は嫌いなんですよ？」

「だけど毎日、肉類ばかり喰べられないよ……」

奈緒美は、不思議に腹が立たなかったばかりか、そんな我儘をいって困らせるのが、嬉しい心地がする。

奈緒美は、小島が一つ屋根の下に暮すようになってから、体の中の青い焰が、不思議な鎮まりをしたのを覚えていた。

いわば自棄的な火災の悶えが、虚しいその火勢を収めて、すつと芯が立った感じであった。奈緒美は、それが自分でよく納得せられた。

その変化は、紛れもなく小島の存在から与えられ、小島という対象を見出して、炎が小さく強く、無駄なく燃え出したといっている。

「あなたは」

と、ある日の夕餉のあと、奈緒美は急に語調を変えて口を切っていた。

「う……美しい人ね」

つい吃っていた。

小島は、広縁に座布団を敷いて座って、庭の暮色に眸を凝らしていたが、その横顔のまま微かに頬を染め、稍あって、

「美しいのは、奥さんです」

いうなり、颯と立上って逃げるように二階の部屋へ上って行った。

奈緒美は後を追った。堰が切れていた。

小島は狼狽しながら、椅子を勧めた。

遠くで稲妻が閃めいているのが、開いた窓から見える。雨が来るのだろうか、空の色が夜の闇の暗さばかりでない、どす黒さだ。

奈緒美は、着物の胸元をはだけて、小島の眸に晒した。思ったより豊かな胸だった。

椅子に座って、小島の顔を見上げ、奈緒美は艶然と嗤った。

小島は無言だった。突立って、まじまじと奈緒美を眺めた。

小島は、机の上のシガレットケースから一本抜いて、火を点けると、ふっーと烟りを奈緒美の顔に吹きつけた。

いきなり土砂降りに降って来た。小島は慌てて窓を閉めた。屋敷の周りには雨の音がたちこめた。

奈緒美は小島の瞳をじっとみつめながら、

「この体をどんな虐い目に遇わしてくれたっていいわ。叩いても、抓っても、撲っても」

一語々に力を入れた。いいながら身の内に、かあっと燃える熾烈な炎を感じた。

小島は一瞬、けうとい眸つきをした。奈緒美は縋るように、

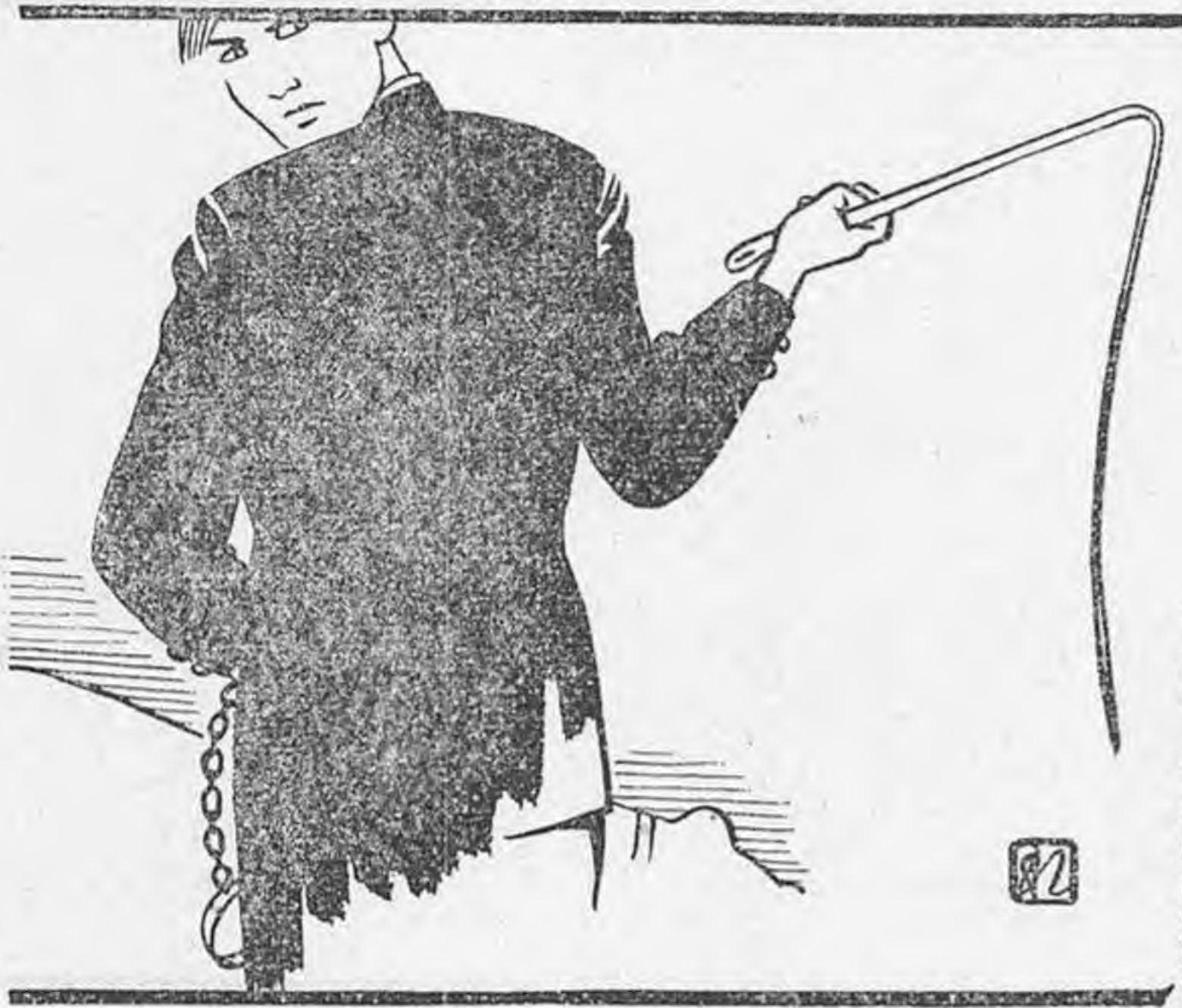
「ねえ」

「……よし」

やがて、低く小島は答えた。眸に妖しい熱気が滲んでいた。

奈緒美は先に立って、階下に降りて行った。

簞笥の中から、奈緒美が取り出した鉄鎖、鉄の足枷、手枷、針束、細引の環、革鞭等々の責め具を見ると、小島はすっかり驚嘆して了っていた。



そうして、それらの道具から、奈緒美の過去の生活のムードを、何か原色的な色濃さで看取っていた。

それで初めて奈緒美の言葉が、すくと胸に落ちて納得された。奈緒美は、責め具の使用法を説明した。十文字縛り、海老縛り、吊縛り等も、キラキラする眸で教えてやった。

「わかった？」

「うん」

「さあ、何かいい方法あって？」

奈緒美はいつて柱に凭れて小島の顔を視た。柱は円柱で室の隅に、にゆうっと立っている。見たところは変哲ないが、実は縛り用の柱である。

「……奥さん。貴女は変わった人……」

というのを喉奥に嚥んで、小島は秀麗な顔を少し蒼くしながら、革鞭と細引を手に執ると、近寄って来つつ不意に鞭を一閃させた。雨の音の中に奈緒美の微かな悲鳴が流れて、胸の上辺りに鮮やかな赤痕が走った。

二

ベッドの上に窓越しに朝陽が当たっている。陽の舌が奈緒美の眸の上にも届いて、ちらちらとまぶされて、眠りを破られた。這入って来た小島が笑っていた。手鏡を持っている。これで眸をまぶしたのだろう。

「毛布だけで寒くなかったか？」

と、奈緒美を眺めている。

奈緒美は起上った。

「御飯の支度をしますわ」

「いいんだ。今日は学校を休む。ーおい」

肩を小突いた。

「……はい」

小島の手から織い革鞭が垂れた。

奈緒美は心が弾んだ。

小島の方から、すすんで責める気になつてくれたのが嬉しい。

昨夜の責めは微温的で、奈緒美は不満だった。柱に括られて胸を撲たれたが、小島の仕打にはどこかふっ切れない手加減があつて、物足りない気持の残糟が蟠まったまま、歇んでいたのだ。

時間にして、一時間もなかったろう。胸が赤く腫れると、次には背中を撲ち、それで小島は細引を解いて、二階へ上つて行つて了つたのだ。

奈緒美は炎の燐りを燃やしなが、自室へ引取つた。

だから、昨夜の延長だと思つと、奈緒美の胸は今、期待に弾む——奈緒美は眼を閉じた。

存分にして、という恰好だ。恰好で示すだけでは足りず、口で告げた。

「あなたの思うように責めて……」

「おお、責めてやる」

小島の言葉遣いは一変して、粗暴な響があつた。小島の中の



柔弱な男の一面がどこかへ放擲されて、俄に荒々しい男が立上つて来たような感じがあつた。

それは昨夜、小島の部屋で挑発的に体を見せたとき、「肩を脱ぎな……」と崩れた口調でいって、奈緒美の顔に真の烟りを吹きつけたときにも、ふっと微かに感じたものだったが、それが今、狂暴な姿勢で現われたといえそうだった。

小島は手枷と足枷も運んで来ていた。鉄具と鎖の触れ合う音が立った。

「俯伏せになれ」

奈緒美は姿勢を一転させた。スンナリとした美しい姿勢が、白々と陽に映えた。手枷が両手頸に嵌められて、附属している鎖が、ベットの鉄柵の両端にがらと音を立てて巻きつけられた。奈緒美の両手は閉じて、釣上り気味に伸ばされた。指が鉄柵を掴むには三程程遠い。その三程の距離は、絶対縮まらないものだった。

小島は無言で、次に脚を縛りにかかった。枷の棒を拡げ直接、足頸の端の鉄の棒とを一緒に連結した。白い踵が鉄柵の両端に、ぶら下っている恰好だった。

完全な緊縛だった。身ゆるぎ一つできない。ビシッ。

「うわあー」

奈緒美は悲鳴を挙げた。臀の肉が破れたかと思うほど、劇しい鞭

撲ちだった。筋肉を収縮することもかなわないようだった。

ビシッ

「うわあー」

夜会巻風に束ね上げていた髪がゆるんで、顔に乱れ落ちた。その髪を奈緒美は口に咥えて、歯で噛みしめた。

小島は一切無言で、鞭を振いつづけた。大上段から、風鳴りを立てて振り下ろした。

解き放された奈緒美は、這って行った。髪が、もうすっかりほどけて、畳を摺った。

痛さに、立っては行けないのだ。

小島がなにか言って笑ったが、奈緒美は聞きとれなかった。多分いい恰好だともいったのだろう。

「返事しないのか」

小島は撲つ素振りをした。

「ああー待ってー」

声の下に、小島は平手で撲った。

痛かったですか、奥様？ と小島は玄関で靴を穿きながら、目で奈緒美へいつていた。

「ええ」

奈緒美は頷いて、

「どうしても学校へ行くの？」

「そうさ」

「さっきは休むといってたくせに——」

「友達に用があったのを思い出したんだ」

小島は繊い指で靴紐を器用に結ぶと、三和土に立って、ひよいと腰を折って顔を差し出した。奈緒美は膝立ちして唇を合わせた。

小島が出て行ってうとうと、奈緒美はまだ這うようにして二階へ上り、小島の部屋に這入った。

壁には黒い学生服が掛っている。奈緒美はその服に顔を埋めた。「この人……とうとう責めてくれたわ……」

服からは、苳の匂いと、小島がつけているポマードの匂いが、微かに鼻膜を擦った。

玄関の格子戸が開く音が耳に届いた。

「ごめんください」

訪う声がした。

「はい」

と応えておいて、奈緒美は慌てて着物を着直した。

客は、小島を世話した周旋屋だった。

「先日は、どうも——」

「こちらこそ、お世話様になりました」

奈緒美はいつて、彼と連れ立っている背広服の男の方を視た。

「この方が、一度部屋を見たいと仰言るのですが」

「あの」

遮るように奈緒美はいつた。

「もうお部屋は貸さないことにしました」

周旋屋は腹立てて帰って行った。

奈緒美は室でピアノを弾きながら、時折、手を休めてなにか憑れたように一点を凝平と瞋める風だった。

奈緒美の頭を占めているのは最早、小島のことだけだった。

小島一人さえ居てくれたら、室なぞ幾つ遊んでいても構わない。

小島からも金を貰う気はなかった。

多額の貯金と、航空会社から受取った高額な弔慰金とで、一生遊んで暮らせる生活が保証されているのだ。

——自分がここまで踏み切っているのに、小島の方はどうなのだろう？ と、奈緒美が落ち込む物想いはそこだった。

小島が唯、責めの遊戯だけで、満足していてくれるだろうか？

夜になったが、小島は帰って来ない。

食卓に並んだ料理は、冷めて了った。

——外は又、雨の音がしめやかに立っている。雨で帰りを阻れているのだろうか。硝子戸を開けて庭を視ると、微かな霧雨だ。濡れるというほどでもない。省線の電車の駅から、三丁余りの道程しかないのだから、走って来たっていい筈だ。

なにかの事情で帰れぬのなら、電話で報らせてくれる位、してくれたら……

奈緒美は、暗い庭に眸を投げながら、唇を噛んだ。素肌に直接に纏った薄い羽根のような細の着物が体を透している……

三

「今日まで何処に行っていたのっ」

奈緒美は哭いた。

二十日ぶりに帰って来た小島だった。顔を視た瞬間、止めようもない劇しさで泪が眸から溢れて了っていた。

「よし、よし……」

あやすようなことをいいながら、小島は玄関で靴を脱いだが、上ると、

「さあ。着物を脱いで」

「いや……」

「おやおや、帰って来るんじやなかった」

茶の間で肩から着物をすべらせながら奈緒美はまだ哭いた。脱衣すると、成熟した女がぱあっと匂うのに、哭く仕草はまるで子供の

ようだった。

「いつまで、哭くっ」

剥き出させた肌を、小島は背ろから叩いた。肌は、白い絨肌に戻っていた。

「這え」

犬のように這わしておいて、小島は美事な肢態を觀賞した。

「まだ哭く……」

が、それはもう、喜悅的な感動の鳴咽であるのは、小島にもわかっていた。

じっさい、奈緒美は全身に顫えるような感動を覚えた。

二十日の間の苦しみも、つらさも、悶えも、この瞬間に嘘のように消えて了っていた。

小島があの日、延長のように、すすんで責め行為にはいつて来たことが、意外な、望外な、そうして安堵的な、深い感動の海に浸らせた。

「……あなた」

肌が、鞭の美味を慕うのだ。

「おお」

小島の眸に、焰が点った。彼は立上って、美しい「犬」の周りを廻った。犬は焦れ、それ自体責めに通じた。

もっと焦らそう。

「奈緒美。どこを責めて欲しい」

「ち……ぶさ……を」

「乳房？」

「……叩いてっ」

「臀は？」

「……お臀でも……」

「どうする？」



「……鞭で撲ってっ」

「髪は。その長い髪は？」

「……引き摺ってっ」

犬は全身をくねらせて、劇しく身悶えた。

「どこでも、早く責めて下さいっ」

階下には、適当な椅子がないので、小島は奈緒美を室に上げて自分の勉強椅子を使うことにしたが、奈緒美は場所を風呂場にして欲しいと乞うた。

「気を喪ったら、ホースで水をかけて下さい」

奈緒美に椅子を持たせて、小島は広い明るい風呂場に行き、奈緒美を椅子に縛った。乳房だけはみ出した形に、胸を幾重にも締めつけて取り巻き、脚を縛りにかかる、奈緒美は微かに嗤って、

「こうした方が……」

脚をぎりぎり緊縛すると、すっかり椅子に固定され、椅子と一体になった。

自分の豊かな乳房を、奈緒美は眺めていたが、その片方に激しい鞭が音を立てて、紅色の縞が描かれると、眸を閉じて稍顔を上にのぞけた。硝子張りの天井まで届いている、鉢植の芭蕉の葉を透した青い光線が、凄艶な顔を斑らに彩った。

「ああッ」

更に強く鞭が襲う。

「うあッ」

奈緒美は天井に眸を剝いて、牀中の筋肉を引き攣らせて、喚めいた。眦から涙が玉になって噴き落ちていた。

両の乳房が交互に打たれて、その白い双丘が無惨な縞綾を示し、紫赤色の彩りを帯びていくと、奈緒美は項を垂れて喪心した。ホースの水が劇しく浴びせられた。

気付いて奈緒美は嗤う。再び振上げられる小島の鞭を、凝乎と眸で刈える。

それが繰り返された。

「ひどい人……」

自由にされて、奈緒美は椅子から立つと黒ずんでいる乳房をそつと見降して、いった。

「こんなにしてしまって……」

「ふふふ。少しはこたえたか」

「ええ」

休憩しようと、小島はいつて、奈緒美の手を執って市松のタイルの石段を昇ると、

「珈琲でも淹れろ」

台所の方へ押しやって、茶の間に這入った。寝転んで、台所へ眸を送った。奈緒美が動いている。

「奈緒美」

「はい」

と答えている。

奈緒美、と呼ぶ方も、呼ばれる方も、なにか新鮮な響を胸に感じた。

「奈緒美」

奈緒美は走って来た。小島がかけたラヂオから、「夕の音楽」が流れている。ハワイ音楽。あの陶酔的なフラのリズムだ。

「珈琲が湧くまで、踊っている」

美事に、リズムに乗った踊りだった。動きが美しく悩殺的だった。

珈琲を綴りながら、

「もう一度あのフラがかからないかな？」

小島がいうと、奈緒美は瀬崎がよくさせた醫責めのことを、ふと思ひ出した。

「やれ」

と、小島はいった。

「はい」

奈緒美は珈琲を置いて立上ると、両手で壁を突張った。

長い時間だった。奈緒美は突きささる針の苦痛に、段々呼吸が荒くなっていた。髪が乱れ背中が喘いで、額に汗が滲み脚が疲れた。途中から鞭が振られだしていた。

責め場の多い邦画が、町の映画館にかかっているのを、小島はスチール写真から知って、奈緒美にいつか一緒に見に行こうといていた。小島は文献を漁って種々、様々な責めの方法を識り実験してもいた。瀬崎が古い方法を固執していたのに較べると、小島は新しがり屋だった。それだけに変化があった。灌腸責めの手段から蠟燭の蠟液をたらすことを思いついたり、自転車を利用した効果的な醫責めを立案したりした。

奈緒美という美女の、若い恵れた美しい体を、いかに面白く多角的に責めるかということに、小島は没溺しているようだった。

奈緒美の中にある焰が青い色ならば、小島の体内に燃えている焰は、赤にも青にも紫にも、多彩な光を発して燃えているようだった。それは奈緒美を圧倒した。

暁方、小島は奈緒美を起す。蠟責めが終って、たった今眠ったばかりである。

「はい」

奈緒美は素直にサドルが二尺も高い自転車に跨りはするが、そう

いう小島の情熱には負かれ、すっかり受身的にさせられていた。一月の経過に、小島はリード権を完全に奈緒美から奪って了っていた。

奈緒美のそれぞれの苦痛の音、異なる苦悶の表情、体の変化……どんな小さな微かなことまでも、小島は識り、極めようとした。

奈緒美という美女に関する限り、責めに依って起る、指一本の變化に至るまで、すべてを貪り知りつくそうとするようだった。

それは奈緒美が、操だけは固守して許さないことへの、嫉妬かも知れない。

いや、嫉妬が変貌した探美の果かも知れない。

奈緒美は、その小島の変化に瞠目はしているが、決して逃避的になつたのではない。

小島の多彩な^{ほじら}皴は、奈緒美の^{ほじら}皴にも紫や赤の絢華な色を点ずるのだ。

責め場のある映画は今日までだという。夕方から、二人は出かけることにした。まだ陽が高い。奈緒美は早目に化粧を済ました。

「まだ行かないの？」

奈緒美は二階へ上って行くと、そういった。小島は珍しく机に向っていた。

「お前の服のことを考えていたのだ」

「服？」

「今夜着て行く服さ」

小島はゆっくり振り向くと、奈緒美に胸許をほだけさした。奈緒美は鴉色の帯をほどいて、着物を落した。紫陽花の模様の浮いた単衣のお召である。

「この着物ではいけないのですか……」

「あー」

告 急

『サディズム特集号』売切

33年7月20日発行の『サディズム特集号』は引続き御注文を頂いておりますが、11月末を以て売切れとなりました。只今、『悦虐小説と緊縛写真特集号』（定価三百円）を発売いたしております。尚『サディズム特集号』△第二集▽は二月中旬発売の予定です。

と、不意に小島は声を挙げた。

「おい。そこにあるサボテンの鉢植を持って来い。早くしろっ」
臀を叩かれて、奈緒美は窓を越えて二階のヴェランダに行つて、サボテンの鉢を抱えて来た。小島はナイフで葉肉を幾つかに截つた。

奈緒美は始めて小島の意図を了解した。
テストされた。

効果は——奈緒美の悲鳴だった。ぴっちり臀部を包むパンティの中に、無数の鋭い棘を持つ切片が投げ込まれて、椅子に座わらせられたのだ——

棘は、圧縮されて臀に突立った。

町へ向っている道は、もう淡く夕映えがしていた。紅葉しかけている周りの雑木林が、燦爛としていた。

肩を並べて歩きながら、奈緒美は、亡夫の瀬崎と一緒に歩いているように錯覚した。

が、それはほんの一瞬、奈緒美の心を唐突に染めて消えて行ったものだった。

奈緒美は、均齊とれた美しい体を派手な和装で包み、小島の腕に腕をまわしていた。

——了——

告白

私のノロケ

田井

恍

私には妻があります。終戦後、結婚しました。初めの内は、普通一般と変らぬ新婚生活を送っていましたが、元々、自覚する程のアブの血の気のあった私は、何時の頃からか、妻を縛り上げる習慣がついてしまいました。

いつ頃から、どう云う口実を設けて縛り出したのか、と云うことを想い出そうと、真剣に考え、被縛者たる妻にも訊いてみるのですがどうもはっきり判らないのです。結婚後一年位経った頃でしょうか、或いはもっと早く、三月目位だった様な気がします。とに角、彼女が何か私を怒らせる様なことをして、私が冗談半分に、彼女を後手にして手首を縛った様に思います。然し最初そうして縛られても、彼女は案外ケロッとしていたので、私は意外に感じたことを微かに覚えています。

それから後の、可成りハッキリした記憶では、着物は着たままでしたが、胸に三重ばかりと後手の手首、両足首を相当強く縛り、転がして置いて、隣の部屋から眺めたことがあ

ります。その部屋の電灯は消して、仄暗い部屋に一人、縛られ転がっている女の姿は、この上なく私のアブの血を満足させてくれたものでした。

最初から、その時迄に何度縛ったかは判りませんが、その時の縄の掛け方から推して、相当回数縛っていたことには間違いないようです。

その時もどういふ口実であったか思い出せませんが、とにかく妻は、割合に易々と縛らせるのです。然し、縛られることに喜びを感じる風情は全然ありません。唯、夫である私に縛られても、堪えられない程の厭気は感じないという程度らしいのですが、私はそれでも満足です。現実社会で、妻にマゾの女を要求するのは無理に近いことでしょう。被縛後も、のた打ち廻って喘ぎ、苦悶する姿こそ、我々サドの喝仰するところですが、実際にそんなに酷いことが出来る筈のないことですし、してはならない事は理の当然で、そんな

姿は、自分の頭の中で描くか、映画、演劇の世界の中の出来事であって、私は温馴しく縛らせてくれる妻を持ったという事だけでも、今の世の中に大変に恵まれていると思っております。

ともあれ、そのお蔭？で、私達は結婚後十年余りの歳月を、非常に仲良く暮して参りました。独身時代は幾人かのガールフレンドに魅力を感じていた私も、結婚後は妻以外の女性には何等の魅力をも感じなくなりしました。然し正直に云って、美しい女性を見ると無意識の内に縛った場合の肢態を思い浮べている時はあります。そんな時はハッとして、これはいけない事だ、その女性に対する冒瀆だ。と自分自身を叱り、注意して気持をそらすのです。そんなことを知らず知らず思いついてはいる自分に、唾でも吐きかけたい気持ちになります。これにはどうにも弱ります。

私は自分にサドの血の流れているのを知った時から、この性向を嫌悪し、呪い、矯正に努力しました。然し結局は徒労でした。天から授かったこの性質を取り去ってしまうことは、生ある限り不可能な事だと悟りました。理性に依って多少の自制以外には無理なことだと知りました。だからと云って他人に迷惑を掛けて許される筈もなし、この苦しみを救ってくれるのが妻なのです。私は、縛られてくれる妻に心から感謝しているのです。

生 体 轢 断

榎 村 奏
青 木 審・画

断 轢 体 生

一

榛葉耕平は、「日の出湯」の暖簾をくぐると番台へ湯銭を置き、それから、ひとわたり脱衣場を見渡した。そこには、五、六人の男達がいたが、特別に注意をひくような人物はいなかった。

榛葉は何がなし、ホッとして着物を脱ぎにかかった。そして六尺褌一本になると、又気になるように硝子戸に寄って、浴場の中を窺った。流しに十人ばかりと、浴槽に七、八人いるようだった。

榛葉は、籠のところへ戻って褌を脱した

が、浴場の戸を開けてから、タオルを忘れたことに気づいて、周章で元の場所へ引き返した。

浴槽に浸たると、湯の暖かさが身にしみ透って、それまでの緊張が、スッと抜けていくような気がする。

榛葉は、己の懐疑心が、フト馬鹿馬鹿しくさえた。

昨夜のことである。「日の出湯」は今夜よりは、もう少し混んでいた。榛葉は、誰かに凝つと見られているように感じて、あたりを見廻してみた。しかし、特別に自分を覗めている者はいない。

彼は、ちやうど褌を解きかけていたときなので、いまだき六尺褌が珍らしくて、誰か見ていたのだらうと思い、そんなことは即座に忘れてしまつて、湯に浸かった。彼が執拗な視線を、ふたたび感じたのは、流しに出て身を洗い始めたときである。顔を上げて見廻すと、そんな気配は全然ない。妙に薄気味悪くなり、上り湯もそこそこに脱衣場へ出たが、主の無い視線は、そこまでも追ってきた。銭湯を飛び出すと、眼についた屋台へ駆け込んだ。だが、誰も後をつけてくる様子はない。彼は、グイグイと乱暴に酒を呑み干した。

「畜生……」と低く呟いた。

榛葉は、ザッと勢よく湯をきって浴槽を出た。もう四十に手のとどく年齢だが、若い頃鍛えた体軀は筋肉が鋼鉄のように張り、浅黒い皮膚は滑らかな光沢を放っていた。

カランの前に陣取って胡坐をかけた榛葉はせつせと軀を流し始めたが、膝を立てて引き締めた脚をゴシゴシやるうちに、不意に手をやめ一瞬、身を固くした。

（畜生！ 又あの眼だ……）

榛葉はしかし見廻すことをしないで、暫くそのまま、ジッとしていた。怪しい視線は痛い程、全身に集中してくる。

彼は、いきなり立ち上って「おいッ。俺をそんなに瞋める奴は誰だ？ 出て来い！」と呶鳴りたい衝動を押えて、尚も動かないでいた。まるで、根くらべでもするように、視線のほうも動かない。榛葉は、浴場内の男を全部集めて訊問できたらと思った。昔の彼ならそんなこともできたかもしれない。しかし、今の彼には勿論、そんな権限はなかった。

昔の彼。榛葉は、己の過去が他人に知れるのを極度に警戒していた。それは、彼の自尊心をひどく圧迫したが、それでも、やはり他人に知られたくなかった。

榛葉耕平の、過去の一時期は、不動の権力と輝かしい暴威によって、毒々しくめつきされていた。

特高係の巡查部長として、榛葉の拷問は部

内でも有名なものだった。取り調べに当たって司法主任は、いつも榛葉をとっておきにして、いた。相手が強情で、いよいよよてこずると、そのときに榛葉を呼ぶ。榛葉の拷問は、自白させるか殺すかのどっちかだった。拷問の結果、相手が死んでも彼は殆んど無感動で、ただ己の職務をなしたとげた爽快だけを味わった。拷問が終ると、夏でも冬でも彼は必らず軀を拭く。その頃でも六尺軀は珍らしく（越中軀の愛用者は大勢いた）、彼が軀一つになつて、裕々と逞しい軀を拭いているのを見ると、同僚でも何か慄然とするときがあった。

銭湯を出ると、榛葉は追われるように足を速めた。（俺も、気が弱くなったもんだ）と思うと、舌打ちの出る程いました。しかし姿のない相手では、どうすることもできなかった。

榛葉が、漠然とした不安に脅やかされるようになったのは、もう一つ原因があった。

それは、元特高主任として鳴らし、彼の上司だった広岡の自殺である。鉄道自殺として三面記事の片隅に小さく報道されただけだったが、榛葉には広岡が自殺するとは、どうしても信じられなかった。殺されたのではないかという想像は、むしろ滑稽だったが、彼は、そう思うだけの理由が全くないわけではなかった。榛葉には、広岡も含めて、誰かの

復讐を受けてもしかたのない、過去が存在していたのだから。

榛葉は、警察をやめてからは、弟のやっている木工所に勤めていた。住居も、妻を戦災で亡くした後、子供もないので弟の家に同居していた。

榛葉が、風呂桶を買うという話を持ちだし、たとき、弟夫婦は驚き、不経済だと反対した。しかし榛葉が、費用は全部負担すると云ったので、それならということになり、それまで物置のようにしていた風呂場を綺麗にし、新しい風呂桶を据えた。

内風呂ができるのと、榛葉は（これで、ゆっくりと風呂へ入れる）と喜んだ。如何に彼奴でも、ここまでは、やって来られまい。

木の香も新しい浴槽に浸かって、榛葉は、のびのびとした気分になり、鼻唄などもついて出た。だが、それも僅かな時間でしかなかった。彼は狭い風呂場の中で、又しても、あの視線を感じたのである。

「誰だッ！」

榛葉は立ち上りざま、窓のほうを振り向いた。細めに開けられた窓からは、外の闇が見えるだけだったが、振り返った瞬間に、人間の眼が、サッと隠れたように思った。榛葉はガラッと戸を開けると、もう一度「誰だ！」と呶鳴った。裏庭には手入れの悪い、コスモスが風に揺れているだけで、怪しい者の影は

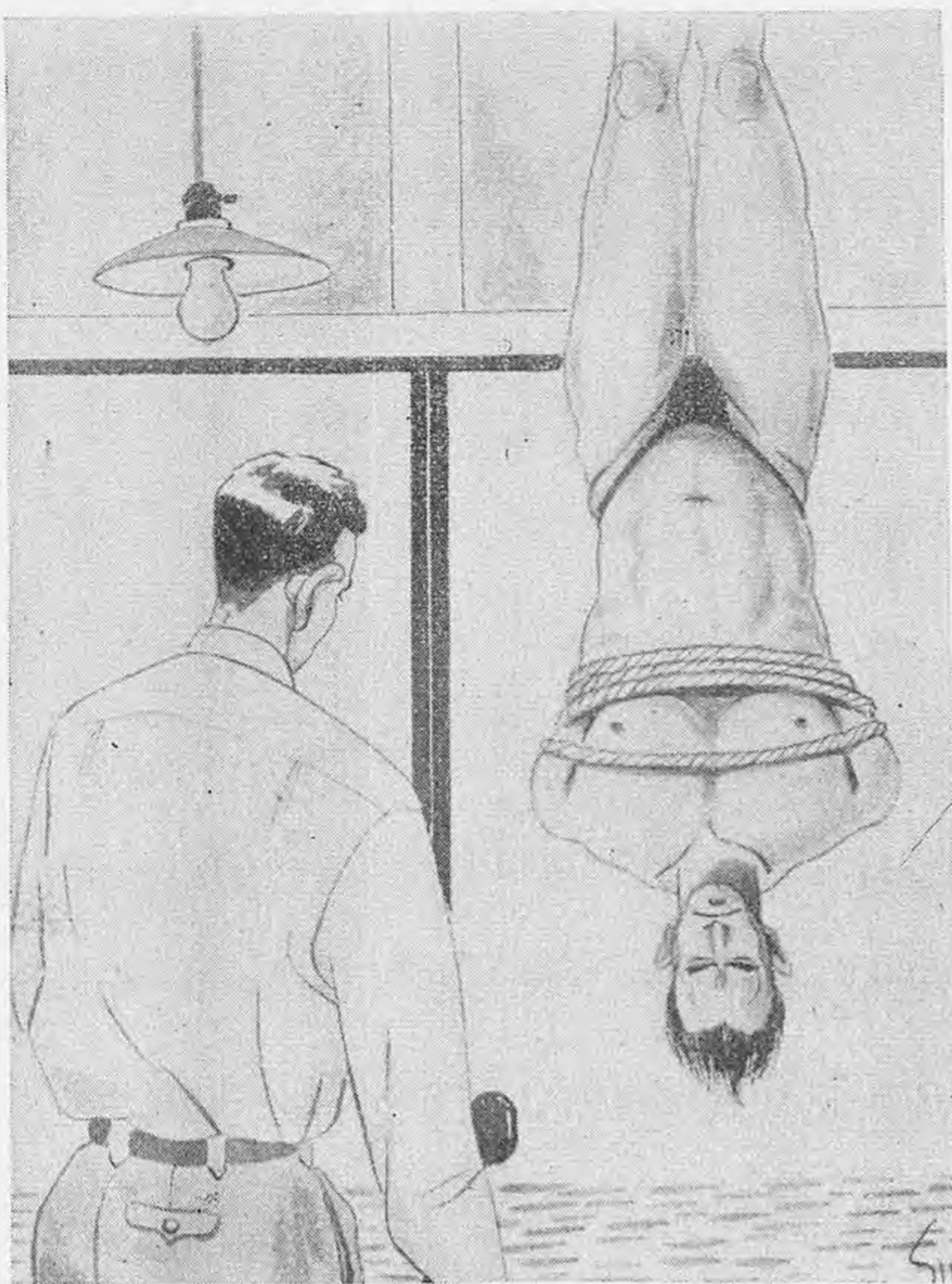
なかった。榛葉は、かまわず裸のまま、窓を乗り越えて庭に飛び下りた。

榛葉は、とうとうたまりかねて、外勤調査をしている甥の次郎を訪ねた。

元特高の前歴から、この叔父を崇拜してい

る次郎は、情けなそうな表情になって、「ノイローゼですよ。叔父さんらしくもない。少しスポーツでもやるんですナ」と一笑に附してしまった。

それ以上は榛葉としても、叔父の権威として云えなかった。それに、そう云われてみる



と、気のせいだったかと思えてもきた。弟夫婦が、会社の慰安旅行へ揃ってでかけ、榛葉は留守番として一人残った。

誰もいない気易さに、彼は晩酌をついすごし、早めに床へ入ったが、その翌朝のことである。

眼の覚めたときは、まだ気づかなかった。

寝巻のまま起きだして便所にいき、愕然として顔色を変えた。何ということか、彼の褌の紐の上に、いつのまにか、真赤な帯紐が巻きついていたので。周章で部屋へ戻って、彼は、急いで、その帯紐をとりはずすと気味悪そうに仔細に眺めた。榛葉は、もとより白い晒を使っていたのであり、赤い帯紐など締めたこともなければ、勿論、一本だって持っていないなかった。

一体、誰が何の目的で、就寝中の彼に、こんないたずらをしたのだろうか。しかも、それは相当に危険の伴う仕事の筈である。

怪人物の侵入口はすぐに判った。推理小説ではないから、台所の戸が不器用にこじあけられている。あるいは、指紋だって残っているかもしれない。

それが誰であるかは、判りようもないが、あの不可解な視線の主と同一人物に違いないと思われた。悪戯にしては、度が過ぎている。榛葉は今度こそ、はっきりと自分が狙われていることを知らなければならなかった。

次郎は、ふたたび訪ねて来た叔父の話を聞くと、ゲラゲラと笑いだした。

「風呂覗きの後が、寝室侵入ですか。これじや何のことはない、まるで痴漢ですナ。但し叔父さんが女性ならネ。まってくださいよ。これは、変態性欲者の仕業かもしれませんな。どうもそうらしい——」

「そんなものならいいが——俺は、どうも、気がかりなんだ。彼奴は、俺の命までも狙ってるんじゃないだろうか——？」

「ソレ、ソレ、それが、ノイローゼだと云うんですよ。もし、そうだとしたら叔父さんは、赤紐を締められて気がつかないくらいによく眠ってたんだ。その場で簡単に殺せるじやあないですか」

「それは、そうだが——」

次郎は立ち上ると、馴れた動作で制服に着がえ、帯革をグツと締めた。

「まア、痴漢にしろ、何にしろ、気をつけてあげますよ。かりにも叔父さんを、そんなに脅かした奴だ。捕まえたなら、ウンとちめてやんなくっちゃア」

「頼むよ。俺は真剣なんだ」

「判りました。じゃ、僕は、これから出署ですから。お先に——」

制帽をキチンとかぶると、軽く拳手の礼をして、自転車に飛び乗る次郎を、榛葉は、それでも、まだ不安そうな眼付で見送った。

二

会社は休みだし、家へ帰ってもしようがないので、街をブラついているうちに榛葉は、フト映画でも観る気になった。『わが生涯の輝ける日』というタイトルの、大きな絵看板が眼につくと、彼は外国映画のような題名だと思ひながら入場券を買った。映画はもう始つていて、筋も判らないままに、刺戟の強い接吻場面が映ったりしている。榛葉は、後のほうに坐つて煙草をふかしながら、ボンヤリとスクリーンを眺めていたが、そのうちに、だんだん不愉快になつてきた。映画は、どうやら戦争中の物語で、思想犯などが出てくるらしい。そうして遂に、特高が現れ拷問場面になると、彼は席を蹴つて立ち上つた。

映画館を出ると、榛葉の足は次第に速くなつた。胸は、まだドキドキしている。すぐ眼を逸らした筈なのに、鮮烈な拷問の画面がアリアリと脳裡に焼きついてた。そして、それは過去における彼の現実と、あまりに酷似していた。逆吊りにされて竹刀で打たれている男の姿が、眼の前にチラチラする。

榛葉は、少くとも半月前の彼なら、こんなことはなかった。そんな映画も平然と観ていられたし、かえつて往時を懐古して懐しんだかもしれない。

(やっぱり、俺は、どうかしている。畜生！みんな、彼奴のせいだ)

榛葉は、怒つたような顔をして、ズンズン歩いた。

誰かに呼ばれたように思ったが、かまわずに歩いていくと、明らかに追いかけて来る足音がした。

振り返ると、笑顔をみせて寄つて来る男があるが、榛葉には覚えのない顔だった。

「部長さん——やっぱり部長さんでしたね。キットそうだと思つて、お呼び止めたんです」

「君は——？」

「いやだなア、僕をお忘れですか？ 三日前に採用していただいた、牧田章司ですよ」

「ああ、そうだった——イヤ、失敬した」

榛葉は、二、三日前に会社で新しく雇入れた青年社員を、やっと思ひ出した。そういえば牧田は、どこにでもいそうな、全く特徴というものの無い貌をしている。

「部長さん。よろしかったら、僕につきあつていただけませんか？」

「君は、旅行にはいかなかったのかい？」

「ええ、まだ新任そうそうで、友達もありませんから——」

「それもそうだな」

「ねえ、そんなことより、どうですか？ 一献さしあげたいんですよ」

「そうだな……」

「サア、サア——」

いきつけらしい酒場へ案内されると、もともと酒はいけるほうだし、気持がクサクサしていたときでもあったので、榛葉は遠慮なく痛飲した。

「アラ、こちら、ドスの利いた貌してるじやない。妾、そんなの好きよう」

下品な女給の言葉を聞き流しながら、尚もグイグイとビールを空けていた榛葉は、不意に、ギクツとしたように、コップを手にしたまま、動かなくなった。

「どうなさったのよう。恐い顔して——」

「静かに！ 黙ってる」

「まア、イヤだ……」

「彼奴だ！ 彼奴が視ている……！」

「え？ 何ですって？」

「畜生ッ！ こんなところへも現れやがったのか。誰だア、出て来いッ！」

榛葉は、いきなり立ち上ると、コップを床に叩きつけた。

洗面所から出て来た牧田は、驚いて近寄ると、

「郎長さん！ 部長さん。どうなすったんです？ 吃驚するじやありませんか——」

「ああ、君。あの眼だ！ あの眼が、俺を視ている——」

「眼？ 眼がどうかしたんですか？」

「そうだ。君には判らない。君は、何にも知らないんだからな」

「とにかく、ここを出ましよう。そして、もっと静かなところで飲みなおしましよう」

それから自動車に乗せられ、榛葉は料亭の離れのようなところへ連れていかれた。

「ここなら静かですから、落着いて飲めますよ」

「ありがとう。驚かしてすまなかった。イヤ何でもないんだが——ハハハハ」

榛葉は、てれかくしのように笑って、牧田の注いでくれるコップを、充血した眼で瞞めた。

「大分、お酔いになったようですナ。少し横になられたらどうです？」

牧田に、そう云われたことまでは覚えていた。その後の記憶は全くないのだから、眼が覚めて布団に寝かされているのを知ったとき榛葉が、そこを料亭の一室だと思ったのも無理はない。よく見廻すと、それにしては安普請で、どうも様子が違う。といって、勿論自分の家ではない。

「牧田君。牧田君——」

上体を起して、二、三回呼ぶうちに、榛葉は、フツと、ある予感を感じた。まさかと打ち消しながら、掛布団をはねると瞬間、彼は脳がクラクラとした。いつかと同様、赤い帯

紐が禪の上からキツチリと巻きつけられているではないか。

榛葉は、落着こうとあせった。酔い潰れて眠った俺を、ここに連れて来て寝かせたのは牧田だ。そうだとすれば、この帯紐も牧田が。——

榛葉が、考えを纏めようとしていると、襖がスツと開き、当の牧田が現れた。

「榛葉さん。お目が覚めましたか？」

「牧田……。君は、確かに牧田だな」

「そうですとも。正真正正の、牧田章司ですよ」

「その牧田が、何の目的で、こんなことをしたんだ？」

「ああ、赤い帯紐のことですか。それは心理的に、貴方を恐怖に陥れる為にとった手段です」

「じゃあ、あの視線の主も——？」

「勿論、私です」

「しかし、何の為に——？ ただの悪戯じゃあるまい」

（それとも、お前は変質者か？）と云おうとしたが、榛葉はそれが、あまりにも希望的観測なので、口まで出なかったが飲み込んだ。

「榛葉さん。貴方は、私の苗字にご記憶はありますか？」

牧田は、ヘンに落着きはらった調子で云う。

「ご記憶のない筈はありませんがね」
「……？」

「ソラ、貴方の拷問で殺された——」

「ああ、牧田賢……！」

「そう、よく覚えていてくださいました。私は、その牧田賢一の弟ですよ」

「そうか。そうだったのか——で、君は俺を恨んで——」

「恨むのは、無理だと云うんですか」

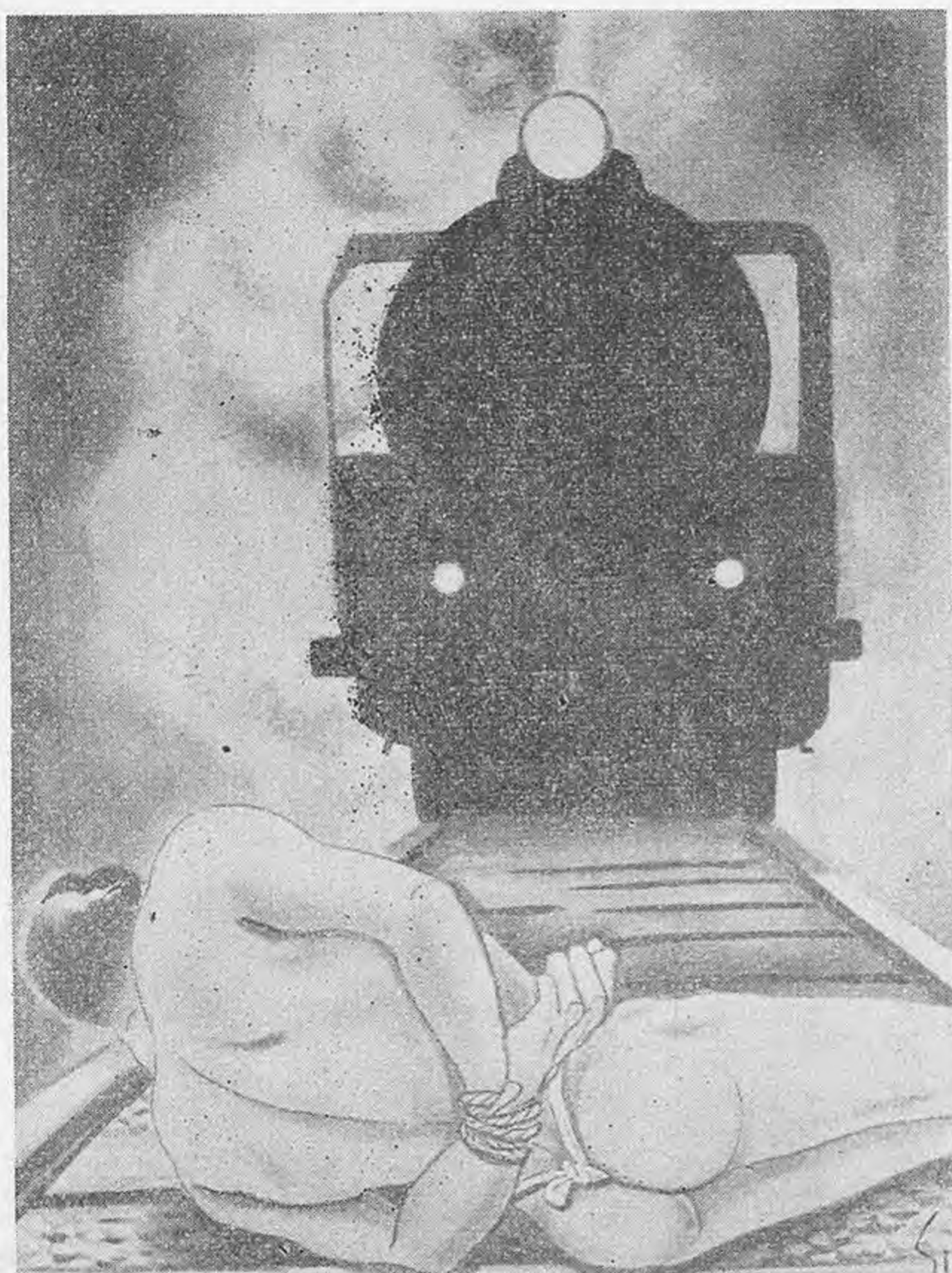
「いや、無理だとは云わん。しかし俺は、ただ職務に忠実だったただけだ。上司の命令で動いたにすぎん」

「それは、貴方にも云い分はあるでしょう。しかし、此方にも立派な理由が在るんです。この近代社会において、いくら恨みがあるからとはいえ、個人的な制裁が法律上でも人道上でも、許されないものであることは私も知っています。ところが残念ながら、私は普通の人間ではありません。私は、たとえ法に触れても人道に反しても、この手で直接に貴方に復讐しないではいられないのです」

牧田は、そこで冷たく笑った。

榛葉は、相手の正体が判ると、かえって冀度胸がついて、

「牧田さん。あんたが、この俺に何をしようとしているか知らないが、俺だって腕に覚えはある。昔は、鬼と云われた榛葉耕平だ。大人しくあんたのされるままになると思ったら



当てが外れますぜ」

「そんなことは、最初から承知しています。だから、さっき貴方の駄に注射をしておいたんですよ」

「ナニ、注射？」

「ハハ、そんなに驚くことはありませんよ。」

命に別状はありませんよ。そんなに簡単に殺してしまっただんでは、私の計画がだいなしになりますからね」

「畜生……！」

「そいえば、さっきから、バカに駄がだるかった。」

（しまった！）と思ったが、榛葉は強引に跳ね起きようとした。しかし実際には、ヨロヨロと重病人のように、やっと立ち上っただけである。

その榛葉に、牧田は裕々と近寄ると、いきなり寝巻を剥ぎとった。そうして境の襖を全部開け放すと、隣の部屋へ一貫の榛葉を突き倒した。

そのときになって榛葉は、ようやく心の底からの恐怖を感じたのだった。

三

隣の部屋は、すっかり畳をとりはずし、ガラザラした板が、むきだしになっていた。そのうえ、驚いたことには天井板まではずしてあり、梁には、どうやら滑車らしいものがありつけてある。片隅の机の上には、拷問用とおぼしき、様々の道具が並び、竹刀や細い竹の棒も立てかけてあった。

「さア、榛葉さん。貴方が兄に与えた拷問を、貴方にもこの部屋で、とっくりと味わっていただきますよ。なアに、人の怪しむ気遣いは全くありません。この家は隣家が離れているし、地形の関係で、パトロールの盲点になっっているんです。遠慮なく大声を出していただいて結構ですよ」

そう云いながら牧田は、ロープでグルグルと榛葉の躰を縛り始めた。

榛葉は、恐ろしさに色を失いつつも、まだ相手を多少は、みくびっていた。

（この青二才に、何ができるものか）

そう強がることで、少しでも恐怖を柔らげようとしたのかもしれない。本当は榛葉こそが、拷問の真の苦しさを知っている筈だったから。

滑車が、キイキイと軋りだすと、榛葉の躰は足先から、徐々に吊り上げられていった。

頭が床から離れた刹那、足首を激痛が締めつけ、榛葉は耐えかねて「あ、あ……！」と呻いた。少しでも疼痛を柔げようと、躰をよじってみるが、効果は逆で、ますます激しくなるばかりだった。そのうちに頭へは、グングンと血が下る。

「た、助けてくれ……！」

そう叫んだつもりだが、殆んど声にはならなかった。

牧田は少し離れて、榛葉の様子を眺めている。いくら顔が紅潮しているが、眼はむしろ、冷然としていた。

「苦しい……！」

榛葉は、絞りだすように呻くが、宙吊りになった躰は、ゆっくりと回転するだけであった。

「苦しいか。おまえは、拷問の苦しさはよく知っている筈だが、身をもって体験してこそ真に理解できるのだ。まだまだ、おまえが兄

に与えた苦痛は、こんなものではない。いいか。今から、おまえは、兄の受けた苦痛と同じ苦痛を、一つ一つ、受けなければならぬのだ！」

そう云い終ると、牧田は竹刀を握り、呼吸をととのえた。

ビュッと、竹刀が唸ったと思うと、肉を打つ鈍い音がして、榛葉の躰が一揺れした。

「あっ！」という悲鳴をあげるまもなく、竹刀は次々に打ち下される。普通の状態なら、ある程度打撲に対する抵抗力もでるが、逆吊りにされていたのでは、まるでそれが利かなかった。

榛葉は、ただ、もう、耐え難い苦痛の中を彷徨する思いで「うおう……うおう……」と絶叫していたが、やがて失神したのか、砂囊のように反応がなくなった。

牧田は竹刀を投げだすと、暫く荒い息をしていたが、止めてあったロープを解くと、榛葉を床に下し、バケツの水をザブツと浴せた。

我に返った榛葉が、定まらぬ視線を牧田に向けようとしたとき、今度は頭のほうからズルズルと吊られ始めた。後手の縄が食い込み肩の関節がギリギリと軋む。

「ううう……！」と呻吟する榛葉の足が、甲斐なく空を蹴る。

牧田の眼は、ようやく熱を帯び、畳屋の使

まえば、じきに死ぬんだから云ってやるが、おまえの上司だった広岡の鉄道自殺な。あれも実は、俺のやった仕事さ。死後轢断でなければあ他殺でないとしたら、大間違い。生体反応が出たって、他殺の場合は、立派にあ

りうるんだ。ここで、おまえが轢殺されても、ちゃんと生体反応が出る道理さ。ただ、おまえの場合は広岡と違って、他殺の痕跡が歴然と残されている。今度は、いかにボンクラな警察でも、まさか自殺とは断定すまい。そうなれば俺は、殺人犯人。しかし俺は、そんなことを恐れちゃいないんだ。それくらい覚悟がなけりや、復讐なんて遂げられやしないものな」

牧田は、そこで言葉をきると、腕時計を透かして見て、

「後五分で、下り列車が来る。そうすれば、おまえも、此の世とお別れさ——それまで、一ぷくするとするか」

煙草をとりだしたが、昂奮は隠しきれず、牧田は、マッチを何本もすった。

榛葉は、咽喉が焼きつくようになり、全身がおこりのように顫えて、止めることができなかった。名状し難い恐怖に五官が圧搾され、思考力はズタズタになった。

レールが、不気味な震動を伝え始め、刻々に列車は近づいてきた。そして、またたくうちに、巨大な機関車が熱風を巻いて迫り、轟音が、すべての音を消し去った。

その瞬間、どういう力が働いたのか、榛葉の軀は、手足を縛られたままで、ピヨンと立ち上り、すぐに又、棒を倒すように転った。機関士は、それが人間だと、即座に判断し

たわけではない。後で訊かれたときも、直感的に危いと思って夢中でブレーキをかけたと云っている。しかし、もう少し遅ければ当然、榛葉の軀はバラバラに轢断されていただろう。

三日目に、病院のベッドで意識を回復した榛葉は、悲惨にも常態ではなくなっていた。極度の恐怖が、彼の脳を狂わせてしまっていたのである。

精神病院に榛葉を訪ねた次郎は、全く廃人と化した叔父を痛ましげに眺めながら、

「叔父さん。僕は本当にすまないと思っています。甥として、警察官として、この悲劇を未然に防げなかったことを後悔しています。でも、もう、すべては終ってしまいました。牧田は逮捕されました。それから、叔父さん、僕は、しばらく休暇を貰うことにしました。自分でも、よく判りませんが。ただ、無

た。自分で、よく判りませんが。ただ、無

性に静かに一人で考えてみたくなったんです。田舎へ帰りますが、時々は出て来ます。ここへも必ず来ます。元気でいてくださいね——」

優しく云われても、榛葉は虚ろな瞳を宙に向けているだけだった。精悍だった貌は、憔悴して死人のように蒼白い。骨太なので軀は痩せないが、それだけに一層痛々しくみえた。次郎が手を出すと、榛葉は不思議そうに眼をしばたいたが、握手しようとする、驚いたように払いのけて後退さった。次郎は悲しげに眼を伏せ、静かに室を出た。

病院を取り囲んだ雑木林には、もう冬を思わせる冷たい風が吹いていた。その中を、悄然と立ち去っていく次郎の背の高い後姿を、榛葉は病室の窓から、無表情に見送っていた。

(完)

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

愛川悦子嬢の巻

☆ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号3)

六枚一組 四〇〇円

☆全裸縛り(略号4)

五枚一組 三三〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号5)

五枚一組 三三〇円

☆股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

告

白

病に臥しつゝ

柴 崎 黎 子

むなしく（本当にいろいろな意味で！）冬を迎えてしまいました。もうかれこれ半年も、ぶらぶら病のため何もしないで過ごしてしまいました。この文も、床に臥したまま書いているのです。

世界文学全集や、「愛撫の風俗史」（新生社）などを読みました。私がしたことといえば、読書と飽きることのない空想の連続、それだけでした。

空想——って、とても文学全集的なものじゃありません。私の場合は、ひどく悩み深く、強烈なものです。まさに妄想という種類のものです。はげしく飢渴的なもので、私をすっかり疲れさせるものです。ことば通り「悪魔的な魅力」で私を、ぐんぐん引っぱりこむ底なし沼のような、得体の知れないものです。

私は充たされない願望のとりこになってしまっているのです。いったい、これはどういうことなのでしょう。私だけでなく誰でもが、こういう不思議な苦しみを体験なさるのでしょうか。私は自分

が何を求めているのか、はっきり判らないのです。そのわからないものに、すっかり魅せられてしまって、ただ、むなしく疲れるだけなのです。

羞恥——そんなものじゃありません。もうそんな皮相（？）なものではないらしいのです。私は、何かを求める。うんとうんと強烈な何か——。何なのか、それがわからないのです。精一杯、頭をしぼって考えてみる——。考えつくだけのあらゆる事態や情景——いや、そんなものじゃなくて、もっともっと強いものなのだ。それしかわからない。つまり「わからない」という事がわかった」なんてことになってしまって、それ以上、深い私の魂の真実には触れられないのです。

何冊かのK誌を繰ってみる。だめ、だめ。何の解決も与えてはくれない。ほんの僅かの共鳴と、一時的な空想のきっかけと、それだけしか得られない。

私が恥しくも、いつまでもいつまでも記憶にあたためている体験。あの時こうされていたら？ ああなっていたら？ もしこうだったら？

だめ、だめ。そんな仮定の結末も、私の本当に求めている何かには、まるで無関係。又はほんの序奏部。

それでも時には、ああこれが切腹を望む方

の気持なのかわとか、マゾヒズムってこのことなのかわとか、サディズムってこういうことなのかわとか、ふいに感じることはありません。きつと単なる生意気で間違いだらけの理解でしょうけど。でも、それらは、やっぱり皆私を充たしてくれそうなものではありません。そのくせ、そのどれもが、かすかに私を惹きつけます。

自分の形のない幻想に追われるようにして、もう何十ぺん同じ数冊のK誌を熟読したことでしょう。創作、告白と題した文の中に、いろいろな衣装や小道具をまとうて出てくる同じような女性達。彼女達と私はすっかりお友達になりました。彼女達が私と何か共通した望みを燃やしている時、私は少しばかり安堵します。でも、おしまいには、いつも落胆です。私はいつも彼女達より、もっともつと深く、もっと異質な欲求を持っているからです。

その作品の中の男性達は、私に何の喜びも夢も与えてくれません。どういう男性が私の心を惹くのか、それもはっきりわからないのですが、今まで私が読んだ中では、好きになれる男性はありませんでした。皆、とても私をわかって下さることのできない人だと思いました。

考えようとすれば結局、何もわかりはしな

いのに、無意識にいろんなことをする。

髪をばらばらに散らして、うっとうしい気分の中に浸ってみる。

指や脛を噛んでみたくなって、痛いからやめてしまう。

皮膚に、竹の洗濯ばさみをかませてみる。痛いだけです。すぐ止めてしまいうくせに時々繰り返す。

破れたズロースをはいてアクロバットみたいな形をとってみる。そして泣き出したくなるんです。馬鹿馬鹿しくて。

それらが私にとって喜びなのでしょうか。喜び——ちっとも。

それなら、なぜ私はそんなことをしないではいられないのでしょうか。少しも嬉しくないのに、四六時中そんな衝動にかられている。変です。わからないのです。それもいつ頃からこんななにひどくなつたのか。又いつまでこんな風でいるのか。そしてどうなっていくのか。

思えば、私のはじめてK誌を知ったのは、もう五年も前になるのです。（私が始めて投稿した年ですから、五年位になるのだらうと思います）その頃、とにかくもう私は異常な願望に身をやいていたのですから、それから随分になります。私はK誌を手にはじめて胸の奥におののきを感じ、こわいと思うと

同時に強烈に惹かれてしまって、もうそのとりこになってしまったからです。私は自分がその時に、はっきり認識できたのじやないかと思うのです。それと同時に私は、自分を変えることはできなくなってしまったのです。きつと私は、こういう自分に縛りつけられてしまったのです。

ブラブラ寝起きしているこの半年間、この期間こそ私に、いっそう拍車をかけました。私は子供のような渴きで、何かを求めました。夢——などという言葉が浮かんで参ります。そう、夢かもしれません。私は、私の何だかわからない悶えを充たしてくれる夢を求めていたのかもしれませんが。その夢が現実のものとしてでも、又は空想上のものとしてでも、とにかく私を悩みなき忘我の境地にいらなってくれるようにと。

私は、そういう私を夢中にさせてくれる小説を読みたいと思いました。そんな小説は、ないかもしれないのです。或いは私が、まだ知らないのかもしれませんが。とにかく私は、その小説の主人公と共に死ぬほどの歎びを分かち合いたかったのです。私はせめて小説の中で、何かを求め、どうにかなってしまうたかったのです。これを書いている今だってそうです。

私は何を求めたいのでしょうか。どうなっ

所がこゝで降りたのは私一人ではなかったのです



しまいたいのでしょう。
そんな私の得体の知れないかつえをいやし
てくれる小説はある訳がありませんので、結
局、私は夢を描く外はなかったのです。私は
きれぎれの、まとまりのない空想をいくつも

いくつも胸に描き、そしてためました。それ
らの空想の断片には一貫したものが無いかも
しれません。あるかもしれません。今の私に
は、その一貫したものがあっても、わか
らないのです。ともかく今の私にできること

は、その空想したものを、できるだけありの
ままに正直に並べてみるだけです。そう
することによって、私が欲しているものは何
なのか分かるなら、きっと私をほっとさせ
ることでしょう。私は、皆様に私の空想した
ものを見て頂きたいと思っています。

私は晴れ着を着て電車に乗っています。暑
くもなく寒くもない初秋の午後。窓の外は見
なれない美しい丘や原。電車は晴れあがった
風景を楽しむようにゆっくり走っている。お
客さんは座席に少し余る程度。だけど、どこ
の国の電車なのか分からない。彼らの話して
いることは私には少しも通じません。顔か
たちは日本人とそっくりなのに。私はどこか
らこの電車に乗り、どこへ行こうとしている
のか自分でも知っていません。別に不安を感
じているわけではありませんが、彼らの話すこ
とばがわからないのは、少し寂しいなと思っ
ている。

お客さんの中には若い女の人もいます。が
和服を着てお化粧しているのは私一人だけ。
先刻から、皆がそれとなく私を見つめていま
す。「美しいな」とささやいていることがわ
かります。

電車は、とある美しい野原のまん中にとま
ってドアがあきました。色とりどりの花が咲

いていて、日光がさんさんと降り注いでいます。私はホームに降りました。駅舎もないホームだけの停車場。私は和服の裾を持ち上げるようにして草原の中に分け入って行きました。うしろで電車が出たようです。ああ、もう私はどこへも行けない。もう電車は二度とここを通らないのです。

所が、ここで降りたのは私一人ではなかったのです。いつのまにか、何十人という人々が私のあとをつけて来たのです。その中には女の人もいて、声高に話したり笑ったりしています。明らかに私に関する話らしい。急にこわくなって電車の方を眺めました。もうどこかへ走り去って影もありません。

やがて、人々は一丸となって私をとりまき私にとびかかって来ます。いや、いや、と叫んでもことばが通じません。

若い男が齒をむき出して笑いながら叫びます。「手をとれ!」といったのでしよう。私は男に両手をとられてしまいました。

私の足をもつ者、おなかをかかえる者、腰を支える者。いっせいに人々の手が私に、のびて来ました。もう私は人々にすっかりかき上げられてしまって、逃げることもできません。

私は一、二、三で高く放り上げられると、そのままドスンと柔かい草の上に落ちてしま

いました。うつぶせに、だらしなく伸びてしまつて、人々が集まつて眺めているのに起きあがることもできない。

私は絶叫を残して失神してしまうのです。(これは正真正銘のマゾヒズムかもしれません)

映画館の中で。(私はやっぱり混んだ映画館が好きです)

今年二十才の、かわいらしい奈美子さんと二人で映画見物です。奈美子さんは内気な、おとなしい、お上品な女性。土曜日の午後で超満員。私は奈美子さんの隣に立って、いじわるをして困らせてあげています。奈美子さんは人混みの中なので声も立てられず、私のするままに身体を固くして、じっと堪えているのです。

私は奈美子さんの、ぴっちりしたセータの上から軽くつねったり、くすぐったりして、困らせています。ふるえる彼女はうつむいてしまつて、私に押さえられている手を放して、と哀願の素振りです。

私のいじわるはそれだけではありません。小声で、といつても周囲の四、五人には聞かえるように、

「あら、奈美子さん。おならしたのね」

「ひどいわ、ひどいわ。お姉様、なんて」

二、三人の男の人が、びっくりしてこっちを見ます。

「おなかこわしてるんでしょう、変よ」

奈美子さんは泣き出します。ここらが潮時しいので、最後に一言、

「さ、出ましょう。帰ってお流腸してあげる」

といい残して皆が、いっせいに振り向く間に手を引いて出て来ます。

外へ出て、声を上げて泣いている奈美子さん。私は今度は謝罪で汗だく。

「ごめんなさいね。もう二度としないわ。あんまりあなたかわいいでしょ?、いじめてあげたくなっちゃったの。ごめんね?」

でも本当に素晴らしい奈美子さん。お人形のような首を振って、許してくれるのです。

(なぜ私は、こんな空想をするのでしょうか。)

別にいじめて楽しいものではありません。よく考えてみると、私自身が奈美子さんのようにされたいのです。奈美子さんは私の身代りなのです。なぜかって、この乙女は、ここに書かなかった他の点、性格や顔立ちの上で、私の持っていない素敵なものを持ち主だからです。だから、奈美子さんは私自身であり、私は私の欲しい架空のお姉様なのです)

私の幻想は、もっとひどいものがたくさん

あるのです。三日に一つ位は作って、そしてその大部分は忘れて行ってしまうのです。つまらない寸劇的な場面のももあるし、少しは系統的(?)なお話のようなものもあります。

今、私が一番、皆さまにお目にかけていた幻想は、大分長いもので小説的です。もう半年もの間、胸の中でいろいろに組み立て、メモをとり、少しずつ書いて来たものなのです。清書すれば八十枚位になっていまして、まだ半分ほどです。始めから「流腸室」という題がいいなと思っていたのですが、「美しきシナライの国」と変えてもいいと考えています。もしよかったらできている分だけでも清書してお送りしたいと思うのです。あつかましいかもしれませんが、始めから皆様に読んで頂きたくて書いてみたんです。

私が病の床にあって暇だから書いてみたこんな文で、皆様を退屈させてしまうかもしれないけど、最後に最近作ったばかりの下手な詩を読んで下さい。それで今夜は「おやすみなさい」に致します。

わたし

わたし、このわたし、
珍しいものでもない何億の女の中の一人の

女、

わたしだけが知っているわたしの思惟や感覚を除いたら、

皮膚と筋肉と臓器の組み合わせ、

お医者様でなくても、

誰でもが知悉していている一個の物体。

たとえば行きずりのあなた。

わたしの肺はどこにあって、

わたしの胃はどこにあって、

その他の器官はどこにあって、

どうなっていてどんなことをしているか、

目をつぶっていたって御存知ですね？

あなたの知りつくしているはらわたを抱えて、

影を引いて立っているのがわたしだと。

そうです。

恥じることがどこにありましょう。

今更、わたしが何をかくせましょう。

わたしの身体について、

一体だれが、何を知らないでしょう。

それなのにわたしはおそれているし、

サタンよ、おまえはわたしを面白がる。

おまえはわたしの身体を追いまわすし、

わたしは必死に逃れながら、

おまえの腕に倒れて悲鳴を上げる時を探している。

なんだか遠いまわり道。

尊い時間を病みながら、

ふしぎな、無意味な、長い道のりに疲れま

す。

ああ、透明な軽い翼があるのなら、

わたしは重い身体を脱いで、

天高くかけのぼって行くでしょうに。

サタンよ、どうぞ、

もうわたしを捕えなさい。

身体をずたずたにされた時、

わたしが女の外形を失った時、

わたしは始めて自分を洗って、

サタンにさよならをいえるのだと、

やっとうれしくなるのです。

臨時増刊号「貴小説特集号」

一部 定価 二百円 (送共)

大好評、売切れ近し!

残部極めて僅少となりました。売切れますと絶対補充不可能です。末見の方は即刻御申込下さい。

フエティシズム抄

私の切り抜きから

須藤 律 夫

女性の衣類や下着に対するフエティシズムやその蒐集に就てはよく社会面で見かける事があるが、その程度が余りにも強く、真剣である場合、私は何故か簡単にフエタリズム（宿命的）としてのみ片付けられないものを感じる。この記事もその例に洩れず、私は深く考えさせられるものを感じたので、茲に抄録して見る事にした。私をして言わしむるなら、フエティシズムも大いに結構であるが、社会人としての約束事は絶対に守るべきで、人倫の道を踏みはずしたり、その行爲が犯罪を構成するものなどはフエチの領域に置けぬ不届者と云うべきで、何うしても戴けない。

その欲求昇華の爲めに手段を選ばぬというのでは、余りにも情けない怪卒さではなからうか。兎もあれ、この記事は、或る読者の人

達に屹度、何事かを考えさせる事であろう。丁度、循環小数を割ろうとする時のような、或る焦そうに似た感じと、そして灰色の暗らさとを。

猶、記事は全部原文のまま、私の添削は入っていない。

— 猟奇版ジギルとハイド

女の下着抱き恍惚 —

（国民タイムス十一月二十五日所載）

女の下着、洋服、着物など専門に盗んでいた男が二十一日東京尾久署に逮捕された。この変態男は盗んだ品を売り捌くでもなく、自分で見たり、眺めては悦に入っていたと云う女の下着蒐集マニア。しかも昼間は真面目な電気工であったと云うから人は見かけに

よらぬものである。この為め附近一帯に被害が続出していながら警察でも犯行が掴めず、盗品は押入れに行き二個に詰められ山をなしていたと云う。ではそのジギル博士とハイド氏とも言える男の正体とは——。

全く人通りの絶えた二十一日午前一時半頃東京都荒川区尾久町尾竹橋の路上を、冷たい足音を響かせ乍ら、パトロール中の尾久署竹橋派出所の外勤、齊藤正幸巡査は突然異様なみなりをした男と出合った。冬とは云え未だ厳冬には間のある十一月と言うのに、線の沢山入った赤い縞格子のネンネコを着て、その下には渋いエンジのお召を着て、うつ向き加減に歩いていった。『おかしい奴だ、オカマならこんな所を歩いている訳がない』ふとそう思った齊藤巡査は一応、派出所迄男を連行、取調べて見た。初めは恐ろしく無愛想に陰険な表情で、黙って何も語らなかったが、鋭い追及にあうと男は次の様な犯行を自供した。

彼は意外にも、それは一昨年から尾久町一帯を壟断、居留守専門に——然も女物ばかりを——荒し廻って、同署でも全く手がかりが掴めず、手を焼いていた事件の犯人だったのだ。彼は木谷義雄（二七、仮名）と云いその犯行の裏には驚く可き変態心理がうずいていた。

— 母の死から性格が一変 —

義雄は昭和六年、東京都荒川区尾久町の電気工事業、木谷次雄さん（五二、仮名）の長男として生れた。小学校を卒業すると間もなく彼は父次雄さんの家業である電気工事の助手として働くようになり、仕事の事では手先が器用でみるみる中に父親を凌ぐ程の立派な腕前になった。性質は無口で真面目な上に、無駄な小遣を使うでもなく、よく働いていた。

それ丈に父親の次雄さんとしても、あとに弟二人、妹一人が控えている事でもあり『よい件を持った』と喜んでいた。ところが昭和二十七年春、母親つねさん（三九）が突然、死亡してから日頃、無口な義雄は一層だんまりになり、然も氣むづかしくなり、その為め家族の者はハレものに触るようにして彼を扱っていた。例えば彼の品物に家族の誰でもが一寸触ったり、いじったりすると、ひどく氣嫌を悪くし、暴れるようになった。

— 真赤な腰巻や、女の下着で寝る —

ところが恰度、四年前である。家族の者は彼が奇妙な格好をするようになったのに氣がついた。それと云うのは、あきらかに女のパンティや下着と思われるシャツなどを着たり、寝る時には真赤な着物や豪華なお召などを着て寝る。ひどい時には腰巻をつけて寝るようになったからである。然し朝になれば普通の姿で仕事に出かけ、相変らず真面目に働いていた。その為め父親も『これは嫁が欲し

くなったのではないか』と考えて、彼に幾つかの縁談を持ち込んでみた。ところが意外にも彼はその縁談を片っ端から断って仕舞い、氣むづかしさと無口は益々こうじて行った。その上、新しく女の着物や下着をどこからか仕入れて来ては、こっそり着用したり、独り眺め、誰にも見せず自分の戸棚の奥の行李に嚴重に蔵っていた。

— 女衣類ばかり盗む

欲しいと思つたら無我夢中 —

家族の者は、こう云う彼の行動を不審に思っていたが、自分の金で買って来たのではないかと思つていたと言う。その頃（昭和三十一年）尾久町一帯では空巢、居留守の窃盜被害が続出、一月（いちがつ）丈でも二十件に達した。或る家では正月に一万五千円にのぼる娘さんの晴着を作り、元旦に娘さんが初めて手を通し居間にかけて置いたのだが、一時間ばかり留守にした間に盗まれた。夜間、物干しに干して置いた腰巻、パンティ、シュミーズ等が、夜が明けると無くなっていったという事件も頻発した。尾久署では、この為め總力を挙げて捜査に当たったが皆目、手がかりが掴めず今日に至ったのである。

— 行李二個にあふれる盗品 —

義雄を逮捕後、同署が直ちに彼の部屋を家宅捜査すると、戸棚の奥から柳行李二個にぎっしりと詰めた盗品と、その他まるめてある

女の着物等が続々と発見され、中には海水着も混り、女物の衣類でないものは無いと云つた程——係官も之には全く驚いたと言う。取調べに対して彼は素直に犯行の一切を自供したが、それによると彼は母の死亡した直後から、女の着ている衣服を見ると、いろいろと欲しくなり、昼間、目をつけては夜間盗みに入ったり、昼間でも誰もいないと物干から女の物なら何でも失敬して来たと云う。然し犯行の時はそれが欲しいと思う事で頭が一杯になり夢中でやるが、あとからは氣がとがめたらしい。又商売が電気工だけに屋根伝いに押入る業は心得たもので、然も近所の地形事情に詳しい為め、警察でも手がかりが掴めなかったようである。又、彼は取調べ後、泣き乍ら『私は病氣のような氣がする。この性質は治療すれば治るでしょうか』と係官の前で語ったと云う。猶、同署では被害者の届け出が少い為め盗品の返却が出来ず困って居り、被害者は早く届け出て欲しいと要望している。

以上で新聞の記事は終っているが、この文中にあるように『母の死去』が一転機となつて彼の偏質に拍車をかけた事（そうした因手は前からあったのかも知れないが）と、本人が自分のフェティシズムを一種の病氣と認め『治るか？』と尋ねた事など思い合せ、筆者は真面目に研究すべき面白い課題だと思った。

異説大江山



三條卓史作画

「殿、何事か……」

と声を落して訊ねた。頼光は

「静かに」

と制してから前方を指さした。

山深い溪流に突き出た、平たい岩の上に白い影が動いている。

「若い女が布を洗っている」

公時は思わずそう呟やいて、じっと眼を凝らした。

「殿、あの女の処に参って道を訊ねましょうか」

季武が精悍な身を頼光に近寄せた。

「ま、それには及ばぬ。あの女人の後より行けば自然と判るであろう。それにしても、酒顛童子の館は近い」

「はア」

季武は頼光の言葉に頷いた。

「よいか一同、われ等は飽までも修験の道を念ずる山伏。夢ゆめ相手に身分を悟られぬよう、言葉、

物腰に気を付けられい」

「畏まりました。それにしてもあの女、二布

(ふたの)一枚の姿で、何とした事」

渡辺の綱が、一寸はにかんだ様な顔を公時に向けた。頼光は

「かの女人には、きっと見張りの者がついて

「おや、鶯が鳴いている。山はいいなあ」

小手を翳して、その声の方向を眼で追って

いた公時の肩を、ポンと叩いた頼光は

「しッ」

と嗜めるように云って、サッと岩に身を伏せた。

「ええ？」

と公時が訝かしげに振返ると、碓井貞光も

ト部季武も、また渡辺の綱も頼光と同じように身を伏せて頼りに公時に眼くばせしている。彼は人一倍大きな身体を窮屈そうに曲げると

いる筈、まずは静かに様子を窺うが第一」

と、顎を草につけるようにして言葉を切った。岩を越え、雑草を浸して瀬切る谿谷のせせらぎが、とどろ、とどろと響いてくる。その白い波を立て岩間を満ぎる流れの上の岩から、上体を持ち出すようにして若い女が布を洗っている。素足に赤い湯文字一枚の、白い背中に初夏の陽が樹影を落して、まだらに揺れて輝いている。さっと梳いて衿首で束ねた髪が、長く肩から背へ流れて風にそよいでいる。ようやく洗い終えて傍の籠へ布を入れた時、二人の男が物蔭から現れて来た。絆纏に野袴をはいた、色の浅黒い屈強の男である。

「おい、その布を貸して見る。まるで絞れていやしねえじやアねえか。なア、都で育ってしつけねえ仕事だ無理もねえが、いったん此処へ連れて来られたからには、こんな仕事も仕方がねえ。なア千公」

「そうだ。少しでも楽がしたかったら、お頭に気に入られて側女になるより他はない。どうだい、絞れたかい」

千公と呼ばれた男は、そう云いながら今、女が籠へ入れた布を取り上げて、きりりと絞ると、たらたらと水の雫が滴り落ちた。

「ハハハ、女って何をさせても録なことア出来ねえもんだ。おッ、為公。何をするんだ」
笑いながら振り向いた時、為公は女の両手を後ざまに捻じ上げていた。

「洗濯物を絞るなア味気ねえが、女を絞るなア、ちよっとおつなもんだぜ。どうだい千公。見張りの役得に、この女をチット泣かせてみたら……」

「そうだな、どうせ、これから毎日悲鳴をあげさせられる女だ。ちよっと軽く揉んでやるかな」

千公は手にした布を、ぽんと籠へ投げ入れると、崖の端に生えている雑木の枝を手折って来た。

千公は面白そうに笑いながら、手にした小枝の先の五、六枚の葉を残して、余分の枝や葉を折り取った。

両手を後に捻じられた女は、上体を前かがみにして首を垂れている。匂うような肩の丸みに初夏の陽光があたって、青黝い背景の中に、くっきりと浮き出していた。

「顔を上げなよ」

「あれ」

小枝の先の葉っぱがふらふらと揺れて、女の顎を擦ぐった。女が顔を上げると

「加茂川の水で磨いただけあって、良い縹緖だぜ。おい為公。こいつが前かがみにならぬようにしてなきや駄目だぜ。」

「ちえッ、勝手なことを云ってやがらあ、どうしようてンだい」

「なアに、少し責めてやるだけサ」

為公背後から両腕を締めつけると、女の上

体はやむなく仰向いた。

「そうだ、それでいいぜ」

千公はそう云いながら、雑木の枝を逆手に持った。

「あれッ、ゆるして」

思わず悲鳴をあげた女は、必死で身をよじろうとして藻掻いた。豊かに盛り上っている胸のあたりに、為公の持っている枝がぐいと喰い込んで、無惨なほど凹んでいる。彼は左手で女の肩をしっかりと抱え、右手に弾みをつけてぐりぐりと木の枝を女の胸の上で輪に廻した。

「ひえッ。たッ、助けてッ」

女は悲鳴をあげた。為公は頓着なく、
「どうだい。悲鳴てえものは、いいもんじやねえか」

と云いながら、今度は左手で女の顎を思いきり上へ持ち上げて置いて、小枝の先の葉っぱで軽く撫で廻した。

「うッ、やめてッ」

女は、身を揉んで歎願する。千公の眼が異様な光りを帯びていた。

「今度は、お前が手を持つ番だぜ」

「いいともさ。後で、お前が好きなようにさせてやらアな。だがな、お前は案外、女に甘えんだから、その前に俺がちゃんと下馴らしをしておいてやろうと思ってサ」

「うまい事云ってやがる」



「兎に角、もうチョット見ていなよ。おい女。これを啜えてろ。」

声を立てたら口から落ちるんだぜ、これを落したら承知しないぜ、いいな」

千公は、木の枝を女の口に啜えさした。

「やッ、何という理不尽な」

じーッと様子を窺っていた一行の中、一番若い公時が、真赤に顔を上気させて躍り出そうとした。

「これッ、公時。早まるな」

貞光が慌てて、公時の背負っている笈に手を掛けた。

「じやと申して、あの獣めらを」

「これ、坂田氏。逸るまい。大事の前の小事じゃ。われらが任務は女一人を助めるためではない」

「そうだ。まあ、待て」

渡辺の綱も頼光に口を添えて、いきり立つ公時をなだめた。

「酒頭童子なる者、夜の都に出没しては民の財宝を掠め、婦女を奪う。今日までその数は挙げて限りがない。多くの女達が山寨で悲惨な目に遭っている事であらう。あの女もその一人だ。また既に身を亡している者もあるう。そうした悲しみと怖れとを除くために、我等は万全の策を施さねばならぬ。皆、近う」

頼光はそう云うと、更に一段と声を落して細々と術策を与えた。

公時は頼光の策略を聞きながらも、心が苛立っていた。飛び出して行って、岩蔭の男達を一捻りにしてやりたい衝動を抑えようとして思わず歯ぎしりをしていた。

「さア立て、帰るんだ」と云いながら女の髪の束ねた処を片手で掴んで、ぐいと上体をのけぞらせた。

「こいつア案外、上玉だぜ」「そうよなア。案外早く、お頭のおぼしめしに預かれるかも知れねえ」

「さア、そろそろ行こうぜ」二人はそう云うと、籠を抱えた女を先に立てて谿沿いの道を登り出した。「もっと、しゃんと歩くんのだ」馴れぬ素足で固い岩角や木の根を痛そうに踏んでゆく女の背中や尻を、千公は面白そう

に小突きながら茂みの向うへ消えていった。

「なに、手下になりたい？ では、その者達をここへ呼べ」

酒顛童子は褥の上に大胡坐で、奪って来た一振りの刀を手に取って眺めていたが、彼の片腕とも呼ばれる「こんがら童子」の知らせを聞くと、大きな眼をギロリとさせながら顎でしやくった。

やがて「こんがら童子」に導かれて広間に入ってきた頼光ら五人は、その広間の中央に端坐した。都では鬼だと騒がれている酒顛童子が今、眼前にいるのだ。だが酒顛童子は鬼ではない。容貌怪偉、赤ら顔の口の大きい、人心の底を見透すように爛々と輝く大きな眼が、人一倍怖ろしく見えるのだ。

「おぬしら、何ゆえ？」

じつと五人の様子を見ている酒顛童子。

広間の周囲には「こんがら童子」「せいたか童子」を初め、多勢の手下が、油断なく頼光ら五人の挙措を窺っている。

「われら、もと都に住い致せし者。故あって都を逐われ、かくは山伏となつて山野を渉る境涯と相成つたが、われらを放逐せし都の役人ばらに一泡吹かせんと存じ、隙を窺い居りしも、風の如く京の街を掠むる貴殿の噂を聞き、その輩下となつて意趣を晴らさんと存じて参つた次第でござる」

頼光は周囲の警戒心にも憶する処もなく、正面切つて滔々と述べた。

「ふむ」

と、酒顛童子は一つ頷いたまま、五人の顔を交る交る見ている。頼光は傍に置いた笈の中から数本の太い竹筒を取り出すと

「この酒は見参の苞に持参いたしたものだ。何卒御笑納賜わりたい。なお万一のご懸念のため、失礼ながら一盞の毒見を」

そう言いながら竹の節を浅く切つた自製の容器に注いで、ぐいと一杯飲み干した。

「ほう」

と頼光の動作をじつと見凝めていた酒顛童子は、そう呟やくと

「先ず手の者になつて働いて見るか。おぬしら腕に覚えは？」

と、少し警戒心を解いたようである。

「いずれも多少は心得ております。お望みとあらば御輩下の誰方かと」

「おう、せいたか」少し試みて見よ」

「はッ」

「せいたか童子」は酒顛童子の声を聞くと、早速部下を選び出した。

——ここではあまり勝つても負けてもいいけない。いい加減にあしらわねば——

五人はそう思いながら

「それがしは拳で」

「それがしは木刀で」

と、それぞれ斗法を告げて立ち上つた。暫らくの間、広間で打ち合いやら採み合いの試合が続けられたが、

「もうよい、判つた。さらば只今より、こんがら」と「せいたか」の手の者に加える。よいな」

と酒顛童子の声が掛つた。頼光ら五人は「はッ、有難き仕合せ」

と、打物を脇へ控えて頭を下げた。

「では、その方とその方は「せいたか」の輩下へ、あとの三人はわれの部下じやぞ」

「こんがら童子」は、そう指図して頼光と公時を「せいたか」に委ねた。五人は再び酒顛童子に一礼すると、並居る両側の列に加わつた。

酒顛童子は、ずらりと一同を見通して一段と声を大きくして

「よく聞け、皆の者。今宵は加茂の阿津麻呂の館を襲う。彼は禁庭に出入りして莫大な財宝を貯えおる由、且つ又、息女の千引は都にも稀なる容貌よき者と聞く。財宝もろともに奪い来よ」

と下知した。「こんがら」と「せいたか」

とが「畏まってござる」

と頭を下げると、一同もそれにつれて頭を伏せた。

「路は遠い。門出一献の支度を」

酒顛童子の声に応じて、若い女達が檜の膳に瓶子と土器へ山の物を載せて運んで来た。この女達はみな都から連れて来られた者ばかりで、輩下たちに従属させられていた。

輩下は組頭、小頭、手下、小者と分れていて二班に編成せられ、組頭が「こんがら童子」と「せいたか童子」の二人、その下に各組の小頭が二人、手下が一人づつ、それに小者と云う雑役が各組に十二、三人いて統制を取っていた。

又、酒顛童子の山寨は入口の両側に小者達の雑居部屋があり真中が広間で両側に手下、小頭、組頭と小部屋が並んでいる。手下は一部屋に三、四人、小頭は二人同室で、「こんがら」と「せいたか」の部屋だけは個室になっている。そして出入口は、全部広間の方に設けられてある。この部屋部屋に一人宛の女が割当てられてあって、その部屋の輩下の者の世話をする仕組みになっている。それ以外の女は小者の雑居部屋の炊事洗濯などの雑役に追い使われているのである。

広間の正面が一段高くなっていて酒顛童子の座所になっており、その奥が彼の居間である。居間の右に宝物倉、左が武器倉になっており、その奥に廊下があって幾部屋かの部屋が並んでいる。

今、酒肴を運んでいる女達は手下部屋の女達である。酒顛童子の傍には女が二人、左右

から彼の大盃に瓶子を傾けている。頼光らは手下の一番下座に坐ってそれとなく間取りの様子、武器の所在など探っていた。

「門出の祝いに舞を一さし舞わせようぞ」

酒顛童子が酒盃を置いて傍の女に眼配ばせすると、すると奥へ消えたが、やがて一人の女を伴って広間に下りた。眼鼻立ちの整った顔が幾分、険しい翳を見せている。

「春は梅 山鶯や飛ぶ鳥の

丹波の山に 霧はれて

空にかがよう 紅雲の

雲の下なる 大江山

女は声をあげて舞った。

「峰の松風 吹き絶えて

谷ゆく水の せせらぎも

閑けき里と なりにけり

一段の唄を歌いすまして足を踏張り、きつ

と姿勢を構えた女が、短刀を逆手に持つと

「ええいッ」

と裂帛の気合と共に、酒顛童子目がけて投げつけた。ハッと愕く一座の者。

「やッ」

と叫ぶと瞬間、酒顛童子は上体を右にかわし、無意識に手にしていた大盃でその短刀を受け止めようとしたが、ヒューンと真一文字に飛んで来た短刀の切先は、その大盃を刎ねとばして背後の杉戸にプツリと突き刺った。

「この乱心者がッ」

酒顛童子が女の膝に崩れかかった態勢を起し、赤い顔を益々赤くして怒鳴った時には、女は既に「こんがら」と「せいたか」の二人に両腕を捻じ上げられていた。

「我が夫を殺せし憎き仇。せめて一太刀と思ふたに、ああ口惜しや」

と眼を吊り上げ歯ぎしりして身をよじる。

「ええい云うな。わしに逆らう者は、見せしめに、首を掻き切つて呉れるわ。それ、そこな女を裏庭へ引摺り出せッ」

酒顛童子は破れ鐘のような声でそう下知すると、陣太刀を引抜き、その抜身を提げてすつくと立ち上った。

やがて裏庭に引出された女は、其処の松の幹に縛り付けられた。輩下の男や女達は、その松の木を遠巻きにして立っている。

「これ女共は、もっと前へ出る。賢しらだつた者がどんな目に遭うか、よく見て置け」

酒顛童子は、そう云うと縛った女の横に立ち陣太刀を振りかぶった。

公時は先刻から余りの無残さに全身を慄わして、今にも酒顛童子に掴みかかろうとする気持を抑えかねていたが、ぴたり寄り添った頼光が、じーッと公時の腕を押えて引留めていた。

辺りには何とも云えない凄惨な空気が漂って、見ている者達は、思わずぞくぞくと背筋を水が走るように身を縮めた。

「ハハハハ、門出の血祭りは済んだ。さア、出発の支度をしろ」

酒頭童子は、カラリと太刀を投げ捨てるとパッパッと両手を二、三度はたいて自分の部屋へ帰っていった。

夕暮れの迫る頃、[〃]こんがら童子[〃]と[〃]せいたか童子[〃]は、それぞれの輩下を従えて山寨を下っていった。頼光ら五人は

「おぬし達は、まだ山馴れぬから我等と共に走れまい。この度は小者と一緒に見張りをしていよ」

と云って残された。この山寨には周囲四カ所に見張り所があつて、昼夜を分たず見張りをしていたのである。頼光は、わざと

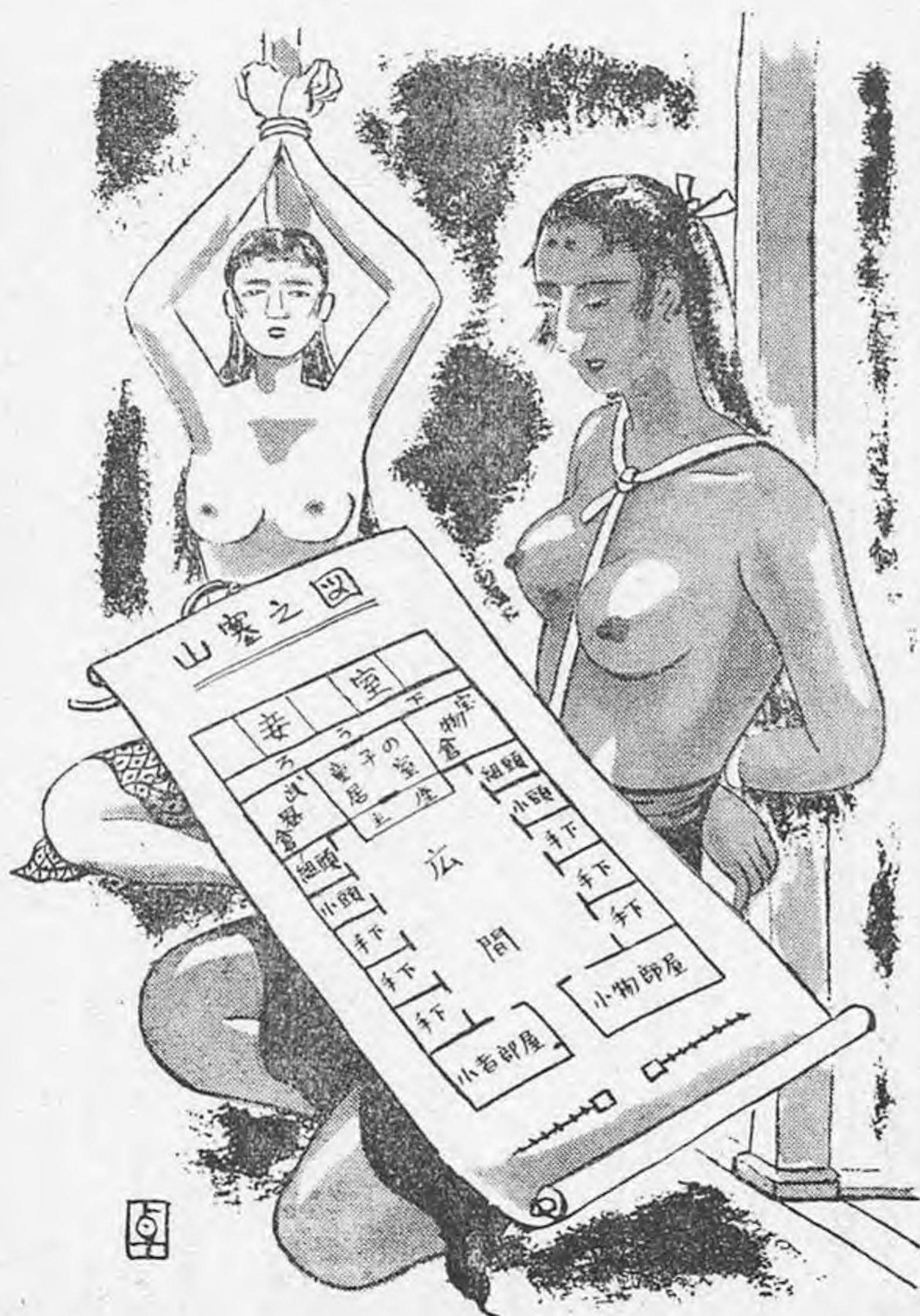
「それは残念、ぜひとも襲撃の仲間に加えて戴きたい」

と云ったが

「ここから都まで山道二十余里。一夜のうちに駆け抜けて参る我等には却って足手纏い。こうしている間に夜路の早駆けの稽古でもしているが良い」

と云うかと思うと、スツと風に吹き飛ばされる木の葉かなどのようにな身軽く駆け行つた。まるで足が地に着いていない様な速さである。

昼間、谿川で千公と呼ばれていた小者が広間に入つて来て



「女共は部屋の前へ」

と怒鳴った。酒肴の片付けを済ませた女達が、手下の各部屋の前へ居並ぶと、

「さア、皆が帰つて来るまで、いつもの様に坐禅だぜ」

そう云いながら一人一人を、その部屋の柱に様々な形で縛つて廻った。留守の間に逃亡

するのを防ぐためである。

その頃、頼光らは小者に引率されて山の見張り所に向つていた。十三夜の月が上つて、周囲の峰々を照らしていた。

其処には小さな小屋があつて四人の者が二人宛交替で見張りに立っていた。頼光らは員数外なのであつたが、小者の中に狡いのがい

て

「ちよつと代つて呉れ。おれは山寨へ帰つて来る。今頃は千公の奴め、留守居役でうまくやってやがるに違いねえ」

「そうだ。一刻もしたら帰つて来るから、そうしたら代つてやるぜ」

「早くしねえと、俺たちの時間がなくなるぜ」

「合黙だ」

そう云うと先輩らしい二人がすつと闇に消えていった。頼光と公時は、互に眼で頷き合つた。——さア、今だ——

頼光と公時は、矢庭に残っている二人の小者に躍りかかった。難なく小者を斃すと直ぐ様、山寨に向つた二人を追つた。

「どうした。慌てて」

と月影に振り返つた相手を、一撃の下に倒すと

「先刻の岩場へ急ごう。もう他の者が来ているかも知れない」

彼等は昼間、女が洗濯をしていた岩場を集合場所に決めていたのだつた。

頼光と公時が其処へ着くと、既に渡辺の綱が待っていた。綱が草叢に隠していた太刀、手槍等を取り出して中味を検めている処へ貞光も季武もやって来た。見張りの小者は全部斃したのである。後は酒頭童子と留守居の小者二、三人だけである。

「さア、山寨へ出発だ。今頃は加茂の阿津麻

呂の邸を散々荒しているだろう。だが、これは止むを得ん」

頼光は、そう云つて山伏の法衣を脱いで身支度を整えた。

その頃、山寨では酒頭童子が、まだ酒を呑んでいた。

「阿佐、酌がぬか」

「はい……あの」

酒頭童子の催促に、阿佐と呼ばれた妾は、そろりと一足前へ寄つた。彼女の両手は後に縛られている。首から胸へ垂らした紐の先に大きな素焼の瓶子が、ぶら下っている。酒はその瓶子の中に入っているのだ。

「早くしないか」

阿佐は促されると、両手を後に縛られたままの上体を屈めた。そうすると彼女の膝頭の上の方でくるりくるりと廻っていた瓶子が足の間に止つた。彼女は両膝で瓶子の底に近い方を挟むと、そろそろと上体を尚も屈める。瓶子は徐々に前方に傾むいた。その膝の力の入れ方がむつかしい。固くすれば瓶子は動かず、少し力を抜けば、つるりと下つて又膝の上でくるくると廻り出す。阿佐は何度も体を前後に動かして角度と力を調節しなければならなかつた。酒頭童子は阿佐のそうした苦しみを、充分考慮しての要求であつた。

「誰だッ」

襖の外に人の気配を感じて、パツと盃を頭上へ投げて太刀を引き付けた途端

「たアッ——」

と襖が蹴倒された。

「酒頭童子ッ。悪逆の酬い、覚悟ッ」

頼光の声と同時に、貞光がサツと手槍を繰り出した。

「おのれ謀つたなッ」

とおめくと酒頭童子は槍の千段巻を左手にガツキと握つた。流石、怪力、押せども引けどもびくともしない。これを見た季武がパツと眼潰しを投げると、これには酒頭童子も不意を喰つて、トンと槍を突き離すと貞光は、はすみを食つて慥と顛倒したが、その機を逃さず綱と公時とが左右から

「えーいッ」

と斬り付けた。

「ぐあーッ」

一瞬、手応えはあつた。だつと大刀を宙に跳ね上げた酒頭童子は、まるで大きな怪獣のように両手を拡げて立ち上ると、頼光らに襲いかかるような恰好になつたが、そのまま、バツタリと広間の床へつんのめつた。

一齊に飛び退つた五人は、暫らくその姿を見ていたが、

「止どめを」

と云う頼光の言葉に、貞光が手槍で心臓のあたりを一突きし、季武が鎧通しで酒頭童子

の首を掻き切った。

「わッ、こりや不可ん。綱、頼むッ」

女を救け出そうとして酒頭童子の部屋へ踏み込んだ公時が、真赤な顔で飛び出して来た。綱も尻込みをした。

「どうも女には弱くていけない。殿、なにとぞ……」

と縛られた女達の救出を、頼光に移譲して

しまった。

「よろしい、女は私が連れ出そう。その方たちは武器倉を打ち壊せ」

「はッ」

と応えて、武器倉の厚い扉を打ち壊しにかかった。

ここから後は、巷間に伝えられる説話をそ

のまま当て嵌めればよい。或る物語の本には大きな鬼の首を車に積んで意気揚々と都大路を行く頼光らの絵があったが、救け出された女の事はその後どうなったか判らない。この稿の筋書きから行くと、それらの女達の後日譚も出来ない事はないが、ここでは一応、酒頭童子の退治までで筆を擱くことにする。

(終)

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十五号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽

復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
復刊第8号 (昭和31年9月号) 二百円
復刊第9号 (昭和31年10月号) 二百円
復刊第10号 (昭和31年12月号) 二百円
復刊第11号 (昭和32年1月号) 二百円
復刊第12号 (昭和32年2月号) 二百円
復刊第13号 (昭和32年3月号) 二百円
復刊第14号 (昭和32年4月号) 二百円
復刊第15号 (昭和32年6月号) 二百円
復刊第16号 (昭和32年7月号) 二百円
復刊第17号 (昭和32年8月号) 二百円
復刊第18号 (昭和32年9月号) 二百円
復刊第19号 (昭和32年10月号) 二百円
復刊第20号 (昭和32年11月号) 二百円
復刊第21号 (昭和32年12月号) 二百円
復刊第22号 (昭和33年1月号) 二百円
復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
復刊第24号 (昭和33年2月号) 二百円

復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円
復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
復刊第30号 (サド特集号) △売切▽
復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円
復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
復刊第38号 (悦庵小説と緊縛写真) 三百円
復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円
○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒に求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

▽未来幻想マゾ小説△

家畜人ヤプー

沼 正 三

第二十五章 長椅子の上と下

一 祈りは聴かれた

クララは長椅子に倚って、夢の本を繰り広げている……
ところで、麟一郎は、どこでどうしているのだろうか？——実は、
その時クララのすぐ近くにいたのだ。二人の身体は一枚の皮革を隔
てて、触れ合ってさえたのだ。

話は少し前に戻る。

麟一郎は、四肢に激しい痛みを感じて失神から回復した。先程と
はまるで違う姿勢で、身体を俯伏せにしたまま手足を四方に伸し、
その両手首、両足首に革製の輪が嵌って、胴体を平らに吊るさ
れている。頭部はゴムの様な袋が顔面に密着してピタリと被覆され

初めて読む方に 今から二千年後の宇宙帝国イース。女性が
男性を圧倒し、貴族平民の別ある白人達の下に奴隷階級の黒人
が仕え、更にその下にヤプーと称ばれる黄肌の家畜入が白人の
生活を快適にする為使役愛玩消費されている。科学の力は一
を失った肉体に現代人の想像も及ばぬ変形を加え、畜人大畜人
馬や、矮人を作り出し、更に肉便器その他の生体家具各種を誕
生させた——劣等人を家畜化し家具化し切った白人達の女権的
貴族政治の世界、その精密図を描くのが、この小説の第一の狙
いである。

イースの大貴族ジャンセン家の嗣女ポーリーン、その妹ドリ
ス、その兄セシル、彼の義弟ウィリアムは、本国星カルーから
地球別荘に來ている。円盤で時間遊歩に出たポーリーンの墜落

ているので、目も耳も全く役に立たないが、どうやら、細長い箱の様なものの内部に四隅で四肢の先を支えて吊られているらしい。それにしても、この背中に掛ってくる重さはどうだ！腹の下に支えがないから、弓形に背中が反り、手首足首に全荷重が掛る。まるで人間ハンモックである。頭部は鼻の下から耳に掛けて柳見たいなもので固定されている——頭の上に何か小さいものが軽く載せられているのは何だろうか？それに身体が無性にほてる。全身の血液がカッカッと湧き上る様な感じだ。心臓に針が刺った様に感じるのは気の迷いだろうか？

急に、背中への荷重が移動した。身動き……

——生き物？ いや、人間だ！

事態が瞬間に明瞭になった。先程、ドリスが青年に命令した「長椅子にお入れ」という言葉を手掛りに推理したのだ。

——これは、人間の身体を使って支える仕掛の長椅子なんだ！

人間のではなく、畜人の、というべきだったが、推理としては当たっていた。鱗一郎の体は、クララの掛けている安楽長椅子の内部に張られて、彼女の体重を受けているのだ。

お尻の動きが、背革とその裏地（スプリング要らずの強い弾性体）を隔てるだけの彼の体に伝って来る。一人の体重がモロに掛っているのだ。その重心が彼の腰から尻の辺に在ることから考えると、掛けている人の向きは彼とは正反対らしい。

——すると、頭の上に在るのは、その人の足だな……

これも当たっていた。安楽椅子の足台——先に彼女の足跡を受け支えていた黒い半球と見えたのは、そこだけ背革がえぐられた孔から身体と直角に半ば突き出した彼の頭部だったのだ。

——だが、一体誰だろうか？

こればかりは知る術もないと思われた。

然し、頭部をスッポリ包んだゴム状覆面帽は、目と耳を完全に被

事故から現代の独乙女美女クララは婚約者瀬部鱗一郎と共に、二千年後の地球面にやって来た。然し、彼女がジャンセン家の客人としてもてなされ、安逸の生活を享樂し得るに反して、鱗一郎はヤプーとして扱われ、畜化処置を施される。——この畜化の過程を細かく辿るのがこの小説の第二の狙いである。

鱗一郎はクララと無理心中を試みて失敗し、家畜適性検査を受けた上、今はイースの人になり切つてウイリアムを愛する様になつたクララに所有飼育される土着ヤプーとして登録され、洗礼されて彼女を神として拜むことになる。

さて、クララはポーリオンと共に空中列車龍巻号に乗り、人類の未来を夢に学んでいる……。

覆しつつも、鼻孔部だけには通気用の小孔があるらしい。この外界との唯一の通路から、上の人の身動きにつれて微かに入ってくる香氣……この匂いは……

——クララだ！

今朝の香樂浴で彼女の体に染みついた独特の匂は、畜籍登録の署名をしに、彼女が彼の傍に立った時、彼の嗅覚に強い印象を残していたのだ。

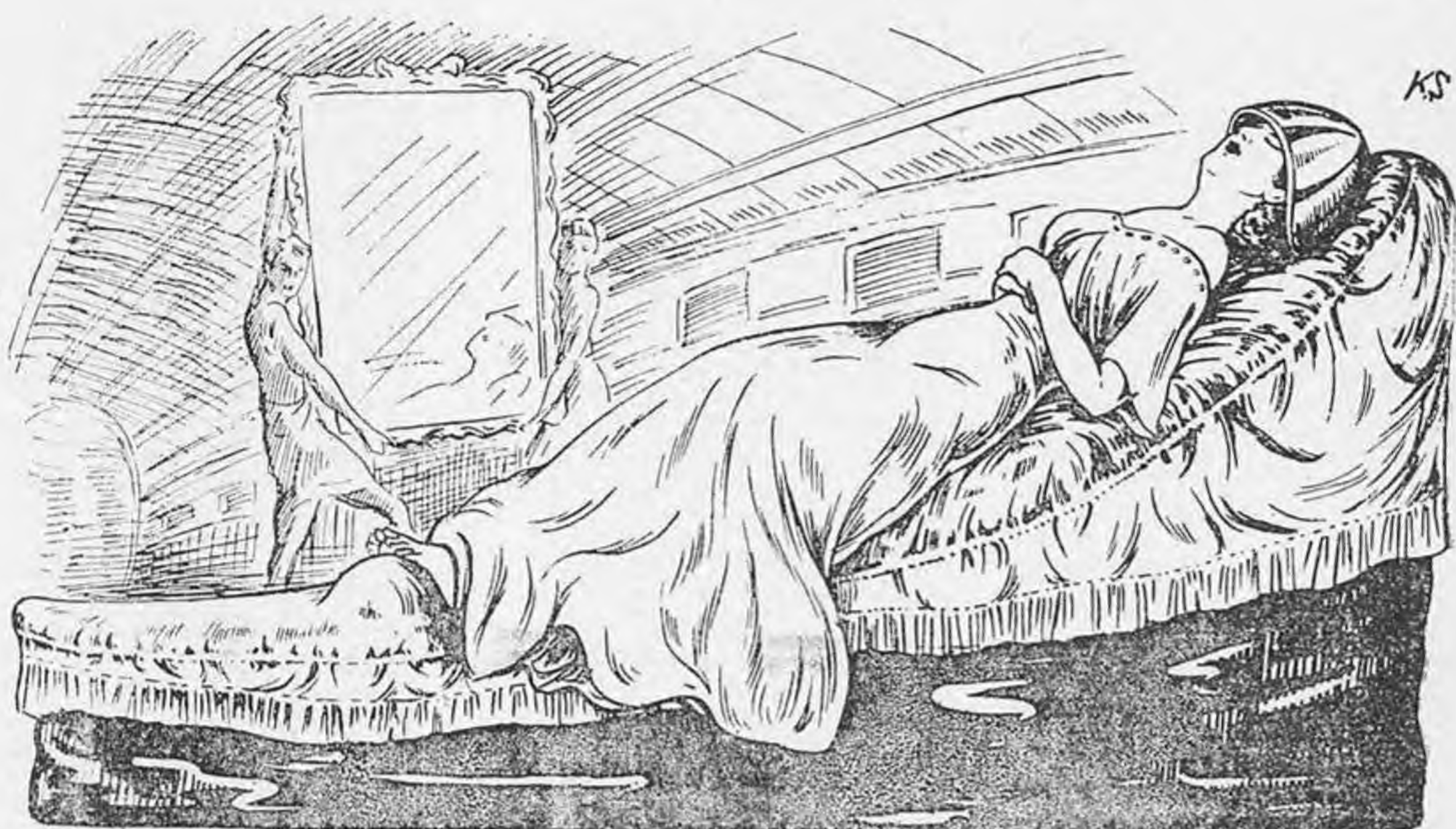
もう疑うまでもない。自分の背中の上にいるのはクララなのだ。彼女は安楽椅子を使っているつもりだろうが、五八疋の体重は彼の生体ハンモックが支えているのだ。

——クララ、僕がここに在るのを知らないのか？

まるで、それに答えたかの様に、偶然に一致して、クララがこの時のびをした。そして両足で彼の頭をウンと突張った。

鱗一郎は忽ち全身の皮膚表面に猛裂な擦りの触感を覚え、堪え難さ思わず身もだえして、擦ったさを振り落そうとした。その身動きは背革の裏地の弾性に倍加されて、上にあるクララの身体に伝え

KS



られたろう。
 どういう仕舞
 なのか、固定
 されて自分で
 は動かせぬ頭
 部を外から押
 される度に強
 い擦ったさが
 生じ、否応な
 しに身を揺り
 上に掛けてい
 る人の身体を
 も動揺させる
 ことになるの
 だ。
 手足の首は
 今にもちぎれ
 そう。
 —ア—ッ
 痛い！ クラ
 ラ！ どうか
 救けて呉れ！
 口唇締め金具
 に閉ざされた
 口こそ開け
 ね、思わず、
 心中クララを
 念じた。登録

式、洗礼式のあとで、既に自分を裏切ったこの恋人の名を呼ぶこと
 に躊躇わなかったのは、最早、彼が男性としての誇りを彼女に対して
 維持しようとしていないからであるが、一つには、又、辛かったら
 クララに祈れ、と教えたドリスの言葉が潜在意識への暗示になって
 いたからであろう。

不思議なことが起った。ずっと身体が軽くなったのである。腹部
 に直接何か支持物が当てられた感じはないのだが、しかも確かに、
 今まで宙に浮いていた身体が何かに支えられている。その為、クラ
 ラの体重を全身で支え得るので楽になる。いわば、ハンモックが敷
 布団になったのだ。祈りは聴かれた！

不思議だ、とその理由を考えていると、又もや堪えられぬ重さを感じ
 ているが、クララよ！ と念じれば、途端に楽になる。ドリスの教
 えたとおり、クララへの祈りが効を奏することは間違いない事実な
 のだ。クララ！ クララ！

今や彼の意識はクララばかりだった。他のことを考えるのを体が
 嫌厭するのだ。だが「苦しい時の神頼み」彼のクララに対する気持
 は、もはや恋人に対するというより救主に、神に対するものだった。

黒い半球の正体を知ってか知らずか、クララは両足先で彼の頭を
 挿んで弄る様に押し動かす。その度に擦ったくなり身揺りをするこ
 とは今迄どおりだが、下から支えられているからズツと楽である。
 荷重からの苦痛に比すれば、擦ったさはまだしも快感を伴ってい
 た。椅子の機構を付度して祈念を中止しない限り、擦ったさだけな
 ら堪えられそうである。気のせいかな、先程来の全身のはてりも、少
 しは収った様だ。

——祈りは聴かれる……

女神クララの尊像がいつか彼の心裡に甦っていた。合唱する畜人
 の大集団が仰ぎ見た空に浮んでいたあの麗ろな白衣の美女神……

もう、他の何事も考えず、彼はひたすらクララに祈念している。夢見るクララの両足が無心に彼の頭を蹴る度に、全身の筋肉で反応して、彼女を喜ばせつつ、彼は必死に彼女に祈り続けている。

二 日本滅亡と蛇蚕の誕生

長椅子の上では、クララが人類の第二の故郷テラ・ノヴァを訪れていた。有翼四足人達の古都三角塔の壮麗さよ。彼等の王に騎乗して天駆けるマーガレット女王の颯爽たる雄々しさよ(四章二節)……だが、その内に夢の場面は再び懐かしの地球に戻って来た――

白人が新地球の経営に腐心していた頃、地球では何が起ったか？白人の故郷の星は今や有色人種に委ねられていた。それも無智蒙昧な濠州蛮人等を除くと、米国内の黒人と日本人とだけが、白人という正当な主人の留守宅「地球」の預り手たり得る民族だった。……が、この両者間には大きな違いがあった、前者は勃興期に、後者は衰退期に在ったのだ。

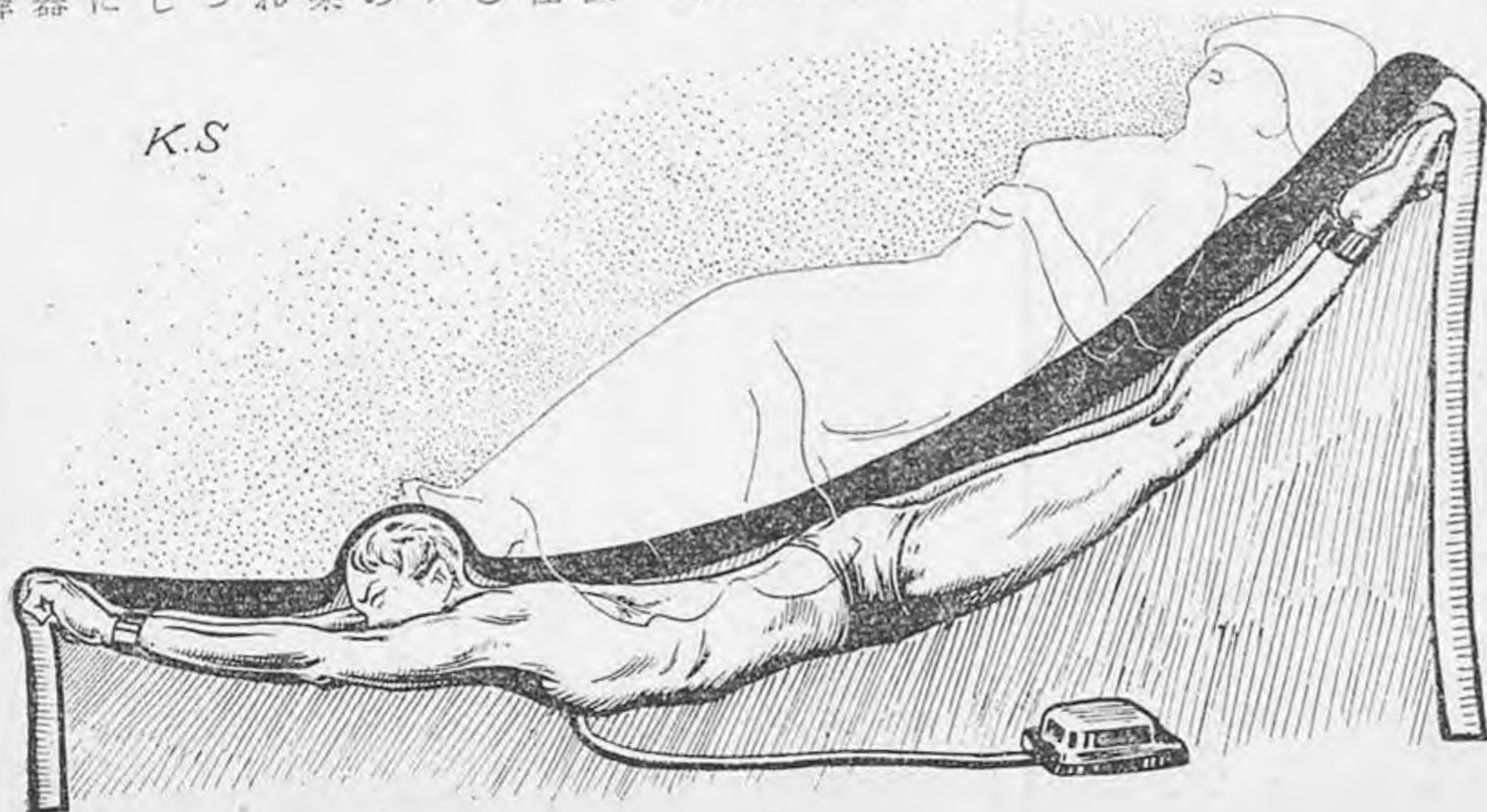
米国内の黒人達は、この地球前史の終末期に、始めて彼等の最良の日を迎えていた。広大な領土、豊富な資源、高度の技術……素晴らしい白人の遺産を彼等は享受した。勿論その能力は、受け継いだ文明を更に進歩発展させるには不足した。然し、とにかく彼等は二十世紀末の科学水準を維持するところまでは向上したのだ。

これに反して、日本はひどい状態だった。然て人口の半ばを失った打撃も痛手だったが、それ以上に放射能に毒せられていたのがある。人類最初の核爆発モルモット(広島、長崎、福龍丸)となつたばかりでなく、初期水爆実験の死の灰は、気候条件から日本列島に最も多くの死の雨を降らせた(※)。それに加うるに、米食民族としての悲劇があった。放射能を摂取する率はミルク食民族の数倍に及ぶと夙に警告せられながら、米食を止めることができなかった

のだ(※)。その結果――出産率は奇妙にも却って向上したが――新生児の六割が白痴か低能であり、その多くは畸形を伴っていた(※)。

(※註) 死の灰の八〇％は北半球に、その五〇％は東半球に集中する。地理的条件からは日本は放射能の吹きだまりである。

(三宅泰雄教授「世界の放射性降下物の現況」ストロンチウム90は骨髄中のカルシウムに集中するが、これは食習慣によつて差異を生じる。現在までに爆発した核兵器からの成層圏降



K.S

下物による放射線は、カルシウムの大部分を乳製品から取る欧米人に対し一六〇ミリレムの一人当り七十年平均骨髓線量を与えるが、これを米から取る日本人に対しては、その六倍の九六〇ミリレムを与える。(原子放射線の影響についての国連科学委員会の報告)

一九四五年八月六日、広島島の爆心から一、二〇〇米以内のところで十一人の妊婦が被災し、生き残った十一人の子供を生んだ。その内の七人までは猿同然の小頭児(先天的白痴)であつた。

(ジョージ・ブランマー、駒井卓博士による)

どこまでも放射能に呪われた国土であり、民族だった。だが、この国土から脱出しようにも、アジア大陸はα爆弾で焦土化し、人間は愚か草木や昆虫にも生存を許さぬ放射能灰の砂漠と化していた。大気の汚染は北半球においては遂に致死的状态に達した。ω熱ヴェールスには免疫性あるメラニン色素も、これには勝てない。米国黒人は、北米大陸を見限ると、蓄積された物量に物を言わせ、南米大陸への大移住を一挙に敢行した。南半球の大気もいずれは危険になる。根本的解決は他遊星への移住しかないのだが、それを想像する勇氣も実現化する能力も、彼等にはなかった。

白人文明の模倣を事として来た日本人にも、その能力はなかった。彼等は、迫り来る死を避ける為の方策としては南半球への移住しか考えられなかったが、船腹が不足していた。

そこへ、南米移住を終わって不要になった輸送船を貸すから南米へ移民して来ないか、と黒人政府から声が掛った。さあ、日本中が大騒ぎになった。乗船資格争奪の醜い争いは国民を更に分裂させ、国政を混乱させた。……が、輸送船団が到着すると、国内での決定は無効だった。黒人の輸送司令官は自分達で輸送すべき者の資格を決めた。二十台三十台の健全な若い男女だけ集めて、その中から更に選抜した。選ばれたさに黒人船員に愁波を投げかけた良家の婦女が

数知れなかった。勝った方を乗せると言われた青年達は、互に死物狂いで決斗して船員に恰好の娯楽を提供した。日本中が黒人に玩弄され、地獄絵図さながらの有様に陥った。

だが、こうしてやっと選ばれ運ばれた南米の地にまっていたのは、ブラジル移民どころでない、奴隷の待遇だった。黒人政府は、下級労働者要員として以外には、上陸を許可しなかったからである。かつて、先祖が奴隷として異郷に酷使された記憶を持つ北米黒人達は、こうして、今得意の時期に他種族に奴隷労働を強制するとに心理的補償を見出していた。

昔エジプトでユダヤ人がそうだった様に、今日日本人は南米に奴隷となった。その受難の中で心の支えとなるのは、モーゼの様な役割を果たした首長一族の激励であつた。

ところで、日本本土に残された者の運命はどうだったか？ 国家組織の中堅層を一挙に失って、国政は停滞、否、崩壊した。警察力がなくなつて犯罪は激発し、弱肉強食の世界を現出し、見る見る物資は欠乏し、国土は荒廃した。子に捨てられ親に捨てられた老弱の国民には毎日の食糧さえ自由にならなかつた。飢餓による死、食う為の殺人、絶望による自殺と発狂、そして疫病の蔓延。死神は跳梁して信じられぬ程の短期間に、ノーマルな国民はこの国土から姿を消して終つた。

「日本」は亡びたのだ。

あとには、文明の残骸の中に、打ち捨てられた白痴や畸形者の群が、死神に対して丈は異常な抵抗力を示しつつ、もとより文化の最低水準さえ維持する能力なく、衣服を着ることさえ知らず、食欲ばかりの動物的生活に退行して、死の大気を呼吸していた。いくら生命力が強いとはいへ、彼等の死は、否、北半球の生物の絶滅すら、時間の問題になって来ていた。

マック將軍を司令官とするテラ・ノヴァの宇宙艦隊が現れたのは、そんな時だったのである。時に二〇五七年。

六十数年前と違い、今度は「故郷の星」の回復が目的である。放射能を消滅させることも熱ウイルスを無害にすることも、今の彼等の科学力には可能だった。

本国で彼等が完全に奴隷化し、半人間と賤しむ黒奴が、地球の主人面で、黄色人を勞務に使役し、国家を構えている笑止千万な有様は、かつて、彼等の先祖が感じた憤りを再燃させた。

戦争ではない。奴隷狩だった。南半球の黒人国家は一瞬に撃滅され、全国民は捕虜にされた。思い上りを懲らして本来の奴隷の地位に置く為に。

黒人国家の奴隷階級を成す黄色人達——彼等の中には古来からの首長一族とて皆から尊敬される者達もいた——も、勿論全員捕獲されて收容所に入れられた。

その間、地球浄化作業は着々と進められた。大地と大氣から放射能と熱ウイルスが一扫され、地球は再び真正な主人の為の樂園になった。東海の空にもフジヤマが旭日を浴びて輝いた。

驚いたことには、日本列島に生存者がいたのだ。ゴリラか猿人かと疑われる容貌姿態で相当数が野蛮な穴居生活をしていた。動物的本能ばかりの白痴の小頭兎、極端な先祖帰りの畸形……これが人間か？

この連中は全部捕獲收容されて、テラ・ノヴァに送られたが、輸送に当った参謀ローゼンベルグ大佐（独逸系）は、彼等を人間と見ず、動物（獸畜）として扱うことを主張した。死亡事故などの時、責任が軽くなるからだった。

常識的には、放射能による遺伝子の頽廢と文明の壊滅こそ、この退化墜落の原因であることは明らかだったのだが、大佐は、神の懲罰による獸畜化を唱えた従軍牧師の説を一步進めて、彼等は元来が

類人猿であり、白人文化を猿真似していたのが、白人文化を離れて忽ち本性を曝露したのだ、と主張したのである。政策的便宜が、畸形の極端と相まって、この僻説が採用され、彼等は動物として、官廷動物園に入れられて王家の人々の目を楽しませたり、飼育所で育種学的研究の対象にされ、後代の多様なヤプー変種の原型となったに至った。

畸形者についてはそれで良かったが、そうになると、同じ種族の南米で捕えられた健全者についても処遇問題が起って来た。大佐の説を採れば、彼等も本質は類人猿なのだから、人権を認める必要はないことになるのだ。そして、彼等にとって不幸なことに、ここでもマック將軍は、政策的便宜を重んじた。回復した地球を白人のみの天下にしておくのには、その方が都合が良いことは言うまでもなかった。類人猿説が司令部を支配した。——彼等には奴隷に過ぎぬ黒人の、そのまた奴隷だった劣等種族に対等の人格を認める気になれなかったことも、この説の迎えられる一理由だったろう。（五章三節参照）。

丁度その頃、南米收容所の黄色人の代表から、自分達の本国島に帰り、昔ながらの首長一族を戴いて独立国を作りたい、という申出があつて、司令部を大笑させた。奴隷の奴隷たるに甘んじていた家畜的劣等人が何を言うか！

「面白いじゃないか、そうさせたら……」
という意見があつた。

「どうせ奴隷資源として繁殖させなきゃならん。なら一部をこの島に住わせて自然動物園にしたらどうだ。太平洋上の猿カ島さ。動物は飼育環境が良い程繁殖率が増すんだから、奴等が人間並みの国家を持ちたいと言うんなら、許して、そう幻想させておけば良い。……」

「よし、それで行こう」

マック將軍が一決した。
「收容所から三分の一を選出して、本国島へ帰してやろう。首長一族も、女王陛下への献上分を残して、あとは帰らせよう。そして奴等の自治に任す……そうだ、我々と対等の独立国だなんて言い出さ



れても面倒だから、保護国にしよう。お前らの精神年齢は十二歳位だからってな。……」
こうして新国家「蛇蛭」が誕生した。

クララはこんな一部始終を夢見ているのだ。この畜生種族の一人を恋人にしていたことのある彼女としては、足台を蹴飛ばしたくなる程うなされもするだろう。

三 従畜馴致椅子

ところで、鱗一郎が今入っているこの椅子、クララが掛けているこの安楽長椅子は一体どういうものなのだろうか？ 今後の出来事を分り易くする為に、多少の説明を加えよう。——これは、イース貴族が従畜を読心能化するのに使う特殊設備の機械だった。

イース貴族は読心家具を使用する。既に（一章四節）説明した様に、これは生体家具の一種で、生理学的処置により特定人の思考を脳波として受信し得るものである。自意識の主体性は消滅してるから、自分の行動というものを持たず、栄養循環装置のコードに繋がれて室内に待機し、主人の命令脳波にのみ対応する行動を以て反射する様条件づけられているのである。家具であって個性がない。

さて、こういう便利な家具を使い慣れた

貴族達が、無制約な移約性ある従畜の使用においても、一々言葉に出さずとも心に思っただけで命令を与え得る様にと欲したとしても無理はあるまい。読心能を備えた従畜（読心従畜）への要求がかくして生じた。

然し、従畜は個性性を持っているから、生体家具化した場合と違い、独立の行動能力も必要である。自意識を把持しつつ、しかも主人の命令脳波にだけは反応せねばならぬ。

イースの高度の科学にとっても難かしい要求だったが、脳波技術の発達は、遂にこれを可能にする従畜読心能付与機を発明するに至った。これが「馴致（長）椅子」と呼ばれるもので、その原理は脳波調節にある。

先ずその基礎となる脳波受信を起させる為には、主人の体との共通部分を従畜の体が持たねばならぬ。読心家具においては主人の脳脊髄液が使用されたが、読心従畜においては、主人の尿を血液化する。細かい理窟は略するとして、尿と血液とが極めて組成の相似た液体であることは周知の事実だ。ヤプーの腎臓機能を制止しつつ、コサンギンを用いて尿毒を無害化すると、その血液は尿に赤血球、白血球を加えた様な組成に近づく（勿論、ある割合を越せば老廃物を排出する。ただ、通常の人尿程度に老廃物を含んでも平気になるのである）そこで、主人の尿に赤血球、白血球を加えたものを全血液と置換し、人工心臓によって循環させると、従畜の血管は主人の尿と血液で満される。これによって脳波受信が可能になるのだ（本来は受信の為には、主人の血液を貰うのが一番良いのだが、それでは勿体なき過ぎるので尿が用いられるのである）。ただ、主人の尿に特異反応を起す体質もあるから、読心化作業の前に少量の尿を注射して検査する。洗礼後（前章一節）麟一郎が受けた反応注射はそれだったのだ。

この血液置換状態を馴致中持続する為には候補畜の身体を拘束せ

ねばならぬ、又後述の様に体へ刺戟を加える必要があるのだ、その方も兼ねて、椅子の中でハンモックの様に吊られるのだ。こうしてから、椅子の底部にある主人の尿を詰めた人工心臓を従畜の心臓部に連絡して置換を行う。麟一郎が心臓に針が刺さった様に感じてるのは、その為である。ドリスは聖尿洗礼の時の尿の残りを人工心臓に入れさせたのである。彼の身体がはてっているのは、尿と血液が血管の中を廻り始めた為の、慣れる迄の異物反応なのだ。——洗礼や堅信で尿を使うと知ってさえ、あれほどショックを受けた麟一郎が、この真相を、彼の生命を維持する赤血球がクララの尿に乗って全身を循環しているこの事実を知ったら、どんなに驚くことだろうか？

さて、椅子に入れた上で視聴覚を外界から遮断する。これは、二つの理由がある。根本的には、後に述べる脳波送信を受けて、主人の見るのと同じものを見、主人の聞くのと同じことを聞くのに、他の視聴覚刺戟があつてはならないからであるが、この脳波送信を感じる得る迄に思念集中が可能になる為には、あらゆる雑念の排除が必要なので、その前提としても、雑念の元になる外界刺戟から絶縁することが有効なのである。

然し、外界からの刺戟を断つただけでは、思念の集中はできない。ここに脳波と刺戟具との相関装置が登場することになる。

原理的には、刺戟は何でも良いのだが、馴致椅子では主人の体重が荷重として使用される。従畜自身の体重も長く吊る間に肉体的苦痛になるが、上に主人が掛けた時にはその負担は殊に堪え難いものになって従畜を苦しめる。しかも主人自体は何ら馴致への努力をせず、単に腰を下しているだけで良い。いわば、主人の存在自体がそのまま強力な刺戟と化する点で、特別の動作を要求する他の刺戟具よりも、主人の便利にできているのである。

この刺戟を解除する中心思念は——麟一郎においては目下「クラ

ラへの祈り」が与えられているが——、通常、各従畜の名前又は専門職域関係の言葉になっている。何故なら、主人の周囲に在る従畜は一匹に限らぬ以上、自分に関係ある脳波のみ感受する能力が従畜には要求されているからである。

この中心思念の脳波型が刺激解除の条件になっている——畜体腹部を支える空気スプリングが脳波型によって起動し、思念の強度に応じて作用するのだ。雑念があればスプリングは動かず、全荷重を四肢の先で受けねばならぬが、思念集中に成功すれば、畜体は支持され、荷重負担が楽になる。——恐るべき思考強制。誰がこの苦痛を冒して他の思考を継続し得よう。それを放棄して与えられた思念に精神統一するだけで救われると分っている時に。

こうして雑念を排除し、思念を集中している従畜の体が、血管の中を走る主人の尿に慣れて来ると、精神交感度が高まり、ラジオのダイヤルが特定周波数に合った時の様に、その中心思念の脳波型に合わせて発せられた短波を受ける様になる。いわゆる脳波受信現象である。

そういう短波が主人の身体の近くから発信されている。超小型の自動放送局がちよっとした服飾品の中に仕込まれているのだ。ドリスがクララに贈ったブローチがそれだった。この中に含まれた精密な機械は、人間の目と同じ光を見、人間の耳と同じ音を聞いて、それを短波に変えると共に、近傍の脳波を捕捉して混成波（これは二十世紀後半に入つての発明で、二つ以上の電磁波を束にして取り扱う方法である。）として発信する。

これを従畜の脳髓が受信すると、発信機の見たとところを見、聞いたところを聞くことになるが、発信機は主人の耳目と略同位置にいるから、従畜は、自分の周囲の外界からは遮断せられつつ、主人の周囲の外界の事物を見聞することになる。——近く隣一郎の目と耳とがこの経験を持つだろう。

視聴覚刺激を遮断することで精神統一に成功しているところへ、この様に外界からの刺激が与えられると、一時は統一が乱れる。然し、そうなればすぐ受信が不能になって、統一に便利な状態に戻るし、肉体的条件からの要求も強いので、やがてこの新状態（視聴覚刺激の受信）にも慣れて、思念は集中し得る様になるし、この状態が続く中に、中心思念即ち受信装置の基礎は、次第に表面意識から深層意識へと沈んでゆく。

然しながら、従畜の視神経と聴神経とを刺激昂奮させるのは、混成波の組成の全部ではない。一緒に受信せられた主人の脳波が、目に見えぬ影響を従畜の脳髓に及ぼす。

従畜自身の自由思考（この時は脳波変動は活潑で他からの影響を受け難い）の停止せられた状況下に、主人と同じ外界を見聞しつつ主人の脳波を受けることが三百時間以上継続すると脳波同調という現象が起る。つまり視聴神経昂奮からする脳波型の符合が神経刺激全体の符合を惹起するに至るのだ。働きかけるのは主人の脳波であり、模倣変調するのは勿論、従畜の脳波である。

以上を分り易く言えば、読心能化の候補畜は、血液置換状態において、中心思念への精神統一を強制せられつつ、主人と同じ見聞を重ねる中に、特に中心思念を意識しなくても良い様になり、やがて主人と同じ見聞の下には主人と同じことを従属的模倣的に考える様になるのである。

そして、一旦この段階に達した従畜は、最早、血液置換状態でも同じ能力を維持するから、人工心臓を外して、つまり椅子から出して、自由行動を取らせても大丈夫なのである。——唯、従畜の自由な行動性を生かす為には、何から何まで主人と思考内容を同じくする必要はない。主人の身辺に在って、主人が命令的な思考をした時に誤らず反応しさえすれば、それで充分従畜としての用は足る筈だ。

そこで、命令波馴致ということが平行的に行われる。椅子に掛け
ている主人の脳波中、命令波を選択して増幅し、これを別種の刺戟
具に連絡させておく。命令を苦痛と感ぜない方がよいから、刺戟と
しては全身の皮膚表面への擦りが採用されている。何の意欲もない
場合にも微弱な命令波は発しているもので、強く意欲した場合との
相違は、強弱に過ぎない。だから、例えば、足先で黒い半球即ち従
畜の頭部を押すといった任意の動作を命令に擬制して命令波を増幅
すれば、実際に意欲し、命令する労を執ることなしに、命令した場
合と同じ刺戟を与え得るのだ。

こうして命令波を全身刺戟と結合させつつ馴らしてゆくと、遂に
は刺戟具を用いなくても、主人の命令波に対しては、何とない擦っ
たさを感じる様になる。この訓練の終わった候補畜は、主人の脳波
中、命令波を先ず感じ分け、次いで思考内容を脳波同調によって理
解する。読心能付与はかくして完成するわけである。

ただ言うまでもないことだが、主人側にはOQ（命令波指数）一
〇〇以上が、従畜側にはIQ（智能指数）一五〇以上が、要求され
ることは、読心家具におけると同じである。OQが不足では擦り装
置が動き出さぬし、IQが不足だと脳波の同調が十分に進行しない
のである。

以上が脳波調節の原理の応用による読心能付与機の機能の概略で
ある。長椅子^{ソファ}としても普通のものと同様の性能があるので、主人は
これぞと思う候補畜即ちIQ一五〇以上の従畜をこの中に入れてお
けば、あとは、唯毎日この長椅子を使うというだけで、三百時間即
ち約二週間後には、立派に読心能化した従畜を手に入れることがで
きるのである。

麟一郎は、今この椅子に入っているのだ。読心従畜にされてしま
うのか？ そうではない。麟一郎のIQは、一四七だった。だから

厳密には候補畜として馴致椅子に入れられる資格がないのである。

ただLC（慕主性係数）がひどく高い。それに目を着けたドリス
は、彼を馴致椅子に入れて、中心思念を「クララへの祈り」とする
ことを考えついたのだ。脳波同調を生じるには（IQ一五〇の従畜
でも）少くとも二週間近く入れてその間、人工心臓の尿血液も新
しいのを補給せねばならぬ（これは便器が滞りなくするので、主人
としては別段の手間は増さないが）リンを一日やそこら入れ、一回
分の尿を使った位では、到底駄目だ。そんなことは初めから狙って
いない。狙いは、椅子の持つ思念強制の機能を、彼のクララへの信
仰の強化に利用するにあるのだ。馴致椅子を堅信札前にこんな風に
用いた例はないし、IQの関係で資格がない。という先入主がある
から、ポーリーンは、リンがまさか馴致椅子に入っているとは思っ
ても見ない。ドリスの思い付きは、正にその虚を衝いたのである。
いや、クララに教えては、ポーリーンにも悟られると警戒したドリ
スは、馴致椅子に座
る本人のクララにさ
え計画を内緒にして
いるわけなのだ。

こうして、空中列
車の客室の中で、三
時間半が経って行く
馴致椅子の背革の上
では、人間とヤプー
との興亡の歴史を夢
に学びつつ眠る美女
の三時間半が、背革
の下では、彼女の身
体を支え、快く揺り
つつ、彼女への祈念
に心を凝すヤプーの
三時間半が、……

絵画 写真

のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分
譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデ
アを広く皆さまから募集いたします。内容
はどんなものでも結構です。採用の分には、
原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを
贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の
上、編集用のフォトを贈呈いたします。出
来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の
添布をお願いします。

(編集部)



緊縛映画 スナッブシリーズ

黄水仙の巻

花太郎 沢村

堀並 構成……牧 高志

確かに誰かに支えられ、背の低いくぐり戸をお気を付け遊ばして……と、くぐった処までは覚えていたが、あとは昏として、まとめようもない混濁の世界に沈めるだけ沈み、宛がら千里の湖底を踏み歩いたような気がした。それが、ほんの一寸前のようだと思ったが、どうやら次第は、ゆうべのことらしい。

眼を覚ます瞬間、張りつめていた霧の中から白雪に覆われる高峯が現われたように、不断、ついぞ見慣れぬ美しい顔が、眼前にちらついていた。視込むにつれて、匂う移り香は二人の人間の間を艶めかしく震わせて、いとも濃くである。

『お目覚めになりました……』と当の女性は二重瞼の美しい白い顔

を近ずけた。方何間かの白木造り、隅寸分を余まらず競い、粹に映えた離れの四畳半、人生航路のつまずいた中憩所でもあるうか。

『済まなかったね。柄にもなく酔っぱらっちゃって……。もう大丈夫だ。世話になった奴に散々迷惑をかけて、木乃伊取りが木乃伊になった形だね。当の君にも、さぞかしあたりちらしたところだろうが、この通り謝って置こう。何を喋って何をやらかしたか、とんと覚えてないんだけど……』

紫地に七分咲の梅をあしらった並一通りのお座敷着、鹿の子絞りの帯揚げ、黄一色の帯





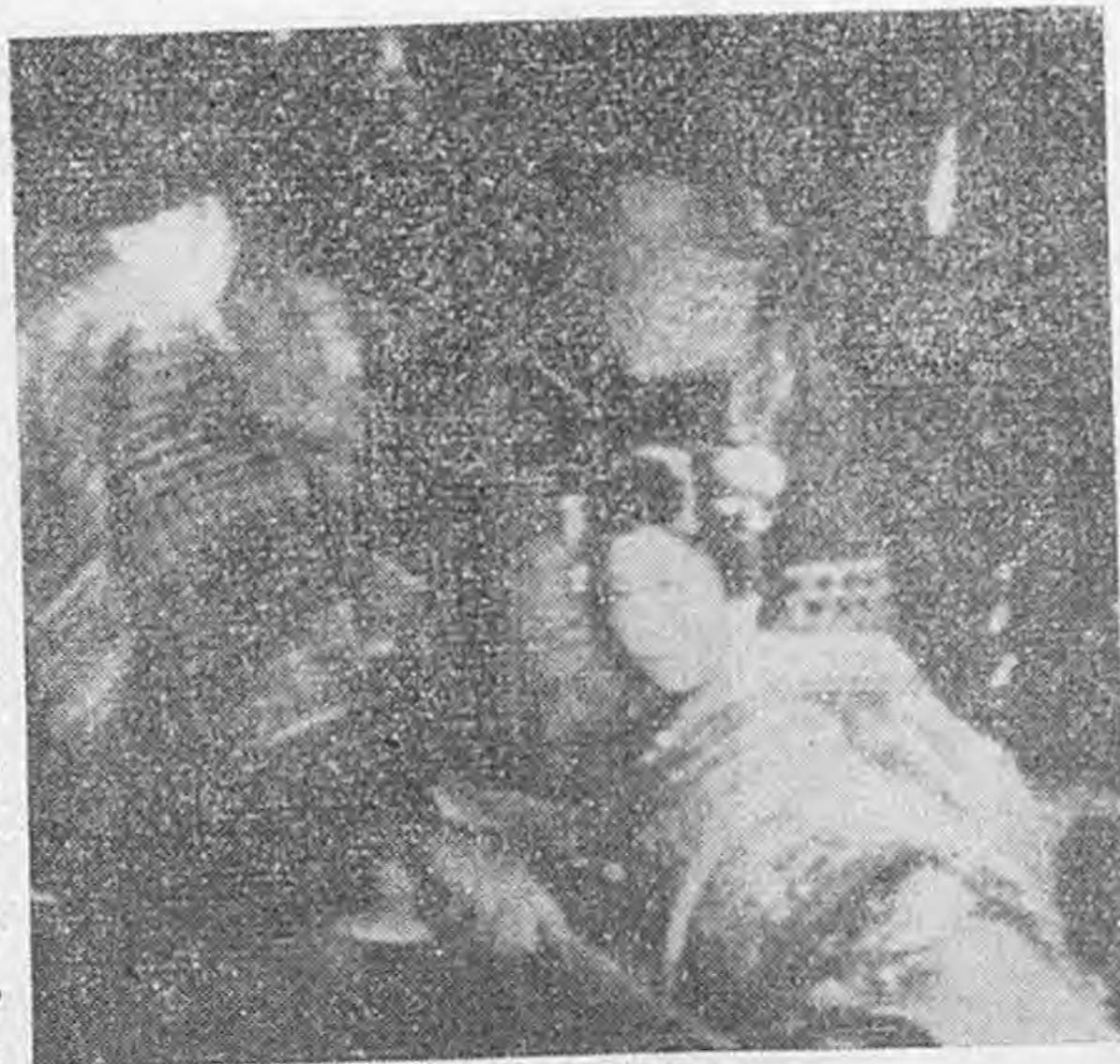
締め、白い足袋は、一抹の艶めかしさを残して多情多恨の浮草稼業を描いている。
『あたしを、しつこくお握えになっての長々説教——覚えていらっしゃる？ 美恵子がどうかして、マチ子拐されたナンテ、まるで小説本なんかのように……』

『無礼の点は平らに勘弁して呉れ給え。つまるところ、ヒヨんなことが頭の中に残っていたんだ。正直に云うとその場面に執心の余りがそうさせたのかも知れない。芝居でも映画でもちらっと見た印象は、どうしてどうして仲々忘れられないからねえ……』

床の間の花瓶に逝く年の秋の名残りを止めた菊にあやかっか、染菊と云う芸名の女性の眼元は漸くにして後朝の朝と共に輝き始めたのである。

『判った……。あなたお芝居の筋書を書いたりなさる人ね。だからこうして、あぁなっこのうなるナンテ、まるでうわごとのような事ばかり仰言って……。アラ、まだ早いわよ。今、やっと六時を廻ったばかり。それに今日は日曜日。あたしも今日はお店のお休み。丁度いいじゃありませんの。ゆっくりしていらして……。今、お目覚めのお茶を用意しますから』

『まあ、待ち給えよ。飛んだ人違いの脚本書きでがっかりしちまうが、つまり君なら君、スターならスターがさ、脚本にこうと書かれてあるとしたら役目通り演なければならぬだろう。君だって芸妓の一人として芸事に魂を打込もうとすれば、京は歌舞練場の舞台から紅血缺血の踊りをテレビに乗せたかも知れない。お役目御苦労さまと云いたい、詮の世は男と女が楽しみ合う浮世だからね……』



『ホホホ、じゃ、ゆうべあんなに迄仰言った美恵子だのマチ子さんって一体、何の魔除か知ら？ 教えて頂戴、ゆうべのお詫びに……お願い』
『きつと何処かで活躍している女性の名前だろう。ただ、残念な事に二人とも実話と云う』

訳には行かない。パッと現われて、スウッと消えて行く幽霊見たいな女なんだから困るんだ。
『じゃ、ヤイツ、美恵子ッ。両の手を後に廻わせだナンテ、ひどく改まって仰言った理由は何んでしたの？』
『そんな事、云ったのかい？ そりや酒のせ』



いだよ』

『アラ……ずるい。神妙に小屋の中で静かにしろって、お座敷着のあたしを屏風の前に坐らせたくせに……ホホホ、まあ、お酒のせいに致しておきますわ。』

それと、もう一つ。帯締めに結んでおいた小鈴を出せって、しつこくお探しになったのを覚えていらっしゃるか知ら？』

『その美恵子って、云ってみれば或るスターなんだが、秘宝の謎を秘めた小鈴の一つを持っていたと云う訳なんだよ。処が、この絶世

の美女に多分、傍焼^{がやき}半分の或る男が御屋敷勤めの彼女を拐わかして自分の住む小屋へ連れて来た。この物語が、そもそもお酒の酔いと結びついて、ゆうべ混がらがったから、つい君の方へ手が廻ったのかも知れん』

『焼餅をやいた男って、美恵子をどうかしますの？ 手を後に廻わせだナンテ、まさか帯の中へ小鈴でもかくしていたのか知ら……』
『早い話が、その男は君みたいな美しく飾った、あで姿の美恵子——可哀いそうだが、後手にして縛ったんだな。サア、何んでって、どっちかな？ 多分、小屋の中だから炭俵をくるくる荒縄か麻縄のたぐいだろう。けど、よく見ると、どうやら麻縄のようだった。それが何んと三巻きも、くくってある。こうなっちゃ、いくら女だてらにかくし短刀を振りかざそうにも、ただただ観念する外はない。』

観念女菩薩とは、この事だろう。例えばさ、仮りに君が腰元風の美恵子だったとすると、この両の腕が、ぐっと後に廻わされて……この手首が先ず縛られる……』

『あたしが、そのモデル？ かまいませんわ、こうなるんですよ。御免なさい、この腰紐が荒縄代りで……どうぞ御遠慮なさらずに。で——こんなに縛られた腰元を、どうなさるおつもり？』

『当の焼餅男は君を薪みたいな棍棒で責める



んだね。秘蔵の小鈴を眼の前へ出させてさ。いや、在りかを云えと責めつけるのかな。

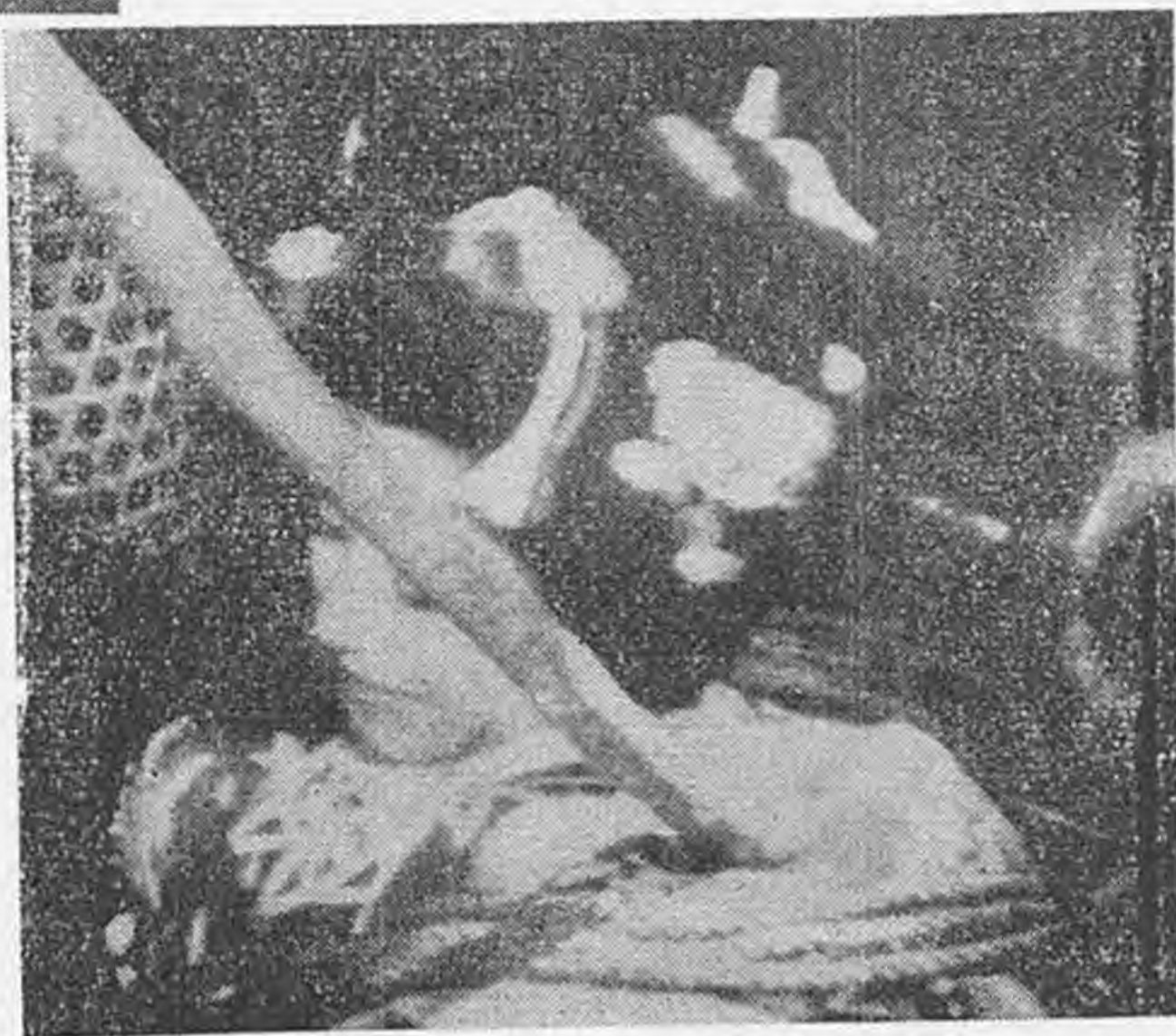
丁度、薪の折かん棒が君の胸の帯——伊達巻の中に捻じ込まれて、態のいい折檻が始まると云う段取りさ。そこへ突然、降って湧いたように、この岡焼男と関係のあるもう一人の女が現れたんだから俄然、治まりがつかなくなっちゃまう。今だってこうやって君が縛られているこの部屋へ、僕の別の愛人が飛込んできたら、忽ち一悶着起きるね。きつと……』
『縛られたかくし女って、そんなに憎いもの

でしようか？ どの道、女って死ぬまで魔モノなのね』

『片方の女を責めると秘宝の謎が解けて、片方の女が嫉妬に狂う阿呆者だと判って来れば、当の男が女の中の一人を消そうとするのは当り前だろう。追っばらうつもりで振り上げた刃の手元が狂ったか、とうとう嫉妬女の方を殺めて了った。勿論、このドサクサまぎれに腰元風情の美恵子は逃げ出そうとするが、どっこい蛇ににらまれた蛙同然……』

『丁度あなたににらまれ、こんなに縛られたあたし見たいに……』

『余んまり気負っちゃ、あとが続かなくなる。その時の美恵子って、こんな、なまぬる



い縛られ方じゃないんだぜ。アハハハッ、……まあ、よろしい。そこへ、また突然、立役者の花太郎が飛び込んで来たのだ』

『花太郎って芸妓の名前みたい。男、女どちらでしょう？』

『勿論、立役なんだから、チョン髷姿の浪人者だよ。元はと云えば、さるお殿様のあとつぎなんだそうだが——サア、この場面一体どうなると思う？』

『何んだか、チャンバラ物見たいだわ。新国劇なら辰巳と島田の一騎打。島の砂浜が舞台

なら武蔵と小次郎と云う処知ら？ でも万が一、あなたが焼餅責め男だったとしたら、縛られたあたしを小脇に抱えて、どうなさるおつもり？』

『花太郎を即座に斬り倒して遮二無二一目散、脚本を書いた人に平あやまりに謝るね。万止むを得ず花太郎を殺めたとき……』

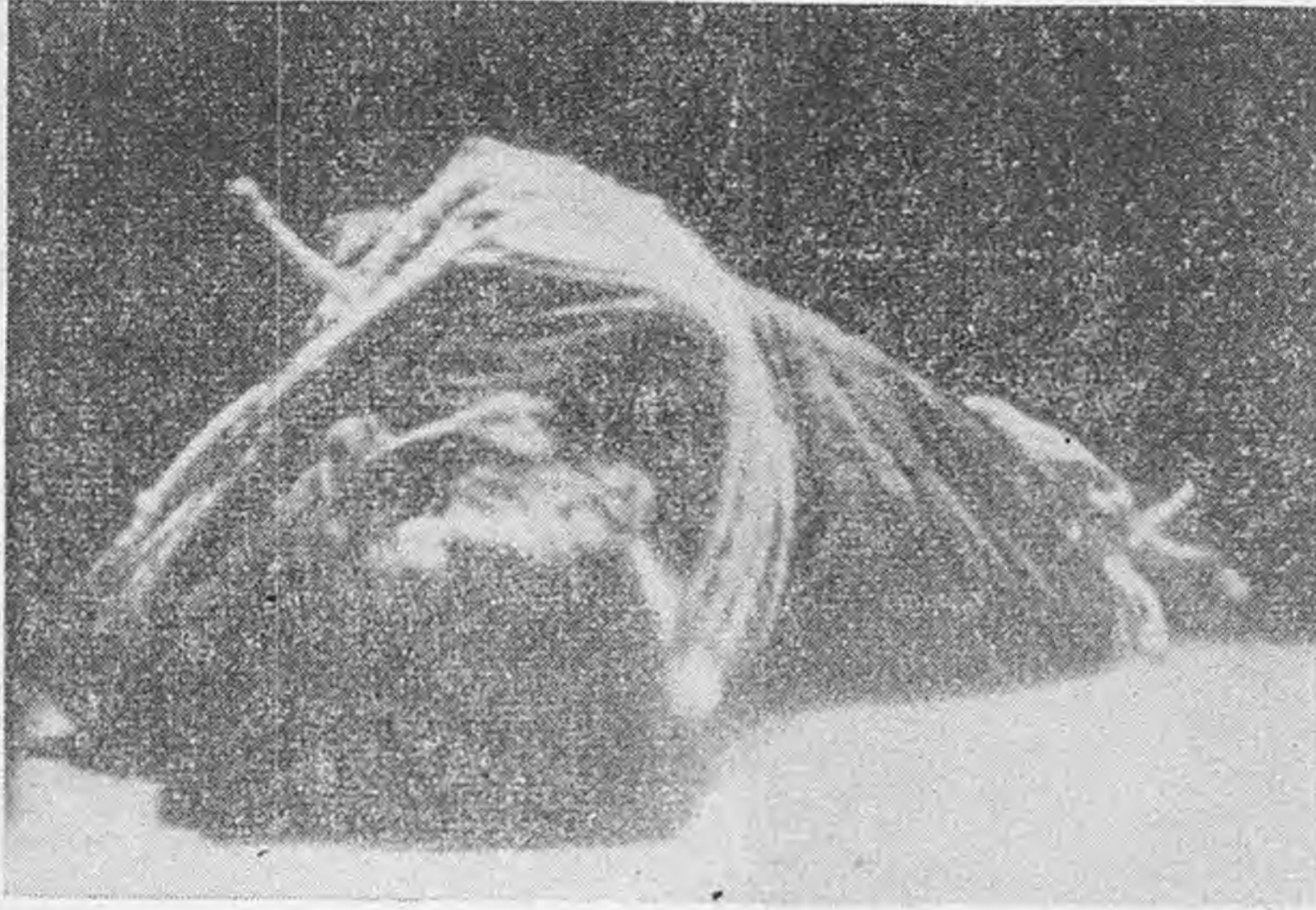
処が、そうはいかんのだ。後手に縛り上げた女を抱えた例の岡焼男が、するどい花太郎の剣に斬り込まれ追いつめられて

「秘蔵の小鈴を渡せばよし、渡さねば女を



一突きだッ。サア、どうだ……と定まり文句の持駒を鼻高々と見せびらかす。これが卑怯者の相場なんだ。

「どう? 一つそのまま立って御覧! 立て



ない程ひどく縛ってはいないんだから……。こうして伊達巻の処を撫んで君を宙に浮かせて刃をつきつけたと思ひ給え!」

『へ、そうか……と剣を棄てて小鈴をお渡しになる、いい度胸だッ。断っておくが、花太郎って全く欲がないねえ。エライ男だった。今生きておれば……。憲法通りの人命第一主義。こんな男に女が惚れなけや嘘だよ。で——小鈴と交換に女が渡されたから花太郎は当然、嚴重に三巻きも縛ってあった美恵子の麻縄をいとも簡単? に解いて女を解放する。従って君の腰紐も解くと云う次第さ……。ああ目出度し映画全篇の終り!』

『アラ……、それ映画でしたの。そう仰言ると、近所のポスターで見かけたことがあったわ!』

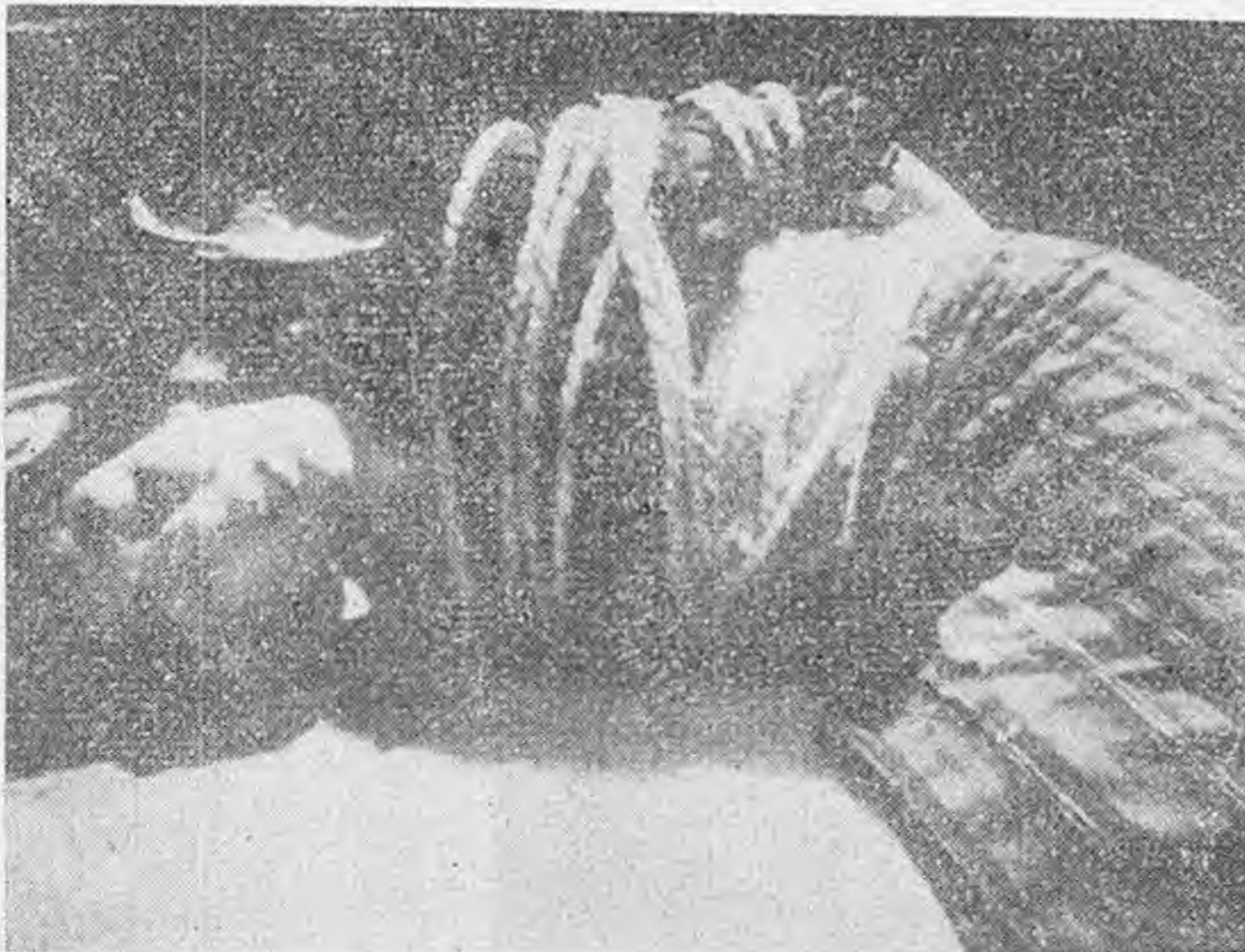
『序に覚えとき給え。こんな映画の原作者、つまり元本を書いた人は大衆作家と云って、おまんまの種になると思ったら、君みたいに美しい女をすぐ縛ったりするから氣を付けた方がいい。』

もっとも縛られた女が現われて、どうとかするとお客が来るから、映画でもお芝居でも大入りの大穴になる……穴、おっとその「穴」なんだ。「穴」にマチ子が飛び込んだ話をすっかり忘れてた……!』

ぽかっと吹かした煙草の煙が障子の彼方に消えて、消えた筈の女が無難作に、はふった羽織の袖から凍えんばかりに朱塗りの盆をささげて入って来る。染菊化して世話女房はいじらしい極みであった。

『中休みにお寿司でもいかが……。今度は穴ですって? 何んのお話、それ……。判ん字物みたいな、それで百万円でもお当てなさいよ。ホホホ……。』

『これもまた女が……。こりやワサビが効い



てる。朝っぱらから、誰かに怨まれてるようだ。そのマチ子が……。わあッ、堪らない。お湯を呉れないか、恐ろしく効かすんだね。余っ程、君と僕の間を妬んだ奴が握ったと見え



穴みたいな倉庫の中で、これまた可哀そうにも——」

『……縛られたと仰言るんでしょ』

『お説の通り、そのられ方が、素晴らしいんだ。られ方にも色々あるだろうが、まるで荷物か芋虫なんかのように雁字搦目に縛られた映画は、古今東西これが初めてだろうねえ。』

君なら新鮮味で買うが、この人は一流のスターなんだからどうかと思うが今更、苦情を申立てた処で致仕方ないし、その写真を持って来ればよかったが想像出来るだろう。もうからきし目茶目茶なんだよ。』

『そんな、縛られ方って可哀そうねえ。そ

る』

『だって、酸っぱく好いて好かれた仲を縄が取り持つ縁かいなで、あなたのあたしがあなたに縛られたんですもの。お寿司屋さん、むずむずしてくしやみしてるわよ。ホホホ……』

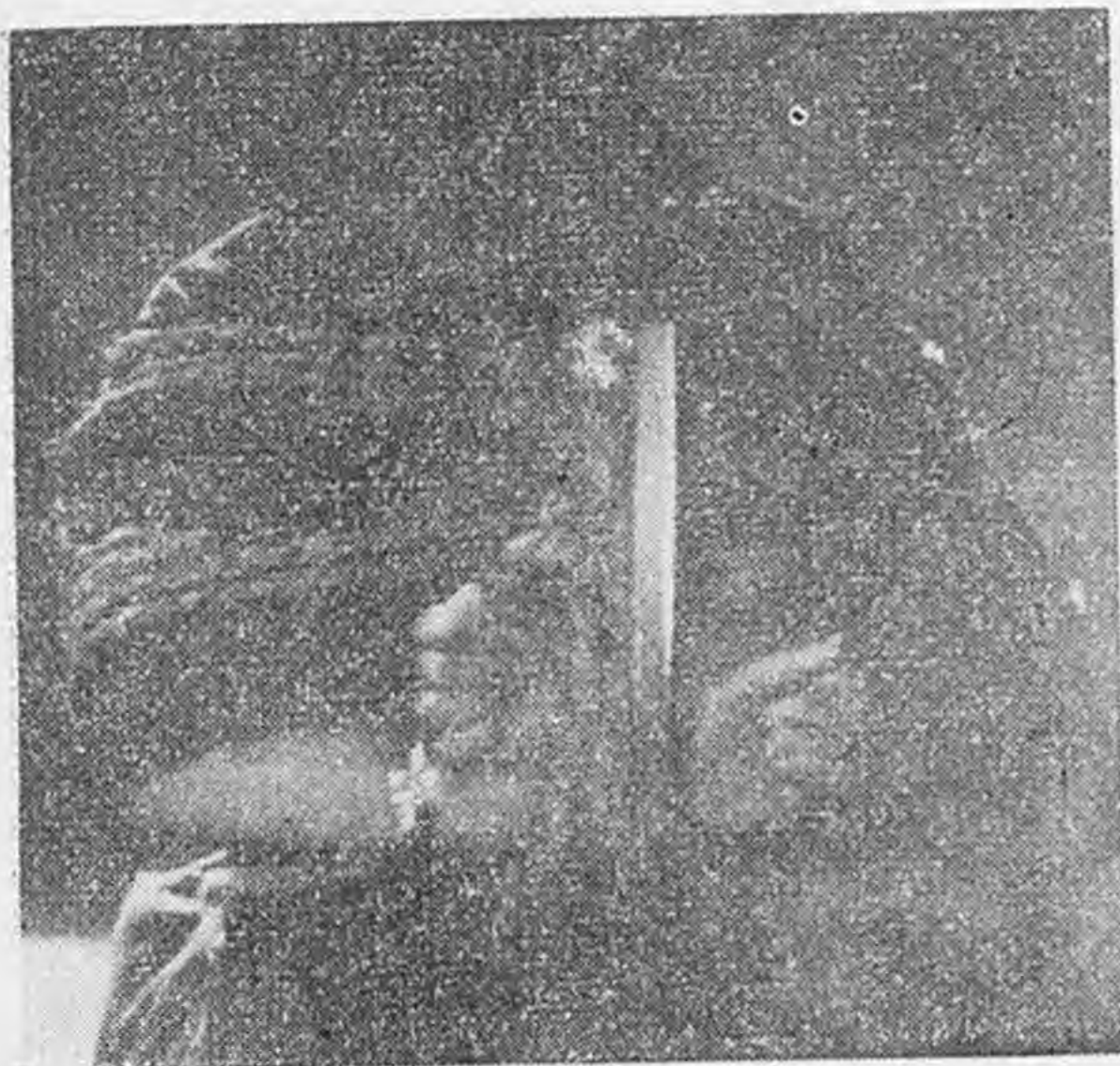
『で——そのマチ子って君は全然、心あたりがない？』

『京マチ子なら知ってるわ』

『それ……その、マチ子なんだよ。それがね、「穴」って云う映画に出たのを観なかったかい？ とっても忙しくて、テンポが早くてヤヤコシイ話なんだけど』

『おあいにくさま……』

『話せないねえ……君は、つまり、波止場の

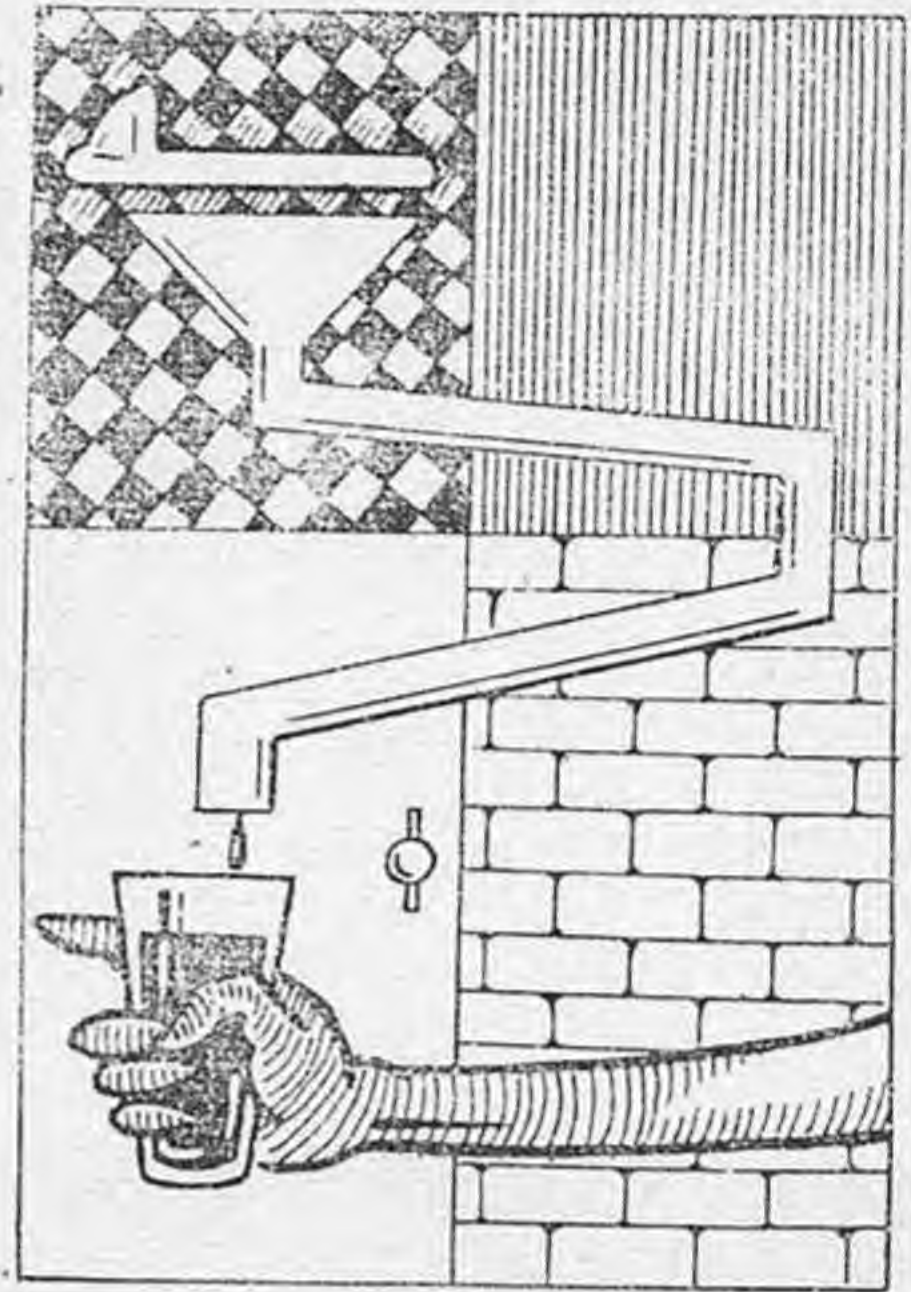


れでどうなりましたの？ 救いに行き度くなっちゃった……』

『救いに、このこ君が行うもんなら君も雁字搦目さ。そこは流石に一流の名だたるスターなんだから、御自分を助け出す方法を、ちゃんと知っている。おあつらい向きに突立っていた小道具の鉄の棒を使って、われとわが身の後手首をゴシゴンこすること、三十秒間にして荒縄が切れたって訳さ。そのあたりが実にユーモラスに描写されていたから、ちっとも惨酷味がないんだ。僕ならいいが今後、君が、もっと悪い奴にと捕って、荒縄で後手にされたら是非、試って見給え。悪いことは云わないから……。さて……と、そろそろみ腰を上げることにするかな。えらいことお世話になったね。どうも有難うさん』

『一寸お待ちになって……、今度は、いつ逢って頂けます？。だって、マチ子の代りに染菊の方が可哀いそうよ。折角、教えて頂いたんですもの、是非演りたいわ。細い紐でもお持ちになって……ホホホ、馬鹿ねえ。すぐそんな風におとりになって……。予告——篇って、まるで映画館見たいねえ。パチパチ花火を鳴らす物って何んでしよう？ 支那人、日本ムスメさん誘拐するアリマス。演月の夜、怖わいアル……嫌だわ。また呪文みたいな事を仰言ったりして……。じゃ、雁字搦目に縛られたマチ子さんになったつもりで、港の波止場から支那人に誘拐されてみようか知ら。好きねえ、いい歳をして……ホホホ』

(第六回作品——完)



愛^マ好^ニ家^アの記録^{ノート}

とやま・かづひこ

昨年の二月号以来、このページに色々とりまぜてメニューを提供して来た小文を、同好の方々は、どう読み取って下さっているだろうか。

何回も述べている如く、本文の筆者は昭和四年以来のコプログニスト。

人生の大半を、このことを思いつつづけていきながら、その好みは少しもおとろえない。あの旨い美酒、香り高き妖かしの固体の味を味わう人、そもいくばくぞ。

かづひこの畏友、H、Kの両氏（ともに本誌の寄稿家）は、いつも暖かき激励を送ってくれる。

人間の口にすべからざる、食物にあらざる

食物、呑み物にあらざる呑み物を、心ゆくまで味わう、そこに人生の喜びを見出すかづひこである。

新しい年を迎えて、古き資料を整理し、大いにM党のためよき読み物を提供したい。どうか、この特異の読み物を本年も読んで頂きたい。

では、本題に入ろう——

⑦⑦ タルから出た酒？

毎夕新聞の十月二十八日附から。和尚さんと、近く嫁に行く娘の話。和尚さんが嫁入りの心得をコーチする。

『うん、ワシと一緒に来なさい』

何を、いかに教えたかは知りませんが、結婚式の当日、祝宴に列した和尚の前に、彼女の母親がやって来て、

『和尚さん。これは、とっときの酒なんです。娘が大変お世話になったそうで、召上って下さい』

恐れ入りながらも、酒に目のない和尚。感激して、早速一杯グーッと。こわいかに、すごいのなんの。酒とは大分縁遠い味。

『奥さん。これが酒ですか？』

『あら、和尚さん。ご自分で口をあけたタルのお酒ですよ。ホホホ……』

『うーむ』

さすがの和尚。目を白黒したそうです。

×
という軽いオトシ話。

このテーマは、何カ月か前の『笑の泉』でフランス小咄として紹介。和尚は神父に、酒はブドー酒にと代えられてあった。

ここで、興味を引くのは、タルのお酒とかいって、娘の排尿がユーモラスな復しゅうの材料に使われていることと、『すごいなんの』と、その『酒』の味を形容している点。

酒といつわって、吞ます小咄は、洋の東西を問わず、たくさんにあるが、連想はどうしてもこの二つを結びつけずにはおかぬものらしい。

酒、本ものの酒をかづひこは愛するが、それ以上にあの酒のうまい味を忘れることは出来ない。

沼氏は、いみじくもこれに『ネクタール』と名づけたが、これを愛好する人士は意外に多いのである。

⑦⑧ 乳しぼり器

毎日新聞十月二十八日朝刊から。

欲しい品という小記事の、この日は『乳しぼり器』のはなし。

◇二週間前に女兒を生みました。乳がたくさん出ますのに、赤ちゃんの飲みかたがまだ少ないので、はって困っています。よい乳しぼり器がほしい。

◇長さ十五センチぐらいのガラス（ポロリス

チール）製のよい品があります。もとの方にまるいゴムがついていて、先のじょうご型のところを乳首にあて、下部のゴムを押しますと、乳首を引き出すようになり、乳はよく出てきます。まるい部分に乳がたまるとなっています。値段は百円です。（薬局）

たとえば、乳の出る身体でない女にこれを用いたら、どのように苦痛があり、どのようなものがしぼり取れるであろうか。

透明で出来たじょうごの中に、乳首が拡大され、操作が進めば、ムクムクと腫れても来よう。こう考えると残酷な発明とも申せよう。

かづひこの夢は、果しなく拡がるのである。

こんなささやかな記事でも、読み方によれば、面白い連想をさそう。

⑦⑨ 舞い降りるおむつ

十一月四日の内外タイムス紙『酔人酔筆』

高橋掬太郎氏文章の一節。

話はチト違うがいま劇壇の大女優になっているMさんが、はじめて大阪へ飛行機で飛んだ時、いと違ってトイレの設備のない小型機だったため、おむつを何枚もお尻にあてて乗り、大阪の上空にさしかかる前に、ソツと外して下界へ落したという話が

ある。いささか眉唾のような話だが、本当だとすると、からりと晴れた青空から、ヒラヒラと舞い降りるおむつを見た地上の人々は、どんなに驚き、不思議がったことかと、その光景を想像するだに愉快になる。

×

文中Mさんとは、大女優水谷八重子氏。

この事件は、水谷さん自身が、かつて何かに書いたことがあるので、どうやら実話らしい。紺べきの空から、ヒラヒラと、濡れたオムツが天下る。

しかも落した御本人が、美人の代表のような女優さんであっては、その壮大な光景をおもうと、かづひこの胸はときめく。

この一文は、オムツ・フェチの方々にも読んで頂きたくて、ここに引用させて頂く。

⑧⑩ 春の風

『肩越しに首筋撫でる春の風』

これは江戸川柳。大井川を渡る旅人が、川越え人足の肩にまたがり、川の途中まで来て急に催して一発、ガスを落した情景。

『キレイなお姐さんが、人足の肩の上でソツとおとします。人足の首すじがフワツと温まり、時ならぬ匂いがあたりにただよう……人足先生飛んだ災難ですが、相手が若い女の子では文句も云えず、その匂いにむせぶばかりで……』

◎ 映画通信 ◎

今月の縛られ女優達

大河原 珠樹

▽底抜け忍術合戦 (東宝作品) 朝雲照代

徳川方隠密の早耳甚内から大阪城の絵図面をスリ取った道中師お銀が、甚内に捕われて立樹に縛られる。後手に太い縄で二巻きにされ足を投げ出し裾を乱して座っている。そこへ通りがかった戸沢白雲齋の娘で

男装の忍と弟十の平助がこれを救ける。太縄をといた後でまでゴソゴソしていると思ったら、後手に手首を縛っていた細引をといいた。この縄目は一度も見せなかったのに御念入りである。

▽底抜け忍術合戦 (東宝作品) 環三千世

早耳甚内から折角絵図面を奪い返した忍が手だすけしてくれた美男の松平弦三郎に恋心をおこしたばかりに得意の忍術がつかえず、山賊達に捕えられ、またたく間に細引で後手に十重二十重のグルグル巻に縛られて山寨へかつがれて行く。山寨の広場で山賊が酒盛中、忍は立樹へ縛り付けられている。朝雲照代のお銀の時と同様に太い縄で二巻、但し違うのは投げ出した足の膝頭を細引でグルグル巻にしてある。平助が山賊達をごまかしている間に夜が明けて忍術が使えるようになり助かる。

環三千世の縛りを見るのは、これが初めてである。

「おわび」一月号での終り近く、予報に環三千世を樹に吊り下げる、とあるのは間違いでした。おわびいたします。

ここで、お客がドット笑った。十一月ある夜の寄席の高座で、講談師が、人足の肩の上でならしたおならの風景の描写偶然にもかづひこには聞き捨てならぬ話。トウトウと流れる大川の途中で、肩の上に乘せたお客から、ガスを浴びせられる。首すじが温まる。身体に振動が伝う。やがて、よい匂いが……そこはかとただよう。これが、ガスだからこの程度でまだよいの

で、万一腹工合でも悪くしておって、川の途中でトイレにでも行きたくなかったのだったらどうなったであろう。いや笑いごとではない。急に出たくなることもあり得る。肩の上から、固体なり、放射水なりを浴びせられた人足があったのではないかしら。高貴なお姫さま、大名の奥方、人足など人間と思わぬ人のこと、思い立った時に、出モ

ノハレモノと排泄され、頭上から、浴びせられて、文句一ついえず、万一避けようとすれば、『無礼者!』と首の飛んだ人足もあったことだろう。肩の上で、有無を云わされず、ガスを浴せられた人足の話は、異った意味での興味と、感慨を催させずにはおかぬテーマであるまいか。軽いタッチのフランス風コントの味を持つ話である。

▽血文字船 (大映作品) 小野道子

死んだ妹のうらみを晴らそうと中国人貿易商の王のもとに近づいたお玉が逆に王達にあやしまれて捕われる。同じように王の秘密をあばくために変装して一味に加わっている目付役奥平伊織が、これまた化けの皮がはげかけて、その証しに王からお玉の殺害を命令される。伊織が拳銃を持って訪れた暗い倉庫の中にお玉は太い縄でグルグル四、五巻の後手に縛られ座っている。その場は伊織の機転で救われるが――

再び王達を調べるお玉は地下道を繰って廃船の中に誘拐した婦女達を閉じ込めた牢のあるのを発見、奉行所へ知らせようと表へ出たとたん見つかって再び後手のグルグル巻に縛られて同じ船室の柱に縄尻をつながれる。今度は少し細い目の縄である。

▽血文字船 (大映作品) 三田登喜子 その他
船底に誘拐された十数人の娘達の中には王に殺害された同心三浦某の妹もいる。いずれの娘も氣息えんえん、片手片足を柱に鎖でつながれている。

▽血文字船 (大映作品)

浦路洋子、浅野寿々子

ただ二人だけ、奥平伊織をおびき出す囹に捕えている盲の娘お糸とその妹のお鈴だけは中縄で後手に縛りいずれも縄尻を柱つ

なぎにされ座っている。盲の姉妹は両眼に白布を巻き、妹の少女は支那服姿で可憐。やがて伊織も捕われ、王達が一同を火薬で爆死させようとする時に、拐かされている三浦同心の妹が不自由な片手をのばして、この盲の娘の雁字搦目の後手首の縛り目を懸命にといてやる。柱につながれているもう一方の片手首に鎖の金環が無慈悲に食い込む。そうしてやととけて間一髪で一同は救われる。

「注」一月号で私はこの「血文字船」を「横浜に現われた鞍馬天狗」の改訂版と紹介しましたが「天狗倒し」の誤りにつき訂正いたします。

▽執念の蛇 (大映作品) 近藤美恵子

伊勢屋次郎兵衛の隠し子になりすまし、伊勢屋の太身台を横どりしようとしたくらむ踊の師匠お歌が正体がばれそうになって伊勢屋の小間使い、実は当の隠し子であるおきぬを兄と一緒に拐かし殺害しようとする。駕籠で川ぶちへ運ばれ手ぬぐいで猿ぐつわ、これで前手縛りにされ二人の男が肩と足をかかえて川へ投げ込もうとする時に愛人があらわれて救われる。

▽執念の蛇 (大映作品) 毛利郁子

お歌に殺された伊勢屋の娘お千代の亡霊が蛇に化身してお歌は沢山の蛇に巻かれ川に落ちて苦悶のうちに死ぬ。縛りではないが、

裸の毛利郁子が体中を蛇に巻かれている姿は、少々グロテスクだが変った趣向だ。

▽修羅八荒 (東映作品) 雪代敬子

慕う男浅香恵之助のため悪一味の所在をつきとめようと徘徊中に捕わった江戸節お駒が始末されようと庭にひきすえられる。細引で胸を三巻後手縛り、口に白布で猿ぐつわ。そこへ恵之助が救いに現われる。逃げ廻るお駒がチラリみせる背中画面きれざれでどの程度縛ってあったか見落した。とにかくくたいした縛りシーンでないがメキメキ色っぽくなった雲代の所在が私の好みに近いて来た。

このほか御期等をそぐ縛りのない映画を紹介しておきます。

▽眠狂四郎無頼控・魔剣地獄 (東宝)

▽捨売り勘兵衛 (東映) ▽水戸黄門漫遊記 (松竹)

また見落した映画は今月は

▽大江戸千両祭 (東宝作品)

の一本きりです。年末には田舎にあまり新しい映画が来ないためでしょう。

それから予告として東映作品「金獅子紋ゆくとくろ・魔境の秘密」でアイヌ娘になる花園ひろみが高手小手に縛られるそうです。



◆ 私のイメージ ◆

悶える女

近藤

一

轟々と地の果から押し寄せて来るかのような唸り、天と地の間に
ある総ての存在を屈服し去らずにおかぬ天魔の蹄の響きのように、
闇夜の潮騒にも似た大自然の叫喚。台風二十二号を眼で観、耳で聴
きながら、私は独り、荒々しい激情に身も心も委ねきって、想いに
没入する。

嵐！ 荒狂う自然の息吹、激烈な狂乱！ 窓硝子の外、透明な障
壁の向うに、室内からの電燈に照らされた見透せる限りは、唯、
雨。雨、雨、そして雨。

天空から降るのを誰が認め得よう。雨の飛沫は大地から一面に噴
き上げられていた。さして低地とも見えぬ庭が、溢れ、泡立ってい
る。ザー、ザザザーッ。ブリキやトタンへ当るのではない。板に吹
きつけられてさえ、嵐の雨は音を立てる。窓硝子にさえ、バシバシ
と飛礫の当るような衝突があるのだ。

じっと戸外を凝視する。暗い、只、暗い。立ち籠めた烟か、張り
詰めたレースのような雨の幕。樹木をおしなべて唸る風。遠く、高
い大樹が、その高きが故に受ける自然の暴威に耐え兼ねたか、頭を
振り、身をよじって、哭き叫ぶ。暗黒の中に一際濃く、真黒な影を
浮かせて、息絶え絶えに、尚も翻弄され続ける哀れさ。心が痛む。
疼く。

闇の中に白いものが蠢めく。

白い柔い女体をそっくり包む白色透明のナイロン・レインコー
ト。立ちつくす足には白いゴムの長靴。ボタンをきちんとかけ、フ
ードをぴったり目深にかぶる。嵐の中の女。

縛られている！ 厳しい縄目に繋がれている！ それは貴女だ！
貴女なのだ！

フードの蔭に覗くのは、僅かに眼許だけ——訝えて而も妖しく輝く瞳だけだ。顔半分を覆う猿ぐつわ。声を奪い、呻きを抑え、舌を押し曲げる口中の布片は、女らしい口に多過ぎて溢れ、それでいて厭わしい肌の汚れを、溶かして喉へ流す。鼻と口をびっちり掩いつくし、耳の後で一捻りして括り上げられた薄布は、その繊維の、目に見えぬ程小さな隙間から吸い込む、女が生きたために必要な最少限の酸素を、重く澱ませ、濁らせる。

——苦しい、苦しいのよ、貴方——

女は喘ぐ。頻りに顔を振り、首を捻る。

両手には肘の辺りまであるゴムの白手袋。フードをかぶり、ゴム長靴、ゴム手袋をつけたレインコートの女体は、両腕を背に廻す。透けて見える胸乳の上下、くびれたウエスト、腿、膝迄をしっかりと細引で縛り上げ、その上から更に荒縄で庭の立樹に、ギチギチと縛りつけられている。手首には雨の流れ込むのを防ぐ思いやりからか、殊更厳しく縄がかかり、後手の高小手を形造っている。嬶やかな女の項には、フードの襟の上から、革製の犬の頸輪が嵌められつけた鎖は、女の背から一尺程上の枝の付根に留められている。女は俯向いていた。両手を背に組み、立樹に倚る姿で、縄目に凭れて立っていた。

——苦しい、苦しいっ、あぁ——

声が出ない。苦しきう。苦しいのだ。

びっしりと雨を含んだ荒縄の苛責は、じっと心に噛みしめても猿ぐつわの布の下まで、ううっ！ ううっ！ と間断なく、呻きを突き上げて来る。

それよりも烈しい呼吸の苦しみ。首を振る。何の戯れか、首輪につけられた小さな鈴が一つ、チロチロと無心に可愛らしく鳴る。哭きたい。併し哭けない。俯向いて苦悶し続ける囚われの女。酸素が欲しい。苦しいッ！ 口と鼻を掩っている薄布が濡れたら、彼女の

呼吸は停められる。生きるためには濡らせない布だ。女は生への強い執着に駆られて、全身で猿ぐつわを庇う。鎖に曳かれながら頭を垂れ、呼吸の困苦に喘ぎ悶えながら薄布を護る。

——許して、貴方、もう、もう駄目。苦しい、苦しいの、とても、もう……—

× ×
幾時間、吹き荒び続ける嵐だろう。雨は又一段と激しさを増したようだ。降るのではない。横掃りにぶつかる雨、空間に渦巻く雨だ。

背に、胸に、腹に。雨はピシピシとレインコートに当り、女を撃つ。ぐるりと取り巻いた処刑役人が、手に手に鋭いムチを持ち、一齊に骨も砕けよと打ちおろす苛責を受ける女囚のように、そしてまた、夥しく寄り合った群衆が、罵り嘲りながら投ずる石を受ける罪の女のように、嵐の中に繋がれ、恐ろしい雨の怒りを聴き、項垂れて痛い雨をじっと受けていた。

女は喘ぎ、苦しみ、悶え、身をよじる。

左右にだけ、僅かに顔を動かす時、チロチロと鳴る鈴の音が、この悲惨な女の苦悶を嘲笑うかのように、明るく際立っている。

嵐はなおも続き、愈々激しくなっていく。

繋がれた白い膚を襲い続ける小刻みの顫え。骨の髄までしみ透る寒気に因るものか、嵐の激情の狂乱のなせる業か。

闇の中に白い女は尚蠢いている。

「告別」の中で（昭和30年11月号、18〜19ページ）古川裕子さんが私のことを、ほんのちよっぴりだけ触れていらつしやう。そしてその時限り、古川裕子さんの姿は誌上から消えた。淋しい。今以て寂しい。

私は、かつて吾妻新氏の「サディズムの精髓」に心を惹かれた。

そして古川裕子さんの「囚衣」を再び読み返してみた。SとMの調和した幸福なカップルに、私は心温まる想いと些かの羨望を感じたものであった。

「続・囚衣」を読んだ私は、古川裕子さんの環境として描かれたものの急激な変化に、恰もフィクションに対して抱くような感慨を覚え、少なからず戸惑ったものである。その中には、直接的でサディズムを満足させる話が活き活きと描かれながら、そのほかに、余りにも真実味溢れる一個のマゾヒスティンの告白があったからである。

第三の「長期刑」で私は古川裕子さんに魅了された。一週間という時の経過の裡のマゾヒズムの生態が、烈々たる歓喜の戦慄と、それに似つかわしくない冷静な自己観察とに依って浮き彫りされていた。而も最後の一節の呼びかけは、慕情の烈しさを目のあたり感じさせるものであった。

それ以後、28年12月以降の各号に載る、古川裕子告白諸篇のすべてを、私は貪り読んだ。私は何とかして、彼女の魂に安らぎを与え、頻りと孤独を主張して已まぬ彼女を、少くとも個人的な孤独でなくすることのできる男性の出現を、彼女のために祈った。

私は古川裕子さんを愛する。心から敬愛する。その理由は、——今ここで云う必要はない。しかし明確にしておきたいことは、私が彼女を愛するのは、私の男に対する女として観るのではなく、云いようもない親しさを感じているからである。

姉！ 正に私は彼女を姉の再来と観ている。私の姉は、——姉と云っても、実の姉でも義理の姉でもなく、私が兄と呼んで親しんでいた人の、優しい妻なのであったが、激しいマゾヒズムに生き、そしてそれが故に死んだ。兄の死は自ら招いたものであったが、姉の死は自殺でも他殺でもなく、過失すら無い全くの不可抗力な事故であった。

ゴムのレインコートと麻縄と鞭、数々の告白の中で述べた事実を愛する古川裕子は、マゾヒスト古川裕子の惨憺たる悪業と謂う。それらは果して悪業と呼ぶにふさわ



しいものだろうか。

古川裕子は確かに卑屈な奴だ。私の姉であるマゾヒストは、もう少し骨のある筈だった。サディストを欲ばせ、笑わせ、考え込ませ、哭かせ、怒らせるような総ての行為に、サディストへの敬愛があり、サディストの気品や尊厳の維持に資するものがあつた。サディストを墮落せしめるような見えすいた愚劣さは、全く持合わせていなかったのである。古川裕子は、……？

古川裕子は真を尊び、善を愛し、美に憧れる女ではないか。彼女は自らの心に誓って真実だけを筆にした。彼女は自分自身を「美貌も才能教養も何もない」と云う。これには不愉快な誇張があるようだ。女らしく息づき、媚を見せて艶めかしい、しつとりと重く柔らかない姿態がある。彼女の身について専門的知識の他に、徹底した誠実さがある。知性も、豊かな感受性も、広大な想像の世界を持っているではないか。

私は古川裕子を、身動きもならぬようにギリギリと縛り上げ、息も止まる程に堅い猿ぐつわを巻めて、その膚を真赤に染め上げるまで鞭打ってやりたい。後手の手首を首縄で高く吊り上げ、色白の胸や腹部を幾つにもくびれさせた細引を更に絞りながら、彼女の身体の中に巢喰う卑屈さを完全に追い出すために、私は眼の前にヒクヒク顫える体を、根かぎり打据えてやりたいのだ。そして、本来の姿の姉を取戻したいと願う。

古川裕子はこう云ったではないか。

「裕子の心は孤独の道をゆく決心をしているのに、目の前にあるこの体は、その心とは全く無関係に、声をあげて人を恋うている。この胸が、この肩が、そしてこの手が、この指が、あたたかくうるおって、睫毛は黒くふるえ、胸うちは、声をあげて——ああ声をあげて「人」を呼んでいる。すべてを投げ出して奉仕をのぞんでいる。」

裕子は眉根をしかめて、その体をにらみつけました。でも、それが何になりました。今、目の前に誰かが現われて、裕子の手首をとり、背中に廻し、張り切ったこの胸に、この腕に縄をかけ縛りあげても、裕子の体は何の抵抗もしそうにありません。ああ裕子は人を愛したい。そして人から愛されたい。裕子のすべてをつくし、すべてを捧げて人を愛したい。裕子は奉仕の心しか持っていない。裕子の誠実の限りをつくして、ただ奉仕するよりほか何も出来ない。……

心は理屈であり、身体は現実である。現実を離れて人は生きられない。現実根ざし、理屈を活かす処に人の前進がある筈だ。

……愛を感じるのは、——女が恋うのは、人格や学問や教養にではないのです。本当に何と愚かなものでしょう。この愚かさこそ女の生命なのです。女の一筋の愛なのです。……

男が女を愛する時、すべての虚飾を塗り取った女を愛すのだ、と私は思う。女の生命である一途の愚かさ、男はそれに魂をぶちつけるものだ。女の美貌、秀麗な容姿、艶、名声、教養、才能、財産等々は往々、愛恋のきっかけになる。しかし、それらは或る種の打算の対象にしか過ぎない。男の魂が、女のひたむきな愚かしさに融合した時、男も初めて女を愛する男になり得る筈だ。私はそう信じている。

私は古川裕子が好きだ。

古川裕子は、彼女の誠実さの限りをつくして、卑屈なまでに身を低くして、吾妻新氏を恋うた。彼女の「女」をあからさまに曝け出して、吾妻新氏を求めた。「古川裕子」は、誌上のみに限られた存在だと思いたくない。私は、「古川裕子」を生み出した現世の實在を、限らない親しみを込めて愛している。

その敬愛の念が、私に今ペンを持たせているのだ。この一篇が或いは静かに消えて行った人の眼に触れ、歪んだ欲望を斥けるために

いじらしい程の祈りを籠めて、齒を喰い縛っている心を波立たせ、苦しませることになるかも知れないと私は思う。その危険を敢えて侵すことは、彼女に対する真の愛情でないと云われるかも知れない。だが、私の彼女に対する愛慕の情は、その思い遣りを棄てて、彼女を偲ぶ一篇を綴らせているのである。

会衆のざわめきが一瞬、びたりと停った。すべての視線は、云い合わせたように、広間の入口に注がれていた。

白い膚が部屋の中へ歩を進めることを拒んでいた。引っ立てて来た男達に鞭うたれながら、肢体は無言の抵抗を見せていた。

「ええい！ はいらないかっ！」

背に答が鳴ると同時に、激しく腰を蹴りつけられて、体は前のめりに広間へ倒れ込んだ。

がちや、がちや、がちや。

鎖の音がした。足首を短く繋ぎ合わせた鎖だった。歩みがつれ、自分で自分の歩行に絡まって、体は宙に浮き、顔、胸、腹を烈しく畳に叩きつけて、腹匍いになった。

女だった。小柄ながらムッチリと肉附の豊かな、凝脂の光る白い肌の女だった。真新しく眼にしみるように白いパンティが唯一枚。細縄が、女の素肌を締め上げ、喉や胸乳の上下、二の腕、腹部などにキリキリと喰い入って、くびれの中に没してしまう程であった。

文字通りの後手、高手小手、首縄、そして胴を縛られ、足首まで鎖をつけられた女体であった。

ううっ、うう、女が呻いた。

緊い猿ぐつわに呼吸を妨げられる苦しみであろうか。女は頻りに訴えるような苦悶を見せながら、なお、臉はとじたままでいた。

口に布片をギュウギュウ押し込み、細い革紐を齒と齒の間に噛ませて口中の布を吐き出させぬよう括り、その上をゴム引きの布で鼻も

口も覆いつくした。灰色のゴム引き布が顎から頬をキッチリと締め上げ、項で結ばれていた。倒れる拍子に額に垂れた前髪を掻き上げもならぬまま、眼の下まで覆われた女の顔は、誰とも判別できないが、限りなく妖艶な媚を見せながら、而もそれでいて、ほのぼのとした清潔感をにじませていた。

会衆の間から溜息が洩れた。会衆のすべてが、この女を痛めつけ、苛責に苦悶させてみたいという意欲を掻き立てられていた。

女は縄目を曳かれて引き起こされた。鎖の嵌められた足首をそのままに正坐させられた。先が二股になった棒で首筋を抑えつけられると、女の後手首は首縄に堰かれて高く背に躍り、女の体は獣のようになり丸まって呻いた。

前から整えた手筈通り、男達は一方的に女を裁いた。女は裏切者であり、逃亡を企てて捕えられた。その罪は男達に対する重大犯罪であった。刑は死罪、賜り殺しを直ちに執行されることになった。

女は一言の弁明も、命乞いも許されなかった。額を畳に押しつけられたまま、自分の頭の上で、自分を裁き、仕置を決定する声を只聞かされるだけで顫えていた。押しまげられた牀が、只苦しくてならなかった。

裁きの結果は直ちに実行された。しつとりと重い女体は、いきりたったサディストの群の狂気の中に抛り込まれ、曝された。

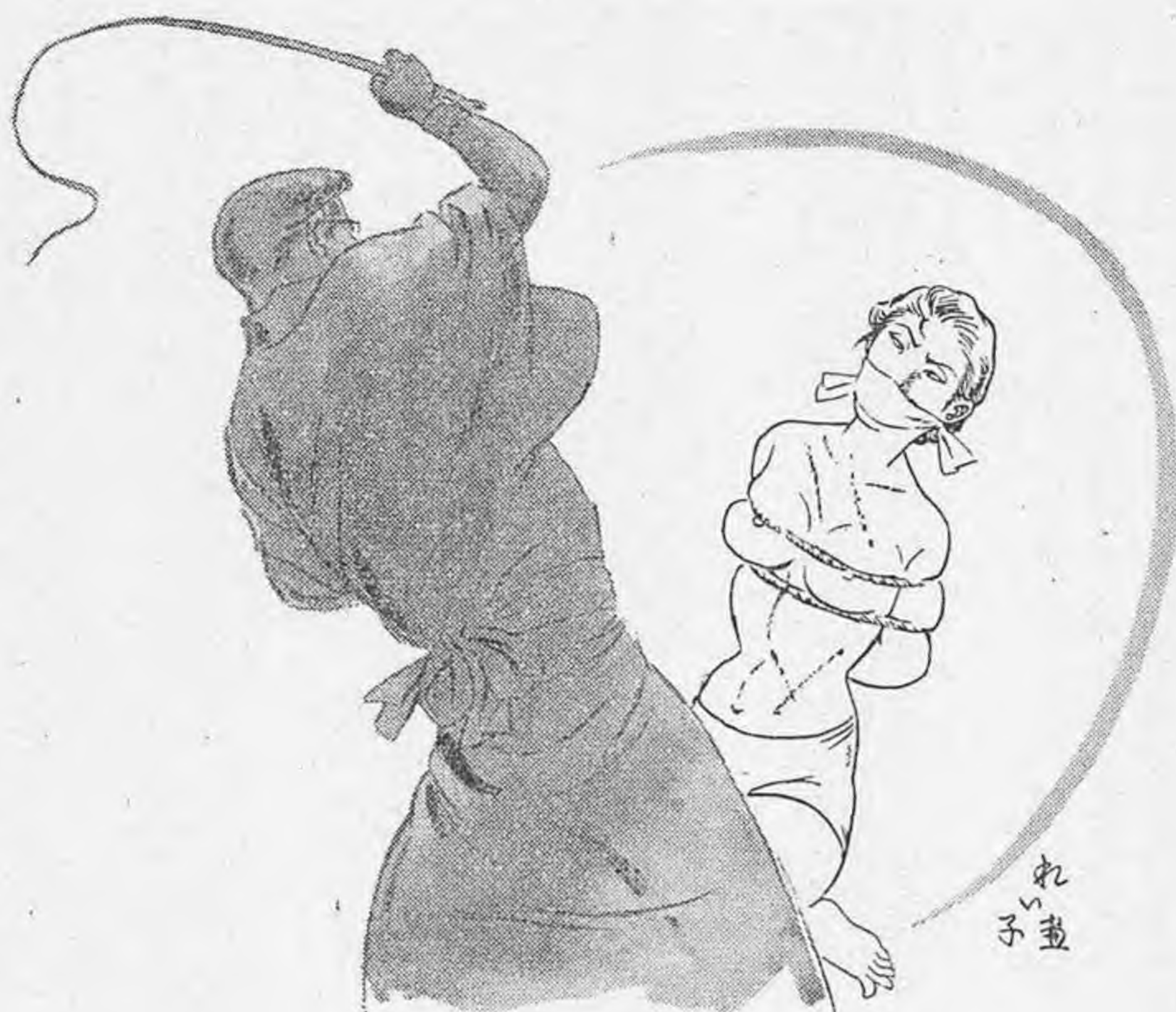
私刑！ 正しく、それはリンチだった。

狂っている！ 正しくそれは狂気の所業だった。

兇戯に等しい裁きを楯に、「女」への見せしめが行われたのだ。男への隷属を自らの心に納得せしめようとするかの如く、犠牲の肌に鞭を振るった女もあった。

数人ずつが一組になり、各組が入れ替り立ち替り、女に鞭の雨を浴びせた。鞭撻者の掛声や吐息の下から女の苦しげな呻きが、或いは高く、或いは弱く、断続して聞こえた。女を這わせた首枷を数

人が取囲み、女の白く輝いていた膚に、赤い条が増して行った。
太く、細く。長く、短かく。
縦に、横に斜めに。



新しい痕ほど濃く刷かれ、やがて鮮かな紅のものをにじませ、噴き出させて来た。

女の臉から光るものがあふれ出し、つ——つ——と鼻翼に流れた。女は首枷に頸をはさまれたまま、静かに涙を流し続け、時折痛々しい痕に満ちた膚をヒクヒクさせるだけで、もう余り呻きもせず、鞭を受けていた。

人々の狂気は更に荒れ狂った。

首枷をはずされて、横倒れになって動かぬ女を、人々は引摺って行って、磔柱に大の字に括りつけた。犠牲の女は宙に浮いた。群衆の女達は、男の命じるままに女の胸に枷を嵌め、力任せにギリギリ捻じ廻した。女はカッと眼を瞪り、物凄く呻きを挙げた。真蒼な額にジットリ脂汗を浮かべ、激しく頭をふり立て、磔柱の上で体を悶え、くねらせ、妖しい拷苦の踊りを踊った。カメラのフラッシュがやまなかった。

「女を吊せ！ 裏切者の絞首刑と、そして死骸の野晒し刑を執行するのだ！」

胸や手首を縛った縄目に吊縄が繋がれ、手繰られた。女は曳かれて起ち上った。ぐいっ、ぐいっ、縄は容赦なく引かれ、女の足は地を離れた。力なく縛めのままによるめいていた女が、慌てたように宙を踏み、ゆっくりと廻りながら揺れた。女を吊った横木に梯子がかけられ、堅い絞縄が下げられた。先端に造られた輪の中へ首を嵌められる時、女は揺れながら二、三度身を揉んで逃れようとしたが、無駄だった。輪はぴっちり締められ、女は眉を寄せて稍、仰向いた。じいんと涙腺が刺戟され、鼻孔が忙しく呼吸した。

何の薬か、女の柔らかな腕に注射された。女の上体を縛った縄目を吊る縄が幾らか緩められ、女の頸が、ごくくと伸びたようだった。見開いた瞳がやがて閉じ、女は刑架の横木にだらりと高く吊られ、晒されていた。華麗で惨澹たる絞首刑であった。

剥き出しにされた膚に鞭を振るい、無抵抗の女を私刑に処することを望み、気の遠くなる程の血の狂いを覚えていた会衆の心の中には、女への憎悪など微塵も無かった。却って愛情があったとさえ云える。唯、その愛情は、獲物に活気を求める愛情でしかなかったのだ。

女は、自分を責め苛んだ男女の群を恨みはしない。彼等の顔や姿態も、さだかには識らず、彼等に自分への憎悪を感じない以上、勿論のことであつた。それどころか、女は自分のマゾヒズムを幾分なりとも充たしてくれた、あの会衆に感謝さえしていた。堅い猿ぐつわに疼きを覚え、厳しい縛めに恍惚と酔い、渴えきっていた鞭の味に全身の血を湧き立たせ、拷問苛責に呻き、哭き、喚き、快い疲労を味わえたのだ。

それだけだった。正直な処、只、それだけのことしかなかった。マゾヒストの女は、もとより与えられたものに全身を以て応えてはいた。だが群をなして自分を玩弄してくれた人々に応えるべき愛情はなかった。無私の誠実も、献身の奉仕も、群衆の凝視を浴び、取り囲まれ、小突き廻されて、戸惑っていた。

女の希いは控え目なものであつた。

唯一人のサディズムから、マゾヒズムに満ち満ちた自分を、何の容赦もなく、思う存分痛めつけて欲しいと望んでいたのである。もし一人の男性が、彼女の心を温く迎え容れたなら、彼女は自分の好みを一切持ち出すことなしに、彼の恣意に従い、隷属の奉仕を誓っていた筈だ。彼女の心を迎え容れる暖いもの、勿論それは愛情である。だがマゾヒストである彼女が求めた愛情は、世の常のものでは決してない。

彼女自身、愛情の本質を判然と把握してはいなかった。然し少くとも憎悪や無関心とは異質のものであるうとは思ふ。ただ、あくま

でも彼女はマゾヒストであつて、彼女に対する取扱いは奴隷にふさわしいものを望み、手加減や遠慮は却って恨めしい思いがするのである。彼女が求める愛情は、サディストの男性が彼女によって満足を覚え、そしてそのことを彼女が認識し得るという漠然たる要素の他に、何ら具体的な定型を例示することができない。結局は彼女が相手の男性の言動の総てから受ける雰囲気の実感ということになりそうである。

一個の女体に狂乱と冷静が同居し、支配力を握っているのが疑いもなくマゾヒズムなのだ。

麻縄が肌に喰い込み、両手首は背中に固く固く括り上げられ、口の中には一杯の布きれ、口と鼻とをしっかりと蔽うている厚い猿ぐつわ。一切の自由が奪われ、自らの身体を責め苛まれるままになっている。何という屈辱、何という苦しみ！しかし、これこそが女である私の憧憬の姿であるとは何という宿命でありましょうか——ああ、この宿命から私は一生逃れられません。じたばた苦しむだけ無駄なようです。私は、やはり囚衣をまとい深編笠をかぶられ、手錠足枷の女囚以外の何ものでもないのです。——

私は今悩んでいます。私自身の宿命の血にはあきらめました。私をこのまま受け入れて下さる方はないでしょうか。私は喜んでその方に仕えます。どんな折檻でも、どんなお仕置でも、それはあなたの御自由です。私はその方のドレイになるのですから。——

鞭を受け、くすぐられても、一切の反抗は許されませんでした。このような生活は、決して私にとって不愉快ではありませんでした。むしろ、これがあるがために生きがいを感じていたと云った方がよいでしょう。気の狂った女——そうです。私自身すら冷静な時の自分には、このような私が解りません。——

要するに、私は強いマゾヒズムの女です。縛られ、鞭打たれ、吊され、猿ぐつわを嵌められる。そのようなことを無上の歓喜と感じ

又それなしでは——その幻想なしでは生きていけなくなっている女です。そして妙に口をふさがれ呼吸を苦しくされると、強い「生きる欲び」を覚える特殊な感覚を有しています。裏にゴムを引いたレインコートを好み、厚いマスクを愛好し、猿ぐつわに憧憬するのです。私は今考えています。こんな女を好んで下さる方はないでしょうか。マゾヒストとしての官能の世界は勿論、処世の上の種々の生活に於ても、私は人間としての誠実をその方に捧げることは云うまでもありません。一生、私は虐げられる幻想と期待とをふりすてることは出来ないでしょう。そのことは、もうあきらめました。私は私のままで、私に出来る限りの誠と奉仕をお約束いたします。前にのべました二つの希望事項を聴きとどけて下さるかたなら、それ以上何も望みません。年令も地位も財産も。貧乏ならば二人で働きましょう。そして二人だけの世界をきずきあげましょう。ただ私を「愛して」下さる方であるならば、私には望外の幸いと云うべきです。——

私はこのマゾヒストを限りなく「愛して」いた。何としてでも彼女を獲たいと思った。私が彼女に宛てた手紙は、だが、遂に彼女の手許へ届く機会を持たなかった。そして彼女は再び私の前には現われなかったのである。

かつて那須不二夫氏がこう云われた。

「……特に女性にあっては異性による被征服感、被汚辱感等々が、ある場合には一種の快感であることは否定し得ない様だ。而してこれらが縄によって自由を奪われた者が感ずる屈辱感、被征服感、及



び肉体的な被圧迫感と、何か一脈相通ずるものがあると考えらるならば、縛ると云う事が屢々行われた長い封建時代の空気の中で、被縛者達が屈辱と絶望の彼方にフト緊縛そのものに対して倒錯的な快感を覚える様になったであろうと想像するのは誤りであろうか。私はこの様な倒錯が最初に女性の心の中に起ったものであると思う。

—— 自他共に何等変態的なものを有していないと許している人々の中

にも、責絵の類に対して——時には単に縛ると云う言葉に対してさえ——漠然と何か異常な心の動きを感じる人々が案外、少なくないらしいのである。——

一口にサディズム或いはマゾヒズムと云っても、その種類は千差万別の様であるが、若し相手に実害を加え、流血を喜ぶと云うものであれば、その実演は、もはやサディズムの限界を越脱した *Atrocitism* (残酷症) と呼ぶべきものではあるまいか。この二つを常に、はっきり区別し得るかどうかは疑問であるが、*Sadism* の底流をなすものは或る特定な相手に対する一種の愛情であり、その表現として加虐が行われるが、*Atrocitism* は単なる本能的加虐陶醉であって、概して相手を選ぶ事もないし、相手の人格を認め様ともしない。大体こんな風に云えるのではないかと私は思っている。——

幼児の残酷性は、個人の生長と共に色々な姿に進化するものであろうと想像されるのであるが、其儘の本能的な姿で残っているのが *Atrocitism* であり、社会的拘束及び知性の抑圧の下に変形したものが *Sadism* 或いは *Masochism* であるとするのは誤りであろうか。

サディズムの底流をなすものが、特定な相手に対する愛情である限り、私は古川裕子に対してサディストたり得ると自ら許す。古川裕子は私にとって余りにも身近い存在に感じられたのだ。遠く去って再び戻らぬ彼女に、今なお私は姉の面影を偲び続けている。

「さあ、云え！ お前の誓いを云ってみろ！」

答を手にして、私は女奴隷に誓いの言葉を唱えさせる。

「古川裕子は賤しい女奴隷でございます。近藤一様を御主人様と仰ぎ、心からお仕え致します。どのようなお云付にも誠心誠意、服従させて頂きます。どのようなお仕置でも飲んでお受けさせて戴きます。」

「ううわわううわ、ううあう、うううう、うあうあう」

勿論、言葉は口中の布片に奪われて、単なる声にしかならない。細く冷たい銀鎖が柔らかな膚にキリキリと噛み込んで、後手錠の両の手首を頸に繋ぎ、高く背に吊り上げている。

「なにっ！ はっきり云え、はっきり！」

「おうううお、おううううおお」

「横着者！ 俺の命令をきかないのかっ！」

「おおおうう、おううううう、ううううあう」

「馬鹿っ！ そんなことで分るかっ！ よし、云いたくなければ云うな。そのまま横着を続けている。俺の云付なんぞおかしくって諾けないって云う奴はどんなに可愛がられるか、じっくり味わってみることだナ。」

女奴隷はヒップを高く誇示して這わされた。もう彼女自身の力では横にも仰向きにもなれず、鎖に噛み虐まれながら、匍うばかりだった。

答は容赦なく降り、白い肌を染め替えた。女という雌は充分に呻き、這い廻り、悶え、蠢いていた。丁度、T・N氏の前で見せたように……。

雌は繋がれている。自らの汗が舌に流れ、御主人様の匂いが鼻を覆う。両手は腿の付根に鎖で留められ、腹部に触れるのが精一杯。与えられた寝床は藁と席と厚手の毛布一枚で常に柔肌をチクチクと刺し続け、ピンクシエードをかけたスタンドが弱い光を発するだけの灰色の監禁室。うっとしい感情を咬るように、ぐっとスローテンポのハーレム・ノクターンが流れて来る。

烈しい折檻。

反抗の女奴隷に、所有者は徹底した懲罰を執拗に繰り返す、獄則に背いた女囚の所業を、看守は怒りを以て懲罰し続ける。

誓いを破った口は、呼吸も詰まるような堅い猿轡が嵌められ、弾

みの強い肢体は後手の高手小手に締めつけられ、引き絞られた首縄は喉に喰い入って深い溝を造っている。

鞭が鳴る！ 答が鳴る！

凝脂の輝く白い体は、ピンクの糸を柔肌に増しながら、伸縮し、輾転し、喘ぐ。

吊られた躰が、速くそして遅く、宙に廻転し、冷たい汗を撒いた。

架けられた躰が打たれ突き上げられて、紫斑を烙き、鮮血を鮮やかに滲ませた。

引き摺られ、蹴られ、踏み躪られて、丸やかな女の躰は、肩と胸と腹だけが、まるで別々の生き物のように激しく息づき、他の部分の降伏を嘲侮していた。

潤んだ両の瞳は円らで、キラキラと輝やき、活気に満ちて、何かを訴え、待ち望んでいた。囚衣の襟許から覗いている艶やかな喉の辺りが、クククッと嗚咽に顫えていた。

「裕子の泣き虫！」

ポロポロッと綺麗に涙が走り落ちた。

×
×
いついつまでも、私の心は古川裕子を偲び続け、求めて己むことがないのである。

◇ ◇ ◇
此の一篇は文字通り「私のイメージ」です。次の諸篇を参考に致しました。

昭和27年12月号 囚衣
" 28年4月号 続・囚衣
" 28年9月号 長期刑
" 28年12月号 凌辱の幻想と期待
" 29年1月号 裕子の夜ばなし(一) 猿ぐつわと私

昭和29年2月号 裕子の夜ばなし(二) 裕子とお仕置

" 29年3月号 私を愛して下さった皆様へ 裕子の告別の言葉

" 29年4月号 慟哭の記

" 29年6月号 わが心の記

" 29年8月号 告白美しい五月に

" 29年10月号 夕暮の窓辺にて

" 29年12月号 愛恋の日に

" 30年4月号 孤独

" 30年11月号 告別

希くば、此の一文が、古川裕子様のお目に留まりますことを。

女体緊縛フォト E組 9×13cm 印画紙焼付

ES1 ヌード緊縛集

モデル 佐賀美智子嬢 三枚一組 二五〇円

ES2 全裸悦虐集

モデル 須川 令子嬢 四枚一組 三〇〇円

ES3 臀 羞

モデル 佐賀美智子嬢 三枚一組 二五〇円

ES4 酒宴の弄者

モデル 佐賀美智子嬢 二枚一組 二〇〇円

ES5 脱がされる娘

モデル 須川 令子嬢 五枚一組 三五〇円

ES6 あわや寸前

モデル 佐賀美智子嬢 二枚一組 二〇〇円

ES7 剥れたズロース

モデル 佐賀美智子嬢 五枚一組 三五〇円

ES8 乙女のすべて

モデル 花坂 道子嬢 七枚一組 四五〇円

ES9 女学生の縛り

モデル 須川 令子嬢 二枚一組 二〇〇円

ES10 緊縛のベッドシーン

モデル 佐賀美智子嬢 六枚一組 四〇〇円

乗馬ズボン・シリーズ落穂集

(其の一)

藤 山 秀 緒

私の乗馬ズボン姿の女腹切シリーズも、そろそろ終りに近着いたようです。そこで、いままで書きつづけたものの外にアイディアだけで、それ以上筆の力が及ばないままに残ってしまったテーマが幾つかございます。

では終りに、構想のまとまらぬままに、幾つかのストーリーを簡単に書いてみます。これを御覧になって何かの御参考になさって下さいませ。二、三回はつづくとお思います。

女馬賊の死

時は満洲事変当時、田代しのぶは、病死した夫の志をついで満洲の曠野に馬を駆り、女

乍ら馬賊の頭領として日本軍に協力しておりました。しのぶは或る日、四、五人の部下を連れ、いつものように馬を駆って町まで行った帰途、敵の匪賊の襲撃に遇います。

しのぶは肩にかけた銃、腰に着けた拳銃を使って必死に応戦しましたが、敵は大勢なので、到底かなう筈もなく、部下は残らず射殺されてしまいました。

何故か彼女にだけは弾丸が当たらない。敵の首領は、彼女を生捕りにしようとして、わざと撃たせないのです。

弾丸をうちつくした彼女は、覚悟したように、銃も拳銃も棄てると、俯伏せの姿勢か

ら、きつと立上ります。カーキ色の乗馬服、きつちりと太腰をしめる乗馬ズボン、黒革の長ぐつ、銀の拍車をつけた男装の彼女は、ゆっくりと塵を払い、恐れげもなく匪賊たちの前へ進みます。

静かな沈黙が流れ、そして首領が勝ち誇ったように彼女の前へ立ちふさがります。

彼女は首領の降伏勧告に応ぜず、日本人らしく最後まで戦うと云いきり、匪賊との一騎打ちを申出ます。

首領は、面白そうにうなずき、自分の一人に眼くばせます。

ニヤリとした平分の髭男は、山刀をふるっ



て、しのぶに斬りかかった。

彼女は大きく体をひらいて腰の軍刀を引き

に斬り結び、僅かの隙を見て、この大男の心臓を一撃します。

ぬくや、忽ち火の出るような斬り合いになります。武道の嗜みのある彼女は、子分の一人や二人を相手にするのには物の数ではないのですが、戦い疲れた体での斬り合いなので、流石に息の乱れが感じられるのです。

やがて烈しい気合と共に、最初の一人が彼女の切先に胸板を貫かれて倒れました。

首領は、意外そうな顔つきで、次の一人を指名します。

二人目は雲をつくような大男で、彼女は左の肩先を切り込まれ、乗馬服は朱に染まって次第に弱りを見せてきました。

彼女はひるまず、軍刀を右手に持って必死

倒れた大男の体に、ぐっと乗馬ぐつをかけた彼女は、かかとで男の体をふみにじり乍ら苦しげに息をはずませています。

首領は、烈しい声で子分達を叱咤し、いま一人の屈強の男を彼女の相手に選ぶのです。彼女は疲れ果てた体に鞭打って第三の男に立ち向います。——この男に打ち克つ自信は、もうない……。叶わぬまでも、日本女性の名誉のために……。

彼女は、次第に重くなってくる乗馬ぐつの両足を引ずり乍ら、何度か刀を杖にして、よろけかかり乍ら、まなじりを決して男の出方を見守るのでした。

男は、油断なく刀を構えて、じりじりとつめよせる。木の根につまずいて彼女の体が崩れた。男は傲然と斬り込んだ！

しかし彼女は、倒れ乍ら男のあばらへ軍刀を突込んでいたのでした。

——男はのけぞり、彼女は肩の痛みを泳えながら立上って軍刀を抜き取ります。

勝った。三人目の男にも勝った。

——しかし体力はすでに限界へきている。そうです。一刻の猶予も許されないのです。勝ち誇った今こそ、彼女の最後の時なのです。

彼女は、倒れた男を長くつで足げにするや、血まみれの軍刀を手早くハンケチで巻き

しめ、完全武装の乗馬服をきっちりとしにつけたまま、逆手に持って、グッ！と腹部へ突込みました。中央部、やや下めのあたりです。厚地の乗馬服が、ずぶっと音を立てて破れ、

「ううっ」

押し泳えた彼女の呻きが、軍刀の手もとを小さきさみに震わせます。

この場合、上衣のボタンをはずし、下着を寛げ、行儀正しく腹を切ることは不可能でありましょう。彼女は、日本人として、女乍らも深い一太刀を、自らの腹に加えて死にたい一心から、とっさに腹の中央部を、懸命の力をこめて突き貫いたのです。

首領は、女に自決され、複雑な表情を浮かべ乍ら、息を吞んで彼女の次の行動を見つめています。

彼女は、歯をしくばり、右ヒザを立て、左ヒザをついて、のめりかける体を必死にのけぞらせながら、乗馬服の肩を激しく喘がせています。

彼女は、やがて匪賊共を、きつと睨みつけながら、軍刀に諸手をかけて

「ウーッ！」

とばかり、大きく一抉りします。

突込まれた乗馬服の破れ目を支点として、軍刀は、ぐるりぐらりと腹の中を縦横にえぐ

りたてられ、脂汗を浮かべて苦しむ、しのぶの壮烈な呻き。——やがて彼女は、激しく喘ぎ乍ら、

「日、日本人、田、田代しのぶの、さ、さ、最期……ううむっ……み、見よ、見よッ。」

——アアム、ウーッ！ ううっ」

悶え苦しむ最期の絶叫。どさり……。

ああ乗馬服の下にのたうつ血みどろの腹部。横転したしのぶのカーキ色の女体。乗馬ズボンの両ヒザを揉み合わせ、上体を屈伸させつつ悩ましげに光りを求めています。

カーキ色の乗馬服、乗馬ズボン、黒の長靴、きりりとした男装に身を固め、腰に拳銃を吊り、誇らしげに馬上に叱咤したしのぶは最後まで誇りを捨てなかった。

女だてらに男装するからは、最後まで男のような切腹でと、かねて心にきめていたしのぶ。

しのぶは、三人の男を斬り倒し、日本女性として恥かしくない働きをした後、思い通りに刃を腹に立てたのです。

しのぶは、ぐるり、ぐるりと刃を持ち直して、最後の力を振り搾って抉る。静かな満洲の夕暮れ、見守る人々の声もない。そして聞えてくるのは彼女の泳えかねた呻きだけ……。

女武者散華

松永弾正は今日の戦に、敵陣から緋緞の鎧、白馬に跨って討って出た若武者の意外の手強さに舌を巻いています。あのような若者が榊原方にいたとは夢にも知らなかった。あのような勇者を、むざむざ殺すのは惜しいものだ。なんとかして生捕りにする手はないか。これが彼の思案の種なのでした。

耳をすますと、城の外には敵方の人馬の物音が、夜のしじまの中にざわめいています。

——翌朝。

再び合戦がはじまり、昨日、初陣の若武者が今日も美々しい鎧姿で馬を乗り廻しています。

かぶとの内に隠された色白のりりしい顔立ち、ふりかざす太刀さばきのあざやかさは、目のさめるような武者ぶりです。

しかし、若武者は捕えられました。弾正の秘策にかかって彼は落馬したのでした。

武士が駆け寄って縄を掛け、兜を脱がせました。

——兜の下に輝く美貌。……若武者は女だったのです。

艶やかな黒髪を後に束ね、大将鉢巻をして、きつめに引いたマユ、くいしばった唇は彼女の気性の、りりしさを思わせます。

彼女は悪びれず、榊原内膳正の家老、桂主水の娘幾世と名乗り、この上は作法通り、命

を召されよと首さしのべるのでした、松永弾正は、生捕った若武者が女であったことを聞いて、踊り上って喜びます。

弾正は幾世を召し寄せ、あわよくば自由にしたいと思うのでした。

鎧を脱ぎ、金ピカの鎧下をあでやかに着こなした幾世は、乗馬ズボンを思わせる具足姿で弾正の前へ曳かれます。

弾正は、生捕られた上は、潔く降伏して余の側に仕えよと水をむけますが、彼女はニコリ笑って「私は命あるかぎり貴方様をつけ狙います。早く首討たれよ」というのみです。

弾正は、この上は手ごめにしても、この美しい男嫌いを征服してみせようという意地も手伝って、「それでは、余に油断があらば何時でも殺せ。それまで側に仕えよ」という。幾世は、にっこりとうなずき、軍装を解かず、弾正の側に仕えることになりました。

彼女は、弾正を暗殺するために、わざと生捕られて来たのでした。彼女は命を捨ててかかっています。弾正は、どこか美少年を思わせるこの男装の麗人に、すっかり参ってしまいました。

弾正は寝る時でも、彼女を側から離しません。それは、目を離したら約束通りの危険が待っているからです。彼女も毎晩、弾正につ



きつきりですが、軍装のまま横になるのです。

がい締めにしめます。疲れた弾正が、一瞬、まどろんだ。

弾正は、彼女を背中から羽がいじめにして行動の自由を奪ってやすみませう。動けば直ぐに目をさましますから、彼女は弾正に背を向けたままで、手も足も出ずに一夜をあかすのです。こうして、油断を見せぬままに二、三日が空しくすぎました。

彼女は次第にあせりを感じはじめます。早く弾正を亡き者にしてこの獅子王城を占領しなければならぬ。もしここで手間取って援軍が到着すれば、榊原方は破滅です。

或る夜、彼女は最後の決心をして、弾正の寝所に入ります。

弾正は、いつものように彼女を背中から羽

この機を逃さず彼女は、枕元にあった弾正の帯刀を、そっと抜きはなちます。大刀の無気味な光。

「何をする！」

弾正は眼ざとく見つけて、彼女を抑えつけようとした。

「もうこれまで！」

彼女は身をかわす間もなく、いまは最後の手段とばかり、大刀を逆手に持ってぐっ、と切先を吾が腹へ加えたのです。

いいえ、吾が腹ばかりではありません。幾世は、

「ウーッ」

と呻きながら、大刀へ諸手をかけて自分の体を貫き、そして羽がいじめにしている弾正の体をも貫いたのです。

「ギャーッ！」

たまざる絶叫。弾正と、幾世は一つの太刀に貫かれてのけぞります。

幾世は両足をふんばって、ぐっと反り返り弾正の上に仰向けにのしかかります。

そして、力のかぎり大刀をえぐりたてゐるのでした。弾正の絶叫、幾世の呻き。時ならぬ地獄の様相です。

急をきいて駆けつける警固の武士達。

しかし弾正を背に敷き、憑かれたように太刀を挟りつづける幾世の思いつめた最後の働

きには、手の下しようありません。

「ウウッ！ 方々、ご、ご、御覧あれ……ま、松永……弾正……様は、……うむ、うむ、ウウッ……こ、これ、この通り……い、い、いくよが、いくよが……う、う、討ち……奉る……」

ウーッ、ウーッ、こ、こ、これで……これ、ほ、本望……ウーッ、ウーム！……い、いざ、お、おさらば！」

幾世は、今度は弱り果てた体を、ぐっと海老のようにかがめ、両手に刃を握りしめながら鳩尾へと切り上げます。もとより二人の体を貫いた刃が、彼女の意志通り鳩尾へ切り進むことはできません。でも体を起こす時に切先は弾正の心臓へ喰い入ったのです。

弾正が虚空をつかんで息絶えると共に、力をついた幾世も突込んだ太刀を抱きすくめるようにして、両脚を踏んばり、若武者の組み打ちを思わせる勇ましい姿で断末魔に陥ります。

血みどろの軍装が、燭台の灯をうけて、妖しい美しさで輝き、鯉のようにあえぐ胸、「くくッ、くくッ……ウムウッ、うむっ、うむッ！」

望みをとげた嬉しさも、せまり来る深傷の苦しみに、ややもすれば忘れがち。

思い直して、苦しい息の下でニッコリとほ

ほえむ幾世。

「ウウーッ！」

激しい呻き。幾世は散って行くのでした。

王女の火刑

中央アジアの一角、I国の王女ソニヤは、才色兼備のきこえが高く、それだけに、住民の反感も烈しかった。

誇り高い彼女は、住民の反感をよそに華美な服装で遊び歩き、気に入らぬ者は命令して死刑にさせるなど、我儘な行いが多かった。

この国に突如、革命が起った。

ソニヤは折柄、一人の男を鞭で責めているところだった。ソニヤは、いつものように派手好みの服装をし、手には素晴らしい革鞭を握っている。打つたびに彼女の黒光りのした乗馬靴が、ぎゅっ、ぎゅっときしみ、乗馬ズボンが波打った。

そして彼女は、この罪もない哀れな男を、内庭の処刑台へ運ばせ、火あぶりにして楽しもうというのだ。

内庭には、柱を中央にして薪が積み重ねられていた。

彼女は頬を紅潮させ、乗馬ズボンのポケットに手をつっこみ乍ら命令を下している。あわれな男は、柱にくくりつけられ、そして薪には油が注がれた。

しかしその時、革命軍は王宮に乱入していたのである。

民衆は、哀れな男が、いま正に火刑にされようとしているのを目撃し、激怒した。

「退れ！」

王女の美しい顔がひきつり、眉が震えた。

しかし、王女の鶴の一声も、いまは何の権威もなかった。

忽ち王女は、哀れな男にかわって柱へ縛りつけられてしまったのである。

たけりたった群衆は、遂に薪の山へ放火した。渦巻く煙。

ソニヤはすべてを悟った。もはや、自分の住むべき処はないのだ。

誇り高き王女は、最期のきわまでも屈従を忌んだ。彼女は、観念のまなこを閉じて、じっと最期の時を待っている。

真紅の乗馬服にベージュ色の乗馬ズボン、黒光りのする長靴、金色の拍車をつけた騎士服の王女は、無残な荒縄に脛をしめつけられながらも、落着いた態度で煙をさけている。

しかし、次第次第に火勢は烈しくなり、火の手は彼女の長靴をかすめはじめ。

その時、群衆の一角から、ホースが延び、彼女の体は水しぶきをあげて濡れて行く。

乗馬服も乗馬ズボンも、そして長ぐつも。助けるつもりか。——いいえ。

このまま着衣に火がつけば、彼女は直ぐ死んでしまう。長びかせるためだ。苦しませるためなのだ。

それでも烈しい火の手は乗馬靴を呑んだ。

——乗馬ズボンが黄白色の煙を吐きはじめた。

この時はじめて彼女は絶叫した。しかし、取乱してはいない。眼を見ひらき、喘ぐように只、一声だった。

「ウーッ！」

その一声は勇ましく、そして壮烈だった。水に濡れた乗馬服は彼女の苦悶を長びかせた。彼女は、ぐっと空を睨み、そして口をひらいて大きく喘いだ。

これが誇り高い王女の最後の動作だった。火は彼女の乗馬ズボンを嚙んだ。そして真紅の乗馬服も、焰に包まれた。彼女は天を睨み、口をひらいた姿のまま燃えさかる火焰の中に立ちつくしている。

群衆のざわめき。

銃声。

燃えさかる紅蓮。

服毒刑

冷たい獄舎の一隅。そしてそこには、一人のうら若い女性がつながれている。

重山紅子は終戦と共に中国に捕えられてい

た。彼女は日本人として行動したが、国籍は中国であったため、奸漢として反逆罪に問われ、死刑を宣告された。

彼女は絞首刑や銃殺刑でなく、日本人らしい切腹で刑に服したいと申し出たが、日本人らしい自殺の方法は適当でないとして却下された。そこで紅子は、やむなく中国の古式通り服毒して自決することを願い出る。

彼女の執拗なまでの申し出に、係官も遂に古式通りの服毒を許可した。

当日は、川島芳子のような軍服式の乗馬服に身を固め、顔面の変色を怖れて濃厚化粧をつくした彼女は、落着いた足どりで、死の苦しみが待つ煉瓦造りの刑場へ乗馬靴の音を響かせて行った。

厚化粧に、くっきりと引いたマユ、真紅の口紅、ほっそりとした手にはマニキュアをつけて、男装美に輝くばかり。

刑場には、執行官と検視の人々が並んで、古式通りの服毒刑が、これから行われるのである。

奸漢の名はつけられても、紅子の行為は賞讃されていたので、立ち合う人々は皆この美しい囚人を気の毒そうに見守っている。

中国古式の毒薬が、ききめの遅い残酷なものであることを承知で、敢えてこの刑をのぞんだ事が立合人の感銘を深いものになっている。

のだった。

紅子は、最期の時に、汚物を吐いたり、排出したりせぬように、前夜から胃や腸を洗いきよめていた。

この毒薬は、囚人が血を吐いて苦しみ悶える様を貴人が覗き興ずるための時間を予想して作られたもので、紅子もその苦しみに堪えて、潔い最期を誇りたいのである。

紅子は書類に署名した。

手にとったペンが、かすかにふるえた。

彼女は静かに署名が終ると、一人々々に握手した。氷のように冷たい手だった。落着こう落着こうとしても、迫って来る死の影は彼女の胸を締めつけ、そして波打たせているのである。微かなほほえみも、やがて固くこわばって消えた。

「見苦しい行為をしてはならぬ」

彼女は努めて冷静に、にこやかに振舞っている。——しかし、これから吾が身をさいなむ苦しみが、腹を切るそれではなくて、体の内

部を灼きつくす地獄の業火なのを思うと、生へのかぎりない執着が、静かな力で頭を拾って来るのだった。

彼女は、カーキ色の乗馬服姿で、いよいよ刑場の中央に導かれて行く。

大勢の人々が、ここに倒れた。或いは銃殺で、そして或いは日本刀で腹を割いたのだ。日本の女スパイも、ここで切腹したという。

紅子は、湿気を帯びた床の土の色を、じっと見つめながら立っている。

粗末な木製の椅子が与えられた。ひじかけはなく、全部木で出来ている。乗馬ズボンの腰を下すと、ぎいっと音を立てた。

時計は午前四時をさしている。

執行吏は、毒盃を捧げて紅子の前に進む。

紅子は悪びれず作法通り盃を受けた。

盃には、なみなみと液体がつがれ、電灯の光をうけて妖しくまたたいている。

ああ、いよいよ最期の時が来た。

紅子は、一同を見渡して

「さようなら！」

と一言。盃を口に含んで一気にのみ干して行く。

——むせるように、口もとをゆがめ、そして必死に飲み下している。やがて……。

一滴も余さず呑み終った紅子。彼女は、しつかりした態度で盃の内側を検視の方へ示し



床に棄てた。検視席から感嘆の声が洩れた。彼女は立上り、椅子を後前に直した。そして、乗馬ズボンの両脚を開いて、椅子の背を抱くように椅子に跨った。そして、やがて襲い来る毒の苦しみに堪えるための、悲壮な身構えを終わったのである。

軍医は時計を出して、最初の反応を待っている。紅子も乗馬服姿で、前のめりに椅子の背を抱き、じっと眼をとじている。

息づまるような数刻が過ぎた。

最初の烈しいめまいと吐き気を、紅子は歯をくいしばって抑えた。

長ぐつを穿いた足先が、しびれはじめた。

不腹が灼けつくように痛みはじめ、そして臓腑が煮えたぎった。

彼女は、アアッ！と抑えかねて喘ぎ、再びのび上って歯を喰いしばった。

彼女は、次第々々に苦悶の表情となり、抑え抑え乍らも切なげに体を屈伸させ、椅子に乗馬ズボンを擦りつけて悩んだ。

十五分にわたる彼女の苦悶は、行儀を忘れまいとする女武者のそれであった。

彼女は、その十五分間に、数回呻いたが、どれも、アアッ！く、く……と云うような押し抑えた健気な息遣いである。

軍医の時計が十五分を指す頃、彼女は脂汗を浮かべて第二波の苦痛に突込んでいた。

美しく化粧した顔が、汗のためぬめぬめと光り、くいしばった口もとからは、ハッ、ハッ！と激しい喘ぎが洩れる。

やがて彼女は、椅子に跨ったまま、殆んど立上るばかりにのび上った。乗馬服の体が、大きくけいれんしたかと思える間に、

「むむ……うっ、うっ、うっ……ア、アッ！ゲエーッ——ウーッ！」

抑えかねた絶叫。彼女は上体をしごいて、どくどくとどす黒い血を吐いた……。

いまはもう忍耐の限界にきたのだ。

彼女は、椅子の背を抱いて、必死に崩れかかる体を支えている。

厚化粧した口もとから、血が尾をひいて床へ滴り、紅子は、なおもウーッ、ウーッ、と呻きつづける。——。

二十五分。

突如、紅子は身を揉んだ。

「ウムーッ！ ウーッ！」

紅子は絶叫したまま、前にのめった。

椅子は前に倒れ、彼女も亦俯伏せにのしかかっている。

彼女は乗馬服のボタンをかきむしり、ズボンの両脚をふんばって、床の上をのたうち廻った。乗馬ズボンへも血がにじんで来る。すでに内臓からも血汐が排出されたらしい。

「むうーッ！ な、なんの。むうーっ……」

アアッ、ゲエーッ！」

三十分。

「うむう、うむう、む、……あ、あ、……ウウム、ウ、ム、ウ、ムッ」いまは力もつき果てた彼女の、断末魔の喘ぎである。

彼女は、それでも意識は明瞭で、しかも取乱したり、苦痛を訴えて泣きわめくようなことはなかった。

呻き、のたうちはしたが、あくまでも堂々とした武人の最期の面目は失わなかったのである。

「ゲエーッ！……」

大量の吐血があった。

ウーッ、ウーッと、彼女は、後から後から血を吐いた。

ああ、その苦しみが、彼女の魂を天に帰せしめたのだ。

どく、どく、どく……。

血が、厚化粧の唇からはとばしり、彼女は乗馬服のボタンをつかみ、ベルトをしめつけ長ぐつの両足を、どさり、どさり、とのたうち乍ら、遂に息をとどめるのであった。

医師の時計は三十五分を廻ったところである。

×

×

×

×

×

×



マゾヒズム百景

馬場好男

第十六景 ヤッチヤン

ヤッチヤンとは靖子と書くのが本当の名前だが、誰もがヤッチヤンと呼んでいた。

ヤッチヤンは私より二ツ年上で遠い親戚に当るが、これは私が当時の数え方で十三歳の小学校六年生の時である。その頃、ヤッチヤンははるか離れた田舎から始めて都会に出て来たばかりで、言葉の訛りを非常に気にしてなかなか喋ろうとしなかったものだ。とにかく都会の見るもの聞くものがすべて彼女には驚異に見えたらしく、クリクリした眼を一そ

う丸くしていたのが、私にとってはいわゆる「田舎ッペイ」としか映らなかった腕白時代であった。ヤッチヤンはその頃、すぐ近所の叔父の家に来ていたが或る日、只、何となく人を苛めるのが好きな腕白ぶりを発揮して……（というより従妹らの口車に乗せられて、ヤッチヤンを泣かさないと弱虫にされる様な立場になったとも記憶している）叔父の家の倉庫の中で、掃除をやっていたヤッチヤンに喧嘩を、ふっかけたのである。私の方としては、ヤッチヤンを女中位にししか考えていないので、きつと「お許し下さいまし」と詫びてくるものと、たかをくくっていたし、もし女中らも同って来たら、二つか三つ位い

ぶん撲ってやるんだという気持をもっていただ様である。倉庫の戸口で覗いている従妹の手前、虚勢を張って私が、

「おい、お前、生意気だぞ。一寸、来い」

とヤッチヤンの袂を引っ張ると、ヤッチヤンはチラッと悲しそうな眼つきで私を見返し黙って私の掴んでいる袂を引っばろうとする。私はそれを離すまいとして、

「おい、来いったら来い」

と私は片手で、ヤッチヤンの胸倉を掴んだのである。すると、ヤッチヤンは「行きますから手を離して下さい。此の炭を向うにやったら、もう終りです」

と何かしら圧倒されそうな口調で私にいった。私は尚も強そうな恰好で「よし」と手を離すと、ヤッチャンは僅か十五歳の女の子のくせに、そばにあった木炭一俵を、いとも軽々と、ひよいと両手にかゝえ、奥の高い処にちよこんと乗せてしまった。そしてパチパチと手を叩いて、ホコリを払い、私の傍にやってきましたのである。

「フエーッ」

私は内心、ヤッチャンの怪力に恐れをなしたが、もう逃げるわけにいかない。

「おい、謝れ。謝ったら許してやる」

「何を謝るのです。私は何にも悪い事をしていません」

「何だと、此の野郎ッ。来いッ」

私は理由のない喧嘩を売って、此のヤッチャンの顔を思いきりひっぱたいてしまった。すると「痛いッ」と一寸、身をよけたヤッチャンが猛然と私に組みついて来て、忽ち二人は倉庫の中で大格闘になってしまった。然し「女に負けたら大変だぞ」

という私の心中はカンタンにくつがえされて、やがて私はコンクリートの上に仰向けに倒され、着物のすそもまくれて両足を出した。ヤッチャンは私の胸の上に馬のり跨ってしまった。

「ちく生ッ」

はね返そうする私の両手を自分の膝小僧で

ふみしいたヤッチャンは、ぐっと私の上にかゝって、両手で私の首をしめたり、交互に頬ぺたを引っばいたり、私はもう盤石の重しにかゝった様で身動きも出来なくなっていました。下から見上げたヤッチャンの顔は怒りで真赤になり、おさげの髪を私をおさえつけたまゝ、両手で直していた。従妹は何時のまにか居なくなつて、うす暗い中でヤッチャンに組みしかれた私は、もうどうにもならなくなり、

「ごめんよごめんよ、かんにんしてかんにんして」と泣き出してしまふ始末となつた。

そこへ従妹の注進で叔母が現われ、ヤッチャンも泣き出して一寸、大騒ぎとなつたが、結局、田舎に帰るといい出したヤッチャンを私の母や叔父達が引きとめ、反対に私は父母から散々叱られてこれからは「お姉さん」と呼び絶対服従を申しつけられてしまふハメとなつてしまった。

然し其処は子供で、私もヤッチャンもサッパリとして、却って仲よくなつてしまい、私が中学二年の時にヤッチャンは私の家に来る事になった位であつた。

「そんなに馬になりたければ馬にしてあげろ。その代りもうやめてっていったって許さないわよ」

その頃、谷崎潤一郎の小説を読みあせつた私にヤッチャンは、イタズラっぽい顔で私の

口に手綱を咬まし、私の背に跨つたものである。田舎から出て来たばかりの頃とは全然變つて、すっかり都会の娘らしくなつたヤッチャンは、色白の美しい顔になり、さすがに父母の前ではやらなかったが、二人きりになると私を組敷いて、息も出来ぬ程苛めることがあつた。

「む………、うゝん、かんにん」

私は甘える様にヤッチャンのお尻の下で許しを乞うたものであるが、段々生長し且、戦争が始まるに及んで二人は自然にそんな遊びから離れる様になつてしまった。

そして或る冬の夜、私が十八、彼女が十九の時、父母が他所の御通夜に出かけたあと、「ね、僕の上に馬のりに跨ってくれよ。ぶってもいゝよ」

そんな事をいう私を、よせつけまいとするヤッチャンの態度に、マゾであるはずの私が逆に、ヤッチャンの胸の上に馬のりになり、ヤッチャンの顔が真赤になるまで引っぱたく事もあつた。そんな時、ヤッチャンは、ただ泣き乍ら私にしがみついてくるだけで、私は狂った様にヤッチャンを虐待しつづけたのである。然し矢張り、意味の違いはあるかも知れないが、ヤッチャンは私に対してはサジストであり、私はヤッチャンのドレイであつた事は確かである。彼女は今、A県のある商家に嫁いで一男一女の母親である。

体 験 告 白

赤い着物と白い縄

桜井良美

かねて用意してあった風呂敷包を手にかかえると、私は立上って自分の姿を洋服ダンスの鏡に映してみました。鏡の中の妙にこわばった顔を見ながら、もう一度入念に鼻の下から頬へとパフをたたき、そして前、後姿と、どこにもおかしい点がない事をたしかめると、気を落ちつけるべく深く息を吸いこみました。甘い白粉の香に感覚をうずかせながらも、これから実行しようとしている冒険に一抹の不安が漂っています。私は、やや震える手で部屋の電灯を消しました。途端にアパート内の静寂が、いいようのない深い水の底のように感じられ、動悸の激しい胸に、ラジオの流行情報が空虚に響いてきます。どこかの部屋の時計が八時を打ちました。

私は草履を手にして、ドアの処に立ちました。そして、そっと廊下の気配をうかがいました。誰も通る人はありません。入ってくる人も、出て

行く人もないようです。今のうちです。私はそっと注意深く、しかし素早く部屋の外に出ました。

玄関の明るい灯が一瞬、私の気持を戸惑わせましたが、人の気配のない事に安心して、草履をはくのもそこそこの外に出ました。アパートの中から笑い声がきこえてきます。それが私には他人からみれば愚行ともみえるアバンチュールを嘲笑するかのようにつきこえます。でも他人は、私の行動を知る由もない筈です。気をとり直して露路に出た私は、その暗さに何かほっとした気分に包まれましたがしかし又、何かそれ以上にとりかえしのつかない事をしてしまったような気に襲われ、小刻みに震える自分をどうしようもありませんでした。そんな自分を励ましながら、私は露路から通りへと出ました。と、ハッとしました。町角の一隅に若い男の人達が四、五人で立話をしているのです。街灯の下に浮びあがった彼等のシルエットが妙に生々しく感じられました。私の不安は頂点に達しています。しかし今更もどるわけにもゆかず、私は勇を鼓してその男達のかたわらを急ぎ足に通り抜けました。もう胸はどきどきです。誰かがピューツと口笛を吹きました。若い女性が彼らのすぐそばを通り抜けたからです。

若い女……その男達の眼にはたしかにそう見えたのでしよう。私は今までの緊張と不安

が拭い去られてゆくを感じました。何故ならその女こそ、私だったからなのです。ほっとした私は、出入りの洗濯屋さんとすれ違いました。ところが、彼は見むきもせず通り過ぎて行ったのです。紺無地の地味なお召の着物、たもとからこぼれる赤い長襦袢、襟もとの清潔な白い半襟、小粋に羽織った淡紅色の茶羽織、そして白いフェルトの草履、風呂敷包みをかかえている女が、疑いもなく女で、外出帰りでもあろうという無関心さから一蔑もあたえず去ってしまったのです。足もとにまつわりつくピンクの腰巻を意識しながら私は私がまぎれもない女であるという事に確信を持ちはじめました。長い間、夢想し、考へ、危惧のうちに計画した私の女装による外出の一步が記されたのでした。

結果的にみれば、あまりに他愛のない事かもしれないし、又、私以上の経験をお持ちの方も沢山いらっしゃることでしようね。その方達から見れば、そんな事ぐらいでとかわれるかもしれません。でも、私にとってはこの夜の外出が始めての体験なのです。

胸にきつくしめられた帯、心快く匂う白粉の香り、私はあてもなく歩きました。しかしどうしても明るい表通りへ出る自信はありませんでした。一切を女装で包んでいる私は、自分の部屋にもどるまでは男に戻れないという自意識に邪魔され、若し誰かに道でもきか

れたらという心配に、始めは成可く顔を見られまいと、うつむき加減に歩いていった私も、すれ違う人が、何の関心も払わずに行き過ぎて行く事に安心し、次第に大胆になり、そして遂に明るい街灯の輝く商店街へ出てみました。さすがに通る人の顔をまともに見る事は出来ません。かねて計画の一つであった喫茶店に入って休む事も、いざとなるとそんな勇氣はなく、入念に化粧してかくした筈の髭の剃りあとを気にしながら、一町ほどで再び暗い路に帰った時は本当にほっとしました。安堵したせいか急に疲労を感じてきました。かかとの高い草履、足もとにからつく長襦袢や着物の裾は自然、私を女らしく歩かせてくれますが、それは想像以上に疲れる事でもあったのです。

私は女装のうれしさと、スリルを私なりに充分楽しみつづつ帰途につきました。喫茶店に入る事が出来なかったのも、明るい処を歩けなかった事も、必要以上の杞憂だったかもしれない。しかし、私がすれ違ったアベックのように、誰か男の人と一緒にいたら、私も案外他人目をひく事なく、平気で喫茶店に入り、映画館にも出入り出来た事でしよう。

人通りのない事をたしかめると、女の人の気取ったポーズを真似て歩き、又、万一道をきかれても困らないように「さあ、存じませんわ」などと甘い声で練習してみました。

アパートの部屋に帰るのも、なるべく人目につかないようにしなければなりません。幸い管理人のいないアパートですから、用心しながらも無事に帰宅する事が出来ました。もう十時近くになっています。帯をとき、着物を脱ぎ捨てると、安心感と疲れにぐったりとなり、そのまま横になりました。

この始めての体験に自信を得た私はその後二、三回外出を重ねました。でも、特に珍しい経験はありませんでした。ただ困った事は、若い男の人達が屯している処を通り抜ける時です。彼等は私を女一人とみてか、必らずといって良いい程、口笛を吹き、声をかけてきます。そんな時には、急ぎの用事があるように小走りですり過ぎました。

そして帰宅後はいつまでもやわらかい着物に愛着を感じ、赤い長襦袢の姿で楽しい思い出を追いつづけてまいりました。

私の女装に対する憧れはやはり子供の時からあったようです。しかし、それは妹の赤い寝巻を着てみたり、家人の眼にかくれて母の長襦袢にそっと腕を通してみたりする程度のものでした。その後、何かの演芸会で女装したのが本格的にやった唯一の経験でした。その時の胸部を圧迫する帯と背中に背負ったお太鼓の甘美な思い出は現在も忘れる事が出来ません。



す。

若しあの暗い夜道で暴漢に襲われ、墓地の立木に縛りつけられたら……この長襦袢からはみ出した白い腕を後手にねじあげられたら、赤い長襦袢の胸に、きりきりと白いロープが喰い込み、抵抗する事も出来ずに猿轡をかませられてしまいたい……そんな被虐の欲びを空虚な気持ちの中にうづかせているのです。

その後は機会に恵まれる事なく、ただ女装に対する憧れに日を送るうち、一年ほど前から同好の人を知り今日のように外出してみるほどになってしまったのです。現在までに和服も洋装も数多く経験してまいりました。でも私にはやはり洋装よりも和服に対する愛着の方がより一そう強いのです。それは幼時の思い出からばかりではなく、和服の美しい色彩、完全に身をつつむやわらかさ、そして身をしめる数多くの紐や帯による緊縛感が強く女を意識させるからなのでしょう。

しかし、この充分な満足感の中にも、何かいい知れぬ空しさを忘れる事が出来ません。この心のすみに巣喰う空虚な気持ちは私を女装だけでは完全に満足させてくれないので

私の女装は、そのまま女としての悦びに通じているのです。かつて本誌の上で南時夫さんが「女装の上で緊縛される事の欲びは、裏をかえせば自分を女と仮定して縛りあげるサジストである」との要旨を述べられました。私の場合は私の体を女と仮定するのではなく女と信じ、そして苛められる事に欲びを感じるのです。間違っても本当の女を縛ってみたいなどと大それた事を考えた事はありません。むしろ女の人に責められ、折檻されてみたいとさえ願望しておりますから本来のマゾだと考えております。又、現在同好の方にもこのような人の方が多いのではないかと思います。

たくましい力でねじ伏せられ、手首にかか

術もなく、はげしい鞭の痛みにも身をもませ、惨忍な男の、あるいは女の足もとにころがされている可憐な赤い着物の女。

縛めにうづく甘美な悦び。

過去に於て、数多くはありませんが、私も数回そんなプレイの経験をしてきました。だから現在もその時の縄目を、悦びと、妖しい期待のうちに待ち焦れているのです。

それは昨年の六月、小雨の降る日でした。その日、私は都内のS駅でその方をお待ちしておりました。その方の名は仮に西山さんとしておきましょう。西山さんとはあるきっかけから交際をお願いし、二人にとって、その日は初めてのプレイの日でした。一時をやや過ぎた頃、西山さんはお約束どおりやってきました。やや肥満した重役タイプ、頭髪も中年に達した年令を物語り、非常にやさしい口のきき方をする西山さんです。

私と西山さんは郊外の旅館に参りました。全室が風呂付二間でかなり広く、その上離れになっているので、プレイには絶好の場所です。しかし、勿論アベック向きの旅館なのでしょう。場違いな男の二人連れに係の女中さんは、うさん臭そうにみつめます。そんな雰囲気を見てとったか、西山さんはさり気なく商売の話など持ち出しました。商売には縁のない私もいい加減な合鍵をうちます。商談と

みせる苦肉の策です。

案内の女中さんが引きさがりますと、西山さんは

「さ、仕度して置きなさい」といわれて、御自分は風呂場の方にゆかれました。私は急に心臓がドキドキし、期待と心細さと恥しさの奇妙な感情にほてる頬をおさえて鏡台の赤い覆いを取り、気を落ちつけるべく鏡の中のいまわしい男の私をみつめました。でも、いつまでもそのままでいるわけにはゆきません。私は思い切って服を脱ぎ捨てました。

鏡台の前に立った私は持参のスーツケースをあけます。プーンと女の匂いが漂よってきます。真赤なお腰、ブラジャー、そして肌襦袢の上から、緋の長襦袢をまとして、伊達巻でぎゅーっとしめつけます。これだけで首から下は女になってしまいました。まだ完全に裸えのとまらない手で化粧を急ぎ、口紅をひきます。しかしなかなかうまく塗れません。何度も何度も念入りに塗り直し、やっと出来る上と、最後に洋装のかつらを取り出してそっとかぶります。そして、どんなに暴れてもはづれないように地髪との間を何本もののピンでしっかりとめると、丁度地髪をかつらの髪型に結ったように頭部の肌がひきつられ、心快い女性の痛みを感じました。

これで完全に女になってしまったのです。伊達巻でしめつけられた緋の長襦袢の胸は適

度にもり上り、欲びにはずんできます。それから白足袋をはき着物を着ます。さすがに帯だけは自分で結べませんから、これは着きつける部分と、お太鼓の部分との組合せで出来る略式の帯をつけ、帯締めを結ぶと、もうどこからみても完全に女です。このまま外出しても、旅館の女中さんと西山さん以外は私を男だと思う人はいないでしょう。

私はテーブルの前につつましやかに正座して西山さんを待ちました。西山さんは、やがて風呂場からもどられました。「お待ちどうさまでした」座布団をぶらし、しとやかにお辞儀をした私に西山さんは「やあ、凄い。本格的だね」と驚かれます。「あら」私は恥しくなって顔をふせました。「とっても綺麗だよ」と私を眺めながらおっしゃいました。それまでは女の服装によって仮装していただけの私が、次第に本当に女になってゆく様な錯覚に酔い、男の人に奉仕する女の愛情すら感じられました。「淑江、始めようか」と西山さんがささやきました。

カーーツと眼の前が真赤になるような期待にもえ、身のふるえるような気持に私はかす



かに首をふってこたえました。「ハイ」その声は消え入るようでした。「あんまり痛くなさらないでね」と甘えるように頼みました。

「さあ、どうかな？ 儼のしたいようにするだけさ」西山さんはニヤニヤしていました。女装で恐怖におおのく私の姿が西山さんにはどう見えた事でしょうか。腰紐を手にして西山さんは私の後に立ちました。

いよいよ縛られる。まだ陽は高いのです。今ここで縛られてしまったら夜おそくまで私は自分の自由をうばわれてしまうのです。いえ、西山さんが興に乗れば明日までかもしれません。或いは明後日、十日、一年……西山さんの思うがまゝの責めをうけなければな



りません。私は背筋を走る戦慄に不安と歓喜の矛盾する寒気を感じ抵抗しようかと思いましたが。プレイとしても私は抵抗すべきだったのかもしれない。

でも「手を後に廻して」と命令されると、何かそうする事が面映ゆく、西山さんのきびしい口調に抗する事が出来ず、素直に手を後にまわしました。途端に両の手首を強い力で押えつけられ、腰紐が強く、強く一卷、二巻きとしめられてゆきます。甘美な苦痛の緊縛感。そして自由をうばわれてゆく悦虐。

私を後手に縛りあげてしまうと、西山さんは別の真新しい白いロープを手になれました。あゝ、それは私が自らの緊縛を夢みて自分の体を縛りあげるべく買ってきたものでした。

真新しい白いロープをわざと私の前でみせびらかしながら、ゆっくりとほどこいてゆく西山さんの姿を私はなす術もなくみている他はありません。

やがて、白い紐が私の胸にまきついてきます。ブラジャーの上に二巻き、下に二巻き、力一杯しめあげられます。新しいロープはかたく私の腕に喰い込み、胸を圧しられる息苦しさには私は思わずはかない抵抗を試みましたが、もとより何の効果もなく、その紐は背中あたりで一旦きつく結び合わされると、そのあまりを後手の手首の紐に通し、思いきり上へひきあげられました。

「アッ——」それは非常な苦痛でした。しかし西山さんは私の悲鳴などお構いなく私の身体を鮮やかな手つきで荷物のように縛りあげてしまいました。新しいロープの一束は思ったよりも長く、その余った縄尻を西山さんは握りました。

「立て！」ぐいと縄尻をひかれました。



くり返りました。かたい縄目は深く手首に喰いこんで私は苦痛にもだえましたが、西山さんは容赦なく縄尻をひきてたまたます。その度にしほられるような痛みが、私の全身を襲います。しかしギッチリ縛られた身にはなかなか起き上る事は出来ません。それでも乱れた裾を気にしながらやっと立上りました。

あらためて足首も揃えて縛られ、口の中にハンカチをつめこまれ、その上から豆しほりの手拭でかたく猿轡をかまされてしまいました。

そんな私を転がすと西山さんはお茶でも飲むつもりでしょう。暫く私は放置されてしまいました。諦めの眼を閉じた私には目のさめるような女装でかたく縛りあげられ、古風な

豆しぼりの猿轡で救いを求める事も出来ずに投げ出されている女、恐怖に悶える女の姿がありありとみえます。それが現実の私なのですから……。

西山さんは部屋の境の処に立って何かやっています。

吊られる！ 私は思いました。鴨居に何本かのロープがかゝっています。吊られるという事は緊縛にとって最高の悦唐かもしれせん。私もかつて吊り下げられた自分をどんなに夢見た事でしょう。しかしそれがいま、現実には私の体の上に加えられようとしているのです。私はかたい縛めの苦痛も忘れ、期待に胸がもえ上るようでした。

準備の終わった西山さんは小柄で十一貫そこそこの私を軽々と抱きあげ鴨居の下に用意してあったテーブルの上に立たせました。足も縛られている私はなかなか思うように立てません。それでも、どうやら鴨居から下ったロープと背中中の紐がぐいと吊られるように連結しました。

「いゝかい、淑江、本当に苦しくなったら首をふって知らせるんだよ」西山さんは私の脚の下からテーブルをとり去る前にさゝやかれました。

いよいよテーブルがとられました。縄のかゝった腕と手首にひきつるような激痛を感じ今にも腕が折れそうです。

「ウワァーッ」猿轡の下から洩れるうめき声が他人の声のように、ガンとした耳にひびきます。しかし、十一貫そこそこの軽い体とはいえ、人間ひとりが吊り下げられるのです。鴨居にかゝった縄がぐーんとびて私のつま先きは辛うじて敷居の上につきましました。激痛は去りましたが、鴨居から下った縄とつま先で支えられた私の体はそれでもまわるようにゆらゆらとゆれ、その度に胸にかゝった縄がしまり、呼吸する息が苦しくあえぎます。

とめようと思ってもつま先だけではどうしようもないのです。本格的な吊りでなかったのは西山さんが手加減してくれたのでしよう。しかしぐいぐい体に喰いこむ縄目は本当に歎きの苦痛でした。西山さんは、そんな苦悶する女の姿を暫く見ておりましたが、やがて何を思ったか、洋服ダンスをあけて何かやっています。私はそれを見る事も出来ず、たゞ次に加えられる責めを待って、期待にふるえながら、鴨居から吊り下げられているだけです。

パシッ！ と私のお尻に鈍い音がします。バンドの鞭でした。先ず軽くあてられたせいか苦痛はありません。それは次第に強くなってきましたが、着物の上からですから、思った程の苦痛ではありませんでした。

どの位の時間が経ったでしょう。私には一時間、二時間の長い間に感じられましたが、

或は十分位かもしれせん。西山さんの鞭はやみました。

大変文才のない拙い文で充分に語りつくせ

ませんでした。ただ赤裸々に真実の病的な告白をしただけです。その後も西山さんと、

そしてもう一人の同好者林さんといろいろなプレイをしまっていました。林さんの場合は

西山さんと違い、林さん御自身も女装され、お姉様（年上ですから）として女同志の責め

なのです。ある時は西山さんの手で林さんと私が一緒に責められたり、又、西山さんと林

さんが無抵抗の私を苛めたり、あるいは可憐な女学生として紺のセーラー服の上から白い

ロープで縛りあげられ、そして純日本風に長襦袢、日本髪姿で海老責めにされ、長い間

放置されたりもしてまいりました。若し幸いにして拙文が同好の方達に一片の興味をでも

感じさせるとしましたなら、その時の事なども書いてみたいと思います。（掲載の写真は

その時のものです。）このように書きますと何か数多い経験のようですが、しかし回数にし

ますと僅かに六回という数少ない体験です。でも私は、その時のほげしい緊縛の痛みも忘れ

ただマゾの血だけをもえたぎらせているのです。そして、どのような責苦を受けるのか、

七回目のその日を冷めたい理性と胸うづく期待に、毎夜の妖夢をみつづけているのです。



◎手記◎

女性のお腹に関して

影 浦 栄

時折、拝見する本誌の最近号に羽村さんなど数名の方々が、女性の腹部について興味ある文章を寄せられているのを拝見して、私は長年探し当てていたものが手に入った様な喜びで一杯です。

私もペンをとって、自分なりのレポートを綴り、皆さんに読んで頂き、何らかの反響を期待しているのです。

特に術語が出て来る様な医学

上の表現を避け、ごく卒直に綴ってみた次第です。

○

舟橋聖一の「風流抄」の中に、新宿の町に立つ夜の女が九カ月にもなる大きなお腹をかかえて、それがかえって面白がられて、客がついて繁昌しているという話が出て来ます。

平べったい筈の腹部が前へ突き出して、固く張り切って如何にも弾力ありそうに見えるのは、人目をひくのが当り前でしょう。

そうでなくとも、普通の平べったいお腹でも、やはり魅力のあるものでしょう。

私が女性の腹部に対して一種の意識を持ち出したのは何時かはつきりしませんが、常時のお腹より、病氣して医者で診察されて抑向けになつてゐる時の、お腹に興味を覚えたことは確かです。

この文も、そんなところから出発したいと思ひます。

○

子供のころの「お医者ごっこ」でも、やはりお腹の診察は重要な部分を占めていました。

自分が病氣した時、かかったお医者ややったと同じ様に、難しい顔をして患者になつた方のお腹の上に手をやって、ゆっくり抑えてみたり、打診や聴診の真似をするのでした。

最近、発行された友川泰彦の「美酒のめざめ」中に少女の「お医者ごっこ」の記述があり、少女が少年の腹に耳をつけてゴロゴロいうのを聴いて悦び返りは流石に、うまく心を捉えてゐるのに感心しました。

成年になつてからは、まさかこんな事は出来ませんので、雑誌や小説の中からお腹の診察や妊婦などに関する記述を拾つてみたり、女性が病院や自宅で医者から診察を受けている場面を想像して氣持を昇華させてゐるのです。

こうしたことも、映画などや、又、親しくしている婦人たちの断片的な話によつてゐる

のです。

若い婦人が妊娠し、臨月も近く大きなお腹をかかえて病院へ診察を受けに行きます。

医者は想像の中では大抵、女医です。

名前をよばれて診察室へ入った女に「食慾は」「お通じは？」など医者が尋ねた後、おもむろに聴診器を出して診察します。

ついでですが、この聴診器にも、私は小さな時から興味を抱いていました。

さて、胸と背中の中を診察が終ると、女は看護婦に案内されて低いレザー張りの寝台に上ります。

着物をうんとゆるめて、見事にふくれ上つたお腹を出して医者の診てくれるのを待ちます。

手を洗つた医者はおもむろに、お臍のあたりを丁寧に触診します。

女は、じつと眼を閉じて一寸、恥しそうですが、生れる子供のために我慢して、身体を診せています。

触診が終わると、医者はラップ型をしたトラウベ式聴診器を持って来て、ラップの吹き口に当る方を耳に、拡がった方をお腹につけて内部の音をききます。

私の伯母から聞いた話ですが、彼女の学校友達で活潑な女性がいたのですが、結婚後、妊娠して診察に行き、お腹を診てもらふ時、これを当てられたのだそうです。

ところが、彼女は意外にくすぐつたがって腹を押さえて寝台の上を転げ回つて笑いこけどうしても診察が出来ないのだそうです。

次に又、出直して来て診てもらふのですが、この段になると、くすぐつたがって、しまひにはトラウベの型を見ただけで笑つてしまつて、医者に「赤ちゃんが死んだって知りませんよ」と怒られる始末。彼女も母親を連れて来て、今日こそ笑うまいと決心して来るのだそうですが、どうしても駄目だったと云ふことです。

伯母は、そこ迄しか話していませんでしたが、診察台の上で笑いこける若い女の姿がしばらくは私の頭にコビリついていました。

羽村さんが腹囲を測ることを書かれていましたが、実際にも巻尺で妊婦の腹囲を測定する様です。

私の空想は、せいぜい、この様なことから産氣づいた女性が苦しがつてゐるところとか、便秘に悩んで一生懸命、腹をマッサージして貰つてゐる処ぐらゐまでで、手術や切腹等の被虐的なことに全く興味はありません。では今度は向きを変えて、文学作品の中から私好みの腹部診察の箇所を幾つか抜いてみましょう。

まず初めは、若杉慧の「禁断」の中から、教師に妊娠させられた少女みふねが町の病院で診てもらふ処です。

「脱ぐんですか？」

「いえおなかを診ます。そうなんですよ？」

「このまま、見てください。」

「そう、これは上げとつてもよろしい。」

医者は掌をひらき、寸法を測るように腹をゆっくりおさえた。二人の腕時計の秒音が呼応し合った。それから医者は黒い細長いラッパのようなものをお臍の下の方にくっつけて耳を当てた。ある一カ所ではなかなかラッパを離さなかった。

もう一つ、時代小説、山下樹一郎の「和蘭囃子」から。

青年医師で剣客の柳小路萌平が、女賊天神お万の診察をしてやる処。

横にきて坐った男は無造作に着物の前をはだけ、まず左の乳の下から、鳩尾と丹念に撫でまわしはじめる。

お万は体中がくすぐったいし、いくら覚悟はしていても、白々とした素肌を男の目に晒らしているのだから気恥しいような、さぞ鴨が見とれているだろうなと思うと、半分は得意のような――

「厭だ、それ取っちゃ」

男の手が下の物をぐいと下まで引きおろしたのだ。

「取りやしないよ」男は案外冷静な声で答えて、むき出しになった腹を撫で、その手

が臍の右下へびたりと止まる。

「痛いかな」じんわりと手に力が入ると、びくくとするほど痛い。

「痛いわ」

「そうだろうな」

こんどはゆっくり下腹を撫でまわす。通じがなくて張っている腹だから、とても気持ちがいい。

最後に田山花袋の名作「妻」の中から産気づいたお光の様子を抜いてみましょう。

痛みが催して来ると、お三輪は取敢ず夜着の下から頻りに腹を摩って遣っていたが、一刻毎にそのいきみが強くなるばかり、寝ていてはいかにも不便なので、葛籠を其処に運んで来て、其上に蒲団をかけて産婦にそれに凭り懸らせて、後に廻って、両手で強く下に抜くように腹を押して遣る。(中略)

圧迫が時を刻んで烈しくなると、女はたしなみななどは云って居られない。身を悶えて苦痛を耐えようとするので、額には汗が滲んで、丸髻が半ば壊れた。

お三輪は出来るだけ力を強く撫でてやっている積りであるが、「もっと強く……」後生ですから姐さんもっと力を入れて……と産婦はいう。

また、ここには書きませんが、舟橋聖一の「絵島生島」の中に妊娠している月光

院を御典医の好竹院が、夜具の間から手を差込んで丁寧に診察する描写が実に克明をきわめたものでした。

映画は余り見ませんので特にそうした場面を見ることはありませんでしたが、二、三年前都内でよく上映された「無痛分娩」という短篇の中で、無痛分娩法の練習法のところに実際大きなお腹をした人の体が写り、自分の手でお腹をマッサージしたり、息を吸い込む度にお腹が思い切りふくれ上るのに目を奪われました。

もう一つ、その頃の洋画「私は子供が欲しい」の中には妊婦の診察場面が極度にまで刻明に出て来ました。

実際の分娩場面も出て来るので、この方が一般の話題となった様でしたが、私は診察場面の方にずっと興味を感じました。

寝衣に着かえた妊婦がベッドの上に横たわると医者は診察して「ここが子供の頭だ」と示したりします。

聴診器を下腹に当てられている時、この女性は一寸恥しそうな顔をしていました。

羽村さんが、お腹の大きい女のストリップのことを云われましたが、私も同感です。

以前は浅草あたりの汚い小屋がけストリップでは、時折明らかに妊娠している女が踊っていて、観客のひやかしに会ったということですが、私は見ませんでした。

私も時折、見るのですが、ストリップの中にはお腹を主とする動きが余りない様です。落語「代脈」の中に、代診のそこつ者が、病氣のお嬢さんを診察に行くところがあります。先生から「長く寝ていて腹が張っているから、決して下腹のしこりを押してはいけな

い」と注意されて行くのですが、面白半分に力を入れて押してみると、音をたててガスが出るが「この頃は耳が遠くなって今のおならさえ聞えなかった」という例の結果になるのですが、この診察の時、落語家によっては「ポンポンを拝見」ということばを使ってい

るようです。私にとって女性の腹部の興味は無限です。又、何か書いて見たいと思いますが、今回はここまでにしておきます。これに関連して羽村さんなどが何か書いて下されば嬉しい限りです。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第八十八項

出版物「お前の敵」

フリリップ・ギブス著、吉田健一訳

昭・二十六・六・二九・小山書店刊

第二次大戦の末期、米ソ両軍に独乙本土が侵され、敗色の濃い頃、東プロイセンの地方都市の一つ、ケーニヒスベルク市内に住んでいた、ヒルデガルト・メンツェルという若い

女性を中心として、独乙の敗戦後に至る数年間を描いた小説。

ポーランドに中間を区切られて、独乙本国と分離されていた東プロイセンは、戦争の開始と共に独乙本国と地続きになった。ポーランドは独乙に合併されてしまったからである。従って其の様な立地条件の下での独乙人の心理はヒトラア・ドイツに対する熱烈な讃

美の念に燃えていた。そしてヒルデガルトも亦例外ではなかった。ユダヤ人排斥運動も、ナチスの信条も神聖なものと解されていた。私達はこういう前提を見逃してはなるまい。本欄は、再び政治思想上の顧慮を全く切捨て、マゾヒズム及び、女性サディズムに関係する記述についてのみ紹介する。

敗色、最早拭うべきもないという段階に至って、主人公は知人親族と共に伯林へと逃避行を始める。彼女等は、或るユダヤ人の女の家で宿を借りる。そこで強制収容所に居たというユダヤ人の主婦が、優越種族に対する階級的義務に従って、無意識にとる態度、——それは、ブーヒエンヴァルトで培われたものである——そして、その大量虐殺についての話を聞き、その殺人行為について、烈しい嫌悪感を示し乍ら彼女は、「ユダヤ人は収容所へ追込んでしまおうといい」といい放つのである。同行の若い軍人は、烈しい罪の意識を感じ、其の意識は巻末に至るまで彼の言動を支

配しているが、この優しく女性的な女主人公は、その事実談に対しても、全く独乙の悪とは思わない。彼女は其の事を考えるとき、アドルフ・ヒトラーの支配がその様な行為を支持して居り、従って彼女がユダヤ人を虐待する事は、如何なる制約もうけないものであることを本能的に知っているからである。この場合に彼女をして、異民族を虐待することは実に賞めらるべき事以外の何物でもないのである。

此の小説の創作に当って、原作者は親しく東プロシイセン、柏林等に赴いて、事実立脚して筆を染めたといわれる。この作品の中の女性の心理の変化は、実に詳細に描かれており、特にヒルデガルトの心理は、環境の変化による女性心理変化の著しい好例である。訳者は一応名声を持った吉田健一氏である。左程に非良心的な仕事ではあるまい。

復刊第八十九項

「全日本馬術大会」について

十一月八日及び九日の両日、皇居内パレス乗馬クラブに於て、馬術大会が行われた。八日は主として婦人及び青少年少女の部であつて、外国人選手が甚だ多かった。此の種大会に於て、通例の通り外人選手は婦人が極めて多かった事を特に記して置き、「週刊サンケイ」の最近号にその一部写真の掲載があり更

に十一月三十日、東京代々木の東京乗馬クラブに於て、婦人、青少年少女のみの馬術大会のあった事を附記して置く。

女性乗馬の持つ、マゾヒストに対する魅力、女性の加虐慾望の充足に役立つことなどは、乗杉喜代子氏他数人の女性騎手によって明らかにされているので、それ等の項に扱われたと思う。

復刊第九十項

出版物「二十五時」

ゲオルギウ著

戦後一時非常に騒がれた著作である。私はくどくどとその内容を詳記すまい。

ルーマニヤを舞台として、一人の男がコムニストにもナチスにも、又、アメリカ軍にもそれぞれ注意人物とされるいきさつ。その中に一段と光彩を放っている、人種、民族、国籍による階級的屈辱を描き、鋭い皮肉な人生観を吐露する。人種による屈辱は「魔教圏」にも触れられている。美しい優秀民族による醜い劣等民族に対する無意識での圧迫、現世はまだフランス大革命以前の様相を、その一節に果しなくつづけている様である。

復刊第九十一項

「東京新聞」文芸欄より

十二月五日付夕刊の同紙に、新人作家、遠

藤周作氏が「活火山と休火山」という一文を寄せている。氏は文中、人間の犯した残忍な行為「太陽と影」に示されたフランス人のアルジェリア反徒に対する行為、アウシュヴィッツのナチス行為を引用して、これらの残忍な行為者が、家庭に於けるよき父、よき母であったこと、これらの行為が、人々の心の中にいつも眠っている休火山の様な「悪」の為であること、吾等は休火山を活火山に転ぜしめぬ様な努力をせねばならぬことを語っている。

氏は、カトリックの信者である。カトリックの持つ潜在的な被圧迫感——法王の存在とその権威、特にその権力を持続させている人々の心理に関連して——は往々にして変態性欲の温床と化した事が報告されている。更に氏は「白い人、黄色い人」によって、我国の文学に人種的偏見を肯定的に導入した。

その作品は、いじらしい程に遠慮深くマゾヒスティックな心が秘められている。本誌に於ても沼氏は早くから、氏を発見して紹介している。更に何人かの執筆者が氏のマゾヒスティックな傾向を作品から指摘している。それらの指摘は実に正確に氏の一番嫌がっているらしいマゾヒズムの作家という名称が妥当であることを語っている。そして、ここに遠藤氏が可成り恣意に執筆したと思われる短文の中に、はっきりとその確証が発見された。

彼は文中、僅かな行数をさいて「アルヂエリア人の死体の側に淫猥な笑い」を浮べた仏人将校が立っている写真について語っている。私達が最も重要視するのは、この新進の作家が在学中、フローベールの研究者であったことである。正確な言葉は各事象に対して唯一つしか存在しないとして、モウパッサンに数十回の書直しを命じたフローベールを知る者にとって、遠藤氏が残忍行為を淫猥と結びつけた事是如何に重要なことであるかを察知することが容易である。

そして現代、ほのかに美化されたとはいえずマゾヒスティックな傾向での考え方、特に政治的方向に逆進するかと思われる人種問題に対する肯定的な意見を持つ、白人崇拜症的傾向の考え方、感覚によって創作された作品を数多く持つ作家が、屢々婦人雑誌にさえ登場するということは、驚嘆の目を以て注意さるべき事ではなからうか。

復刊第九十二項

出版物「見るまえに跳べ」

大江健三郎著

私は此の作家を決して尊敬しない。彼の作品は極めて濃厚に大量生産の臭いがするからである。日本語は既に多くの新人作家——石原慎太郎を始めとする学生作家達を含めて——に依って徹底的に破壊されつつある。文

章というものの存在は稀になった。有力新聞でさえ誤植だらけの時代なのである。大江氏だけの責任ではないともいえよう。

本欄は、氏のこの短篇集の中に扱われている主題の特異さの故に、この著書を選択した。

集中、外人の同性愛行為に参加する為の娼婦、外人だけの同性愛の対象となる少年等が現れる。いわゆる、まっとうな日本人は一人も主役を演じない。そして作者は、これをどうという訳ではない、只興味ある主題だから

ら、というだけの理由で書いている。政治的な臭気もない。ゲイボーイ達の示すと同様の世紀末のピンク色の雰囲気だけが香る様である。

復刊第九十三項

仏映画「四角い帆」

大した映画でもない。そして大した興味もない。しかし奴隷に対する執拗な鞭打ちが描写されている。こうした場面は、歐洲ものの方がしつこいし、写實的でもある。美しい色彩の、アラビヤが舞台の活劇ものである。

本誌百号突破記念 懸賞原稿募集 について

本誌通刊第百号突破を記念いたしましたして懸賞原稿の募集をいたしましたところ、多数の読者の方々から御応募頂き厚く感謝しております。

募集以来、優秀作品は、すでに本誌七月

号誌上に花巻京太郎氏の「お町の最期」をはじめとして、八月号では、路加比利氏の「身悶える妖精」九月号では、沖竜彦氏の「草双紙に於ける賣場の研究」を。更に十月号では市田健次郎氏の「女水兵哀史」(女奴隷愛好者の遍歴より)十二月号では、真木不二夫氏の「白い玩具」と近藤一氏の「継母」の二作を発表いたし、三十四年新

年号には、蒼野礼氏の「花臂(かでん)」を。二月号では、有瀬流子氏の「十七娘火焙哀話」を。更に本号では、再び蒼野礼氏の「奈緒美」を掲載致しまして、皆さまの御高評を仰ぐ次第であります。

尚、只今手元に届けられた数多くの応募作品を鋭意検討中ではありますが、皆さまをアッと驚嘆させるような傑作にめぐり合わさないので残念に思っております。これはと思う優秀作品は逃さず掲載いたす考えでありますから、何卒奮って、傑作を御寄せ下さるよう御待ちしております。

記

驗

体

逃 亡 徴 用 工

真 金 鍛 次 郎

「現在はもはや戦後ではない」と云われる様になってからも、もう久しくなりますが、私にはその戦時中のことが、私の被徴用中のことが、まるで、つい四、五日前の出来事のように思い出されてならないのです。

私はあの時代、舞い込んだ白紙一枚に自由を奪われ、横須賀の海軍工廠に配置されて、池上に在る寄宿舎に、多くの同じ運命の若者と共に「お国のため」に起居していました。

その日、私とTは作業を休んだのです。前日の屋外作業中に降られた雨で、全身ズブ濡れになったのが不可なかつたのでしよう。そ

の日の起床時間には頭がフラフラしていましたが、私は寮長に申し出ました。熱を計ると八度六分でしたので、寮長も療養を許してくれました。Tも大体同じ様な容態でしたので二人は、皆出て行った後の部屋で、薬を貰って寝て居りました。ひどい汗をかきながら夕方近く迄床の中で我慢してお蔭か、ウソのように気分が良くなりました。するとTが起き出して来て、何かゴソゴソ始めたのです。

「T、どうした、もう良いのかい？」

私は頭を上げて問い掛けました。

「ウン」

Tは白い歯をのせかせてうなずきました。

私もそうですが、熱さえ下れば、仲々じっと寝て居れるものではありません。二人はどちらからともなく、床の上に起き上り寮に備えつけの盤を持ち出して将棋を指し出したのでした。

「貴様達はどうしたのだッ」

夢中で駒を進めていた私達は、とび上る程驚きました。巡廻の兵が二人、部屋の窓から私達に声を掛けたのです。

私とTはうろたえ乍ら、それでも訳を話しました。

「なにイ、病氣だとり将棋を指したら直る病気かッ」

兵の語気は俄かに荒くなりました。

「コイツラア、仮病を使ってサボッテやがるオイッ責様等、この非常時を何と思っとるか！」

「……」

私は直立の儘、唇を震わせていました。

「来い！ 国賊奴、ど性骨を叩き直してやる！」

兵達は、私達二人の首筋を掴んでズルズルと宿直室迄引ずって行ったのでした。二人は長い間、その部屋の片隅で直立させられました。兵達が自分達の前に立ったのは、もう寮生は皆寝静った頃でした。

恐らく、Tの悲鳴や怒号で彼等の夢が破られたのでしよう。寮長と副寮長の二人がその部屋へ飛び込む様に這入って来ましたが、しばらく二人共、兵等の覇気に恐れをなしたのか、只茫然と眺めているだけでした。二人が入って来たのに気づいた兵は、Tを隅の方へ蹴飛ばして向き直りました。

「寮長、貴様の寮には斯ういう国賊がおるぞ！」

兵は大声と共に檣の棒を横に払いました。激しい音をたてて、寮長の手から竹刀が飛び立ち直る間もなく、頬に激しい平手打が鳴りました。

「貴様の日頃の教育が悪いからだ」

軍の威風を誇示して怒鳴りたてる兵の前に二人は直立して、慄えている様でした。兵は更に語を荒めました。

「解ったか」

「ハイ、以後気をつけます」

「ナニ——、以後——これから後はずっと以後だ。貴様の以後はいつからの以後だ」

「ハイ」

「ハイで解るか。今直ぐ教育し直せ、宜い！」

使喚する様に吐き捨てる、汗を拭ぐ、ゆっくりと腰を下ろし煙草をふかし始めたのです。私は緊張した此の場の空気に吾を忘れて見とれていました。日頃はあんなに威張り散らしていた寮長達が、兵の前では慄えながら立っているのを見た時、急に二人共無価値な者の様に思われたのでした。然し、教育し直せと言われて、私達を睨んだ時の彼等の目は、爛々として残忍な光りに満ちていたのでした。

「貴様等のお蔭で寮長の顔は滅茶々だぞ」余程腹が立ったものとみえ、私達に対する攻撃は常とは比較にならない程痛烈でした。

踏まれ、蹴られ、交互に竹刀や細竹で叩かれ、息を吸うひまもない位でした。私は部屋中を転がり廻り、逃げ様などという意慾はいっのまにか、どこかに素っ飛んでいました。

恥も外聞もなく夢中で詫び続けましたが、

なんの甲斐もありませんでした。詫びる言っても、休みもなく襲って来る激痛の為、最後迄明瞭に言い切れず、吐く息の悉くが悲鳴と共に出てしまうのです。二人の兵は私達二人の苦しむ様を凝と見ていた様でしたが、突然意地の悪い方が大声で吐鳴りました。

「二人共退け、手緩いぞ」

隅の方で慄えていたTが蹴られながら中程へ転がされて来ました。

「此奴も未だ教育が足らん」

そう言う、身を丸めて縮まったTの尻を力の限り殴りつけたのです。魂消る様な悲鳴と共に、Tの体は一尺程も抛うたれました。休みなく追い打ちをかけられ、其の度にTの体は前に素っ飛ぶのでした。

「好いか、斯ういう風に遣れ」

「ハイ」

寮長がすかさず其の後を引き受けたのですから、私は副寮長の方を振り向きました。彼の細竹が当然、私を攻撃して来ると考えたからでした。然し、副寮長は戸を開けて出て行きました。再び私はTの断末魔の苦しみを、身を切られる様な思いで見ているより外、方法がなかったのです。ズキンズキンと動悸の度に襲って来る激痛は、Tが撲たれる為に起る様な錯覚に囚われるのでした。程なく、副寮長が入って来ました。手にかかえたくさんの太いロープや麻縄を見た時、新らしい恐

怖が湧いて来て思わず身をよじりました。

「おい、こっち」

寮長が催促する様に手を出して太いロープを受取ると、Tを仰向けに蹴転がして両手首を縛り、一方の端を天井の梁に掛けて、二人でグイグイと引き始めたのです。Tは力が尽きたのか、目を閉じてされる儘になっていましたが、爪先でやっと身体を支える位迄、吊りあげられた時には、手首が痛むらしく泣きながら身を揉んでいました。二人は前後から攻撃を加えました。やっと床に届いているTの爪先は、その度に忙がしく移転しました。片足を醜く力みながら持ちあげました。吊られた両手に全体重をかけて反り返りました。それでも休みなく加えられる鞭に余程苦しかったとみえ手を力みながら折り曲げました。爪先は床から離れて持ちあがりしました。程なく手を伸ばしたTは、爪先を床に落して、ああ苦しいと叫びました。其の時のTの苦悶に満ちた顔を、私は今でも判然と憶えています。が、どんな風に書いたら良いか解りませんが、言語に絶するとか、不文の何々とか言う言葉は、こんな時使うものかも知れません。

私の傍には余った細引が二、三本散らばっていました。十分な攻撃をTに加え様とでもしたのでしよう。足でその細引を隅の方へ押しやった副寮長は、傍に寝そべっている私に気づきました。

「此奴も括って遣れ」

いきなり一本を手にとると、私に近寄って来ました。とび起きて夢中で許しを乞う私の頬に、罵声と共に息も詰まる様な平手打が加えられました。恐らくそれは、私を黙らせる為の威圧的な手段だったのでしよう。然し、恐ろしいという脅迫感で一杯の私が、そんな事で黙る訳はありません。私の泣き声は益々大きくなりました。泣き叫びながら詫び続けていたのです。痛めつける様な行為が強まれば強まる程、私の叫喚もそれに比例して強まっていました。両手を一纏めに掴んだ副寮長の手には、私は泣きながら咬みついていたのです。

何か大声で嗚咽しながら頬が変形する程何度も撲たれましたが、撲たれば撲たれる程私は歯に力を入れました。唇の間から洩れる悲鳴に押し出された唾液の為に、副寮長の手はベトベトと濡れていました。尋常一様では離さない所か、益々めり込む痛さに、剛毅な副寮長は私の腹を思い切り蹴とばしました。

息詰まる様な激痛を下腹に感じた私は、思わずヘタヘタと崩折れる様に蹲んでしまったのです。間撥を入れず胸を蹴られ、私の五体はベニヤ戸に叩きつける様に弾きとばされました。激しい音を立てて戸は廊下に倒れ、私はその上に仰向けにひっくり返りました。

その時私は、逃げ様などという意識は全然

働いてはいなかったのです。只苦痛に泣き叫ぶだけが精一杯でした。恥も外聞もなく必死で許しを乞うていたのです。所詮無駄とは知りながら。とすれば、私を逃亡の罪に追いつたものは、意志ではなくて痛覚のなせる業だったかも知れません。ベニヤ戸と共に廊下に放り出された私は、起きあがると同時に、一散に出口に向かって走り出していたのです。各部屋では様子を窺っていたものと見え、廊下の窓から慌てて顔を引っ込めた者がいました。

後ろからは何か大声で喚きながら追ってくる様でした。余談かも知れませんが、私は学校時代から走るという事は大の苦手でしたので、運動会なども何かに託つけては出なかったものでした。それがその時には夢中だった為か、追ってくる彼等をグングンと離していったのです。こんなに早く走ったのは後にも先にもこれが始めてでした。恐らく今後もないでしょう。寮からとび出ると私は山道を選びました。休みの日に附近の農家へ柿を買いに行った時、Tと共に通った道でした。パンツ一枚で裸足の儘、ヒタヒタと音をたてながら、奥へ奥へとただ走り続けました。全身は火の様にあつく、撲ちのめされた野良犬の様に泣きながら、何所をどう通ったという何の感覚もなかったのです。嗚咽がひっきりなしに咽喉について咳あげて来ました。私は歎歎りな

が走り続けていたのです。曲りくねった細い山道は西に傾いた月の為に照らされたり弱ったりしながら果てもなく続いていました。両側に茂った木々の梢からはサラサラと葉擦れの音がして、見るからに淋しい感じの山道



でした。普段ならばきつと怖ろしくて通れない所でしょう。この儘道がなくなるか、倒れるかする迄、私は走り続け様と思いました。疲れて足が進まなくなると、大声で泣きながら踏張りました。大声で泣き叫ぶという事は

何故か気持の良いものでした。疲労した自体を隠す自虐の本能が、其の時の私を支配していたのかも知れません。泣き叫ぶ自からの声に私は昂奮していたのかも知れません。想像して下さい。恥も外聞もなく叫びながら走り続ける私の姿を。

全く正気の沙汰ではなかったのです。然しこの様な我無沙羅な行為が何時迄も続く訳がありません。両側に生い茂っていた木が絶えて一面の草原と変った所迄来た時、精根尽き私は草の上にどっかりと腰を落してしまいました。途端に何かに弾かれた様に転がりました。叩かれた所が火の様な激痛に襲われたからです。私は又しても大声を張りあげました。そうすると幾らかでも苦痛が薄らいでいく様な気がしたからです。両手を強く握り締め、草の上に顔を伏せて、次第に薄らいで行く苦痛を待ちました。夜露に濡れた草の感触は、苦痛に火照った身を気持良く冷して呉れ、匍匐して場所を変えては腹這うのでした。其の後、しばらくの間、私は何も考えては居なかったのです。

放心状態とでも言うのでしょうか、全身の力を抜いてグッタリと身を投げ出し、古木の

様に横たわっていました。逃げだしては来たものの、この先如何したら良いか、さしあたり困る裸の身の処置。纏て襲って来るであろう空腹への不安、そんな事を考える力さえ失っていたのです。近くで虫が鳴き出しました「轡虫だろうか」

最早、頭をあげるのは愚か、瞬きさえも億劫でした。前に責められた時、同室の者が、「年をとってから疾患が出て来るぞ」と、注意して呉れた事があり、その言葉が

私の頭に強く焼きついていました。「年をとってから出る。年をとってから出る」

仲ば夢遊病者の様にこんな事を繰り返しながら恍惚として息づいていました。その内、疲れていたものと見え、寝入ってしまったのです。気づいた時夜はとくに明けて、強い太陽の光りが、私の寝そべっている草原を照らし、泣き腫した目に痛く射しました。ドンヨリと濁った頭に、どうして自分が此所に居るのか解ると、昨夜からの記憶が次第に解けて来ました。痛む身を、息を詰めながら立ちあがり、今自分が居る所を見定め様としてあたりを見廻したのです。

私が寝ていた草原は小高い丘の頂を茫々と遠く迄続き、泣きながら走り登った山道が曲りくねって裾の方に続いています。遂昨夜迄寝起きた寮は目の下に棟を並べて点在し

ているのでした。相当遠く迄走ったと思った私は、寮の裏手にある丘の上に登っていただけだったのです。一面に生えた草原は所有者が有るとみえて所々刈った跡がありました。

私は寮の見える反対側の方へ歩いて見ました。下は一面に田畑が拓け農家があちこちにみられました。この山の所有者が通るものか反対側にも一本の道がついているのです、丘の端の方には、綺麗に手入れされた畑にタバコらしい植物が植えられていました。時を確かめ様として、私は太陽の位置を見定めました。登って間もないと見え、山からそう離れてはいなかったのです。私は不安になって来ました。其の内農夫でも登って来て姿でも見られるとそれこそ大変です。早く他の安全な場所へ。それも猿又一つでは如何にもなりません。私は又ヨロ／＼と寝ていた所へ戻って来ました。昨夜から裸足だった為、足の裏は歩く度に激しく痛み出しました。寝そべっていた草原は、体の形の儘に萎縮して、腹や胸には萎びた草の切れ端が所々へばりついていました。寝ている間に蠟蚊に襲われたのか、プクリ／＼と到る所が脹れあがり、激しい痒みが全身を責めたてたのです。私は手の届く限りボリ／＼と掻きました。掻けば掻く程、激しい痒痒感が刺す様に襲って来ます。私はもう無我夢中で肉が亀れる位両手で掻きました。

痒みはやがて苦痛に変わり、血さえ滲んで来て胸が悪くなる様な痛みが、全身に漲るのでした。

それでいて掻く手を休めれば、又強烈な痒さに苦しまなければならなかったのです。私は掻く手を止め、草の上に寝そべって身を冷しました。痒い所へ手をやり度くなると全身を硬く延して泳ぎました。掻く、耐える、交互に繰り返した為、手も体も血でヌラ／＼とべたつき、氣も狂うかと思われる程苦しいものでした。その苦しみが漸く薄らいだ頃、私は起きて再び寮の方を眺めました。Tは如何したろうか、未だやられてるだろうか、それ共もう隔離されたろうか。寮では朝の食事が始まる頃と見え、食堂へ向って人影が忙がしうに去来しているのが手に取る様に眺められるのです。その一角から群をなした一隊がゾロ／＼と此方へ進んで来るのが見えしました。私はそれ等の情景を只ぼんやりと眺めていました。激しい苦しみ後の放心だったかも知れませんが、沈沈の為の脳神経の麻痺だったかも知れません。それ程私の頭が散漫だったにも拘らず、その一隊が私を捕えに来たのだという事が解ったのは、其の中の一人が手に白い繃帯を巻いていたのと他の一人が犬を連れていたからでした。繃帯は私が咬みついた名残りなのでしょう。その一隊は寮生である事が遠目にも解りました。寮で逃亡などが

あると寮長の落度として左遷を命ぜられるので朝食前に寮生を動員して来たのでしよう。それにしてもどうして私のいる所が解ったのでしょうか。後で解った事ですが、附近の山々には空襲にそなえて監視所があり、望遠鏡に私の姿がキャッチされ、電話連絡に依って解ったのだそうです。その一隊が丘の麓迄近づいて来た時、私は急に慌て出しました。こうしてはいられない。早くどこか安全な所へ身を隠さなければ。奥へ／＼と走りながら、身を隠すに適當な場所を目を皿の様に求めていました。やす／＼と捕ってたまるか。後を振り向き／＼、息を切らして私は奥へ／＼と走りました。草原の切れる所迄来た時前方に人影らしいのが見えた為、慌てて草の中に身を伏せました。幸い其の人は私に気づかないとみえ素知らぬ顔で通り抜けました。百姓女らしく背中にシヨイコを背負い鎌を持っていたが間もなくそれを背中から下ろすと、サク／＼と草を刈り始めたのです。それも私の隠れている目と鼻の先で始めたのですから、私は逃げ出す事も出来ずに其の場に釘づけに成ってしまいました。私は早く行って呉れれば好いと、気ばかり焦るのです。こんな所に何時迄もいれば、捕まるのは解り切った事でした。早く行って呉れ、早く何処かへ隠れなければ。然しパンツ一つでとび出して行く等という事は勿論出来ません。草原

とはいっても、オーチャードらしいのが二尺位生えているだけで、身を隠しているのが精一杯だったのです。私は此の時程焦慮した事はありません。見つけられまいとする緊張と早く行って呉れれば好いという、やきもきした気持とで、ぼた／＼と脂汗が流れました。何度走り出そうと思ったか知れません。然し羞恥心が私を其の場に釘づけにしてしまうのです。サク／＼という草刈りの音が、恨めしい音となって私の身を刺すのでした。

未だだろうか、まだか、今はもう、早く行って呉れれば好い、とそればかりを半泣きになって願うのでした。鎌の音がピタと止まりました。ああ終りだ、帰るんだ、私はホッとして顔をあげて恐る／＼草の間から様子を窺いました。百姓女は刈り終えたのではなくて、昨夜私が逃げ登って来た方を、体を伸ばして凝と見ていたのです。私はハッとしました。追手がもうそこ迄来たのかも知れない。屹度それを見ているのだ。そう思うともう我慢がなりません。見つからぬ様に注意深く後ろ態に移動を始めました。オーチャードの穂は動く度に大きく揺れ、それが又私の行動を挫くのです。間もなく、ガヤガヤという人声が聞えて来ました。猛るのを制御しながら引いて来るらしい、ハア／＼という犬の苦しそうな呼吸さえ聞えて来ました。ワイ／＼と騒ぐ大勢の聞きとれぬ声に交って、犬を離せ、と叫

ぶ聞きなれた寮長の声が聞えた時、私の咽喉からは、無意識の内に泣き声が迸り出ていました。

呻く様な泣き声と共に、私は走り出していました。私は夢中でした。農家の方へ向ってついている山路を、一目散に駆け降りたのです。蹠に喰入る石コロの痛さも感じませんでした。誰かが後で怒鳴っても振り返りもしませんでした。鎌を肩にした男に出会いました。鋤を持った女と擦れ違いました。共に驚きの目を睜りながら脇に除けました。ほえたてる犬の喧しい声が足元に迫って来た時、私は始めて立ち止って振り向きしました。後ろから足でも齧られては大変だと思ったからです。私は泣きながら其処いらにある石を手あたり次第に投げつけました。然し、其の犬は余程獾猛とみえ、齒を剥き出して猛然と襲いかかって来たのです。犬は石を持った私の手にも咬みつこうとしたのでしよう、前足をあげ、唇を捲くって跳ついて来ました。怖ろしさで一杯の私は半ば夢中で蹴とばしました。犬に勝るとも劣らぬ程の泣き声をあげながら、夢中で蹴りあげた私の足先は、うまい具合に犬の腹の中程へ入っていたのです。犬は傍の小川に声も出さずに転がり込みました。余程力を入れたものとみえ、足先は激しい痛みを憶えました。追手の一隊はグン／＼迫って来ます。私は跛を引き／＼、又走り出した



のです。走りながら痛む足を見ると親指の生爪が浮いて血が滲んでいました。道が二又になった所迄来た時は、どっちへ行こうかと迷いましたがゆっくり思案している余裕などとは勿論ありません。私は咄嗟に細い道を選びました。見通しが効く広い方は危険だと思ったからです。然しものの二十歩も走らぬ内に栃藪棒にも等しい自分の行為を後悔しなければなりませんでした。その道は一軒の農家へ続いていて、そこで行き止まりになっていたのです。そして、間の悪い事には其処にも犬が飼ってあった事でした。追手が連れてくる犬と異り小柄な方でしたが、喧しく吠え立てる為に、其の家の小供達がバラ／＼と飛び出して来ました。パンツ一つで血と泥に汚れた私の異様な風体を見ると、慌てて又家の中へとびこんで行きました。犬は益々激しく吠え立てます。私は進退に窮しました。今から引き返す事な

ど勿論出来ません。かまうものか。何所でも好いから走り抜けてやれ。走り出そうとする。と犬は左右を飛び廻り、進んでは吠え、飛び退いては吠えして益々激しく吠え立てます。走り出せば、足元に追いつく様に襲いかかって来るのです。大人を交えた四、五人が、家の中から出て来ました。早く逃げなければ、私は焦りました。小石を拾っては犬に投げつけながら、追手の方を振り向いて見ました。追手は目の先に迫っていました。それよりも先に、私の蹴とばした追手の犬が、牙を剥いて足元に迫っていたのです。私が振り向いた為に気がたったとみえ、獐猛な唸り声と共に猛然と飛びかかって来ました。私は夢中で犬の首っ玉を掴んだのですが、其の時左の腕に激痛を感じました。既にその時は、体当りの様に襲って来た犬の体重に煽られて、叩きつけられる様に地に転がっていたのです。どうなっていたのか分りません。腕の痛烈な痛みと、口の中に入ってくる異様な味の粘液とを味わいながら、私と犬とはゴロゴロと転がっていました。私はいつか夢中で犬の鼻先に齧りついていたので。鼻を齧られると、犬は私の腕を離して悲鳴をあげ始め、前足で私の顔を引掻き廻して足掻きました。死んでも離すものか。私は益々齒に力を入れました。此の犬が憎々しかったのです。

説明が前後するかも知れませんが、此の犬

は寮の炊事場の裏に繋がれていたのです。桶に捨てた残飯が頻々として盗難にあう為、業をやした炊事部では遂に此の犬を飼う様になったものでした。残飯といっても附近の農家が、桶を持って貰って行く程で、決して穢なものではありません。私も以前に同室の者と此の残飯を盗みに行つて、犬に吠えられた為に見つかり酷い罰を受けた事があり、皆から不倶戴天の仇の様に思われていた犬です。夢中で鼻に噛みついていて私は追手の為に周囲をグルリと包囲されていたのです。頭上で誰かが怒鳴ったと思う間もなく、尻や脇腹を強く殴打されました。私は激痛に全身を捻つて足掻きました。その瞬間私は犬の鼻先を噛み切っていたのです。その時折れた二本の前歯と、犬の前足でひっ搔かれた脇の上の爪跡とは、永久に消えぬ記念となって残ったのでした。再び、尻のあたりに棒を見舞われた時私は猛然と立ちあがっていました。大勢の寮生と二匹の猛犬を向うにまわして、私は阿修羅の如く奮戦したのです。誰も掛かって来ようとはせず、遠巻に取り巻いてただワイ／＼と騒いでいるばかりでした。無理もありません。犬の鼻を噛み切った血と、脇の爪跡から流れ出る血潮が顔全体を真赤に彩り、更に大声で泣き叫びながら暴れ廻ったのですから。……恐らく見られたものではなかったと思います。其の時の光景を想像して見て下さ

い。何とかして囲みを破つて逃げ出そうとした私は、弱そうな一角に向つて猛然と突進して行きました。皆は慌てて道を開きました。夢中で走り出そうと五、六進んだ時、

「逃がすな／＼」

と叫びながら、追い迫つて来た寮長に足を攫れて、叩きつけられる様に倒され、押えつけられ、あらかじめ用意して来たらしい細引で後手に縛られてしまったのです。それでも私は必死で暴れました。蹴りました。噛みつきました。唾を吐きつけました。畜生、畜生と絶叫しながら。縄尻を引かれズル／＼と曳き摺られても、立とうとはしませんでした。撲つたり蹴飛ばしたり、私を連れて行こうと懸命になって、二人は種々手段を施していましたが……私は、その度毎に大声で泣き叫びながら反抗していました。決して不貞腐れていたのでありません。何故か無性に腹立たしかったのです。私の此の無茶苦茶な抵抗が、より以上、悪い結果を招いた事はいくらもありません。唾を吐いたり叫んだりした口には荒縄が二重に巻かれました。足首はより以上開かぬ様に結び合わされ、後手と背中の間には長い棒が通されました。後手の細引以外は、皆農家からでも貰ったのでしよう。幾重にも私を取り巻いている寮生の後には農家の家族達が物珍らしそうに眺めていました。

「世話をやかせる奴だ。全く我無沙羅な野郎だ」

寮長は憎々しげに呟くと、全員に引きあげる様に命令しました。背中に通された棒を、左右から寮生が担ぎ腰にも荒縄を縛ると、長く伸ばして四、五人が前で引っぱるのです。私は嫌でも歩くより外に方法がありません。片方の目は血の為見えませんでした。折れた二本の前歯はズキ／＼と痛んで来ましたが、巻きついた縄の為、流れるよだれを拭く事さえ出来ません。縄を引きながら前を行く者が私の顔を見て騒ぎ出しました。寮長も不安そうに覗きこみましたが、

「何ともない」

と吐鳴ると、早く歩けといわんばかりに背中や尻を時々突つつかうのでした。かくして逃走後七時間足らずで、私はあさましい姿となつて亦寮へ連れ戻されたのです。彼等のいう様に、私は国賊だったのでしょうか。いいえ、私は只一生懸命だったのです。彼等のいう様に、私は我無沙羅だったのでしょうか。いいえ私は怖かったのです。横須賀に於ける私の成長の歴史は、私の迫害の歴史でした。周囲の者が寄つてたかつて私を迫害し、知らぬ間に私は逃亡者という怖ろしい罪名さえ背負わせられていました。と同時に一生抜ける事の出来ないマゾの世界に次第／＼に追いやられて行つたのでした。

(この項終り)

旅

情

藤 川 力 行

情 旅

グーと一息に咽を通る湯上りのビールの味は、旅の疲れを一時に五体から押し出してくれる程、心地良く思われた。

ホッと息を吐き出す私を見て、傍にチヨコナンと坐っている宿の女中がニッと笑って、「おいしそうに上りはりますナア」

と空いたグラスにビール瓶を傾けた。

窓ガラスの外には初秋の夕暮が爽かな気配を感じさせて、余り立派でない、この旅館をも、しっとりと落着かせる役を果していた。

私が出張を命ぜられて東京を発ってから、

もう今夜で三晩の旅の仮寝を結ぶことになる。昨夜は京都で関係先の人に遅く迄付き合わされた上、今朝早く、この神戸の都心から相当離れた土地へやって来て、どうやら社命だけは果したが、今日の要談は意外に手間取り、こみ入って私を必要以上に疲れさせたのだった。

それでも辛じてではあったが、マアマア程度の報告を社に持って帰れる、と思うと気が軽かった。ヤレヤレという安らぎが、お世辞にも美人とはいえない顔立ちのこの女中に対して、取り止めのない冗談口を叩かせ、余り御馳走でない月並みの膳も案外うまく感じさ

せた。

私の冗談口に笑いこけた女中が膳を下げて出て行った後、私は寝転んで天井目掛けて煙草の煙を吹きつけていたが、昨夜の寝不足と軽い酔いについとうとと、まどろんでいた。と、

「ご免やす」

襖の外で男の声が私を呼び起した。私は寝転んだまま返辞した。這入って来た四十がらみのジャンパー姿、どことなく品のない男が窮屈そうに正座して、せわしく揉手しながらペコペコ頭を下げる。安っポイ頭である。

「何ですか？」

私は起き上って、訊いた。

「ヘイ、どうもお邪魔致します。ヘッヘ……」

又ペコリとおじぎする。

「その……何でございます、……ヘイ……そのう……ネ」

妙なオヤジである。何をいつているか、いおうとしているのか、サッパリ判らない。私は困った。

「何ですか？ はっきりいって貰わないと僕には訳が判らんのですがネ」

「ヘイ、イヤこれはどうも……わたしやあ、この宿の者ではおまへのやけど、まあ宿の者同様みたいなものでおまして……ヘイ」

又ペコリである。ゴマ塩になった頭髪も値打のないこと夥しい。

「それで？」

「ヘイ、その……ナンでございます、もしおよろしかったら……今夜のところをお世話させてもらえまへんやろかと思うてさんじましたんでヤス、ヘエ」

男は揉手をしたり、首筋を叩いたり、膝をこすったり落着かない様子でそういうと、

「ヘッヘ……」

と意味あり気な追従笑いをつけ足した。

「ナンダ」一人旅の経験の余りない私にもやっとこの男の来意が判って苦笑した。

「これやあえらい宿をとっちゃったもんだ、甘く見られちゃった。さっき調子に乗って女

中に冗談話が過ぎたかな」

私はいささかウンザリして、首筋の後に両手掌を組合わして、後へゴロリと寝そべった。

「如何なもんだっしやろ、エエのが居りまっせ、一つ呼んだっとくはなはれナ」

男は私が意味を悟ったのを察してか、急にモゾモゾ型から脱け出して、ハッキリとものをいい出した。

「よりどりみどり、どんなんでも揃てマ、ナをやったら一遍下見しとくナアレ」

「何いってやがる、俺には可愛いヤツが居るんだぞ、結婚以来まだ一年経ってねえんだ、」

私は胸の内で呟く。男は私の無言を思索しているとお観たらしく

「ネエ、お客ハン、安うしときマ、そこらの辻に立ってると違いまっさかい安心しとくなあれ、旅の恥はかきずてだんがナ、お客ハンのお好みはどんなんだす？」

と盛んに気を引こうと努力している。私は身を起した。

「君イ、」

「ヘエ……」

男は膝を乗り出して来た。

「売春禁止法は日本の国の法律だぜ、日本に住む以上、日本の法律に従おうじやないか」私は自分の口から飛び出した言葉に我乍ら

驚いた。照れかくしにニヤリと笑ってやった。

男は私の高飛車な調子に一寸タジロイタ様だった、このニヤリで気を取り直したらしく、

「ヘッヘ、イヤお固いことで……けどねえお客ハン、そら法律は守らなアキマヘン、そらよう判ってマ、けどナンデッセ、その売春禁止何タラいう法律も、女と男が友達になつたらアカンいうのんと違いまっしやろ？」

男は又一膝乗り出して来た。

「あれは金で女の身体を売ったり買ったりしたらアカンいうだけで、友達になつたらアカン、恋人を持ったらアカンいうてンのと違いまっしやろがナ」

私は、男の黄色い乱喰歯が見え隠れする分厚い唇が、必要以上に大きく動くのを、面白くと思いつら眺めていた。

「そやからナお客ハン、あたしや何も女を買ってくれいうてんのとチガイマ、お話相手を御引合せしよういうてマンネ、ナ、そやから、友達としての話し合いやったら、アンタ法律の何の気にすることオマエンガナ、世の中には一目で好きになり、意気投合してメヨウトになりはる人もヨウケ居はりまんガナ、ネ、そうだっしやろガナ、ネ、お客ハンそうだっしやろガナ」

男は、だんだん調子に乗って説得調になつて、奇妙な口振りで、極めて幼稚な法の脱け

道を教えてくれた。私は吹き出しそうになり乍らこの愛すべき脱法者に少し理屈拔きの好意を感じ出すの覚えた。

そこで、私はこの親爺の努力に対して多少の色をつけてやらすはなるまいと覚悟？した。勿論このオヤジのいう、一目で、意気投合をする積りは毛頭ない、法の尊重はいう迄もないが、それよりも尚、何者にも優るブレ―キは、幾百キロ離れて居ても聊かもおとろ

えをみせぬ、驚くべき強力さを持つて、東京の自宅から目に見えぬ拘束を感じる故である。私は決して恐妻族ではない。恐妻どころか暴君を以て任じている。まだ結婚後一年足らずだから、多少自重はしているがボチボチ我が本領を発揮しようと、機を狙っては極めて自然的に教導に取掛っているとこゝろである。可愛い我妻は、必ず私を満足させてくれるだろう、多少の苦痛は撥ね返して……。

何故なら、彼女は私を愛している。そして私も又、何者にも替え難い愛情を注いでいるからだ。故に、身は遠く離れていながらも、尚拘束に似たものを感じるのも当然のことだろう。

「ネエ、お客ハン、お一人旅の物足りなさチユウもんは、アンタあんまりええもんやおまえんやろ？ あんさんみたいにお若いお方のしはるこっちゃやおまへんデ」
オヤジは愈々熱を入れてくる。

「退屈しのぎの友達だんがな、友達、おともだち、ネ、何でもよういうことをきく友達をご紹介さして貰いたいっていうだけだんがナ。」

私は思わず吹き出した。オヤジはキョトンとした顔付で私の顔を覗めていた。

二

先刻あれ程笑いこけた女中が、今度は極めて事ム的に酒肴を運んで来て、事ム的に一礼して出て行った。

私は盃を手にとった。友達が寄って来て銚子を取り上げた。瞳が合って友達がニコツと笑った。留守宅の妻とは較ぶべきもないが、思ったより清潔な感じである。マズマズ美人の部類に入る顔立ちで、色気だけは確かに妻よりは濃い。

私は盃を干したが、少しもうまくなかつ



た。先程のビールの酔が醒めた直後だからであらう。

「君、何というの？」

私は、友達に注いでやりながら訊ねた。

「キミ子」

「いくつ？」

「二十五、六」だろうと思ひながらの間には微笑みだけで答えなかった。

私は、必要でも、知りたいとも思わない月並なことを次々と質問したが、このキミ子なる友達には、オヤジの売込みとは大分趣を異にして、唯、エエとか、ウンとか、簡単な単語を散発するのみで、一向にオヤジの話相手にはならなかった。

然し自己の職分は忠実に遂行せん、の気配を見せて私にしだけ掛り、フックラとした手を私の手に絡ませたり、その柔軟さを誇示するが如く、軀をクネクネとくねらせた。キミ子女史にしてみれば、問答無用、不言実行を旨としているのかも知れない。

私は聊か弱った。世の如何なるものに優る愛情を妻に対して持つとはいひ乍ら、やはりそこは人の子、木でも石でもあるまいものがか様に直接行動に出られては、凡愚の浅しさから女史の軍門に降って、謂ゆる意気投合せざる得ない羽目に陥りそうな予感がしきりにしたからである。

私は今更の如く、物好きにもあのオヤジに

妙な好感を持って、好奇心を動かしたことを後悔した。然し時既に遅しである。如何にしてこの吾が心の危機を脱出するか、私は自分の心の中の今一人の私と苦闘を続けた。

「チョット……」

私は首玉にまつわりつく女の腕を解き外すと、向き合って坐り直した。そしてわざと難しい顔をしてみせた。キミ子女史の円らかな眸が、「どうしたの？」といったげにまばたいて、顔を心持ち右へかしげ、問いかける様に私を睨める。残念乍ら可愛いと思った。

「……………」

咄嗟に声を出しそびれて喉の奥でモタツイていた私に

「なんですのう？」

と焦れた様な声で訊いて来た。

「ウン？ イヤ、その何だ、ボ、僕はそんな

積りで君に来てもらったんじゃないんだ」

「えっ！」

「イヤ、積りが違うといってるんだ」

私は漸くにして調子を取戻した。

「あのオヤジに妙な好奇心を持っただけで、他意はないんだ。君ももう引取って貰おう」

「マァー」

キミ子女史はさも心外だという顔付で一膝乗り出して来た。

「ワタシの様なモン、お嫌い？」

「ウン？ イヤ好きとか嫌いとかは問題じゃ

あないさ、」

「でも……あのオジサン、何にもいいまへんでした？」

「いったよ、なんでもいうことを聞く友達を紹介するってね」

「ホンデ、ワタシを呼んでくれはったんでっしやる？」

「そうだよ」

「ホナラ、何でなんにもいいつけんといて、帰れやなんていいはりマンノ？」

「いや、それは……」

「そら、ワタシ、事情があつて今はこんなにおちぶれていますけど、ワタシもやっぱり女です。嫌われたらしようおまへんけど、呼んでもらうて、唯、帰れだけでは、帰る訳にいきまへん。オジさんにも顔合わされしまへんやないノ」

キミ子女史は膝を突き合さんばかりに身を乗り出して、私の気紛ぐれを難じ出した。

「客に振られた」ということより、「自分の女としての魅力」に対するプライドを傷つけられた口惜しさ、という様なものが言外に感じられるいい方だった。

「ナンでも、お客さんのいいはること諾きます。ソヤから帰れやなんていわんと、こないにせえ、あないにせえいうて頂戴……ネ……ネ」

彼女の瞳は意外な程直剣である。私はこの

成行きに途迷戸った。そのいじらしい態度に行きづりの女とは思えぬ程の何ものかを感じたのである。無意識に煙草を抜き出した。彼女がマツチを擦った。一息、二息、大きく吐き出す煙と共に、モヤモヤしたものが心の中で渦巻いている。チャンスだぞ！と胸の隅からけしかけるものがある。私はその是非に迷った。

「嫌といって帰ればよし、承知すれば日頃の夢が何のさわりもなしに実現出来る訳」

そう決心すると、勢い良く煙草を灰皿に揉み消して座り直した。

不安と期待の入り交った様な彼女の視線が真直ぐ私の眼を捉える。

「君、本当に何でも僕のいう事を諾くかい？どんな事でも……」

「アンタもえろう、くどおますナ」

「嫌ならいいから帰り給えよ」

「はよいうて頂戴」

キミ子女史は意地になった様に詰め寄って来た。

「縛る！」

「エッ？」

「縛るっていうんだ、映画なんかによく出てくる様に後手にして縛るっていつてんだ」

「……………」

彼女の瞳がマジマジと私を瞷める。

「帰るかいい？」

「……………」

彼女の瞳が下って、膝元の畳の一点に移された。俯向いた袴足が美しく露呈された。

「僕はもう一風呂浴びて来る。その間に帰って置いてくれ給え」

私はスッと座を立った。彼女の顔がサッと上った気配がしたが、私はわざと無視して部屋を出た。

三

「帰らなかったの？」

私は何か心の高鳴りを感じながら、わざと意外だという様な顔付を装って、彼女を見降した。見上げた彼女は黙って微笑んで、クリクリと眼の玉を動かした。

私が元の座へ坐ると、彼女は首を一寸かしげて問いかけた。

「すぐになさる？」

「え？」

「紐はこれで宜しい？」

私は少々面喰らった。彼女の差出した手には白い荷造り用の細手のロープが一束乗っていた。

「……ホントにいいのかい？」

「フッフフ」

彼女は可愛いく含み笑いして静かに立ち上った。気が付かなかったが、さっき迄、胸高に締めていた帯はもう無かった。私の留守の

間に準備をしていたらしいのだ。『本当にこの女は縛らせる気だ』私はカッと血の騒ぐのを覚えた。

彼女はスルリと着物をさらせて脱いだ。真紅の長襦袢が艶かしい雰囲気を一気にかもし出して立っていた。

「この着物だけは私の一張羅やさかい堪忍してね」

艶然と笑って、彼女は脱いだ着物を衣紋に掛けた。そして長襦袢の儘、私の前に正坐して両手を畳について首をかしげた。

「どうぞ御自由……」

私はゴクリと喉を鳴らして唾を飲み下した。臍中の血が、豪雨の直後の十根川にも似て、激しく音を立てて狂奔するのを覚えた。

いきなり左手で彼女の肩を掴んだ、驚く程に柔らかな感じだった。乱暴に捻って向きを変えさすと、彼女は不自由に臍を捻じられ乍らも、両手を自ら後へ廻して手首を重ねた。

私は夢中でその手首にロープを巻きつけてぐいと引上げ、グルグル胸へ廻したロープの端を手首の近くで固定した。彼女は身を屈してこの動作の終るのを待っている。動作は余り手際よく運ばなかった。それでもどうにか捕われの美女の図がそこに出現した。肩が大きくはだけて、白い滑らかな肌がホンノリとした桜色を見せて息づいていた。私は彼女の顎に手をかけて顔を仰向かせてみた。閉じら

れた眼の捷毛が美しく、可愛い唇が半ば開いて微かに喘いでいる。

私は彼女の両肩を掴んで、坐らせたまま曳ずって床柱に寄り掛らせ、胸の縄の一卷きを外して縛り直し、その柱に繋いだ。元の座へ帰り煙草を片手にしげしげと、被縛姿態の美女を眺めた。薄目を開けてこちらを伺い乍ら

うなだれている彼女の姿は、哀れにも美しく私の眼と心を楽しませてくれた。

「痛いかい？」

私の間に、彼女は黙って首を左右に振った。私の気持はずっと落付きを取戻していた。大抵の者なら、きつとさげすんで拒否するであろうこの異常な要求に、行き掛り上の



意地も多分に手伝だっているものであろうが、素直に応じてくれたこの女に、妙ないじらしさを覚えた。

指の間の煙草が灰になっていた。

「可哀相だ、もう許してやろう」

私はサド漢にあるまじき気になった。ゆっくりと立ち上って傍へ寄った。黙ってロープを解いた。彼女が、身をよじって私を見上げニツと笑っていた。

「今度はどんな縛り方？」

私はこの言葉に挑発された。もう許して帰そうと思っていた事がどこかにスツとんでしまった。長襦袢の衿に手をかけて、急に後ろに引いた。はだけていた肩がスッポリ抜けて肌襦袢と共に、伊達締め処迄、その白い肉付きが露わになってしまった。さすがに彼女も胸を抱いて本能的に身をすくませる様にした。私の心に、一瞬狂暴な嵐が吹いた。彼女のふくよかな上体にギリギリとロープが喰い込んで行った。深い溝をつくって、柔肌が妖しい被縛美を現出すると、私は日本手拭を採った。形だけのものではあったが、その手拭が猿轡として彼女の顔半分を覆った。完全に自由を失った姿の彼女は、観念したものの如くうなだれている。私は痴呆の如くその姿を見降して突立っていた。

時刻が流れた。……石化した様に、二人の姿勢は動かないまま……

達 優 男 の

菅 良 太

スッと彼女の顔が上った。私を見上げたその眼が笑っていた。私は突然、激しい自己嫌悪に襲われた。美女の被縛体に憧れる自分の性向に対して、無生に腹立たしいものを覚え、無情を感じた。寂寥たる日暮れの曠野にたった一人で放り出された様な、淋しいやりきれない気持であった。

私は、ムツツリとして荒々しく彼女のロープを解いた。

「もういい、帰ってくれ」

まだ顔の手拭はそのまま、彼女の驚いた様な眼差しを無視して、私はプイッと部屋を出た。夜はすっかり更けていた。

四

ゆるやかに絶え間なく移動する遠景を、見るともなく瞞める視界を線路脇の鉄柱が、リズムに乗る様に一定の間隔を置いて、よぎり流れる。

私は車窓に身を倚せて、昨夜の事を想い浮べていた。縛られた彼女の哀れな美しさがマザマザと浮かんでくる。一旦部屋を出て、気を落つけてから帰った時、彼女は縛めを解かれていたにもかかわらず、猿轡の手拭を外しもせず、半裸のまま壁に片手を支えて佇んでいた。這入っていった私を肩越しにじっと瞞

少年時代からソドミア傾向のあった私は、非常に内気な性質から、好きな同性がいても話しかける事も出来得なかったので、自然と空想の世界に身を浸らせる事が多かった。映画や小説が、そんな場合の私を慰めてくれたのは云う迄もなかった。

当時、松竹の映画は蒲田で製作されていて栗島すみ子と岩田裕吉、川田芳子と諸口十九のコンビが人気を集めていた。中学初級頃の私はこの諸口十九が大好きであった。彼の演ずる役柄は、メロドラマ的悲恋の恋人役で、女性からは圧倒的人気を拍していたが、男性からは、キザだとか、色男振っているとか、余り良い評判ではなかったらしいが、私は、あれほどの風貌と体格の整った俳優は、現在でも少ないと思っている。色は浅黒く、太く上

めていた姿が、妙に強烈な印象となって眼前に映じ出されていた。

ゴウツと音を立てて列車がすれ違った。

それが機会の様に、またも昨夜のあの自己嫌悪が頭をもたげて来た。自分自身を叩きつけ、踏み潰し、唾を吐きかけたくなった。やりきれない程の情けなさだった。

「女を縛るなんてつまらぬ事さ、もうそんなことは考えない様にしよう」

昨夜と同じ様な決心を、改めてしてみるのだった。——続いてくれたらいいが——という懸念を胸の一隅に感じながら……。

(終)

り目の眉と、下り気味の眼尻とが、実にいい角度を保っていた。殊に深い二重瞼が一層、彫りの深さを増し、体格も優れていた。

彼の演じた、菊地幽芳の悲劇「月魄」の軍人の役など末だに忘れられない。和製ブアレオンチノと呼ばれ、欧米まで巡った全盛期があったが、トーカーになってから、声の加減が人氣が下降し、遂に廃業して易者になったそうである。私は彼の風貌が忘れ得ず、集めたプロマイドの顔だけを切り抜き、自由に描いたポーズの上に貼りつけては妄想に耽ったりした。それが半裸の縛られた姿であったり、油槽に浸された責絵だったりした。

彼が演じた、近松の「女殺し油地獄」の中で河内屋与兵衛に扮して、白衣のまま地獄に堕ちて、獄鬼に責められる場面には熱中して

追 想 告 白

想 出



二度も三度も観たものだった。

後年、上野図書館で偶然彼の姿をみかけたことがあった。鼻下に短い髭を蓄えて、落着いたその姿は、往年の優男然とした面影はなく、たくましい魅力に満ちた中年男で、私の胸をときめかせたものであった。

大船映画と呼ばれる様になってから、私の心のアイドルになった俳優は高田稔である。高田は、体格は諸口には劣るが、あの独特な彫りの深い目元が好きであった。当時、大船にはスポーツ俳優の鈴木伝明がいたが、彼と共演した「大進軍」という航空映画の将校姿

は忘れられない。

鈴木伝明の対抗馬だった、日活の広瀬恒美（水泳のチャンピオン）も、私の血をうづかせた一人で、彼の出演した幾つかの水泳映画での、水に濡れた逞しい姿態には若い心をときめかせた。際物映画の「日本人ここにあり」で、大都のハヤブサ・ヒデトと競演したが、広瀬の方が遙かに魅力を感じた。

この頃、日活に、井染四郎という若いスポーツマン風の俳優がいた。私は諸口以来の憧憬を、この俳優に持っていた。彼はデビュー以来監督に恵まれて、田阪具隆の「心の日月」で入江たか子の相手役を、内田吐夢の「噫、無情」ではマリユラスを演じて、純情な青年役ばかりを演じていたが、やや小柄乍ら、浅黒い引締ったマスクが、若々しく誠実な感じに実に素晴しかった。

彼の傑作は、何と言っても田阪の「五人の斥候兵」の兵隊と「真実一路」の小学校教師で、内田吐夢の「路傍の石」でも本屋の康吉に扮して好演した。然し一方くだらない映画にも随分出演したが、当時の軍国調映画で、もう題名も忘れたが、彼が斥候兵となり、匪賊に捕えられ拷問を受けるシーンなどは、生唾を飲みこんで見詰めたもので、以後私が責場面を空想する時には必ず彼が想い浮んでくるのである。其後五所平之助の新興映画作品、藤沢桓夫作「新雪」で、水島、月丘のコ

ンビと共演したのを最後に、ロケ中に急死したそうである。それ以来、私は久しく映画を観ない程、失望落胆した。

この「新雪」に出演した水島道太郎が私の心を惹いたのは、これも、軍国ものの「父子桜」という映画であった。中学校配属将校の生活を描いたもので、水島は短い口髭を蓄えて出たが、その軍服姿といい、きびきびした態度といい、私は一度に水島のファンになってしまった。然し好調だった月丘とのコンビも破れ、その後の作品に恵まれず残念であるが、中年に入った現今の彼の容貌は、ますます冴えて魅力に満ちている。私は彼を使って素晴らしいスリラーを作る監督は居ないものかと思っている。勿論、凄い責シーンをふんだんに挿入して……。

少し話は遡るが、今、大映で監督になっている島耕二の俳優時代の容貌も一寸した渋さを持っていた。当時は逞しい型の俳優として小杉勇の株が高く、共演の島は損な役廻りであったが、私は彼のインテリ風の風貌が好きだった。彼の好演の数々は題名すら忘れた今でさえ、シーンだけはハッキリと想起されるのである。

岡田茉莉子の父で「英パン」と謂われた岡田時彦は、松竹で芸域の広い俳優として種々の佳作を残したが、私の忘れられない映画の一つだけある。小津作品で「淑女と髭」とい

う喜劇で、岡田の扮した髭を生やした大学の応援団長の下宿へ美人の訪問客がある。下宿は勿論乱雑を極め万年床の一隅に綱を張り洗った越中禪が干してある。美人はその下をくぐって這入ってくるので、彼が慌ててそれを外そうとするが仲々機会がない。という場面

は時彦の絶妙な演技で腹を抱えさせたが、私は、英パンの持つ「色気」(?)を考えて撮った小津の演出に感心した。尚、彼はある富豪令嬢の邸宅のお茶の会に招かれ、余興を強いられた、剣舞を舞う場面があるが、熱演の余り締めていた禪(この場合は六尺禪)が解け

スクラップ・レポ

真木不二夫

山田五十鈴のゲロ

主婦の友(昭和三十三年十二月号)の記事のなかに、おもしろいものがあった。

映画評論家の津村秀夫氏と、映画女優、清川虹子女史の対談のなかに、コプロ・マニヤの心を、ちよっと惹く言葉が、でてきたのである。文中、ベルちゃんというのは、山田五十鈴のこと。

○
津村 あなたと山田五十鈴さんは、たいへんな御親友だそうですが、お酒は山田さんのほうが強いんでしょう。

清川 そりやベルちゃんの方が、ずっと強いですよ。私はもっぱら介抱役で……

津村 あなたは陽気に発散する方だが、山田さんは、飲むほどに酔うほどにしずかになっていく人ですね。陰にこもるんですよ。あんなのは底が知れない。

清川 今は、そんなに飲まなくなりましたが、むかしはウイスキーをストレートで、キューツ、キューツとやりましたものね。一番びっくりしたのは、京都で二人で飲んだときですが、あのころは、ある恋人と熱烈だった最中でしたが、祇園の柳小路ね、あの通りで酔っぱらったベルちゃんが、柳

て袴の裾から垂れるのを本人は気づかず、令嬢達が騒ぎ始めてやっと気付き、澄して舞い乍ら袴に手を入れて引上げる軽妙な所作は傑作であった。今でこそ格調の高さを誇る小津の作品に、こんな喜劇のあるのを知っている人は、もう中年以上の者だけかも知れない。

黒沢作品の「姿三四郎」に出演した藤田進も、当時実に颯爽として好きであった。藤田の男らしい風貌は、戦記物などには打ってつけて「加藤隼隊長」はじめ、実に多くの戦争映画に活躍した。黒沢の佳作「わが青春に悔なし」の主演など、彼の最も傑出した役柄であろう。

現在、名傍役として活躍中の菅井一郎も、忘れられない数々の魅力ある好演を残している人である。「縮図」の芸者屋の主人や、新藤兼人の「女の一生」の親父など今でも心に残る。彼は妙にサド的演技がうまく、「滝の白糸」で、入江を捻じ伏せて部屋中引摺り廻すシーン、「縮図」で乙羽を蒲団巻きにして縛り上げる役「女の一生」で日高を折檻する役等々、サド役では無類である。「女の一生」で彼はうす汚い越中禪一つの姿を見せたが、その軀軀は、ミケランジェロの彫刻でも見せられた様な美しさを感じて思わず溜息が出た。

禪といえば、あの勤厳な紳士を主に演ずる笠智衆も、佐分利信演出の「人生劇場・続篇」

の木にもたれて、ちよっとシナを作り、新派のセリフみたいなことを言ったときは、凄艶そのものでしたわ。(笑)それから宿につれて行ったら、苦しがつて、ちよっと吐いたんですが、それがきれいなウイスキーなんですよ。あれだけの美人になると、ゲロを吐くにも風情がありますわ。

○
感じをだすために、前のほうを少し長く引用したが、清川虹子の話術がうまいので、山田五十鈴の、凄艶な酔いっぷりが、眼にうかぶようである。ことに、吐いたウイスキーが、きれいだったとか、ゲロを吐くにも美人は風情があるとか、虹子女史の言葉の表現にも、なかなかの味がある。

“千羽鶴”のモデル自殺

映画“千羽鶴”のモデルとなった一高が生が自殺した。十三日午前三時ごろ、広島市下柳町文具商池後寿彦さん(五〇)方階下の六畳間で三男の尚彦君(一六)基町高一年生Ⅱが首つり自殺しているのを家人が発見、東署へ届けた。尚彦君は幟町中学時代「こけしの会」のメンバーとして「原爆の子の像」の建設運動に活躍、映画“千羽鶴”に登場する彦一のモデルといわれている。部屋には「すべては運命だった。神がすべて知っている」と書かれた紙片が残されているだけで、家族も原因がわからない

と云っている。

なお、尚彦君は三日前学校で柔道をしたとき相手にしめつけられて気絶、帰宅後家人に「いい気持だった」ともらしており、最近やや神経衰弱気持だったという。

○
岩竹担任教諭の話 明るい子で学校の成績もよく、友人からも好かれていた。毎日元気で学校に来ており、自殺の原因に思い当るものはない。(昭和33年9月14日附東京新聞)

この記事で注目されるのは「学校で柔道をしたとき相手にしめつけられて気絶、帰宅後家人に「いい気持だった」ともらした」という点である。

“柔道でしめられたときの快感”が、最近の“神経衰弱気味”と結びついて“自殺”それも“首つり自殺”という悲惨事になった——と想像するのは、あまりにも奇巧的考察であろうか。

だが、この短い自殺記事の中に「柔道でしめられ」云々の文章が入っていることは、記者もまた、知ってか知らずか「しめつけられる快感」と「首つり自殺」との間に、何らかの関係があることに気づいているのかも知れない。この少年の微妙な心理を追究することがこの自殺事件の原因を解明することになるのではないだろうか。

で、千恵蔵、月形、舟橋等と一緒にマワシ一本で土俵に立った姿を見せたことがあった。男性的俳優の好きな私も、粗野な感じの三船敏郎は余り好まない。然し「七人の侍」や「隠し砦の三悪人」のようなものは好きである。「七人の侍」で滝で禪一本になって魚を生捕りにする場合や「隠し砦の三悪人」で短い禪のようなものをつけた姿は素晴らしいと思う。

○
その他現在活躍している俳優では、大木実の逞しさが好きで、あの駄に幾重も縄を掛けて締め上げてみたい。少年俳優は好まないが「潮騒」の久保明と、「禁断の砂」の石浜朗の六尺禪姿は印象に残っているし、近作「炎上」で俳優名は知らないが、海軍兵学校の生徒が越中禪一つで相撲をとる場面もハッキリ憶えている。

三十有余年、ソドミヤ臭的な映画を求めて見続けて来た私にとって、現在、往年の諸口、井染ほどの鮮明なイメージを与えてくれる俳優が見当たらないことは淋しい限りである。強いて云えば、若手で大木実、三橋達也、根上淳、丹波哲朗。中年では、宇野重吉、森雅之、河津清三郎、水島道太郎、藤田進、高田稔、更に上って、菅井一郎、笠智衆、滝沢修、等が私の好みの合ったイメージを与えてくれる人達で、今後も大いに期待したいと思う。

新稿

ある夢想家の手帖から

イデー・タート・エロチック
理念と行為と性の分野に
おいては等質である。

— キント —



第一章 夢想のドミナ

Ich bin Amazone und Blaustumpf in einer Person.

— Sacher-masoch, Die verliebte Redaktion.

わたしは馬にも乗るし文学も談ずるわ。

— マゾッホ「女新聞社長」

マゾヒストは夢想家である。彼は理想世界イデーの美女に憧がれて、生涯満されぬ夢を追い続ける宿命の下にある。——恋人にドミナを、女神を見るのは恋する男の常だが、普通、それは恋愛の一時期で終る。もし、何時までも女神を見続け、恋人が人間の女へと下降すると共に彼女への愛情を失ってしまう様だったら……それは既に異常である。そして、それこそマゾヒストなのだ。女神を恋してしまっ

沼 正 三

まえがき

手帖旧稿に加筆したものを増刊ないし単行本形式で取りまとめることになって、原稿の整理も一応終っていたのですが、出版事情から、この方は当分見込薄になりましたので、更に最新の資料も織り込んで稿を改め、「手帖新稿」として本誌上に分割発表させて貰うことにしました。以前同様に愛読を賜りたく、又各位の忌憚ない批判を期待します。

た男、文字通り女神以外を恋することのできぬ男、それがマゾヒストだ。マゾッホの代表作が美女神ヴェヌスの名を担っているのは、故ないことではない。

だが、「毛皮を着たヴェヌス」が余り喧伝せられて、マゾヒストの理想の女性像がヴェヌス（ヴィーナス）なのだ、とされていることには、少々異論がある。——マゾヒストのドミナとしてはヴェヌス以外にもっとふさわしい女神があるのだ。

ギリシヤの古い伝説が想起される。

オリンパスなる神々の饗宴に一つの林檎が投げ込まれ、「最も美しい女神に」と記してあった。この林檎の帰属をめぐって、女神ヘラ、アテネ、アフロディテの三者間に争いが起り、各自が林檎は自分のものと主張した。イーダ山上に羊を牧するトロイの王子パリスは、その審判を求められたが、ヘラは地上の王たること（権力）を、アテネは戦の勝利者たること（名号）を、アフロディテは絶世の美女（ヘレン）を与えることを、それぞれ自分が選ばれた時の条件として申し出た。パリスはアフロディテを選んだ。女神は約により、既にスパルタ王メネラオスの妃であったヘレンを彼に手引し誘拐させた。十年にわたるトロイ戦争はこの為に行ったのであった。……

パリスに与えられた審判の課題の意義は仲々示唆的である。普通に考えれば美女神アフロディテ（ヴィーナス）が一番美しいのが当然だ。それが争いになるのは、単に容色に関する女の自惚を諷する以上に、美貌というものの主観的な多様性を語っている。山本富士子と有馬稲子と白川由美と、どれが好きだ、ということとは言えるが、どれが一番美しいか、は仲々言えない筈である。三女神の争はそういう困難さを表現する。

三女神の申し出た条件は彼女らの属性を、その美貌の特徴を示すものだ。ヘラ（ジュノー）は大神ゼウスの妃で、神々の女王として

君臨し、孔雀の驕美を愛してこれに車を輓かせている威厳ある女神、女神中での貴婦人である。アテネ（ミネルヴァ）は文と武を司る。理智的教養を持つと同時に武装して戦えば戦争の神アレスを破る武勇を示し、その雄々しさは、女性よりむしろ男性に近いものを感じしめる。一方アフロディテ（ヴィーナス）は、美と愛を司る。最も女性らしい性格であり、いわば女性の性的魅力の象徴である。驕慢な貴婦人、男勝りのM型女性、愛嬌の良いグラマー、この三者のいずれを選ぶか。これが課題なのだ。

そして、パリスの審判の結論では、矢張りアフロディテが選ばれたという点が示唆的である——ノーマルな男性の判断の最大公約数をパリスの選択が示しているといえるのだ。これは最早、等質な美の量の多寡による順位決定——いわゆる美人コンテストはこの考え方に立つ——の問題ではない、異質な三種類の美の択一の問題であり、三種類の女性のタイプの男性に訴える力（魅力）の大小の問題なのである。男なら、貴婦人より、M型女性より、グラマーを選ぶ。これがパリスの答だ。極めてノーマルである。

そこで、読者のマゾヒスト諸君に問う。諸君なら、誰に林檎を渡すか？三女神の中の誰を自分のドミナに選びたいか？

パリスと同じく、アフロディテを選ぶ人もあるに違いない。本誌旧号時代、春日ルミ嬢の着衣のマゾフォトに対し、相当反対の声があった。これらの諸君は、グラマー的魅力に惹かれる人であり、マゾヒストといっても程度の低い方である。実数としては、マゾ派の中この程度の人が一番多いのかも知れない。

然し、真にマゾヒストを以て任じる人ならアフロディテを選ぶまい。一般的魅力だけでは動かされなくなっているのである。マゾ的效果ある刺激を伴わねば、どんなグラマーも無価値なのである。クラフト・エビングのある患者は、マゾヒストの心理を要約して、「真のマゾヒストはヴェヌスの抱擁よりも並の女の足蹴を喜ぶ」（附

記第一)と言っている。

その刺戟的な属性を丁度他の両女神が持っているから面白い。

ヘラを選ぶのは、貴婦人崇拜者である。マゾヒストの喜ぶ奴隷とか召使とかの観念は女主人の権力と結び付き易いから、貴族とか現代の支配階級である富豪とかの権力家族に属する女性をドミナに選びたくなるのが自然である(例外はある。鬼山氏、河間田氏等。その理由付けの一例は二九年七月号九三頁参照)然し、女の地位や財力に叩頭するのは実は、それらに支えられた驕慢に刺戟を感じているのだともいえるから、流行歌手や映画スターや女流作家などの有名人に憧れる向きもこのタイプに含めて良い。

アテネを選ぶ人もあろう。女性にして男性に伍して活躍する者に魅力を感じる人、つまり驕慢よりも有能さにこそ叩頭するタイプの人が、これに属する。厳格な女教師、敏腕の女記者、女実業家、女弁護士、女将校、女探險家等、賢い女、強い女に憧れる向きがそれだ。男装も、そういった意味での男性付与の一形式として考えられて来る。(附記第二)

パリスの林檎の場面には登場しないが、アルテミスという女神がいる。美青年アポロの妹で狩猟好きな弓矢の達人。自分の裸体をかいまみた獵人アクテオンを直ちに鹿に変えて獵大に喰わしめた位誇り高い処女。M型だが、武装するアテネと異り、七分スラックスの似合う美少女の風情がある。彼女を参加させて、彼女にこそ林檎を与えたかっと思ふ人もあるだろう。女主人として清純な乙女を選びたいパギスト(後章に詳述)達がそれだ。ヘップバーンや北原三枝の様なボーイッシュなタイプに惹かれる人達もそうだ。スポーツウーマンやハントレスに憧れる向きもここに入れてよい。驕慢や有能よりも、潑刺たる若さこそが要求される。

貴婦人ヘラ、M型のアテネ、美少女アルテミス……こう見てくると、三者は皆それぞれにマゾヒストを喜ばす特質を具えているでは

ないか。優美な女性的資質だけ売り物にしているアフロディテよりも、遙かに魅力があるではないか。ヴェヌス(アフロディテ)よりもマゾヒストのドミナたるにふさわしい女神があるという私の意見は間違っているだろうか。

この意見にはマゾッホ自身も賛成して呉れたに違いないと思う。(「毛皮のヴェヌス」のヴェヌスは美女という点に重きを置いたただろ。)というのは、彼の諸作品のドミナを研究すると、彼が右の両女神の性格に魅力を感じていたことがよく分るからである。典型的なのは中篇「女新聞社長」(原題「惚れ込んだ編集局」)の女主人公、男爵令嬢アンドレアであろう。彼女の父男爵は富豪で將軍だったが他に子がないので彼女を男の子の様に育てた。彼女は天下國家にいても、芸術や古典についても博い教養と高い識見を具えているし、動植物の研究もした。又射撃や乗馬のたしなみもある。「わたしは女騎兵と青輻(文学少女)とを一身に兼ねているの」(題辭)。未婚のまま父を失い、遺産で新聞事業を起し、自ら社長兼主筆となり、編集局員一同に独裁的に君臨している。自分の名与を傷けた反対派の新聞の主筆を膺懲しようとして決意する誇り高さ、散々に犬鞭で叩いて笑ひものにして快哉を呼ぶ気性の激しさ、陥穽に落ちた敵の復讐を封ずる縦横の機略、しかも敵を欺く時に用いる妖艶な色気……それでいて、芳紀僅かに十八才(!)なのである。

馬鹿々々しいと言ふなけれ。これがマゾッホの夢想のドミナなのだ。多くのマゾヒストにとっては、ヘラ、アテネ、アルテミスは、そのどれか一つがドミナの理想型を示す。ところが、マゾッホは一人の女性にこの三女神を(更には美女神アフロディテをも)渾然一体化して具現せしめようとしているのだ。貴婦人で文武に有能な美貌の少女アンドレアは、ヘラとアテネとアルテミスと(アフロディテと)の見事な結合ではないか。オリンパスでさえ三女神に分れていて特質を一人に兼ねた女性が現実の地上にいる筈がない。マゾッホ

の小説の多くはお伽噺に過ぎない。だが非現実的と笑われようが何しようが、マゾッホとしては、この理想像を謳い上げずにはいられなかったのだ。

批評家は笑うが、私達マゾヒストには彼の気持がよく分る。マゾッホは文士であるより前に、マゾヒストだった。イデア世界にドミナを求める夢想家だった。——私達の誰が彼を笑えるだろうか。

(附記第三)

附記第一 ヴェ、エ、ス、の抱擁より並の女の足蹴という表現について、一言補足する。重点は抱擁より足蹴というにあり、並の女でも良いというのであって、美女の足蹴なら尚良いことは勿論であり、醜女では足蹴も有り難くない(醜女からの虐待をこそ喜ぶマゾヒストもあるが、地位低い女を却って喜ぶのと同様、私には賛成できない。三二年九月号「麻生氏の意見」も同説)。ヘラの威厳と驕慢、アテネの理智と雄武は、女神としての美しさに伴われているからこそ、女性美の結晶たるアフロディテと優を競い得るのである。

附記第二 「サド女性の覆面」(二九年八月号)、「夫婦の倒鎖遊戯」(三〇年一月号)に見る山田正実氏のマゾヒズムは、私には殆んど共鳴し得ぬものであるが、貴婦人への隷従の契機を示さず、専ら女性への男性付与に努めている点で、このグループに属すると思われる。

附記第三 わが国でも、日野富子(権力女性)、千姫(淫虐貴婦人)、巴前前(騎馬の女武者)、姐妃のお百(毒婦)といった典型化された史上の人物はあり、架空の分野迄広げれば、かぐや姫(竹取物語のヒロイン)に驕慢な貴婦人を、白縫姫(白縫譚のヒロイン、幻術者)に男勝りのM型女性を見出すことは困難でない。——太宰治の詩人的直観は、かちかち山の白兎にさえアルテミス型の冷酷な美少女を発見している(御伽草紙)。——にもか

かわらず、ドミナのタイプとして、これら日本人に親しい名前を挙げ得ないのは、女帝らしい女帝を持たず、聖母崇拜や騎士道の伝統にも缺けた日本の文化史が、マゾヒズムの土壌として従来余りにも貧困で、これらの人物が——個々にはドミナたり得ても——理想型となる迄の精錬を経ていないからである。

第二章 馬上の令嬢

「あたし、ヴィクトワールに乗りたいの」と彼女は挑むような語気で言った。……大尉はちゃんと鞍を置いたヴィクトワールを曳いて来た。彼は手綱をベルに差し出し、彼女が乗るのを手伝った。……ベルは鞍に腰を据えたままゆつくりと速脚をはじめた。指は手綱を通じて馬の口をくすぐっていた。

——ノリ「十六歳」

前章で、ヘラ、アテネと並ぶドミナの理想型として挙げたアルテミスは、ローマ神話ではディアナ(ダイアナ)である。本誌読者はこの名前から、乗杉貴代子女史の「ダイアナ夫人」と題した女性乗馬に関する一連の文章を連想されるだろう。神話のダイアナは処女神だし、又鹿や熊に跨ることはあつても、乗馬とは結び付かない。然し、現代風に言えばボーイッシュな服装の似合うM型の美少女で、さしずめ、生活の苦勞も知らずに、勇壮なスポーツに夢中になっている富豪の令嬢といった感じだから、彼女を乗馬という上流階級のスポーツに結び付けることは、不自然ではない。少くとも私達は、乗杉女史によって乗馬女性の象徴としてのダイアナを考える様に慣らされてしまった。

乗馬女性ダイアナ夫人は、本誌読者中に素晴らしい人気を持ってゐる。「僕にとつて、鞭を鳴らしながら障碍とびをしている女性程、美しく崇高なものはこの世の中にあり得ないのです。そして、ダイアナ夫人こそは常に僕の理想の女性像なのです」(麻生保氏、

三三年三月号読者通信」といった発言、ここには、驕慢とか有能とか冷酷といった精神的資質は二の次にして、乗馬という特殊の状況そのものが——服装とか鷹揚な態度といったいくつかの要素を副次的に伴うことは勿論として、むしろそういった望ましい諸要素の渾然結合した頂点的場面として——ドミナとしての資格的属性を直接に意味している事態があるが、古くは「乗馬服と長靴と鞭」の森本愛造氏（附記第一）氏と同一人物と思われる「或る被虐性愛者の手記」の天泥盛栄氏から、近くは、「私のキタ・セクシユアリス」の山本節夫氏、「女性乗馬考」の馬場喬次氏を経て、「馬化白書」の鞍良人氏に至るまで、幾人かのマゾヒストが、乗馬女性へのこの種の偏愛を示して来た。マゾヒストの類型をそのドミナによって分つ時、彼等は無視できぬ一つのグループを形成している。

乗馬女性の話題は殆んど無数にある。ギリシャ古伝の騎馬女族の女王ペンテジレア、第二次十字軍の華ゲルマン女騎兵の長として金色の拍車と長靴を謳われた「金足夫人」下ってはオーストリーの騎馬女王エリザベート（映画「双頭の鷲」のモデル）、金鞭を揮つて悍馬を乗りこなし煬帝をして三大觴を干さしめた舞劍の名手薛冶兒、脂粉却って顔を汚すと詩聖に美貌を讃えられた当代乗馬女性の随一魏国夫人（楊貴妃の妹）、馬上畠山重忠と角逐した女武者巴御前、満蒙の野に三軍を叱咤した金司令川島芳子……和漢洋といわず古今を問わず、次から次への連想にことかかぬし、もしそれ架空の人物も許すというなら、「春の水」（ツルゲネフ）のポロゾフ公爵夫人、「残酷物語」（リラダン）のシルヴァベル嬢、「木蘭詩」（衛敬瑜の妻王氏）の女將軍木蘭、「兒女英雄伝」（文鉄仙）の十三妹、「伝奇日女若」（笹川臨風）の箕輪城主日女若と麾下の女勇士花若・月若、「鞭を鳴らす女」（岸田国士）のヒロイン紀伊子……これまた和漢洋古今に亘って美女の応接に違ないことになる。

鞏前才人帶三弓箭一 白馬嚼齧黃金勒
翻身向天仰射雲 一箭正墮雙飛翼

（註。才人は女官の職名、技芸に通じた美女である。）

とは、杜甫の哀江頭の詩句だが、何と美しい場面だろう。まこと明眸皓齒の男装の麗人の騎馬図は、想像するだに我等マゾヒストの胸の血を湧かさせるのである。

然し、右に示した女性達は、それぞれが独立の一章を要求する。ここに尽すことは到底不可能だから、処女神ダイアナから話題を取り出したことにちなみ、ここでは「馬上の令嬢」と主題を絞って見よう。右の諸例の中で言えば「鞭を鳴らす女」がそれである。

この作のヒロインが自家の馬場から帰って来る時の姿は次の様に描かれている。

黒地の背広に同色のベレー、鹿革の短袴とエナメル・キッドの長靴は先ず型通りに違いない。そこへ持つて来て、白革の手袋をはめた両手に節竹の鞭をぎゅっと反らした姿は、天晴れ亜米利加仕立の当世「おとこ娘」だ。白リンネルのワイシャツに、青磁のリボンがひらめき、胸のポケットからこれも同色のハンケチが溢れているなどは流石に物柔かだ……そうかと思うと、また、大腿に歩き出しながら拍子を取るように、鞭をびゅうびゅう鳴らすのである。

彼女が無頼紳士椿礼三から唇を求められて、激しく拒んだ末、乗馬鞭で力まかせに男の頬を打ち、馬を繋いだ場所に去るという素晴らしい場面もある。

然し、こういう一見新しい型の激しい気性の女性も、結局は椿という人物の男性に降伏して一生を彼に托し、人身売買の嫌疑を受けて海外に高飛する彼についてゆく、弱い日本伝来の女性になってしまう。作者が作中で紀伊子に読ませるマルセル・プレヴオの「半処

女」(Les Demiurgues)のヒロインの生き方とは大分違ふし(附記第二)、標題や、「女王の口笛」「貞操と答」などの小見出しに嗜虐女性を感じて食欲を覚えた向きは、羊頭狗肉の感を免れまい。思想的風俗小説としてのこの作品の価値を云々するのではないが、「鞭を鳴らす女」という標題は少々ハタタリがききすぎている様である。

だが、肉を味わなくても、美しい羊頭を眺める丈でも満足できる場合がある。騎馬美女においては、彼女等は必ずしも嗜虐的性格を有することを必要としない。何故なら人間に対しては優しい女性も馬に対しては苛烈であり得る以上。馬と同一化して女騎手の支配を味えるものにとつては、女が馬に乗っているということが、自分のマゾヒズムを昂揚させる上の必要にして十分な条件となり得るからである。先に指摘した一群の人々は正にこの様な心理操作に長けているのだ。

ことに、「鞭を鳴らす女」のヒロインは良家の令嬢である。

令嬢という言葉の持つ独特の響きは、マゾヒストを自ら叩頭させるものを持つている。それには表現し難い雰囲気に伴う——萩原朔太郎は「お嬢さん」という呼び掛けを用いた詩篇をいくつか残しているが、詩人の語感がこの雰囲気をつ捉えたのである——。

令嬢とは上流階級に属する未婚の女性を言う。上流生活に特有の豪華な有閑なもの、召使を使いなれた人特有の支配的なもの、そして何よりも洗練された挙措と美貌……が、それ文ではない。千姫を令嬢とは言わない様に、少くとも日本語としては、令嬢とは、明治になって、近代化が進展し、産業ブルジョワを主体とする富豪が地主や華族と並んで驚進する日本資本主義の手綱を握って以後、この特権階級に生れた女性——皇太子妃正田美智子さんはその代表といえよう——を指すのである。だからそれは近代的な西欧的な概念である。乗馬や自家用車の運転が令嬢という言葉にマッチするのは

その為だ。

更に令嬢とは未婚の女性——処女——である。しかも、日本では特に年の若い中を言う。若い処女の冷酷(嗜虐性ではない)については、ダイアナやブルンヒルデを材料に詳説する機会があるであろうが、とにかく「美しく高ぶった処女の残忍性には限りが無い」(太宰治)のである。

令嬢とは、近代特権階級に属する処女である。だから、マゾ的連想は、令嬢ということばに、特権階級の驕奢と処女の冷酷とを結合する。「笑めばみな男の子は前に伏すものとなおも思ひぬ」(吉井勇)と歌われる若く美しく心驕れる処女——マゾヒストならずとも男はその前に伏するであろうが、特にマゾヒストにとつては、その驕慢がそのまま魅力なのだ。加藤武雄の「珊瑚の鞭」でも開巻劈頭から乗馬中の令嬢が登場するが、彼女は求愛者達に対して驕慢そのもの。ひそかに、男達の態度、容貌、頭脳、愛情等を、試験官の様に採点したりするのである。

こういう驕った令嬢達の生態を描いた作品が、この昭和初期の通俗現代小説には沢山ある。日本の資本主義は、畸形的ながらも、この頃から独占的段階にさしかかり、爛熟期に入った。富は偏在し、上流と中流との生活程度の懸隔は大きかった。——戦後の三等重役の月収では贅沢はできぬことを述べて、戦前には月収五十万の会社重役は珍らしくなかったが、今の金にして月収一億五千万(三〇〇倍)にあたる、と比較した文を読んだことがあるが、戦後の経済がこういうブルジョワをなくしてしまったことは、少くともマゾヒストにとっては、遺憾千万な悪平等化だった。——菊地寛の「真珠夫人」や「火華」のヒロインを先頭に、特権階級が特権階級らしさを失っていなくなったこの良き時代の若き貴女達は、次々に通俗小説の女主人公として登場し、庶民の夢に代えて、自由奔放に、豪華な生活を営んだ。三上放兎合、小島政二郎、久米正雄、牧逸馬、吉

屋信子（附記第三）……これらの作家達の作品には、馬上の令嬢の登場するのが少くなかったが、彼女等の手に握られた乗馬鞭こそその隔絶した特権の象徴だったとは言えないだろうか。

馬上の令嬢という観念は、かように二重に（乗馬女性一般として令嬢として）マゾヒストを刺戟する。「鞭を鳴らす女」が嗜虐女性の羊肉なしにも、樂しめる所以である。今の世に、女神ダイアナ（アルテミス）を見たければ、夏の軽井沢に行くが良い。彼女はオリンピック別荘から馬に乗ってやって来るだろう。

附記第一 乗馬女性愛好は屢々乗馬靴即ち革長靴や鞭へのフェチズムと結び付く。森本氏はその顕著な事例である。長靴を穿いた男装女性に理想のドミナを見る例として、三三年十二月号通信の田島裕士氏「剣、長靴、ウエストをバンドで締めた服、これが私の理想の女性の三位一体です」マゾヒストの理想ドミナもまた多様なかな。

附記第二 「半処女」の挿絵の一つが「鞭を鳴らす女」の中で、次の様に説明されている——「何処かの部屋の一隅である。男が長椅子にもたれかかり、片臂をあげて防身構えをし、女が、それも乗馬服を着て、その前で立ち塞がり、右手に持った鞭を今や

振り下ろそうとしているところだ。」

然し私の続んだ訳本（井上勇訳）では、こんな場面はない様である。日傘で撲つて柄が折れる条りがある丈だ。この小説は極めて征服的な女性の類型を描き出した注目すべき作品だから、いずれ一章を費すつもりであるが。右の点で刊本が二種あるのかとも疑え、迷っている。麻生保氏など仏文学に通ぜられる方の助言を仰ぎたい。

附記第三 吉屋信子の初期の作「双鏡」には、鞭打つ令嬢の場面がある。双生児なる姉の身代りに富豪令嬢の仮面をつけたヒロインに求愛するに至った貴公子が、軽井沢なる彼女の別荘を訪う途中、昨日までの愛人が馬で来るのに出逢う。彼女は自尊心を傷つけられ、別れの言葉と共に、馬上から鞭を一閃、彼の頬にみみずばれを残して馳せ去る。——嗜虐的という形容詞なしに、令嬢の語に伴う雰囲気だけで、こういう行動が不自然でなくなっている点に注意されたい。——なお、麻生保氏「生活と意見」（三三年新年号）には、他に吉屋信子の「蝶」「お嬢さん」「日本人クラブ」が男を鞭打つ令嬢の登場する作品として、フランス・ノリ「十六才」と並んで、紹介されている。

サッポーター随想

山口 幸一

筆者は、久しく少年の禪美に就いて研究して来たものであるが、最近、殊にこの三、四

年の間に禪の使用は、急激に減少して行つた事は否定出来ない。私の少年時代は、水泳

といえは必ず「六尺禪」を締めるのが常識であり、海水パンツは未だ無く、海水着を用いる者は、選手だけに限られて居り、猿又や、パンツのまま泳ぐ少年は六尺禪を買って貰えない子か、又は忘れて来た子供だけであつた。百人中、九十五人迄は六尺禪姿で水泳をやったものである。然し変った。それは「少年用サッポーター」の急速な流行である。

サッポーターは御承知の通り、外国で始めて用いられた、ゴム製の襪ともいうべきもので我々の少年時代にも既にあったが、当時はサイズも大人用に限られ、陸上競技選手のみが使用していた様で、中学の上級生や小学校の先生達が、パンツの上部に白いサッポーターのゴムバンドを巾広くのぞかせて、トレーニングをやっていたことを覚えている。

私も中学を終える頃に、このサッポーターを使った事があるが、その当時のものはゴムの中も狭く、且つ質も不良で弾力がなく、緊張度が弱かった。むしろ六尺襪を締めた方が遙かに運動にも便利であった。

当時のN教授著の陸上競技練習法という本の中にも「服装」の項で次の様に説いている。「外国人は運動をする際にサッポーターというゴム製の襪を用いるが、日本には六尺襪というものがあるから、強いてサッポーターを用いる必要はない。襪は、あまり太いものはよくない。通常モリンス製、巾六、七寸のものを水泳に於ける場合と同様に結べば、例え長距離競争の場合でも途中で解ける様なことはない。」

しかし、前に述べた町り、当時は運動会などでも中学三年生位になって初めて下ばきに襪を締め、下級の者は使用していなかった様に記憶している、デパートで少年用サッポーターが売られているのを見掛けたのは、つ

い二、三年以前からである。

そのサイズは様々で、一番大きいのは大人もしくは高校生用であり、これは昔あったサイズと同寸であるが、品質は比較にならぬ程良くなっている。中型は稍々小さいが、腰に廻る部分の布巾に十二、三糎以上あり、赤、黄、黒、青のゴム糸で縁取ってある。小型は、布巾も十糎位になり、ゴムも稍々薄く、軟かくなつて、前袋や股下の紐もずっと小さくなっている、これは中学一年生や小学生でも身体の比較的大きな少年用として作られている。更に特小型があつて、これはそのサイズから推してどうしても少学生用と思われるが、一寸可哀想なぐらい、太く、厚く出来ていて初めてこれを穿かせられた子供は、きつと嫌がるであらうと思ふ程である。

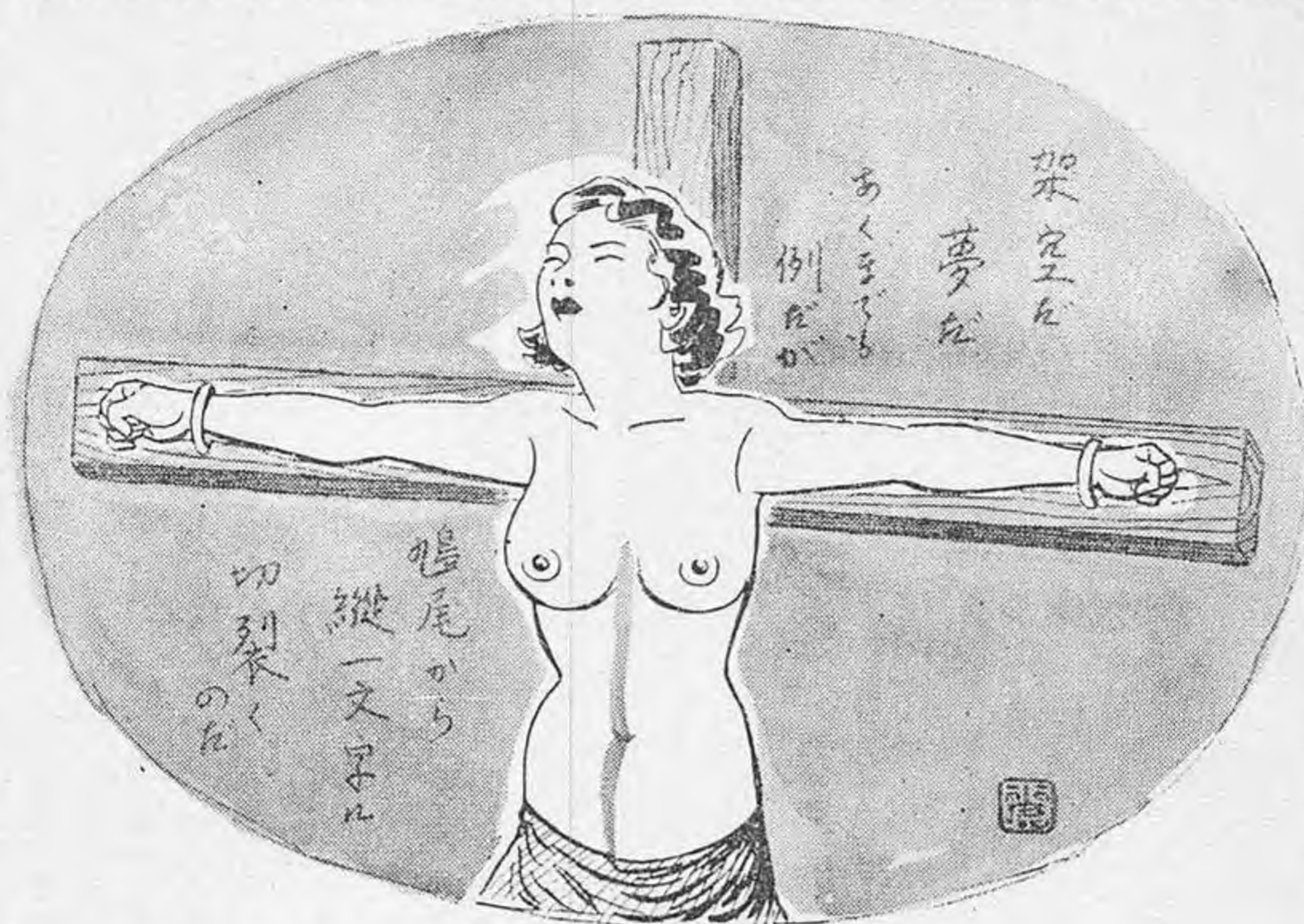
百貨店の売子に打診した結果、現在では小学生でも相当数、このサッポーターを使用していると思像されるし、中学生ともなれば、殆んどが使用していると観て間違いないという確認を得たのである。これは、今の中学教育が昔の体操と違って総ての体育実技に組織的訓練を施している関係上、服装も正規の指導している現われであらうと思像した。

私はこの良質のサッポーターを、体育の時間に何時も使用出来る現代の少年達を幸福だと思ふのである。しかも襪の退化と共に、逆に都会から流行し始めたサッポーターは、常

時は勿論、水泳でも陸上競技でも、殆んど襪を使用しなくなつた都会の少年達が魅力を感じ、急速に普及しつつあるという注目すべき事実である。健康面からいっても、内臓の振動を防ぎ、腸を固定するサッポーターの效用が、一般のお母さん達に認識され出したのであらう。

筆者が嘗て南方に在勤していた頃、支那人の歯科医と懇意になり、度々遊びにも行つたが、その家に十四、五才のハイスクールに通う少年が居た。女の様な華奢な美少年で美しい花を眺める様な気持だったが、その少年が水浴をしてシャワー室から出て来たばかりの所へ行き合せて事があつたが、ピッチリとその柳腰を締めつける様なサッポーターを穿いていた。少年は直ぐにランニングシャツを着て出て来たが、筆者はその少年がサッポーターの常用者であることを始めて知った。

他にも二、三、サッポーターの少年を見受けたが、皆、良家の少年であつた。ということは、戦争下の苦しい経済で余分の物資もなかった為で、平和状態に戻れば、当然少年達の下着として全般にサッポーターが愛用されているのではなからうか。日本の少年が運動に欠かせぬものとしてサッポーターを使用しだしたのは、戦後外国少年達との交流が激しくなつた影響ではなからうか、とも考えたが、まだ確証は得ていない。



◎セミ体験記◎

“暗い部屋”

南方佳男

一昨年の暮、正しくは十二月十八日から、私は胃力イヨウで四カ月近くも床についていた。そのころ独り暮らしだった私は、その病床でさまざまな空想にひたつたものだった。病苦のいらだたしさをうち消そうとして、正常な私では容易に考えつかぬような奇行をした

ものだが、丁度まる二年目に部屋の大掃除のはずみに、そのころの空想を何かの拍子に記したものだろ一冊のノートを発見した。とりとめのない事だが懐かしく、そして病人らしい奇想天涯の着想に思わず御紹介してみたくなつて筆をとりました。

× ×
“異様な刺激を求めて、私はわざわざその為にしつらえた「暗い部屋」の中に、時の近づきを持っている。部屋を染めつくした闇黒

が、重く覆さつて、私の神経を砥ぎ澄す。まるで、とほうもなく大きな生き物の心臓の中に座っている様だ。好奇心に緊張している私は、先刻から私のつい鼻先きにあるだろうはずの見ない板壁とニラメツコしながら、巨大な闇の脈ハクを聴きとつて、なかば怯えているのだ。

——私だけの部屋である。

江戸川乱歩先生の傑作「赤い部屋」のスクルを地に、私の「暗い部屋」というのは、裏町の片隅に十坪半の敷地を間口だけでも広く三間に拡張した奥行四間、平面鍵型の木造で平屋に建てたバラックというにはややましなチップケな建物を二軒に仕切った。そう、背丈よりはるかに低いくぐり木戸の出入口のほかは明りとりの窓すらない裏側の部屋である。

板仕切の表、私が「明りの部屋」とよんでいる表の部屋は、囲い者だという、美人じやないが愛敬のいい小意気なマダムの独り住い。そこには生活に疲れた労働者達が、午前九時から午後十一時までの営業時間をたえ間なく、影日向の区別のつく強い光の下で、人生の表模様を、くったくなく描いている割安な飲食店なのである。

私のように卑屈に随ちた。そして自分では

確かめる事の出来ぬ異状神経の——ズバリいって精神病患者のような、とも角、不思議にこの世がつまらなく、退屈で、生きている事がみじめで、そのくせ勇気もない人間でなければ、誰しもこの対象した二つの部屋が同じ屋根の下にある、この家には住めないだろう。

けれども私は、この家が好きだ。日蔭でなければ住めない私。光の中の出来事には興味も快楽も持たない私。私の求めているのは光の次に必ず訪れて来る闇の中の出来事である。

「パチリ」

一筋のクリーム色の電灯の光りが黒い絹のカーテンを裂いて小心者の私の顔を刺した。何故だか私の退屈な心が、こんなにウキウキする。私は急いで起きあがる。

物音のたたぬように足を忍ばせて、いま闇のカーテンを切裂いたばかりのクリーム色のナイフへ眼を当てる。

三十分前と同じ電球の光が、三十分前よりしみるのは闇になれた私の眼のせい。三十分前より活気に満ちているのは、奔る私の心の錯覚。

きよう、土曜日の夜は、土曜日の夜に決つて訪れる「旦那」といわれる。マダムと幾らも年の違わない精力的な三十男の接待日であ

る。

私という、他人に対して同情的な性格と観方を持つ——それはいまわしい五年前の過去を回顧させる——人間でなければ知る事の出来ない喜びが、闇の中の生き物で、ことさらに鋭敏な感覚の所有者である私が、光の中の世界に住む種属へ示すレジスタンスである。

私はそんな、およそ欲望というものから切り離されているアブノーマルな人間なのだ。

下着

新しい土曜日の夜。この夜の事を私は「ブラックの夜」と称ぶ。ブラックは私の一番好む色。

ブラックの夜は、表のマダムも決して身をブラックに飾る。

マダムは貧弱な、店がまえに似合わず派手好み。この世界の趣味なのか？

マダムのは下着趣味。

お嬢さまのようにウイクリー・パンティが田舎街の御自慢。

月曜日 ピンク。火曜日 クリーム。

水曜日 オレンジ。木曜日 スカイ・ブルー。

金曜日 ライラック。

そして今夜、ブラックの夜が過ぎると日曜日がホワイト。七曜七色の薄いナイロン地が決つてその翌朝に、隣家との間にはんの僅か

申しわけほど残された空地の物干に掛っている。

「このウイクリー・パンティね、一着三百円もするのよ。一寸高わね。でも……私、これもアナタのために……あら本当よ。だって週に一度きりしか会えないんですもの。……ネ……判るでしょう。このパンティみたいに淡い色から段々に濃くなって行く私の気持……いい趣味だと思っただけじゃない？」

聴き惚れている旦那。(いい気なものだなあ)

浮気者のマダムが、この一週間にどんなことをしたか、一つバラしてやろうか。

月曜日 カンバンまでねばった。赤ら顔の脂肪ぎった五十禿に売りつけた、ピンクのつくり声、ふくみ笑い……。

火曜日 月に一度の定休日が雨。まだ熟れない。黄色い果実のような学生を相手に……。

水曜日 セールスマンらしい若い男の遊びなれた口説にコロリ、マダムはオレンジ色のホノオを燃やしていた。

木曜日 「明日またね」あの声を真にうけて昨日の若い男を待つマダムのしおらしさ。スカイ・ブルーの冷たさ、やるせなさ。

金曜日 早じまい、そそくさと御外出。ついに帰らず。きっとあの若い男と——でもマ

ダムには清純な藤の花のような恋。

土曜日 アッ！ これは今夜だった。

そして明日は日曜日。

きっとホワイトの清潔を保つだろう。けど気懸りな染まり易い色。

加 虐

「いやよッ……」

とげを含んだマダムの拒否する声。

一服の時の間。

「駄目だ！」

重く命令形の旦那の声。

「だってえ……」

年増女のいやらしい鼻声。

マダムは八年前に手術で傷つけたという下腹部をひどくかばうらしい。およそ六、七寸も、平板な白い腹の上に縦一線にきざまれた線が、単調なこの年増女の体にアクセサリーとなつて残っているそうである。

腹部加虐に少なからぬ関心のある私にとって、この種の傷跡を想像することは、たまらない感興をふるいたたせる泉となる。

例えばそれが、水々しい乙女の、ピチピチと發育した筋肉が、腹部を縦に左右二等分するのではなからうか、と見違えそうな魅力的な体でなくたって——。

七、八年前だというから、このマダムもその頃は二十才を幾らも過ぎていなかったろう。その頃のマダムを想像しながら手術の日の幻想を描いてみた。

不気味に光るメスが白シーツを切り裂く。

不規律に波うつ女の白い腹が現われる。

蒸気消毒器の音がやけに心の刺戟をつのらせる手術室。

キラリと光るメス。

プツリと白い腹部にメスが刺さる。ズズズと、バリバリッと、異状な雰囲気と緊張に、小さな音は、しかと聴き、たしかめるゆとりも持たない私は、ただ眼だけをたよりに執拗にメスの動きへ注視する。

麻醉で眠っているはずの女、縦に強い力で切裂いて行くメスの動きにともなつて、かすかながらウメキ声とともに体を震わせるのは、本能的な脳髓の働きのためだろう。

ふきとつても、ふきとつても、真っ赤な澄んだ血がコンコンと吹きだしている。でも唐紅いと形容するほどではない。ペアレが大きな血管を次々とふさいでいるためである。

腹膜を開く。

アッ！ 夥しい血！

吸引ポンプが、この腹腔の血をくみ出す。そして再び静脈へと輸血されてゆく。

白い
脇の上に
縦一線



ピカピカ灰銀色に光る内臓が現われる。
患部が切りとられた。絹糸が傷口を縛り、
または逢い合わされて行く。手術は無事終
了——。

まってくれ「無事終了」の四文字はしばらく

くお預けにしておこう。
パツクリと切り開かれて、ピクピク痙攣す
る傷口を開いたいまの姿は、腹部造形美の極
致。誰かがみにくい不均衡なものだと逆説す
るかも知れないけれど。

生きていて、感情を持つ乙女の健康な腹部

が、このような姿をみせて呉れないものか。
架空だ。夢だ。あくまでも例だが、健康で
肌も肢体も、そして顔も美しい若い女が、十
字形に磔にされているとする。

左右へ水平に開きもう永久に合わすことを
ゆるされなくなった両手が、拳を握って開き
また握り、一定のリズムを繰返しながら磔姿
を晒す羞恥に肌を紅に染め、爽やかな腹部を
周期的に起伏させて観念している美しさ。や
がて訪れるだろう処刑執行人の加虐は、この
あわれな犠牲を、古い刑罰史の中にも類例の
少いだろうと思われる方法で、グイト、鳩尾
から縦一文字に切裂くのだ。悲鳴をあげての
たうつ美女。

そんなイメージを描きながら、連想する。
白燭光の無情な電灯はマダムの顔を照して
いる。その顔はいま私が空想した処刑されて
いる乙女のイメージに似た憂いがみられる
ようだ。

鏡

ガサゴソと旦那は鏡台を運ぶ。
鏡だけが何時ものブラックの夜と違って
いる。奇妙な旦那の思いつきだ。

不承知なマダム。

電灯の明りに反抗する彼女なんだもの。

手を下さない女の責め方ときた。精神的加虐法だ。(旦那、なかなか頭がいいぞ)

“鏡” そうだ、私にはそんな事より……と
尚も幻想は飛躍する。

それはそれは巨大な凹面鏡がある。

凹面鏡の正面にはX型の架木が一基。

架木の後方、頭越しの小高い位置に素晴しく大きいライトが一基。

こんな部屋へ、オフィス・ガールとおぼしい美女が、救いを求めて絶叫しながら、数人の男達に運ばれて来た。可憐なあどけない顔だちの中に知性のひらめきがある。真珠の肌は、羞恥にうづくまる。

無情な男達は、美女の両腕を捉えると無理じいにX架の上端にとりつけられた金環へ左右別々に縛った。背丈より長い架木に美女の体が浮く。遠慮なく男達の手は、いま床から離れたばかりのスナリ形よく長い両足も、対象的な運命であるように、これも下端の鉄環に継ぎとめた。

盛り上った胸の半球、締ったウエスト、発育の途上にある腹部、何一つバランスのそこなわれた個所のない八頭身の女体美が披露された。

後方のライトが灯る。

ハリツケ美女の姿が、醜化して凹面鏡に写

しだされた。

悶えながら何も出来ぬ美女。

男達の惨酷な手は、さらにライトの位置を操作して——そうだ！ 凹面鏡の持つ作用を利用して、いま光は可愛らしい美女の哀れな姿に集められた。

時。間。

やがて、臭気細い煙と共に、美女の悲鳴がたかなり、ブスブスと音さえたてて真珠の肌に恐しい焼き印が残されて行く。

灸責を増幅したこの責めのアイデアは、光線の加減と凹面鏡の移動でどのようにでも変化するだろう。

“暗い部屋”で退屈しのぎに思考した私のアイデア。“暗い部屋”はそんな事にもってこいの部屋でもあるのだ。

喧嘩

今夜はすぐく荒れた。

マダムの斗志は、ダウン寸前の相手を追い詰めたボクサーのラッシュに似た激しさ。旦那を襲い殴る、蹴る、締める——

無気力な旦那は、さもその乱暴を心地よげにニヤニヤと煙草をふかせていた。

煙草の火があやまって旦那の下マブタにとび散った。

たちまち攻守とところを変える。

何のことはない本来の姿に返ったのだ。泣きわめくマダムを押えつけ、息つく間もあたえず細紐で縛りあげ、髪の毛をつかみあげると、風をきるような往復ビンタが……。

息たえだえに崩れおちるマダムの腰へ、さらに足蹴の追撃。ゴロリ横転して乱れるスソも何のその。両脚をすぼめてやっとのがれようとするマダムへ、もう数回も旦那の足蹴がとんでいた。真っ黒なパンティに包まれた偉大なヒップが俗にいうチラリズムを描く。

でも私にはそんなことより、久々にみるリアルな女の責め場？ に少なからず満足している。

そりやあ空想の世界だったら、こういった場面もきつと美しく、形よく自己満足の行くように進展することだろう。

さしずめ私だったら、着物を剥いで、後手縛りだけじゃなくって、雁字搦目に縄をかけ、そのうえ……空想ではきりがいい。それにいきりたっている短時間にうちにそんな手のこんだ事は出来ないもんな。行きあたりバッタリの怒りを表現した旦那の責めっぷりは落第点だけど、これも現実はこれがせい一杯なんだ。

私の理想論。女の責めるには

①着衣は出来るだけ少く。

- ② 縄目は出来るだけ多く。せめて胸を巻く位
いは。
③ 猿ぐつわ絶対。
④ 答か何か必ず責道具を使うべし。
⑤ 時間はタツプリ。ETC……
こんな事を考えているうちに、表のお二人も静かになった。マダムが降伏したのであるう。

憩

廃物のような「暗い部屋」の住人である私にも、生き甲斐がわかる。まして正常な人間にはどんな快楽があるだろうことか。
この暗い部屋、表をマダムに貸して一カ月にも満たないが、これから存分に面白い出来ごとに出逢うことも出来るだろう。その度に続きを書きたい。

マダムが暗い部屋を訪れて来た。

「何か本を貸して下さいな」

「エエ、遠慮はいりませんから、その戸棚の中から勝手に捜して行って下さい」
彼女は、きつとK誌の何冊かを持ち帰るだろう。

×

×

しかし私は、この後を書いていない。病状が悪くなって入院したためだろうと思いついてみた。

病人のたわ言集である。

手 帖 雑 報 欄

沼 正 三

二四五 江崎誠致「尻」（文学界三四年新年号）女出入で不具者にされた男が、有閑マダムの要求を満たして金を得たことに自信を持ち、舐め屋というのになる。最後に「吸い着いて」とか「自分の口を売るために女をさがす」とかいった愛好者向きの文字がある。

二四六 小野善弘「しつぽ」（『もうひとつの夜』東京ライフ社・所収）ゲイものの作家の短篇だが、畜化空想を諷刺的に扱っている。しつぽが生えて来て、犬的心理になるのだ。周りの者もそれに反応する。恥じて写真を避けていると恋人が来る。ライターを取り出す。

実は隠しカメラでしつぽを写そうというのだ。ある記者はチョコレートを座敷に投げて、とびついてしつぽを握るところを撮る。やがてサーカスに入る……

二四七 中河与一「続探美の夜」雑報一九〇の続編。ナオミのモデルおすえとの交渉は手帖新稿第四章の参考資料となるであろう。

二四八 漫画・塩田英二郎「古亭主」（週刊サンケイ新年号巻頭色刷口絵）大して珍らしくもないが、手帖新稿第三章の参考に。なお旧第七三項参照。

二四九 映画・毒蛇のお蘭（新東宝）本誌二月号には縛られ女優映画にあげてガッカリするとあったが、むしろマゾヒストに楽しい書生を欺して盗みの手引させ、主人に射たれてるのを見捨てようと、裾にすがりつくのを蹴放して「往生際の悪い男だね。妾の身体を知ったのを冥途への良い土産にして、未練残さず地獄へお行き」と罵るあたり、毒婦の好きな方に向く。ヒロインの小畑絹子は、バラと女拳銃王（新東宝）では、ピストルの名手としての活躍も見せる。

ス
リ
ル
の
報
酬

久留木 栄

一
眼に見えない糸にたぐられるというのは、
こんな場合のことをいうのであろうか。

ラジオが、春の夕べにふさわしいムード・
ミュージックを流し出すと、気が落付かず、
ソワソワせずにはいらなかった。芳枝は何
かに追われる者の様に、黒い外出着に着替え
て廊下にすべり出した。扉に錠をかけるのも
もどかしく、ハイヒールの足音を忍ばせる様

にアパートを抜け出し、大通り迄出て、始め
てホッと一息ついた。

“自由になった”そう思う。やや蒼ざめた
頬、黒い瞳、その妖精のように輝いた眼差し
に、チラリとかげりが見える。薄ら笑いが、
謎のように浮くとふっと消えた。

それから芳枝は、いかにも不満足といった
黒猫のような姿で、夜道を歩き始める。

黒のワンピースに黒のハイヒール、手に黒
革のハンドバック。この黒づくめの服装が、

一際彼女の美貌を浮き上らせ、黄金色のネッ
クレスとブローチが、耳と胸に静かな輝きを
みせて、上品に全体の調和を引締めていた。
まるで風に乗ったように、道の片隅を音も
立てずに歩いて行った。幾つかの辻を折れ目
抜通りへ出ると、喫茶店トワイライトの扉の
前に立ち止った。四方を見廻して一呼吸、ス
イと扉の内へ身を入れた。

「コッファイー オーレ」

一番奥の隅の席に座を占めて、彼女はウエ
イトレスに小さな声で注文すると、卓の上に
あった新聞で顔を隠すようにした。

“悪い女”芳枝は自分をそう判断する。

“人妻である自分が、浮気に似た行為をする
為に今夜も誰かを待っている。”

人から批判されても当然である。もし夫に
知られたら、どんなに叱責されても文句はい
えまい。

でも、でも淋しくってたまらないんだも
の。

芳枝は良心に抗議する。芳枝の夫はアメリ
カ航路の機関士である。一旦出港すると、二
カ月、三カ月の航海はザラで、その間たった
一人きりで長期の留守を強いられる淋しさ。

その淋しさ、頼りなさを紛らす為の外歩き
が、旧友、園部伊都子に逢ってから唯の外歩
きだけではなくてしまった。伊都子はバ
ーのマダムに納っていたが、芳枝の悩みに手

軽に同情して、店へ来る客の一人に紹介してくれた。その夜の芳枝は時刻の経つのも忘れる程に愉快に過すことが出来たが、それが病みつきとなって、それから屢々伊都子に紹介を頼む様になってしまったのである。

然しどういふ積りか、伊都子は毎回変った男性を引合わした。彼女にはその真意は判らなかつたが、判ろうとも思わず、却って「今日はどんな人かしら？」と期待を楽しむ様な気持にすらなっていたのだった。

二

「少しスリルに富んだ、若い人居ない？」

「困った奥さんネ、むつかしい事ばかりいつてサ、とにかく今夜六時、トワイライトの奥で待ってて頂戴」

今朝の電話で、そういった伊都子のねばっこい声がまだ耳に残っている。

「遅いわねえ」

彼女の小型の腕時計は六時を二十分も過ぎていた。

「どうしたのかしら」

少し焦れて入口を見やると殆ど同時にツカツカと彼女に近づいて来た青年があった。

「あらっ」

彼女は小さく声をあげた。青年がニコツと笑った。

「しばらくでした」

「……」

「その節はどうも失礼」

「貴男ですの？伊都子さんからの……」

「そうです、僕からマダムに頼んだのです」

「そうなの」

芳枝は少し気落ちした。この青年は以前一度付合つたことがあったのだ。だから詰らないという訳ではないのだが、この青年は余りにも紳士的なのだ。スリルを感じないのだ。今迄紹介された男性は、殆ど例外なく最後には求めてくるものがあつた。その誘惑の手が強ければ強い程、スリルも激しく感じられ、その手を振り払つた場合の勝利感、人妻としての立場を守り抜いた誇らかな気持が深く味えるのである。そんな気分を味う為のアバンチユールであるのに……。それがこの青年に限っては例外であつた。幾ら酔つても、唇一つ求めようとしないのである。頼りない程、紳士的態度を崩さない男だつた。若いくせに、と彼女はあの時、自分自身が焦れたことをハッキリ覚えていたのだ。気落ちした原因もそこにあつたのだ。

青年が向い合つて腰を降した。

「僕がお相手ではお気に召しませんか？」

「……私、スリルを求めていますのよ」

彼女はズバリといって青年の顔を睥睨した。

二十七、八と見える、好感の持てる童顔に逞しい体格の持主であるが、取って三十才の彼

女には未だネン、ネンと思えて仕様がなかつた。尤も、子供もない彼女は他人には二十六才で通していたし、事実若々しい彼女の美貌はそれ以下にさえ見えた。

青年はニンマリと笑い乍らいった。

「承知しています。マダムからもよく聞きました。僕も今夜は多少スリルを味わいたいと思つて来ました」

「そう、この前はダンスでしたわね、今夜は何？ お酒？ ストリップ？」

彼女はわざと露骨な表現を使った。然し青年は平然と微笑を消さなかつた。

「お酒もストリップもいいでしょう。けれど折角の希望ですからもっと烈しいスリルを差上げましょう」

「何よ、その烈しいスリルって」

「フッフ……ひよつとしたら命迄貰うかも知れませんよ」

「エッ！」

「怖いですか？ 怖かつたら今夜のデートは止めても良いんですよ、今の内だつたら……」

青年はからかう様にいつて、芳枝の瞳をのぞき込む様にした。彼女はグツときた。

「ホッホ……お手並拝見させて戴きますわネ」

ワザと、はすっぱに応じてから、少し興味の湧き上るのを憶えた。

「怖くないですか？ そうですか、けれど途中でもう嫌だなんていつても駄目ですよ」

「ホッホ……御心配なく。どうぞ御存分に、貴男になら切りきざまれても本望よ」
彼女はからかい返す積りで、艶然といい切

った。「なによ、子供のくせして、ナマいってわ」という気持が多分に作用していた。
「ほんとうですね……」



念を押す青年の眼がキラリと光った。

三

人が酒を飲むのか、酒が人を飲むのか。

薄暗い照明にかかわらず、何処か明るさを感じさす店、バー・ヒョーヌンボのボックスに腰を降した時には、もう芳枝はかなり酔っていた。

「ヒョーヌンボって面白い名前ネ、確か主人が何時か、ヒョーヌンボというのは南九州の方言でカップパの事だよって教えてくれたことがあったワ」

彼女は、青年の肩にもたれ掛って、混濁した頭の隅でそんなことを想い出していた。

「酔いましたか？」

青年の声が頭のすぐ上でした。

「三軒目ネ」

「そう、三軒目」

「これ位で酔うもんですか」

芳枝はグラリとする上体を起すと、これ見よがしにテーブルの上のグラスをとった。キッス・オブ・ファイアという名のカクテルが白い彼女の喉を波打たせて一気に流れこんで行った。

「お代り頂戴！」

バーテンと和服の女が、驚いたように顔を見合せて彼女を睥めた。青年はチラッと流し目を注いだだけで平然と煙草の煙を吐き出し

ていた。

二杯、三杯

芳枝は意地になって次々とグラスを空にした。酒はもう、只にがいばかりだが、この青二才の貴公子然とした態度に対抗するには、何か飲まずには居られない気持だった。

「ネエエ、ボウヤ！ あんたのいうスリルって何さ！ こんな酒場なんて、幾ら廻ったってスリルなんかないじゃないノ」

少々焦れて来た彼女に、青年はニンマリと笑顔を向けた。

「そう急いで、痛い目に遭いたがることはないでしょう」

「マア！ いったわね」

彼女は又ぐいっとグラスを傾けた。

二人がもつれる様にして外に出たのは、夜も相当に更けた頃であった。

四

芳枝は五体が何ともいえない様な苦しみを感じて目がさめた。頭の芯がズキズキする。喉が痛い程ひりついている。

「此処は何処？」

彼女は起き上った。ベッドの上である。枕元に小卓があつて水差しとコップが乗っている。グーッと一息に喉を潤おす水に、やや生気を得た様に部屋の中を見まわした。家具類がキチンと揃っている明るい洋室である。天

井に螢光灯が埋めこまれあつた。

彼女は痛む頭で回想につとめた。何軒か酒場を廻つて、カップ、そうヒョーヌンボつて酒場でガブ飲みをして、青年に抱えられて出た事は覚えてゐる。それから車に揺られて寝込んだ様だ、後はいくら考えても判らない。あのボウヤはどうしただろう？ 私をここへ寝かしたのはあの人に違いないけど……フンあのボウヤ、スリルの何のって偉そうなことをいってサ

そう思い乍ら、ハツとして起き上った。もしや、自分の知らぬ間に、と思いついたからだが、服装は少しの異常もなかった。彼女は拍子抜けした様にグッタリと傍らの椅子に腰を降そうとしたが、まだ酔が醒めきっていないのか、足がもつれて椅子と共に大きな音を立てて横転した。彼女は痛みを感じるよりおかしくなつて、床に倒れたままクククッ笑つた。目の前に投げ出された左手首の時計が三時を指していた。

扉が開いて誰かが這入つて来た。彼女はハツとして上体を起した。あの青年であつた。「おや奥様、お目覚めですか、何をそんなに暴れてるんです？」

彼は昨夜のままの服装である。

「ここは何処？」

「私の家ですよ」

「御家族の方は？」

「私一人です」

「そう、お世話かけましたわね」

「いいえどう致しまして、これもスリルを追う為ですから」

「エッ？」

「奥さん、お約束は忘れていないでしょう」

「……………」

「私は奥さんのお約束を果たすために、お目覚めになるのを待っていました」

「ア、アナタは……………」

「そうです、お寝みでは折角のスリルも感じられないですからネ」

青年は、じりっと彼女に近づいた。彼女は本能的に胸を抱いて身を引いた。青年の腕が彼女を捉えようと伸びて来た。彼女は斥いてこれを避けた。青年がパツと飛び掛つて衿に手が掛つた。ピリッと音を音で彼女のワンピースが裂けた。彼女は本当の恐怖を感じて必死の力で抗つた。服の破れは大きくなつて白い背中をみせていた。突然肩を突かれて彼女は床にうつぶした。その背へ青年の膝が乗りかかつて行つた。手に綿ロープが持たれていた。

五

部屋の中程に三面鏡が引出されて開かれてあつた。その鏡面に映っているのは芳枝自身のみじめな姿だった。ズロースとナイロンス

トッキングだけを残して、その以外の衣類は皆床に落ちていた。

豊かな、白い肌に埋まる様にロープが幾重にも喰い込んで、彼女の両腕を背中に高々と固定していた。白い木綿の手拭が口を覆ってフックラした彼女の頬にも深い溝をつくっている。

壁の棧から棧に張り渡した太いロープから垂直に下った綿ロープに、彼女の体が揺れている。その揺れる体、青年の手にある皮バンドが飛んだ。辛ろじて爪先立つ白い肌は、押し殺した様な呻きを洩してクルクル廻る。

ビシッ！ビシッ！

芳枝は自分の肌が音を立てる度に、身を反らし、屈め、くねらしてその痛みをそらそうとした。無暗と涙が頬を伝う

「この人は本当に私の命をとってしまつつもりだろうか」

縛られた上半身がしびれて、自分の体でない様な気がする。

「苦しい！ もう堪忍して！ やめて！ 許して、許してえ！」

芳枝は、そういつて目茶苦茶に暴れた積りだった。しかしそれは声にはならず、白い肢体が妖しげな曲線を描くだけだった。

ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！

皮バンドは容赦なく、滑らかな肌に縦横に紅の痕を印して行った。

しばらく後には、打たれても体が勝手にピクンと応ずるだけで、最初の様な激痛は感じなくなってきた。

青年は皮バンドを捨てた。近よって来て吊っているロープを外した。

グッタリと崩れる彼女をベッドへ抱え上げて放り出した。然し後手のロープは解いてくれなかった。

彼女は怨めし気に青年の顔を睨んだ。

青年は、椅子をベッドの傍へ引いて腰を降し、ニコリと彼女の顔をのぞき込んだ。

「どう？ 奥さん、少しは

応えましたか？ 悪女の報ってとこですナ」

「奥さん、貴女のしていることがどんなに危険で、どんなに御主人の愛情を裏切ることか、ってことを、考えたことありますか？ 御主人の小川君は航海中絶えず貴女の事を想っているんだ」

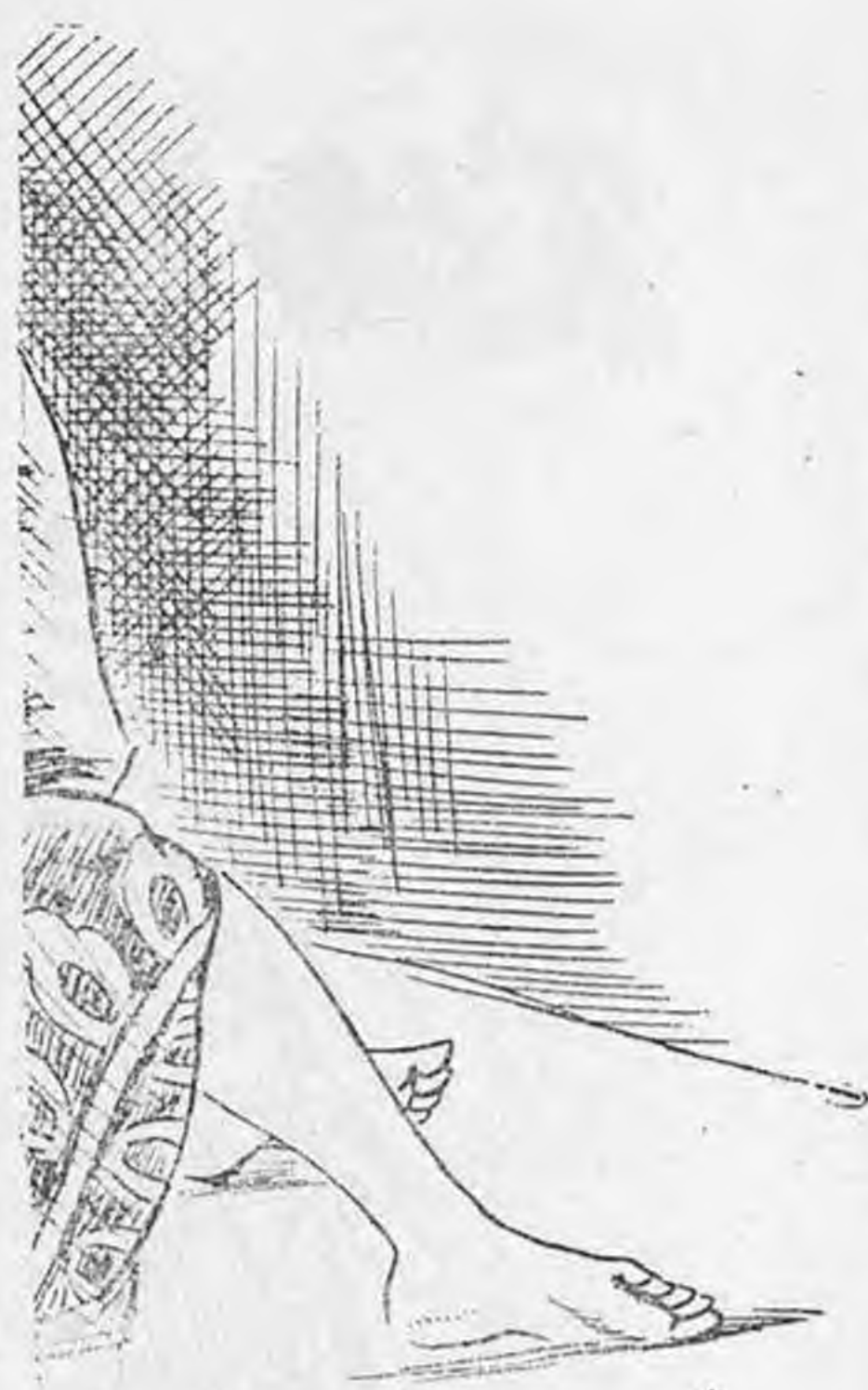
「この人は私の素情を知っている」 芳枝は愕然として眼を睜いだ。

「僕は貴女のこととは良く知ってます。理由は、いずれ判るだろうが、とに角、この苦しみを罰と思って、今後は危険な火遊びじみたことはお止めなさい。僕も偉そうな口を利ける柄ではないが、もっと愛情を唯一人の御主人に注ぐべきです。二ヶ月や三ヶ月の留守居が何です。世の中には船員の妻は沢山いるんだ。淋しいのは貴女だけじゃない。御主人も同じ淋しさに堪えているんだ」

青年の言葉は、痛烈に彼女の心に突き刺さっていった。芳枝は溢れる涙を流し乍ら、体中で荒い息を吐きつつ、その言葉を聞いた。皮バンドの鞭、縛られた縄目の痛さの、数十倍の痛さを持つ言葉の鞭だった。

「その体の中に住む毒虫を叩き出してあげましょう」

スックと立ち上って、青年は再びバンドを握った。振り上げた。打ち降した。肌が激しく悲鳴を上げた。豊かな体がググッと悶えた。しかし、不思議と心は左程の苦痛を感じな





奇妙な苦痛を夢中で憶えている彼女は青年が何時の間にか部屋を出て行ったのに気付かなかった。

(6)

「つらかったでしょうね」

伊都子の介抱を受けながら、芳枝は静かに微笑して、羞しそうに蒲団を引上げて顔半分を隠した。

青年が出て行った後彼女は、自分が縛られた儘、放って置かれていた不安も感じない程今迄の行状を後悔していた。窓から朝日の射し込む頃になって、始めてうろたえ出した。

そんな時、園部伊都子が這入って来て縛めを解いてくれたのだった。

「まさか、こんなにひどくするとは思わなかったもの、御免なさいネ」伊都子はそういつて謝った。そして青年のことを話してくれた。

青年は青年ではなかった。芳枝の夫の同窓生で、年令も夫と同年の三十五歳、外交官でいつもは外地に居って、時々仕事の関係で帰国するが、現在は奥さんも向うに連れて行っていること、伊都子から聞いて、友人の奥さんに忠告の意味で一思ひ知らしてやるといい出したこと、等であった。

「どう？ 懲りた？」

伊都子はいたずらっぽく笑いかけた。

「まあいや………けれど本当に間違いない内に、身に沁みる忠告を戴いて良かったと思うワ」

「そうね、あの人も今時分、飛行機の上で思ひ出してるわよ」

「まあ、もう発たれたノ？」

「ええ、今朝早く、羽田から」

芳枝はホーっと溜息をついた。憎い、そして有難い想いであの童顔を想い浮べた。するとその顔にダブッて夫の笑顔が現れて来た。「貴男、済みませんでした。今度お帰りになったら、今迄の罰にうんと叱って下さいネ、縛って、叩いて頂戴ネ、私どんなお仕置でも喜んで受けますワ」

芳枝は胸の中で夫に呼びかけた。その顔は晴れ晴れと明るかった

(完)

った。
バンドは次々と降った。心と完全に分れた様に、白い躰だけが、芋虫の様に後手に縛られたまま、クネクネと悶え苦しんでもがき廻り、ズシリッとベッドから転げ落ちた。

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

恨みに燃える眼

うす汚れた灰色の部屋だ。壁も天井も、すっかり古びてくすんでいる。

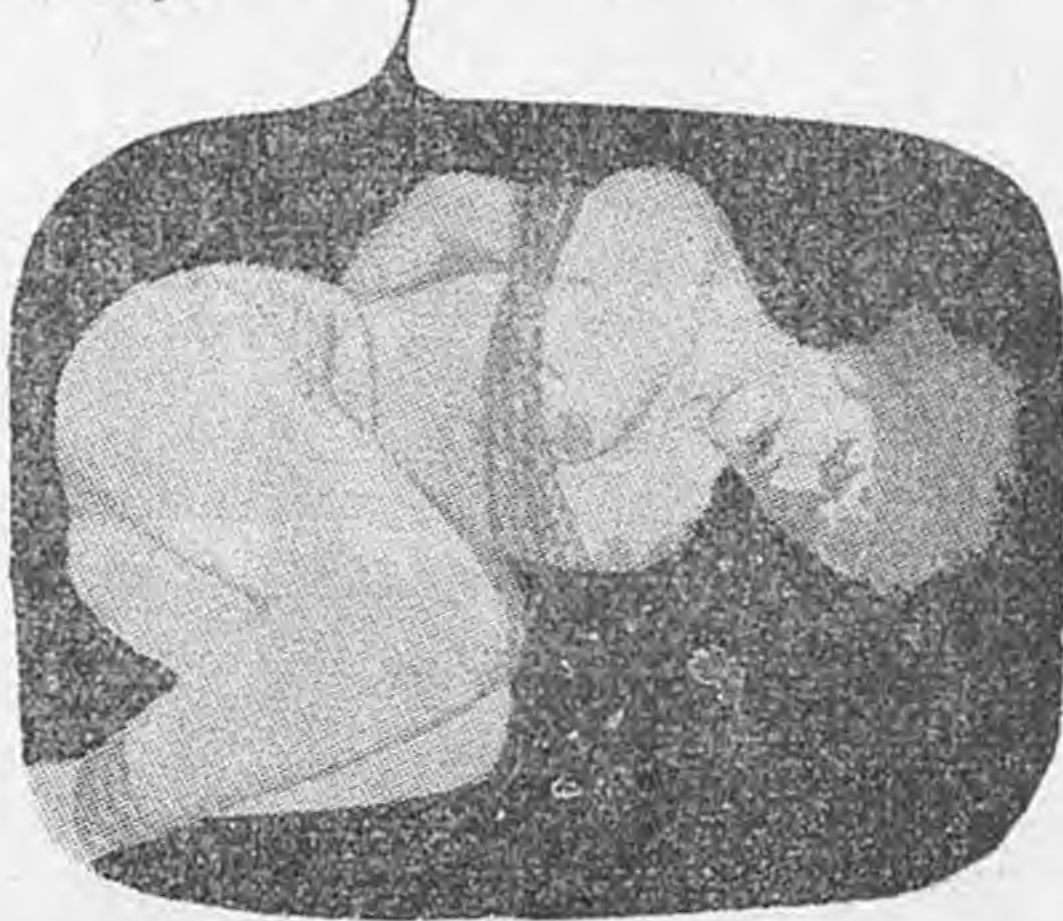
部屋の中央には、テーブルが一つ。頑丈な木の椅子が、三、四脚。それから、壁にそって、これもひどく時代がかったベッドが一台、どっしりと据えてある。

Toyo



乳房に火をつけるな

藤木仙治



北条哲夫は、その椅子の一つに腰をかけ、ゆったりとタバコをふかしていた。

哲夫は、黒いメガネをかけている。細おもてで、女のように色が白い。おまけに、彼の唇は妙にツヤツヤと光っている。それが、哲夫の風貌を病的なものにみせていた。

彼はいま、女のくるのを待っているのだ。おもての道路に、車のとまる音が、かすかにきこえた。

(きたな……)

哲夫は、その青白い頬に、ニヤリと微笑をうかべる。

やがて、廊下に足音がした。

ドアがあく。

はじめに、一人の若い女が、背中を突きとばされて入ってきた。

金次と順吉が、その女のうしろから現われた。金次は、手にドスを握っている。いま、この娘を誘拐してきたところなのだ。

「——兄貴、おそくなってすいません。なにこの女、バカにあばれやがって……」

金次は、哲夫にペコリと頭をさげた。

「うむ……」

うなずいた哲夫が黒メガネの奥から、じっと娘の顔をみつめた。

「フフフ……。千絵子、大きくなったな。いい娘になったじゃないか」

娘は、自分の名をよばれて、ギクリと哲夫にむきなおった。

「あんた、誰？ あたしをどうしてこんなところに連れてきたの！

あたし、こんな乱暴されるいわれはないわ。帰してよ！」

「いやだよ」

哲夫の赤い唇が、ゆがんでこたえる。

「あたしが、星島大五郎の娘だということ、知ってるのね」

千絵子は顎をつきだし、傲然といった。

「知ってる。星島の娘だから、ここへ連れてきたんだ」

星島大五郎とは、銀座の星島組の親分である。たびたびの暴力団狩りで、ヤクザ共も、うわべは影をひそめたかにみえるが、裏へまわれれば、まだ隠然たる組織と勢力を保持している。

千絵子は、その星島組のボスを、父にもっている。

「あんた、誰なのよ。その黒メガネをとったらどう？」

「ウフフ……。あわてなくとも、すぐわかるよ」

哲夫は、金次と順吉に目くばせをした。

「へい……」

二人は、いきなり千絵子にとびかかった。

「なにするのさ！」

千絵子は叫んでたじろいだ。

金次の手が、千絵子のコートにかかり、ブラウスをひき剥いだ。順吉の手も同時に千絵子のスカートを、荒々しくひき裂く。

「いや！ バカ！ なにすんのよ！」

千絵子は気丈に抵抗する。手足をめちやくちやにふりまわす。爪をたてて、男の顔をひっかく。

「うるせえ！ 静かにしろ！」

哲夫が椅子から立ちあがり、千絵子の両頬を、いきなりパシパシとなぐった。すさまじい力である。

「ぐッ！ ……」

と、息をのんで、千絵子は抵抗をやめた。恐怖に顔がひき吊る。

パンティ一つにされた。

「ああッ……」

千絵子は、胸の乳房を両手でおおい、前こごみにうずくまった。

「縛れ！」

哲夫が、次の命令を発した。

金次はうなずくと、用意した縄をびゅうっと宙にしごいた。

順吉は千絵子を俯伏せにおさえつけ、その白い両腕を背中にねじあげた。

「痛ッ……」

千絵子の顔が、はげしくゆがむ。その手首を、うしろで交叉させ一つにして縛りつける。さらに、二の腕から胸へ、ぐるぐると巻く。

金次は、前に運送会社の運転手をやっていたことがある。荷造り

はお手のものだ。縄さばきがうまい。

「ひいッ……」

千絵子はあえぐ。乳房の上と下に、縄が、キュッキュツとしまるのだ。素肌に喰いこむ縄の非情さ。背中にくりあげられた手首がちぎれそうだ。

「うむ、それでよし」

哲夫が、満足げにうなずいた。

千絵子は髪をみだし、肩で荒い息をついてべったりと床の上に坐っている。うつ伏せになっているのは、乳房をみられるのが恥しいからだ。

さっきの傲慢さは、すっかり消え失せている。二十歳の娘だ。ヤクザの世界に育っても羞恥心はある。

哲夫は、金次から縄尻をうけとった。

「立て！」

その縄尻を、ぐいと上にひっぱった。背中の手首が、ぐぐぐッ……と肩のあたりまであがる。

「ああッ、痛ッ……」

よろよろと千絵子は立ちあがる。真っ白なパンティ、その下にゆたかに伸びた形のよい脚……。それが金次と順吉の眼に、強烈な刺激となって映った。

「床の上に坐ると、冷えるからな。まあ、椅子に腰かけろよ。固い木の椅子で、ちょっと気の毒だが……」

哲夫は、千絵子の胸を小突いて、椅子に尻を落させた。

それから、また縄をとりだし、千絵子の身体を、動けないように椅子の背にグルグルくりつけた。両足首もそろえて、椅子の脚に縛った。もう立つこともできない。

ゆたかな二つの白い隆起が、苦しげにふるえている。胸をしめつける縄が、呼吸を圧迫するのだ。

「こ、こんなにひどく縛って、あたしを、どうしようというの！」

わずかに残る勇気をふりしぼって、千絵子は哲夫をにらんだ。

「フッフ……。苦しいか、千絵子。おれの美佐も、お前のおやじのために、そういう目にあわされたんだ……」

哲夫の赤い唇が、唾に濡れて、ヌメヌメと光った。

ギクリ、と千絵子の肩がうごいた。

（この黒メガネの男は、いったい誰なんだろう……）

不気味な男。おそろしい男だ。声だけは、どこかできいたことがあるようなのだ。

「——千絵子。おれだ。よく顔をしろ！」

哲夫は、やっと黒メガネをはずした。

「あッ……」

千絵子の眼が、とびでるほどまろく見ひらいた。

「しばらくだなア、お嬢さん……」

「あ、あんたは、哲、哲夫！……」

「そのとおり、北条哲夫だ」

「い、い、生きていたのね！」

「そうだ。生きていた。幽霊じゃないぜ。このとおり、足はたしかに二本ある……。だが、一度はたしかに、お前のおやじのために、殺された男だ……」

哲夫は、その青白い顔を、千絵子の鼻さきに寄せた。そして、恨みに燃える眼で、千絵子をにらみすえた。

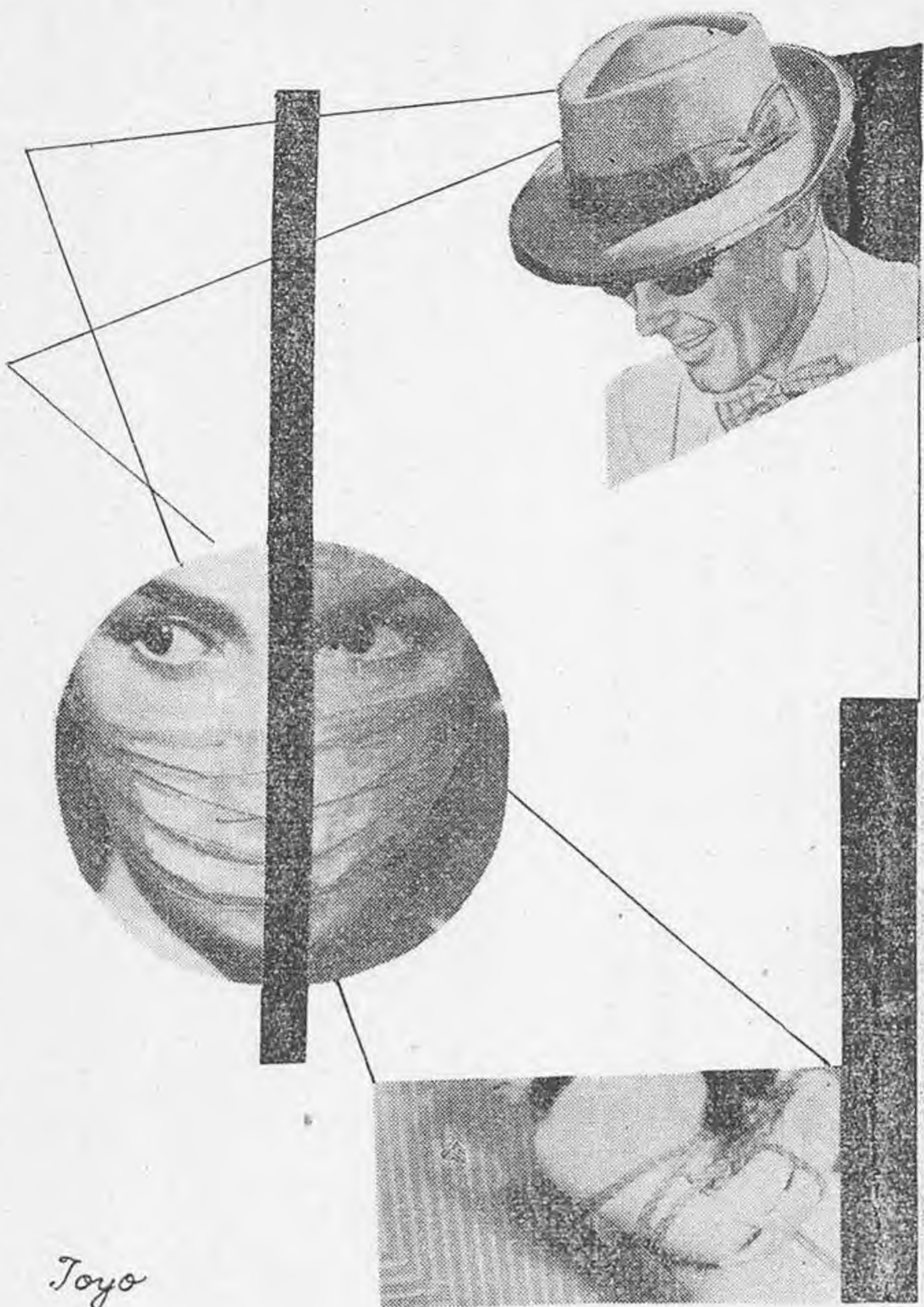
ヤクザはヤクザ

——話は、三年前にさかのぼる。

その頃、哲夫は、銀座の星島組では、大幹部の一人として、いい顔であった。

腕っぷしは強いし、どこでおぼえたか拳銃さばきもうまい。度胸

があつて、しかも大学をでていて頭もきれ。
だから、親分の星島大五郎も、哲夫には特別に目をかけて可愛が
っていた。
当時は、星島組の全盛時代で、銀座周辺にキャバレーやバー、パ
チンコ店を経営して、羽ぶりをきかせていた。哲夫の頭脳と才腕は



これらの店の近代経営に、なく
てはならないものだった。
——ところが、その哲夫が女
に惚れた。
相手は、東銀座裏の喫茶店で
働らく、美佐という娘である。
銀座で働らく娘にしては、ひ
どく清純な感じであった。その
容姿の清潔さ、ういういしさに
哲夫は心をひかれた。
女に惚れると、男は強くもな
るが、弱くもなる。哲夫は急に
ヤクザの自分が恥しくなった。
暴力団が経営するキャバレー
商売なんて、先がみえている。
利口なだけに、このへんが足の
洗いどきだなと彼はさとした。
「——社長。実は、ちょっと、
お願いがあるんですが……」
ある日、哲夫は大五郎の前に
膝をそろえた。大五郎は、子分
たちに、自分を社長とよばせて
いる。

「なんだ、改まって……」
でっぷり肥えた腹をつきだし、大五郎は警戒するような眼で、ジ
ロリと哲夫をみた。
「実は……あたしを、退社させて頂きてえと思ひまして……」
さすがに、哲夫も、いいだしにくかった。

「足を洗わせてくれというのか？　おいおい、冗談じゃねえぜ。いたい、どうしたっていうんだ？」

「へえ……。それが……」

哲夫は、美佐のことを話した。

大五郎は、しばらく考えていたが、

「ふむ。お前ほどの男を、そんなに夢中にさせた女に、おれも一度逢ってみたいな。いやなに、その上で、おれも氣にいつて、この娘なら、お前の女房にしても大丈夫だということがわかりや、世帯をもつ費用からなら、全部おれがだしてやろうじゃねえか……」

「へえ……」

表面だけをきけば、ありがたい言葉だ。だが、哲夫は、もう大五郎とは、スッパリ手を切りたかった。

そんな余計なことはしなくてもいい、かえって迷惑だ……と、いたかったのだが、そうもできない。星島組をやめるに際し、いくらかまとまった金も欲しかった。退職金というわけだ。それには、大五郎を怒らせてはまずい。

その翌日の夜十時――

哲夫は、銀座八丁目のバー「深海魚」へ、美佐を連れていった。

大五郎に逢わせるためである。

このバーも、星島組の経営であった。

「――なんだか、暗いお店ね」

と、美佐が不安な表情でいった。つまずきそうになって、哲夫の腕にすがりついた。

「名前が『深海魚』っていうんだからね。海底の感じをだすためにわざとこうして青く暗くしてあるんだ」

哲夫は、苦笑してこたえた。きわどいサービスをするための照明なのである。

マダムの夏代がカウンターのなかから、哲夫にウィンクをした。

このマダムは、大五郎のメカケである。だが、哲夫に気があつてときどき、あやしげな誘いのポーズをみせる。

約束の時刻に、十五分ほど遅れて、大五郎が姿をみせた。

「――おお、いい娘さんじゃないか。さすがに、哲の目はたかい。よし、結婚のしたくから、二人が住む家の世話まで、おれがみてやろう……」

美佐をみて、大五郎は豪腹な口調でいった。白粉けのない素肌が大五郎の眼にも新鮮だった。

「ありがとうございます……」

うれしそうに口もとをほころばせ、美佐は素直に頭をさげる。

大五郎は、眼をほそくして、美佐の胸から腰のあたりを、なめまわすように眺めた。

哲夫は、その時の大五郎の眼の色に、かすかな不安と危惧をおぼえたのだが……

それから、三日ばかりたった夜――

哲夫は、大五郎の命令で、芝浦の海岸べりにある倉庫へ、荷をとりにいった。

荷とは、密輸の洋酒である。一仕事終えて、暗い岸壁でタバコを吸っていた哲夫の耳もとに、

「ビューン！……」

と、不気味な音がかすった。

（消音拳銃だ！）

ガバと身を伏せると、三人ほどの黒い影が、倉庫脇の暗がりから現われた。ものをもちわず、哲夫の脇腹に、ドスをつっかけてくるのだ。

「くそ！　てめえら、どこのもんだ！」

危く身をかわしながら、哲夫は相手の顔をわずかな月光にすかしてみた。

「あッ、きさまらは！」

おどろいた。哲夫と同じ、星島組の幹部、鶴松、啓介、玄太郎の三人だ。

「フフフ……。わかったか。社長の命令なんだ。かくごしろ！」

「ど、どうして親分が、おれを殺すんだ！」

「親分はな、おめえのイロの、あの美佐とかいう小娘に、ゾッコンまいったのよ。そこでお前が邪魔になったんだ！」

鶴松が、ちよっとばかり、気の毒そうな顔でいった。

「いまごろ、親分は、美佐と——フフフ」

啓介が、からかうような、ふくみ笑いをした。

「あきらめな、哲！」

玄太郎が、その大きな身体ごと、ドスを突っかけてきた。この三人、かねがねから、若い哲夫が、星島組で兄貴風を吹かしているのを憎んでいた。

「そうか、そうだったのか！」

血を吐くような声で、哲夫はうめいた。全身の血が、音をたてて逆流した。

いくらかきれいなことをいったって、やっぱり、ヤクザのやることはヤクザだ。

おれが、あまっちよかった！……。

哲夫は、がっくりした。その隙に、三人のドスが、いっせいにひらめいた。

「ああッ……」

哲夫の身体は、高いコンクリートの岸壁から、暗い海面へ、まっさかさまに落下していった……。

ボスの奸計

同じ時刻に——。

大五郎は、おびえる美佐を、じりじりと部屋の壁ぎわに追いつめていた。

「ウフフ……。もう、あきらめろ。わめいても、あばれても、こは地下の密室だ。誰も助けにきてはくれないぞ」

星島組の経営する、キヤバレー「ダスカ」の地下室である。

「哲夫さあん、哲夫さあん！……」

美佐はわめき、恐怖におののきながら、壁伝いに逃げまわる。ドアのノブを必死にまわす。あかない。鍵がかかっているのだ。

「ああッ……」

おそろしさに涙もでない。

哲夫から、逢いたいから「ダスカ」までくるよ……

があった

のだ。きてみると、哲夫の姿はみえず、かわりに大五郎が現われて迫ってきた。哲夫からの呼びだしは、偽であった。大五郎の奸計なのである。

「助けて！ 助けてえ！」

声がかすれる。足がもつれる。ついに壁の隅に追いつめられた。

大五郎の手が、美佐の右手首を、ぐいとかむ。それを大きくねじりあげる。

「あ、痛ッ……」

美佐の身体が、くろりとまわる。よろめくところを、足をかけて床の上にひき倒す。

「ウフフ……。そうあばれるな、わしが疲れる」

だが、そのものがく手ごたえが、大五郎には楽しいのだ。猫がねずみをもてあそぶような心理で、美佐の両腕を、じわりじわりとうしろにねじりまわす。

大五郎の手には、いつのまにか縄が握られている。片膝で、美佐の背中をガッチリと踏み敷き、両手首をギリギリと縛った。

「ううッ……」

腕の骨が、へし折れそうな痛さ。

「ソラ、ソラ。あばれると腕が折れるぞ」

乳房の上に、縄がかかった。三巻き、四巻き……。もう腕もうこかせない。美佐は、絶望に、眼の前がまっくらになった。

（ああッ、縛られたら、もうおしまいだ！）

スカートの裾がみだれ、白い脚が、大五郎の眼に、さらけだされた。陶器のような、なめらかな肌。そして、若々しい弾力を秘めてもがくたびにふるえる。

ゴクリ……と大五郎の咽喉が鳴った。酒焼けのした、太い首だ。

「哲夫さアン！……」

美佐は、悲痛な叫びをあげた。映画なら、ヒロインの危機に、突如として青年の救いの手が現われる場面なのだ。

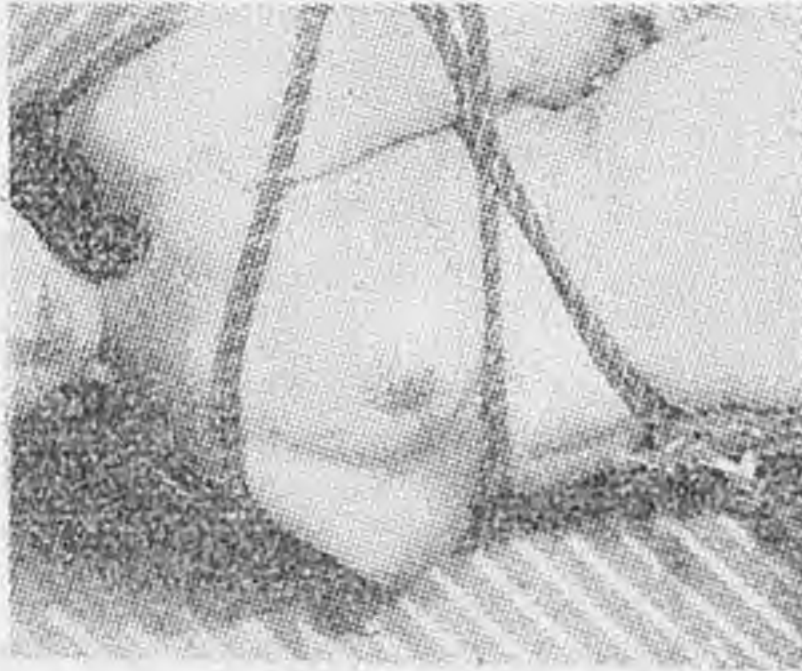
「うふふふ。その哲夫は、いまごろ、身体じゆうに穴をあけられ、東京湾の水に、ドンブリと投げこまれているよ……」

「ええッ」

思わず、美佐は立ちあがる。うしろ手に縛られたまま、無駄とは知りつつ、ドアのほうへ駆け寄る。

床にひきずったその縄尻を、大五郎の足がぐいと踏まえた。美佐の身体が、ガクンととまり、反動でうしろへひっくり返った。

ずしん！……と、尻もちをつき、二本の足が宙にハネあがり、またスカートがまくれあ

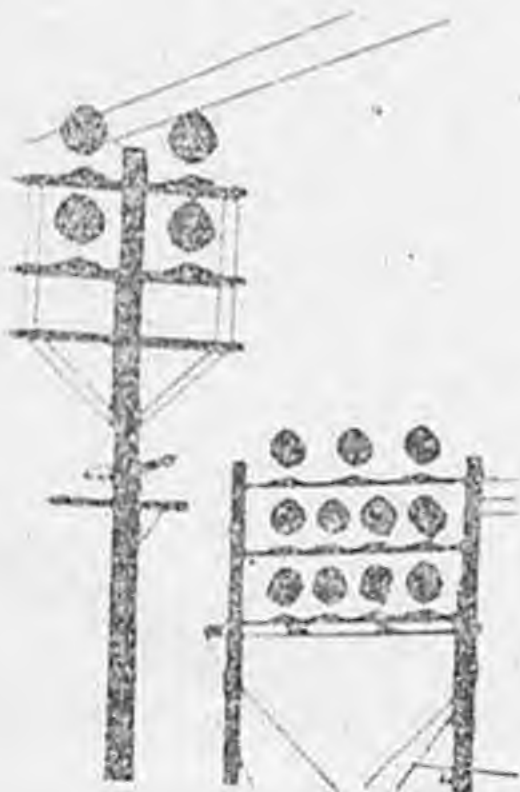


がった。むざんな光景である。

「ふふふ……。可愛い娘だ……」

大五郎は、美佐の髪をつかみ、その顔を上にねじむけた。

Toyo



「う、ううッ……」

つぎに、二本の指で、美佐の鼻の頭をつまんだ。

「ああッ……」

苦しさに、口をあける。その口の中へ、ハンカチをつめこむ。歯と歯のあいだに、ギユウギユウねじこむ。さらにその上に、手拭いで猿ぐつわを噛ませるのだ。

頬の肉に喰いこむほどに強く——そして頭のうしろで、ギッチリとむすぶ。

「むむ、むむむウ……」

美佐は、顔を前後左右にふって、その猿ぐつわをほどこうとしたが、しよせんは無駄であった。

「ウフフ……」 お前の眼は、大きくてきれいだ。だから、そうやって猿ぐつわをはめると、その眼がひきたって、よけいに美しくみえるのだ……」

大五郎は、鑑賞するように、眼を細めて、美佐の苦悶の表情を眺めた。みだれた髪の毛が、眼の上にも垂れさがり、可憐な美しさである。白い咽喉が、呼吸困難のために、ヒクヒクとうごく。

それから、大五郎は、美佐を抱きあげた。

「どっこいしょ。おお、だいぶ重いな」

そのやわらかい持ち重りを楽しむように、抱いたまま、室内をひとめぐりした。美佐にはもう抵抗する体力も気力もなくなっていた。部屋の片隅に置かれてあるベッドの上に、美佐はどすんとおろされた。

「むッ、むむむウ……」

縛られた乙女は、そのスプリングの上で、ぶざまな姿態で大きくはずんだ。

縄目の喰いこんだ胸が、せつなげにあえぐ。

「哲夫のことは、もう忘れろ。おれは、お前が気にいったんだ。わ

かったな……」

赤ら顔の醜い表情が、美佐の眼の前に、クローズアップされた。美佐は、そのとき、気を失った。

復讐 鬼

肩と腹を刺されて東京湾に投げこまれた哲夫は、いったんは水の中に沈んだ。

ふと、眼をあけると、船室の低い天井があった。救われたのだ。しかも、その船は日本を離れ、香港にむかっていた。哲夫を助けたのは、王竜元という麻薬ボスのひきいる密輸船だったのである。星島組から足を洗おうとした哲夫は、皮肉にも、ヤクザよりも、もっと悪質な国際麻薬団の中に、足を踏み入れた。

ヤケになった哲夫は、どうともなれとばかりに働いた。ここでも哲夫の腕と度胸と頭脳の敏速な回転が、モノをいった。

香港と日本の間を、官憲の眼を巧みにくぐりながら往復すること三年——。

そして、早くも哲夫は、麻薬ボス王竜元の片腕として、重要なポストについていた。

常に死と直面した危険な取引の日々……。そして、やっと少しのひまをみつけ、東京に姿を現わした哲夫である。もちろん、その胸には、炎のような復讐の誓いを秘めて……。

「——あれから三年、あの頃はまだ可愛らしい高校生だったお嬢さんが、こんなに色気づいて、美しくなろうとはねえ……。復讐のやりがいも、あろうってもんだよ……」

灰色の部屋のなか。

誘拐してきた千絵子を椅子に縛りつけ、哲夫はその顔に、フウ……とタバコの煙りを吹きかける。

ゴボゴボ……と千絵子はむせた。

「——で、兄貴。これから、この娘をどうするんで？」

金次がきいた。金次も順吉も麻薬密輸団の仲間で、哲夫の弟分である。

「まあ、あわてるな。あせってはつまらん。ゆっくりゆっくり、楽しみながら、復讐してやるんだ……」

哲夫は、落着いてウス笑いをうかべる。

この娘を、めちやくちやに責め苛むことによって、父親の大五郎が、いかに苦しむかが、みものである。ヤクザでも、親の情愛は世間なみだ。まして、千絵子の母親は、千絵子が幼ないときに病気で死んでいる。千絵子は父親の手で育てられた娘だ。

「——そう。それでわかったわ」

千絵子は、皮肉な微笑をうかべて、うなずいた。

「なにがわかったんだ？」

「あたしのいまのママは、ほんとに哲夫さんのお嫁さんになる人だったのね」

「なに！」

これには、哲夫もおどろいた。

「あら、知らなかったの？、その、美佐さんという女の人、いまあたしのおかあさんになっているわ。あたしより、二つ年上のママなのよ。とってもおかしいの。フッフ」

千絵子に、笑う余裕ができた。

「そうか。美佐は、大五郎の女房になってるのか！」

「お気の毒ね。ママは、いま、とっても幸福そうよ」

哲夫の顔色が変わったのを見て、千絵子は、小気味よげにいった。裸にむかれて縛られていても、ヤクザの娘だけに、不敵な土性骨がある。

「うぬッ、くそ！」

哲夫の頭に、カッと血がのぼった。眼の前の白い二の腕を、思わ

ずつかみあげる。

「痛いッ、なにすんのよ！」

千絵子は身をのけぞらす。胸にかかった縄が、ギシギシと喰いこんだ。縄のあいだの乳房が、むっくりと異常な形で盛りあがっている。

「大五郎一派に復讐するために、三年ぶりで東京へもどったおれだが、考えてみれば、娘のお前には罪はない。可哀そうだとも思うがこれも悪い父親をもった不運だと、お前もあきらめるんだな」

哲夫に、凄味の表情がもどった。薄い唇に冷酷な笑いがうかぶ。「そうよ。卑怯よ！女をつかまえて椅子に縛りつけるなんて、男らしくないわ！」

千絵子は戦慄した。白いなめらかな肌が、恐怖のためにザラザラになった。

「——兄貴。はじめにあっしらにやらして下さい。さっきからみていると、この娘、いやにナマイキで図々しくて、腹がたつてならねえ。いっちょよう、きれいな声で歌をうたってもらわなけりや、おれの気がすまねえ。まア兄貴はそこで、椅子に坐ってゆっくり見物していなよ」

順吉は、ドスのきいた声でこういうと、手に皮のバンドを引ぬいた。

それをふりかぶると、いきなり、千絵子の肩を打った。

ピシリッ……

白い肩に、たちまち一条の赤い線がくねった。

「むむッ……」

千絵子は、背をまるくして耐えた。

また皮バンドがうなった。

ピシリッ……

白い膚がもたえ、その勢いで椅子がうごいた。そろえて縛られた

太腿の上に、鞭の痕が走った。

「ああッ……ひいッ……」

背に肩に腕に腿に、順吉のふりおろす皮バンドは、狙うところに命中する。その鋭い苦痛に、牛乳を塗りかためたような白い腹のあたりが、ヒクッ、ヒクッとへこみ、ふくらみ、のけぞってあえぐ。

「あ、あ、あんたなんか、あたしになんの恨みがあるのよ！ひ、ひどいわ！」

唇を噛みながら、千絵子は順吉を睨んだ。

「ばっかやろう！兄貴の恨みは、おれ達にも恨みさ。兄貴の仇は、おれ達にとっても仇なんだ。わかったか。よし、こんどはおれがやってやる！」

金次が一步、前にでた。そしてタバコに火をつけた。プウッと紫煙を吐きだす。

と——そのタバコの先を、いきなり、千絵子の二の腕におしつけた。

「ひいッ、熱ッ……」

パンティ一枚の身が、電気にうたれたように、けいれんした。うしろ手の手首を、必死によじりあわす。だが、縄のとける筈はない。つぎに金次は、豊かに息づいている胸に、タバコの火をおしつけた。

縛られた女体ばかりの写真集

限定版『女体緊縛フォト・アラベスク』

定価 五百円(送料別)

堂々二月上旬完成予定

特アト六十四頁にぎつしりと詰った緊縛女体の確証。美人モデル嬢の艶麗な姿態は全頁に亘って絢爛と春の花の如く咲き匂う、限定版につき数に制限あり一般書店にては市販いたしません故、直接発行所へお申込み下さい。予約の方々は完成次第、第一番に急送申し上げます。

主な内容

(題名とモデル嬢)

鏡(かがみ) 愛川悦子
銘花二輪 花坂道子
鉄鎖 大塚啓子
諦観 大塚啓子

「ああッ、むむッ……あ、熱ッ……」

胸のけぞり、つきでた乳房が、ブルブルとふるえる。

「へへへ……。こいつはおもしろえや」

残忍なタバコの火は、つぎに千絵子の、ふるえる乳房をねらってせまった。そのとき哲夫が椅子から立ちあがっていった。

「待て。乳房に火をつけるな。そこは一番最後にしろ」——(未完)

庭園にて 絹川文代

謎のスマイル 田中芳代

(田代悠子表情集 その一)

凝視、流し目、軽い驚き、無視 田代悠子

誇る脚線美 田代悠子

この脚どうかしら 田代悠子

裏と、表と、愛川悦子

落陽の丘 絹川文代

「危惧」「困惑」「空耳」「退屈」「蜘蛛」やんちゃ」

ポリユムの花園 大塚啓子

豊かな双丘 豊かなヒップ 大塚啓子

緊縛感の綾 大塚啓子

後手の厳しさ、二の腕の縄目 大塚啓子

奔放な肢体 大塚啓子

遅ましき脚線、美しき重量感 花坂道子

鏡台と腰巻 花坂道子

腰巻と鏡台 花坂道子

奇妙な休憩 絹川文代

美しき偶然、華やかな機会 猿くつわと表情美のいろいろ

(田代悠子表情集 その二)

松葉チラシ、タオル、豆しほり、カギ模様、渦巻、水玉模様、明眸皓齒、

脱がされた高手小手 愛川悦子

コルセット、ブラジャー、後手首、縦しほり 愛川悦子

亀甲縛り 愛川悦子

吊責折檻 村井知可子

立木縛り 村井知可子

豊醇(ほうじゅん) 愛川悦子

乱れ髪三景 大塚啓子

観念、均整、屈伸 愛川悦子

椅子と絨緞 愛川悦子

俎上の美鯉 絹川文代

☆ 通 信 ☆

「悦・特」読 後 感

近 藤

—

臨時増刊号正に落掌致しました。早速に感想をと思いペンを執った次第ですが、第一に挙げるべき特色はグラビヤ・フォトの素晴しさだと思っています。過去の実績に照らし、増刊号発行の予告を読んで素敵な企画とは思ったものの、フォトの素晴らしさは正に予想以上でした。「妖精」から「観念」まで、上品な雰囲気の中に、少しもゆるがせにしない緊縛の実写を列ね、各モデル嬢の特質を生かし得た佳品は、K誌にして始めてなし得るものだと思っています。

特集の最初を飾る「妖精」は実に心憎いま

での出来栄です。大体、絹川嬢の肢体が見ほっそりしているが肩幅も広く、ヒップから脚にかけての張りも、逞しい程に豊かなので、稀少な脚線美と共に得難い特質を備えたモデル嬢でしょう。彼女のマスクは誘惑とか挑戦とか軽侮とかの感情を表現することにマッチし、またそういう際の全身の表情というべきものが誠に巧みなので、あの様な大胆奔放なポーズに生彩を放つものと思います。彼女の美しさを充分に表現する為には、やはり充分な照明に曝すことが必要だと思ふのですが、私の観る処では俯向いた時よりも、キ

ッと仰向いた時の方が格段に美しくなります。彼女にはニヤリとする笑いはマイナスです。折角の美女がいやらしく汚れてしまします。あの大きな瞳を活した愁波だとか、ツンと拗ねた処とか、唇の辺りに微笑みを軽く漂わせた感じのフォトが、これ迄の彼女の感じでした。俯向く場合は伏目にするか、そうでなければ頸筋を伸ばさないとおかしいと思います。絹川嬢は細面に見えながら、顎は決して尖っていませんし、むしろかなりの丸味を帯びています。ですから顎を引いたポーズでは咽喉の辺りが不必要に太く見え、品が悪く写るのです。更にまた彼女のその姿態から非常な柔軟さを思わせるのは、膝（極めて美麗な）から下のスラリとした長く形の良い線にあるのです。そこでこの「妖精」の成果を機として、今後の彼女のフォトに次の様な希望を寄せたいと思います。どの様な緊縛苛責も結構ですが、彼女の特質である近代的センスに満ちたマスク、全体にスラリとした印象、見事な脚線美、等を害わない様に願いたいと思います。実在の彼女の私生活を私が知る術もありませんし、また関知する限りではありませんが、誌上で識り得る限りの彼女は私のイメージにある、ピチピチした近代的美女であって欲しいと思います。とにかく「妖精」はどの様に讃辞を送っても過ぎるということのない作品だと確信して居ります。

次は全くの新人、田代悠子嬢の被縛フオート「三つ葵のプロフィール」ですが、やはり白布で口、鼻を覆った二葉が他を圧しています。紐の色が映えるせいかもしれませんが、猿轡一つで瞳の輝きが変わるのです。田代嬢のマスクはキリッとした処のない、而も子供っぽいもので、正直の処一人前の女性という印象はありませんから、猿轡は不可欠のアクセサリだと思っています。

第三の絹川嬢「誘拐」は再び彼女の素晴らしさを見せつけられる思いの作品です。ピタリ身についたスーツの品の良さ、着衣の色合いも被縛フオートにふさわしく、弱やかな上体に喰いこんだ厳しい縛しめ、そして自動車に繋がれて曳きづられる姿態の無惨美、みじめさや哀れさの全くない、全身で強く抵抗し続ける美女の苦悶の素晴らしさに、正に息をのむ思いです。着やせではないのでしようが着衣の後姿などはっさりして見えるのに、縄に抗って前屈みになった全身からは、ドキッとさせられる力強さと、柔らかいポリウムが感じられるのではありませんか。屈服のない抵抗の美しさというのが、この作品の生命であろうと思います。

第四、絹川嬢「羅致」。左ページ上段右と下段の二葉が素敵でした。スリッパのストリッパが外れているのですし、狭いトランクの中へ押し込められている緊縛の美女なのです

から、脚を伸ばさずに全身を折り曲げた方が慎しみ深く、また後姿に抵抗の感じも強く出ると思います。この場合は脚線の活かし方が問題ですが、もし爪先まで写すとしたら、やはり膝を曲げなければいけないと思います。

第五、浜本喜美、三木敬子両嬢の「プレイ」どちらが被縛モデルのお名前か分りませんがマゾ役のモデル嬢のポツテリと肉づいた柔らかな丸味は清潔な感じがします。右ページの後姿のポーズなど、うっとりする程です。こんな緊縛を受けて居られるのにお気の毒とも思いますが、もっともって残酷にギリギリ縛り上げたいと思う程の柔軟さも見えています。唯、あくまでもプレイですから髪の毛は余り乱さないで下さい。モデルになった以上、猿轡もあるのですから、髪を大切にしておいて表情を余すところなく見せて下さい。サド役の方の表情には今後を期待出来るものがあり、楽しみに思っています。

第六、大塚嬢の「木洩れ陽」いつも乍ら、彼女のポリウムは楽しい限りです。マスクはリファインされた絹川嬢とは対照的です。から、できるだけ顎を引いて、時には肩へ付ける様にして、眼は閉じないで俯向き加減がよいのです。多すぎる位の長い髪を上手に整理すると、予想外に良い表情ができる筈です。脚を伸ばす時は腿、膝、足首などを縛り合せて下さい。さもないとポリウムが豊富で、

美容がリファインされていないので、薄汚れて見えるのです。左ページ下の長い髪ごとの首縄の緊縛は変わった趣向でした。大体、彼女のようにポリウムがあり、顔に光の当たらないポーズの多い人には、少し太目の縄で、喰い入ってくびれが出来る程、強く縛り上げないとマッチしません。一度、眼を大きく睨った処が見たいと思います。右ページ下右端のフオートが一番良いと思います。

第七、「夢路」モデルは愛川嬢となっていますが違ふようですね。容貌も違ふようです。愛川嬢にはこれだけの女らしい慎しみや羞恥に満ちた女体の線の表現がなかった筈です。それにこんなに髪の手入れが良くない筈です。もし本当に愛川嬢でしたら驚嘆の他はありません。やはり、顔をねじって伏目になり両脚をピタリ合わせて膝を曲げるポーズが、月並なようですが最も情感に充ちているようです。

第八、絹川嬢の「競花」。この作品で絹川嬢のポリウムにドキリとしたのです。バストもヒップもこれだけの張りがあって乍ら、どうしてホッソリ見えるのでしょうか。それでも私としては、俯向きの柱縛り立姿以下三葉がホッソリ写っているの、特に気に入りました。

第九、愛川嬢の「首縄」大体彼女は緊縛に遭って苦悶する時、初めて美的価値判断に耐

え得るようになるタイプの人ですから、どうしても人一倍厳しい縛しめが施されることになりがちです。その結果、胸元や裾があられもなくはだけでも、慎しみを想う余裕がないのかも知れません。髪の毛が多すぎる上に手入れもよくないようですし、フオトでは大抵乱れきっていますから、普通のポーズでは綺麗に写りません。マスクも頬骨が張り、瞳の輝きや、唇の表情が不充分、という実情なので、彼女の特写は、あの豊かな胸の隆起に焦点を向けるべきです。ギリギリと締めつける縄をもっともせぬ弾力は独得のものですから、海老縛り、逆海老、駿河問、その他残酷な拷問シーンのモデルとして、彼女の肢体、マスクは適していると思います。今までの処彼女の美は汚れ役にして初めて出るものだと思いますが如何でしょうか。

第十、田中芳代嬢「シュミーズ」。これは素敵な作品でした。白い下着に黒っぽい縄、厳しい後手、高手小手に喰い入る縛しめ。モデルが少女を感じさせる田中嬢だけに、空想の世界は果しなく拡がって行きます。こういう場合は喘ぎの表情が見たいものですから、口を覆わないものを入れるか、或いはもっと眼の表情を豊かにすることが良いと思います。そこで鼻孔を見せるのも一策でしょうし、多少の誇張になっても、身悶えを見せるために全身の捻転は必要と思うのです。とにかく

かく貴重な作品でした。

第十一、愛川嬢「放心」。苦痛の極の反応かとも思いますが、彼女の表情には屢々無神経なものが見えているのです。放心ということとは鈍感なのでしょうか。それとも恍惚なのでしょうか。私は後者と見て、それ故に彼女を拷具に架けよと進言するのです。他のモデル嬢では僅かな例外を除いて残酷な責苦が、彼女の場合はあの雑草のような強靱さで安心感を与えてくれるからです。

第十二、村井知可子嬢の「間諜成敗」。どうも和服の着こなしが上手でないというのが従来のこの種の作品の印象でした。少くとも間諜として入り込む以上は、多少の武芸は心得ているでしょうし、而も昔の女性気質として、浅ましい悶え姿を曝すのは余程のことと思われるからです。矢羽根模様に着子の帯という典型的な腰元スタイルですが、外見の形式に終ることなく、実質も間諜らしく振舞うことが要求される筈です。その点で左ページの長襦袢に剝かれた被縛ポーズは優れています。恰も伊藤晴雨翁の好みの様な、古風な美女責めを構成しています。忍者は死に直面しても名乗らぬものとか、それだけの習性を持つ者が着物を着、帯を締めていながら太腿まで露わにするのは見苦しい限りで、間諜の成敗には不似合と思います。村井嬢のマスクが元来日本髪には不適のようです。下顎が張

っていることと口許の大きく見えることが致命的でしょう。ですから可憐なタイプではなく、眼尻を切れ長に粧って凄艶なタイプにしたら良さそうです。つまり不義者とか裏切者とかのブアンプ・モデルにしたら素晴らしい作品が出来ることを、この「間諜成敗」が立証していると思います。侍役の容赦ない責め方は絶讃の他はない程で、俯伏せの村井嬢の背に立って蹂躪しながら刀でこじる辺りは、息をのむ思いでした。

第十三、大塚啓子嬢「三処責め」。三葉とも眼を閉じていますが、この場合は猿轡に救われています。胸許、胸の隆起の上下の三筋で締めつける縛しめが、弾き返される位のボリユームは見事な限りです。縄も適当な太さですし、ウェストのくびれが綺麗なアクセントになっています。髪は大事ですね。

第十四、益田房子嬢「黒タイツ」。肌の白さが際立って見える美体です。かつて私は彼女の首筋の美しさを指摘したことがありましたが、咽喉の線も実に綺麗ですね。彼女は特に頸、肩、腕から背にかけての弱やかな美しさのある人なので、黒いタイツによって上体が浮き出して見えるのは成功でした。益田嬢のマスクには理知的な冷やかさが見られます。従って彼女には近代的なもののうちでも知的な役柄が良いと思います。差当っては若奥様風かインテリ女性という処でしょうか。

髪の手入れも良く、脚線も綺麗ですが、タイツに包まれた腹部がプツクリ盛り上っているのは妙にユーモラスでした。

第十五、花坂道子嬢「観念」彼女の和服姿は藤田節子嬢に次ぐ程似合うものですが、この作品に於てもその特質が活かされています。首縄が緊く締められているポーズも、頸に縄のないポーズも、いずれも彼女の楚々とした可憐さにプラスしています。彼女の縛られ方は実に巧みです。瞳の伏せ方、項垂れ方、肩や腕の力の抜き方など大したものです。厳しい縛しめの上に、あれだけに両手首を吊り上げられ乍らも、全く反抗の表現がありません。正に観念の図です。第一ページ右上の坐ったもの、第三ページ左上の丸く俯伏したもの、匂うような出来栄は感嘆しました。三ページに亘るこの作品、文字通りの写真集の有終の美です。

以上のようにグラビア・フォトについては申し分ない出来栄でした。四馬氏の巻頭口絵も力作揃いで楽しめますが、「憐光」「女奴隷の手記」「続・囚衣」「妻は縛らず」「長期刑」等は愛情あるサディストとしては品が悪く、その他も本文と異なる描写で、本文を参考にした四馬氏の創作と見るべきでしょう。十八篇の本文はいずれも悦虐小説特集にふさわしいものばかりだと思いますが、今回はかなり添削されている様ですね。四馬氏の挿

絵は脚の長い八頭身の美女と、醜怪な顔をした男の登場ですが、六頭身か七頭身位のポツテリした女性の色香とか、端麗な美男のサディズムとか、愛情に基く合意の悦虐シーン

も欲しいと思います。臨時増刊「悦虐小説と緊縛写真特集号」についての感想を綴りましたが、冗慢に陥った点は御赦し願います。

臨時増刊号『青い廃院』

只今発売中！

定価 二百円（送共）

〇〇 内容紹介 〇〇 青い廃院

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇談

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粋夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

巻頭豪華口絵

四馬孝画「青い廃院」 画廊

- 〇美貌の人
- 〇苦悶する美貌
- 〇踊り責め
- 〇モデル責め
- △変ったレッスン
- △受
- 〇美女誘拐
- 〇屈辱の責め
- 〇廃院の中
- 〇救出
- 〇表紙裏
- 〇目次裏

本文内容主な項目

青い廃院（弓沢俊二郎）

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手練りの網
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談（永山久美雄）

- 女護ヶ島与那国
- 女百人に男一人
- 股裂きになる女
- 孤島の殺人
- 股裂きと火焙り
- 人肉の炙り焼
- 筏流しの刑罰

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十三年

○四月号（復刊第二十六号）

【定価二百円】

口絵

「猿ガ島に捕われた令嬢」滝 梨子

「危し伊達六十二万石」北沢典子

「若き日の千葉周作」高木悠子

「力闘空手打ち第三部」園ゆき子

「和装屋根裏の秘密室」四馬 孝面

「緊縛写真一早春賦」花坂 道子

「洋面スチール二題」本誌写真部

「緊縛女性に関する小品五題」編集部

「十三人目の奴隷」水沢 雅美

「切腹感と種々相」須藤 律夫

「私訴 愚者の言」貴山 茂

「創作 被虐供養」青葉 正三

「ある夢家の手帖から」沼 正三

「日本印象記 外人の見た女腹切」高 志純

「忙中閑お慰み読本」牧 高志純

「縛り舞踊放談の巻」奈加多須磨尾

「私のアイディア 縛り七態」海野 史郎

「時代小説 縛り七態」黒田 史郎

「マゾヒズムへのいさな」三 史郎

「創作 紅山彦」三 史郎

「最近の時代劇の縛り映画」三 史郎

「棒を使用した女体拘束」三 史郎

「シナリオとその周囲」三 史郎

趣味（街に拾ったフエチ）
麻生保氏の生活と意見……麻生 保
○五月号（復刊第二十七号）
【定価二百円】

口絵

四馬孝傑作集美人調教馬……四馬 孝面

「責画 女友達（乳房責め）」杉原 虹児

「滝れい子画集 横恋慕」滝 梨子

「縛り写真「屏風の前にて」」田中芳代

「和装写真「赤い扱帯」」花坂 道子

「緊縛映画名場面集」藤本仙治・阿部秀・提供

「（大映「東京暴力団」矢島ひろ子）」

「（東映「力闘空手打ち」園ゆき子）」

「洋面スチール 伊映画「カルタゴの女」」

「奴隷」編集部・選

「論文 下着と女性の進化を論ず」S・S 生

「緊縛映画研究 縛られた女優たち」大河原珠樹

「マリアンヌの手記（その五）」

「赤いベチコート」三 史郎

「マゾヒズムへのいさな」三 史郎

「魔教団NO8（3）」三 史郎

「私のアイディア 縛り七態」三 史郎

「残虐なる女性たち」三 史郎

「ある夢家の手帖から」三 史郎

「縛り・女優と裸刑」三 史郎

「裸にされた二人の新人女優」三 史郎

「私の体験したフェチシズム」三 史郎

「続・病者の獄」三 史郎

「悦風土記」三 史郎

「女体切腹の創作」三 史郎

御用盗異変……海野 史郎
現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正
強盗団に襲われた若後家……岸本 青柳
縛られた女優達（追加）……大河内 珠樹
映画にあらわれた男性責シーン……

口絵

創作 結婚の条件……菅 良太

「私の女装履歴」近藤 浩二

「女体風俗 妖艶花の」三 史郎

「雑誌通信 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

「創作 妖艶花の」三 史郎

残虐なる女性達……森本 愛造
創作 美容病院……久留木 高志
創作 美容座談会……牧 高志
マゾヒズムへのいさな……黒田 史郎
現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正
創作 小僧と輝……内田 武男
「告白」藤恥を求めて……三 史郎

口絵

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

「告白」藤恥を求めて……三 史郎

創作「黒い霧の中で」……黒田 史朗	ナースの洗腸日記……岩村美智子	女体風俗(さよならの巻)……牧 高志	条痕(じょうこん)……榎村 秀	誘拐されゆく美少女の詩……菅谷はるみ	夕陽に散る華(後篇)……藤山 秀	私が拾ったアブの種々相……とやま	創作「運命の少女」……嵯峨 紀	創作「紅山彦(四)」……三条 卓	切腹幻想曲……佐藤 史	創作「一月明に泣く」……河村 操	私のイメーシ……近藤 一	研究発表「切腹風土記」……壬生 三	残酷なる女性達……森本 愛	女斗美短歌……土俵 四	子供時代の洗腸……池田 喜	古典にみられる男責について……菅 良	乗杉様に寄せて「私の馬」……西田 佐	懸賞募集原稿入選作品……美 太	創作「お町の最期」……花巻 京	断層の女……辻村 太	美容病院(完結篇)……久留木 隆	再びピーチボールの魅力……佐田 春	緊縛映画速報とその雑感……藤木 仙	魔教団N08(その五)……土路 草	マゾヒズム百景……馬場 好	今月の縛られた女優達……大河 正	沼正三たより「手帖速報欄」……沼 三	読者通信……
-------------------	-----------------	--------------------	-----------------	--------------------	------------------	------------------	-----------------	------------------	-------------	------------------	--------------	-------------------	---------------	-------------	---------------	--------------------	--------------------	-----------------	-----------------	------------	------------------	-------------------	-------------------	-------------------	---------------	------------------	--------------------	--------

〇八月号(復刊第三十一号)

【定価二百円】

口絵	孝傑作集 拷問會……四馬 孝
緊縛映画名場面集……提供・楓月 太郎	
新東宝「朱桜判官」……若杉 嘉	
新東宝「毒婦夜嵐お絹と天人お玉」……若杉 嘉	
新東宝「幽霊沼の黄金」……瀬戸 麗	
新東宝「サタン城の魔王」……瀬戸 麗	
ニューモデルの緊縛模様……益田房子嬢	

俊平戯面集

南村俊平面

「床間のニューデザイン」……「飾櫓」	「ロボット」……「模型鉄道」	写真後手(高小手)……縛り愛川 悦	女殺油地獄(近松について)……南方 純	「サタン城の魔王」の縛り雑感……佐渡 完	洗腸と妊娠……羽村 京	婦人補導院の保護具……佐渡 完	映画に見る男性責……堀 孫	最近の時代劇縛りシーンから……嵯峨 美	一研究発表「切腹風土記」……壬生 三	現代マゾヒズム芸術時評……海野 忠	妖艶なる女性達……森本 愛	残酷なる女性達……土俵 四	女斗美短歌……池田 喜	話の屑籠……辻村 太	告白小説「屈辱の砂」……榎村 史	マゾヒズムへのいさな……黒田 朗	愛好者の記録……とやま	「腰元女の吊責」と題して……牧 高	魔教団N08(その六)……土路 草	体験「鼻いじめのこと」……花房 孝	マゾヒズム百景……馬場 好	切腹特集号に関するアイデア……南方 純	体験「シートの役割」……泉 加	磯・Gクラブ撮影会報告……菅 良	歌舞伎にあらわれた輝美……菅 良	創作「紅山彦」……三条 卓	私の女性下着コレクション……小野 比	懸賞作品「身悶える妖精」……辻村 隆	妖虫は夜にうごめく……	読者通信……
--------------------	----------------	-------------------	---------------------	----------------------	-------------	-----------------	---------------	---------------------	--------------------	-------------------	---------------	---------------	-------------	------------	------------------	------------------	-------------	-------------------	-------------------	-------------------	---------------	---------------------	-----------------	------------------	------------------	---------------	--------------------	--------------------	-------------	--------

〇九月号(第三十二号)

【定価二百円】

口絵	孝傑作集 いぶしセメ……四馬 孝
俊平戯面二題……南村俊平面	
「大井川渡渉」「河童と少女」……南村俊平面	
縛り絵責絵師の苦心……滝れい子画	

縛り写真特報

大塚啓子嬢

縦と横の線、柔肌の熱き血潮……提供・梶 田	緊縛映画名場面集……提供・梶 田	日活映画「殺人計画」……筑波 久	日活映画「悪魔の爪痕」……山崎 昭	東映「少年猿飛佐助」……山崎 昭	東映「変幻胡蝶の舞」……山崎 昭	入選作品「草雙紙に於ける責場の研究」……杉原 虹	創作「受刑の肌」……近藤 一	通信「最近号を読んで」……近藤 一	子供時代の洗腸(その二)……池田 喜	「檻」への執着……鬼山 史	「マゾヒズムへのいさな」……黒田 朗	「戦場にかける橋」とぼくの責小説……菅 良	続・女斗美短歌……土俵 四	幕末奇談手枕お千代……海野 忠	今月の縛られた女優達……大河 正	残酷なる女性達……森本 愛	切腹風土記「江戸の切腹」……壬生 三	ニユー・ス小説「復讐船」……榎村 史	愛好者の記録……とやま	体験「シートの役割」……泉 加	お座敷シネ・プロ始末記……菅 良	マゾヒズム百景……馬場 好	「奴の拳銃は地獄だせ」に思う……三条 卓	創作「紅山彦」……三条 卓	裸馬との対話……乗杉 貴	手帖速報欄……沼 三	今月の縛り映画……菅 良	文部大臣の専属室……奥田 龍	現代マゾヒズム芸術時評……土路 草	魔教団N08(その七)……菅 良	紺緋の郷愁……鍵村 江	告白「マゾヒズムの谷間」……鍵村 江	読者通信……
-----------------------	------------------	------------------	-------------------	------------------	------------------	--------------------------	----------------	-------------------	--------------------	---------------	--------------------	-----------------------	---------------	-----------------	------------------	---------------	--------------------	--------------------	-------------	-----------------	------------------	---------------	----------------------	---------------	--------------	------------	--------------	----------------	-------------------	------------------	-------------	--------------------	--------

〇十月号(復刊第三十三号)

口絵	孝傑作集 汚物漬け……四馬 孝
俊平戯面選……南村俊平面	
「縛りごっこ」「水飴のプール」……滝れい子画	
縛り写真特報「細目」……大塚啓子嬢	
写真・脚線美……益田房子嬢	
洋面スチール二題……編集部・選	
米映画「指紋なき男」……	
伊映画「荒野の抱擁」……	
告白「私の青春履歴」……川西 毅	
私の傑作写真報告……長瀬 昭	
創作「(かけり)」……久留木 隆	
洗腸室……池田 喜	
マゾヒズムへのいさな……黒田 朗	
話の屑籠……辻村 太	
創作「最良の仲人(一)」……若杉 嘉	
創作「最良の仲人(二)」……若杉 嘉	
麻生保氏の生活と意見(八)……麻生 保	
休職記「ナナ」の人々……佐渡 完	
「ヌード春泥」から……とやま	
愛好者の記録……大河 正	
今月の縛られた女優達……森本 愛	
残酷なる女性達……土路 草	
創作「紅山彦(完結篇)」……三条 卓	
本誌「緊縛映画」論……千草 忠	
切腹風土記「切腹の研究」……千草 忠	
創作「偽縛(きばく)」……榎村 史	
殉国女性に捧げる……中康 弘	
レイコンコート姿の女腹切……市田 健	
入選作品「女水兵哀史」……市田 健	
洗腸と妊娠(続)……馬場 好	
マゾヒズム百景……菅 良	
告白「血潮の疼き」……菅 良	
魔教団N08(その八)……菅 良	
文部大臣の専属室……菅 良	

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

現代マゾヒズム芸術時評……原 忠正
映画スナツプシリーズ……牧 高志
「紅葉の巻」……沼 正三
沼正三より(九月号読後)……沼 正三
読者通信……

○十一月号(復刊第三十四号)
【定価二百円】

口絵 孝傑作集 鼻吊り……四馬 孝画
縛絵 稽古屋……杉原虹児画
新映画作品「蜘蛛男」……河上 敬子
新映画作品「人喰海女」……三原 葉子
新映画作品「蜘蛛男」……宮城 千賀子
特報 喰い込むコルド……愛川 悦子
ニユーガールの緊縛模様……南村 俊平画
復式探りマシンの考案……林 弓志雄
アプロマの最良の仲間(第二回)……若松 志宏
現代マゾヒズム芸術時評……泉 忠正
お流漫録……須藤 孝子
月明りねずみ小僧……海野 史朗
マゾヒズムへのいさな……黒田 史朗
創作 乾濕……模村 史朗
詩集 女剣断腸譜……中村 史朗
告白 ヒズム百景……馬場 史朗
再び映画に見る男性責……菅 史朗
切腹 宇空に輝く……堀 史朗
愛は好者の記録(女の腹切り)……と 史朗
涙は好者の記録……と 史朗
腹切 宇空に輝く……と 史朗
映画 スナツプシリーズ残菊の巻……三 史朗
創作 竹夫人……三 史朗
三吉と女奇術師……三 史朗
緊縛映画速報とその雑感……三 史朗
魔教団N08(その九)……三 史朗
創作 賭……三 史朗

告白羽村京子夫人へ……佐田 春雄
読者通信……

○十二月号(復刊第三十六号)
【定価二百円】

口絵 孝傑作集 責への期待……四馬 孝画
ニユーガールの緊縛模様……南村 俊平画
縛絵 嫁ぐ日……南村 俊平画
俊平戯曲二題……南村 俊平画
奴隷商人と猿猴大臣・大王様御幸……南村 俊平画
映画に現れた緊縛シーン……南村 俊平画
日活「裸身の聖女」……筑波 久子
東映「裸身の聖女」……筑波 久子
日活「裸身の聖女」……筑波 久子
特写 益田房子嬢の艶姿……益田 房子
鞭打台二題……益田 房子
鞭打台への道・台上にもたえる女……益田 房子
読本に於ける責場の研究……沖 隆彦
創作「ナナ」の人々……南村 俊平
懸賞入選 白い玩具……南村 俊平
マゾヒズムへのいさな……黒田 史朗
Mレポート 異色美人局……鬼村 史朗
推理小説 輝の男を捜せ……模村 史朗
告白 悩みの乗馬スボン……藤山 史朗
懸賞入選 母……藤山 史朗
愛は好者の記録……と 史朗
秋の縛り時代劇から……と 史朗
女体散華異聞 機上切腹……と 史朗
切腹 宇空に輝く……と 史朗
妖異 人肌形談義……と 史朗
緊縛 テレビ観賞日記……と 史朗
通信 私の不満……と 史朗
マゾヒズム百景……と 史朗
レポ 日課の下着泥棒……と 史朗
創作 竹夫人(下)……と 史朗
話の屑 竹夫人(下)……と 史朗
最近の縛られ女優達……と 史朗
真説 水野十郎左衛門……と 史朗

本誌最新号の読後感……近藤 草一
魔教団N08(その十)……土路 草一
緊縛映画スナツプシリーズ……沼 正三
「寒牡丹の巻」……沼 正三
読者通信……

昭和三十四年
○新年号(復刊第三十七号)
【定価二百円】

口絵 かるた会の夜……滝 孝画
縛絵 ボクシングの練習……杉原虹児画
責面 観世音菩薩……南村 俊平画
戯画 観光旅館の待合室……南村 俊平画
写真 女体の家畜化……四馬 孝画
面集 妖婆と戦場兵……四馬 孝画
戯画 妖婆と戦場兵……四馬 孝画
捕虜の少女と獅子……南村 俊平画
図書通信「特異な角度から」……九 孝画
映画 出版物の男風について……原 孝画
懸賞入選 花婿……原 孝画
通信 長瀬昭子嬢へ挑戦……三 孝画
創作 宿直室……三 孝画
体験手記「女体相相譚」……三 孝画
人妻マゾヒズム芸術時評……三 孝画
現代マゾヒズム芸術時評……三 孝画
美女処刑の賦……三 孝画
マゾヒズムへのいさな……三 孝画
夜を賭ける男……三 孝画
馬化白書 スナツプより……三 孝画
涙は好者の記録……三 孝画
創作 従卒……三 孝画
愛好者の記録……三 孝画
スナツプシリーズ「鬼火燈籠」……三 孝画
呼びかけ 益田愛子さんへ……三 孝画
河内山遊侠伝……三 孝画
魔教団N08(その十一)……三 孝画
腹切 宇空に輝く……三 孝画
切腹 宇空に輝く……三 孝画
読者通信……三 孝画

○二月号(復刊第三十九号)
【定価二百円】

口絵 フラ・フープ……南村 俊平画
縛絵 フラ・フープ……南村 俊平画
戯画 墨像……南村 俊平画
スクリーンに現れた緊縛場面……南村 俊平画
東映「薩摩飛脚」……提供・増田 孝画
東映「丹下左膳」……提供・増田 孝画
ニユーガールの緊縛模様……田代悠子嬢
特写 黒いスカート……田中芳代嬢
面集 裏切者への私刑……四馬 孝画
戯画 女侍・人喰鬼の腕を斬る……三 孝画
南総里見八犬伝中の女の縛り三糸……三 孝画
新聞切抜通信……三 孝画
「ナナ」の人々……三 孝画
胸毛頌……三 孝画
愛憎裸女……三 孝画
被縛縛仰……三 孝画
現代マゾヒズム芸術時評……三 孝画
家畜人ヤプー……三 孝画
今月の縛られ女優達……三 孝画
話の屑 竹夫人(下)……三 孝画
相撲雑記……三 孝画
スナツプ・シリーズ紅梅の巻……三 孝画
愛好者の記録……三 孝画
吾木香……三 孝画
切腹 宇空に輝く……三 孝画
妖婦の生簀……三 孝画
妊婦の魅力について……三 孝画
魔教団N08(その十二)……三 孝画
一馬化白書「の作家へ」……三 孝画
法衣と軍服……三 孝画
蠟人形に想う……三 孝画
仇討奇譚「姫塚物語」……三 孝画
懸賞入選 十七娘火焙良話……三 孝画
沼正三より……三 孝画
読者通信……三 孝画



ハドイツ便り〇奇クの皆さまお元
 氣ですか。住みなれた京都を離れ
 て十月よりドイツへ来ています。
 ここで約一ケ年半は滞在しなければ
 なりません。「大奥裸女血斗」
 (京洛生)を掲載させて頂いてか
 ら早や二年近くなりました。その
 間、北斗生様、KK生様、南方純
 様等同好の方を得ましたことは大
 変嬉しいことでした。その後も奇
 クは大発展を遂げていることと存
 じます。ここドイツには日本から
 妻と共に数冊の奇クを友として連
 れてきています。そしてはからず
 も私共夫婦は日本で考えもよらな

かった幸福に今浸ることが出来た
 のです。御承知の通り、歐洲は完
 全な個人主義の国で、家屋も又そ
 れを象徴しています。即ち一步私
 室へ入れば全く他人の干渉から免
 れることが出来ます。ですから私
 共夫婦は奇クを通じて養われた人
 間の赤裸々な本性に返って様々な
 アブ的行為をしても、それが第三
 者に迷惑を及ぼさなければ、その
 干渉を受けることがないのです。
 私共夫婦のみのアブ天国を現出さ
 せることが出来ます。幸か不幸か
 私共夫婦はまだ子供にめぐまれて
 いません。このことも、これから
 読者の方へお話しするアブ天国を可
 能にさせているのです。私共夫婦
 は平凡な見合結婚でしたが、或る
 時私の留守中、私の机の中に奇ク
 が入っているのを見つけ、そして
 その日、妻は自分も御誌のファン
 であるという告白をしました。そ
 れ以来数年、今ではすっかり心身
 共にとけ合って、みち足りた夫婦
 生活を送っております。これも御
 誌のおかげと日々感謝して居りま
 す。私共夫婦はその頃御誌の誌面
 を飾っていた山田正美氏の「アブ
 探求」の数々の文に共鳴を覚え、
 又、土俵四股平氏をはじめとする
 女斗美、女性輝美愛好(妻は男性

輝美)グループの一員になりたく
 願ったのでした。さて、吾々はド
 イツへ来て、上述の如き家屋構造
 並に環境ですの、日本のように
 隣近所に気兼ねすることのいらな
 い幸福をしみじみ味ったのでし
 た。私共夫婦のブレイというのは
 二人共ふんどし一本になって相撲
 をとることから始まりました。私
 は黒縹子の六尺、妻は緋縮緬の六
 尺を使います。妻は最初は一寸恥
 しがつたのですが、今では緋縮緬
 のふんどしがすっかり気に入って
 いるようです。お互いに投げたり
 投げあったり、又、山田氏の場合
 のように妻が女武者となり、私が
 討ちとられる悪侍になってみたり
 します。私は専
 ら女性(妻)に
 征服される男性
 を演じていまし
 たが、妻はそれ
 では物足りな
 い、私も一度思
 いきり投げとば
 されたり組み敷
 かれたりといま
 す。しかし、日
 本では、そんなことも出来ません
 でしたが、こちらへ来て、床には
 厚いジュータンが敷かれてありま
 すし、天井も高いと来ていますか

◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、
 アイデア等によつて写真の特写
 を御希望の方は写真部に於てお
 引受致します。詳細なる趣向を
 御連絡下されば費用其の他につ
 いてお返事いたします。
 (返信料同封下さい)

ら、二人共思うように取っ組みあ
 うことが出来ます。妻は邦舞(井
 上流名取)の素養もあり、一度ふ
 んどし一つで踊ってみると言い出
 しましたので、それは面白いとい
 うことになりました。妻は兼々師
 匠から姿を美しく見せようとする
 ならば、自分一人で裸になつて鏡
 に写しながら稽古をするのが一番
 といわれていましたので、今こそ
 絶好の機会だということです。そ
 れで日本から持参しました邦楽のレ
 コードに合わせて「越後獅子」「藤
 娘」を緋縮緬のふんどし一つで妻
 が踊ったとき、私の念願が叶えら
 れた嬉しさで魂も宙にふつとぶば
 かりでした。又、妻は「アブ舞
 踊」を創作して私
 共夫婦だけで演じ
 ています。その一
 つを御紹介しま
 すと、一、「サロメ」
 (佐露女)これは
 私の「大奥裸女血
 斗」中のサロメ様
 の女性立廻りを舞
 踊化したもので、
 踊化したもので、
 邦舞の型、或は芝居の立廻り
 の型を集め、妻が創作しました。
 音楽はどれが適当か、今物色中
 です。妻は自髪で日本髪が結えるよ

うに髪をのばしたままで、たらし
ば腰位まであります。その髪を流
し髪にして、顔は年増の如く化粧
し緋縮緬のふんどしをきりりとし
め、扇子の七首の他に、手頃の棒
を薙刀にみたて立廻りを演じ、相
手の首級をあげる。が、他の新手
の敵に槍で乳房をえぐられもだえ
ながら息たえるまでを演じます。
此の他、こつこつ共同で制作中
です。以上がアブ夫婦のドイツで
生活の一面です。奇クには女性の
輝美愛好家がかなりの数居られる
ようです。ドイツへ来て街を歩
いて感じたことは、女性のパンテ
イが、大部分ふんどしに近いもの
になってきているという事です。
中にはストリッパーのバタフ
ライマがいのものや、クロネコふ
んどしの如き型のパンティが衣料
店で売られており、一般の婦人特
に若い女性がそれをどどん買っ
てゆきます。これはドイツの女性
もふんどしのもたらす緊縛感に関
心を示している証左で誠に興味深
く感じました。話が変りますが、
ドイツでも夫婦間の倒錯遊戯やサ
ド・マゾプレーが相当広く行われ
ているようです。その大部分はム
チによって打ち又は打たれるとい
うプレーです。私の住んでいる街

の皮革品店に或る日、用があつて
立ち寄ったところ、多くのムチが
並べられてあり、それは乗馬用の
ものと思えないものでした。即ち
乗馬用のものにしては、余りにも
きやしゃで色彩も派手で美しい模
様がついています。これは何に使
うのだと聞いてみました。が只笑つ
て答えてくれませんでした。私が
余りしつこく聞くので、しまいに
「これは子供用のシツケに使うの
だ」と話してくれました。翌日職
場で親しいドイツ人にこの話をし
たところ「それもある、しかし夫
婦の間で新しい刺激を求めるとき
にも使える」と云つて大いに笑い
「ドイツでは相当広くこのプレー
が行われている」とつけ加えまし
た。これと関連して私の職場へ毎
日通ってくる女性の一人が、時々
乗馬ズボンという乗馬服スタイル
で来ます。これもその道のフアン
が居られたら、いろいろな場面が
想像されます。ドイツは、かつて
奇ク誌上で紹介された「残酷な女
達」の若者を生んだ国ですので、
この種の観点より見て面白いもの
が見出されるかも知れません。読
者諸兄姉の中で、この点に関して
いろいろ御忠告なり御教示を賜れ
ば幸いです。又、新しいことを知

代理部案内

最新作女体緊縛写真

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

りましたら御便りさせて頂きます。
(在ドイツ・京洛生)

○

私は奇クの一愛読者です。月々

発行されるのが待ち遠しい時もあります。最初は友達に貸りて知ったのですが、今では私の生活を豊かに人生の空虚を満たしてくれる重要な一つの条件とさえなっています。私の孤独な毎日の生活に明るい灯を与えてくれるのが奇クであります。私は今は孤独ではありません。奇クを読むようになってからは、私の友とし奇クが私の座右にあるからです。ここに小説とも告白ともつかぬ文章を懸賞原稿として出します。題は「孤独な流腸マニヤ」というのですが少々引目を感じて居ます。常日頃、私の頭の中に閃めく奇抜な幻想をいざ文章にしてみると十二分に表現出来ないのを残念に思います。今後の貴社の御繁栄を祈りつつペンをおきます。
(東京都 H・S 生)

えば、告白体で貴下の本当に体験されたものだけを書かれた方が、より読者に訴える力が大きいのではないかと思っています。

○

貴誌を手にしてからもう数年の年月が経ちました。本当に月日の経つのは早いものです。最初の特異な雑誌を発見したとき、活字がまるで生き物のように私の目、いや胸の中へ電撃のように飛び込んできたのを覚えています。活字が活字でないような、あのときのショック。この世の中に、このような雑誌もあるものかという驚き。このとき程、私は言論出版の自由の有難さを味ったことはありませんでした。何故、もっと早く発見出来なかつたかという悔いよりも、どんなぼろぼろでもよいから一冊でも多くと狂気のように買って古本を買い漁ったあの頃。靴の中ですつしりと手ごたえのある重味が、私には金銀財宝より有難く思つたのでした。この雑誌さえあれば、他のもうどんな欲望も捨て去つてもよいとき思つた程の打ち込みようでした。あれから数年。しかし、人間の欲にはきりがないもので、ときには物足りなく思つたり不満に思うことがあつた

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13種)です。

お申込は 天星社代理部へ

りましたしたが、とにかく貴誌は私にとつては、米の飯の次に必要な命の綱として毎月愛読して参りました。インクの香もかぐわしい新刊をペラペラとめくるとき胸のときめきは、今も尙、変わりなく私の情熱をかきたててくれます。最近号は白い表紙となつてから三十冊以上も出ているので落ち着いた体裁は、全く好ましいものです。内容的にいつても、これだけの頁数では、もうこれ以上収容出来ないだらうと思われる位の充実ぶり

○

輝党の皆様、御元氣ですか。扨て、文芸春秋の十二月号に扇谷正造氏が「オイカサラマサ事件始末記」にこんな事を書いてあります。九州の或る代議士が追加更正予算の事をオイカサラマサと読ん

だと週刊誌に載せた所が、それが人間違だったので、どなり込まれて陳弁これ努めたけれども許してくれない。翌日、九州へ帰ると云う代議士を送って、少し時間があつたので喫茶店へ這入った。「コーヒー二つ、それにケーキと云つてから、あわてた私は高橋さん、それともビール?と聞いた。いやコーヒーでよかです。」と云い乍ら氏はどつかと椅子の上にあぐらをかいた。藍の上質の着物の裾がまぐれて、まっ白な褌がその中からぞいていた。私は急にこの人に好意を感じた。『ザツとこうですが着物の藍色とまっ白な褌と色の対象が鮮かで目がさめる様。そしてそれに好意を感じた扇谷氏も禪覺かな。一寸古いが今年の五月頃の週刊男性と云う週刊誌に、ある下着のメーカーが、男の下着で何が一番魅力があるかと云うアンケートを、東京で女の何百人から取った。ところが、六尺褌と云う答が沢山あつて下着会社が啞然とした。然し会社も六尺褌では仕方がなかったと。けれども昔から男の一番男らしい魅力のある姿は、六尺褌を締た所だと云われているからそれもむべなるかな。と云う記事があつた。禪美が分る女性が沢

山居るといふ事は心強い限り。東宝の弥次喜多道中、主演小林桂樹、加藤大介を見たら褌が随所に見られて思わぬ拾い物だった。主演の二人だけでなく、雲助なんかも素裸に赤褌なんかでカラー映画だから、よかった。三木のり平の旅役者の女形とのホモを暗示するところ等のおまけまでついていた。只主演の二人がもつと若手の俳優だったと惜しかった。大伴尾上松之助時代はイザ知らず剣戟華かなりし頃は刀をぬいて構えると直ぐ前が開いて褌が見えたもので市川百々之助等はそれを魅力に見に行く女性が多いと当時云われていた。其後ヤクザがつける様なサル股をはく様になりひどい映画だと侍迄があんなのをはいて出て変だった。最近は大分リアルになつて駕籠かきや川渡の人足等六尺褌一本で出て来たりして見えてドキッとする事がある様になった。近頃は銭湯等でも六尺を締た人等見なくなつたが海水浴場で中学、高校生の三分の一程が六尺を締て泳いでいる。先日京都へ行ってバスの窓からフト見ると何処かの祭りらしくみこしが出ていたが、かついでいる若者の半分位が真白の六尺褌、晒の腹巻、ハンテン

写真 硯

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大判印刷紙焼付 三枚一組 四〇〇円
モデル 大塚 啓子 嬢

姿だった。バスでなかつたら立止って見物するのに惜しまれた。子供の時本屋で「屁と褌」と云う本を見掛けたが今頃になって読んで見度く古本屋でさがしても見当らぬ。誰か御持の人があつたら貸すか譲つて下さるまいか。

(愛禪生)

大分寒くなりました。編集部の皆様お元気ですか。復刊以来貴誌を愛読して居りますが、精力的な皆様の御努力には実際驚嘆の外はありません。貴誌が発行されると何をかいても内容を拝見しますが残念ながら全体的に見てマゾヒズムに関するものが少い様です。殊に写真頁グラビヤ頁では皆無といつて宜い様です。唯僅かに時たま女性による女性の責めが時に見られる程度の様です。今後はグラビヤ頁にもマゾヒズム、サジスティンものを載せて頂けませんでしょうか。又、サジズム特集に対してマゾヒズム特集を計画して貰えないでしょうか。前掲の写真は過日

手に入れました絵画で、その複写です。高位の女官が小姓を此れから翫る情景を描いたもので、女官の右手の弓の折とキッスでもするのでしょうか、小姓の頸に手をかけてグイと向きを変えさせようとしている構図は、正に貴婦人の男性征服が如何に残酷性に満ちたものか想像するにたかくありません。小生の好きな時代物サジの一例です。次の絵は四馬孝先生の絵の改作です。四馬先生は専ら女性の鼻責の絵に力を注いで居られますがこれは私も好みのもので、毎号待たれるものの一つです。唯残念な事は前に述べた様に責める相手が男性である事です。そこで申訳ないと思いましたが、先生の絵を改作してみた次第です。唯小生絵が下手で描けませんので、長い事ばかり適当なサジスティンの絵を求めましたが先日この絵のふん囲気にびったりする絵をみつめましたので早速切り貼りして実験してみましたのがこれです。いう迄もなく責め手の女性はリーレ・レホルタ

1を象ったものです。唯少々急いだので下絵がはみ出たり、切り方を間違えたりして一寸出来の悪いものになってしまいました。が御高覧願えれば幸いです。とりとめもない事を申し上げましたがいささ

か自分の希望を述べて筆をおきたいと思ひます。編集部の方々の御健闘を祈ります。

（東京T・R生）

△編集部註▽「サジズム特集」に對して「マゾヒズム特集」を企画

せよとのこととありますが、編集部として写真、絵画、その他の資料は集めました。先般予告しました「手帖増刊」及び分譲の「マゾヒズム画廊」の申込者が数える程しかなく、到底「サド特

集」のように印刷することが出来ないという予想のもとに、その行を躊躇してあります。「サド特集」は成績がよいので今度引続いて二、三カ月に一回の割で刊行する予定ですので、「M特集」も購

〔新版〕女体緊縛フォト オンパレード

R組 百花撰 大手札判（印画紙9×13）

各組一組（全部送料共）

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

R11	股間しぼり正面（伊吹真佐子）
R12	女学生制服しぼり（須川令子）
R13	尻立後手しぼり（萩千恵子）
R14	開股しぼり（川辺砂登子）
R15	猿ぐつわの魅力（伊吹真佐子）
R16	トイレでの縛り（須川令子）
R17	立木野外しぼり（村田那美子）
R18	緊縛横臥（厚狭春江）
R19	足湯梯子ゼメ（伊吹真佐子）
R20	いたぶり（春日ルミと伊吹）
R21	帆立しぼり（萩千恵子）
R22	強烈な梯子ゼメ（伊吹真佐子）
R23	梯子責め（佐賀美智子）
R24	逆さ本吊りゼメ（伊吹真佐子）
R25	後手吊りゼメ（同右）
R26	股間しぼり後手（中塚文子）
R27	逆エビ責め（伊吹真佐子）
R28	高小手しぼり（加賀利江子）
R29	変型足手しぼり（萩千恵子）
R30	松樹後手しぼり（村田那美子）
R31	くさりゼメ（伊吹真佐子）
R32	薄羅の後手緊縛（加賀利江子）

R33	股間タテしぼり（中富綾子）
R34	首縄股間しぼり（坂口利子）
R35	手足逆吊り（伊吹真佐子）
R36	和服の後手しぼり（藤田節子）
R37	仰向全裸悦虐責（川端多奈子）
R38	後手首縄シメ（加賀利江子）
R39	乳房下しぼり（村田那美子）
R40	肉体美への折檻（伊吹真佐子）
R41	お灸ゼメ（春日、伊吹二嬢）
R42	後手猿ぐつわ（萩千恵子）
R43	松樹縛り晒責（村田那美子）
R44	コルセット縛り（中塚文子）
R45	股間しぼり（同右）
R46	手と足と緊縛（萩千恵子）
R47	後手しぼり（加賀利江子）
R48	御開帳（萩千恵子）
R49	くさりゼメ（川端多奈子）
R50	折檻の魅力（須川令子）
R51	全裸の股間しぼり（愛川悦子）
R52	逆立の折檻（大塚啓子）
R53	開股椅子ゼメ正面（同右）
R54	振袖の緊縛（花坂道子）
R55	腰元の吊り責（村井知可子）
R56	ヌードしぼり（愛川悦子）
R57	本縄しぼり（同右）
R58	股間しぼり（田中芳代）
R59	落花狼藉の緊縛（同右）
R60	樹間のハリツケ（川辺砂登子）
R61	帆立舟のゼメ（益田房子）

R72	逆エビ責め（愛川悦子）
R73	変形全裸股間縛（同右）
R74	ヌード縛り（花坂道子）
R75	全裸横臥緊縛（同右）
R76	ピクニック（村田那美子）
R77	ハイヒール（萩千恵子）
R78	湖畔の宿にて（須川令子）
R79	尻立逆しぼり（同右）
R80	下着の色模様（大塚啓子）
R81	目隠し開股縛り（田中芳代）
R82	後手高小手（愛川悦子）
R83	乳房しぼり（同右）
R84	開股ベツド縛り（花坂道子）
R85	全裸床柱縛り（愛川悦子）
R86	亀ノ甲縛り（萩千恵子）
R87	ヌード股間縛り（愛川悦子）
R88	全裸乱れ髪（大塚啓子）
R89	ガンジガラメ（川辺砂登子）
R90	腎臓責め（愛川悦子）
R91	後手股間しぼり（中塚文子）
R92	腹部丸出し猿轡（伊吹真佐子）
R93	破れたシユミーズ（坂口利子）
R94	女学生のしぼり（須川令子）
R95	仰向開股しぼり（萩千恵子）
R96	乳房くさりゼメ（川辺砂登子）
R97	野外バンド責め（村田那美子）
R98	トイレ正面排泄縛（中塚文子）
R99	開股正面いじめ（伊吹真佐子）
R100	乳房搾りゼメ（佐賀美智子）

代理部分讓品総目録

新人モデル多数
新しく参加

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

売者がありさえすれば、いつでも刊行したいと思ひます。

○

私は挿画家を夢みている青年です。K誌は二十八年頃から読んでいた様におぼえていますけれど、いつ頃からか書店に見当らずがっかりしていた所、つい最近、発見して喜んで居ります。私は縛り絵、責絵に人一倍関心がありますので、描いてみたいと思うのですが、なまじ興味をもっているだけに一段とむずかしく困ってしまします。モデルになつて下さる人があつたらしくも思ひます。またいろいろの参考になることもおしえて戴けたらと思ひます。私は自分ながらおかしな性格で、一応どんなことにも関心があります。Sボーイなどにも。自分自身の中にそうした生命があるのでしよう。そのくせサディズムの傾向が一番強いのですからおかしいでしよう。ただし女性を対象にした場合だけなんですけれど……。同じ気持ちを持った者同志のグループなどが欲しいものです。それから御誌

に対してのお願いですが、いろいろの生活態度（マゾ、サド、同性愛、年令差のある男女の交際等々）のルポタージュ風な記事をもつともっと沢山載せてほしいと思ひます。こうしたものの中から一つのテーマを拾つて特集して下さい、もつと身近な面白さが出てくると思ひますが、勿論、グラビヤも含めて……。

（広島県 S・V生）

○

増刊号「悦・特」を只今入手致しまして、拝見しております。何時も乍ら、吾々サドを心行くまで大いに満足させてくれる貴社に感謝致して居りますが、今回のものは、小生にとりまして一層良き「蔵書」となりました。「写真集」を観て、御苦心がよく判り敬意を表します。絹川文代嬢がよく活躍！「縛られ姿」を出して居ますが、自動車に於けるシーンは、日頃から夢みていた小生に実にぴったりで、注文通りの様な場面の現出に大いに嬉しく思ひつゝいる次第です。又、黒のブローズの姿もよ

く撮れて居り、乳房の四重巻き、とってもすばらしく思ひます。新人モデル田代悠子嬢も少女らしい風格があつて表情が大変に気に入りました。彼女の足も可愛いく、猿轡の目元がパツチリとして美しいシーンでした。ただ縄の掛け方が、今後は「本縄」にしたものをお願いしたいと存じます。三木、浜本両嬢の「プレイ」は色模様のブローズ姿と猿轡が印象的でした。漸くベテラン化してきた大塚啓子嬢の「木洩れ陽」は、縄もしつかり掛つて居るし、表情もよく少し可哀想な場面とも思つて居ります。次に小生の好きなモデル、愛川悦子嬢の「夢路」は誠に「夢」を思い出させるシーンとしていただけます。田中芳代嬢の「シニミーズ」は白い姿の縛られた彼女に同情しそうに感じました。早く解いてあげたい……。然しもう少し、ブローズがハッキリと見えたら方がよかつたのではないでしようか。その他のそれもこれも非常に満足致しております。今後こういつた「写真集」を世の多くの人々が観賞して研究される「人生の本」としての活躍を望んでおります。本文も又、以前に掲載されたもの

ですが、再び読みますと「心一新」といった感じで面白く拝見致して居ります。特に「妻はしばらく」の一文は、小生もこの様なロマンスがあり、「想ひ出の記」として懐しく感じながら読まして戴きました。世の中は思ふ様にはなりません。せめて貴社の「本」に依つて夢を満したいと思つています次第です。貴社の発展とモデル嬢各位の御健康なる活躍をお祈り致します。（名古屋 岩本生）

花坂道子嬢

緊縛フオト分譲

大中判印画紙焼付(13×18) 13

○全裸緊縛集

略号 (はな1)

10枚1組 八〇〇円

○股間縛り集

略号 (はな2)

10枚1組 八〇〇円

○ヌード縛り

略号 (はな3)

2枚1組 三〇〇円

○股間縛り

略号 (はな4)

2枚1組 三〇〇円

○

男性責めにのみ興味を持つ愛読者で休刊以前から引続いて読んで居ますが、いつもこの種の記事の少ないことに不満を持っています。編集部の方には我々のような読者が少くないのを御存知ないのではないのでしょうか？ 然し新年号だけは榎村氏と菅氏の「宿直室」と「従卒」の二編が断然光っていました。日頃の不満も消しとんでしまいました。共に文といい内容といい絵といい素晴らしい傑作でした。二月号の葛西様の意見に全

く同感です、グラビヤにも以前のようにつくらはのせるよう計画して下さい。代理部でも写真や絵でも発売してほしいと思います。菅様の胸毛頰も面白く読みました。以前一寸発表された戦場にかける橋の日本版などは是非まとめて発表して下さい。葛西様、同好の方、力をあわせて編集部にお願ひしようではありませんか。(横浜・T生)

僕は二十五才の男性。長靴、デニムのマンボズボン、トレパン、

◎ 絹川文代嬢 緊縛姿態 新作写真 (新作)

全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

輝くばかり純白の美女の柔肌にきびしくも、痛ましく、喰い込んだ縄目の鮮やかさ。

股間縛り三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

健やかに伸びた手と足、全裸の肢体に掛った麻縄、苦痛に耐えた愁顔の美しさ。

全裸高手小手 略号(きた)

三枚一組 二五〇円

ひしひしと二の腕から豊かな胸に、黒ずんだロープがからみついてゆくむごたらしさ。

緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

後手にきりきりと縛しめられた全裸の立姿は麗しくも神々しく我々の目に輝く。

す。僕もKもサポーターを締めて居ります。僕のような趣味の方は有りませんか。(京都・池田明)

○

三十四年新年号を迎え、K・K誌益々隆盛御発展の御事、愛読者の一人として、心よりお慶び申し上げます。或る方からお電話を頂き本当に吃驚しました。小生と同じ考えなので一生懸命、電話帖を調べたこの事です。電話でのお断り致します。お灸に関心をお持ちの方、とくにマゾ的な女性の方のお灸に就いての通信発表をお待ち致して居ります。尙復刊号で売切となつて居る一号、三号までと、六、七号を御希望の方が有りますればお譲り致しても良いと思ひます。他にも復刊号は全部揃つております。最後に今後は一頁でも二頁でも結構、ぜひ灸に關した記事またはフォトを毎月載せて頂き度う存じます。余り虫のよい注文で恐縮ですがお願い致します。(松原美房)

○

本日二月号落手。久方振りに充実した内容を見て嬉しく、一気に読了しました。先月号、今月号と小生の貧しい絵について南方氏、

剣道稽古着、ボクシングや陸上選手が使用するサポーター等を着用する高校生、大学生に魅力を感じます。僕自身剣道をやりますが、最近、町道場で袴の代りに、トレパンや、マンボ・デニムズボンで剣道をやって居る青少年に接すると、ぞくぞくする様な気持をおぼえます。先日、剣道初段で硬派不良で通つて居るKが黒胴、黒マンボズボンで居たので練習を申込み突きで仰向けにひっくり返してやり気絶させ、組打の型で馬乗りとなり、面をねじって完全に屈服させた時は責める快感を心から味わいました。その若者はその後SとMである事を知り、付合つて居ます。が度々その若者と僕はプレイを演じます。僕が右翼大学の生徒でKが下級生で僕が気合を入れやる形で剣道の練習を強要し、気絶させるとか、逆に大学生のヤクザの僕が高校生のKにのされて降参し、長靴を着用して居るKに踏みつけられ気絶すると云つた風にあります。又二人が新選組の隊士となり剣道の胴と垂れとをつけた稽古着スタイルで鳥羽伏見の戦で官軍兵士に取囲まれ惨殺され、死体に暴行が加えられさらしものにされる云つたプレイもやる事があります。

◎浣腸連続フォト◎

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 愛川悦子嬢

女体『浣腸風景十二態』

(9×31Cm) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(ちふ)

奈加多氏よりの御批評が載っております。御期待にそいたいと思ひます。ただ、アイディアはあかりしても、どうしても自己のイメージが強くアイディア通りにゆかない事もありましたので、その点、アイディアを提出された奈加多氏に一言お断りしておきたいと思ひます。今月号(三月号)の絵も奈加多氏のそれを根本にしているのですが、自分の好みも大分加えまして大分原案より外れているかと思ひます。ただ前作より多少、細かく描き込んでキレイ事になりすぎたのではないかと内心おそれております。どうも中心人物と周囲の描写が、しつくりしないで困りました。

た。御高評下さらば幸いです。作因は戦国時代、野武士に襲われた豪士の娘が人質として捕われ身代金を得られないまま彼等の野営地で火焙りにされようとしている所です。

先月号(二月号)の「魔教園」の挿絵は久方ぶりに素晴らしい出来でした。先月号のにやがッカリしていた矢先だったという事もありません。滝さん失礼な言い分ですがこの調子で毎号お願い致します。本文の方はいよいよ佳境に入りましたが、唯ひたすらマンネリズムに墮さぬ様お願い致します。読者通信欄その他に批判の聲が多くなつて来た様ですが、一路邁進されん事を切に祈ります。長

篇アブ小説は、必然的に現実をはなれるというのか私の持論ですが「ヤブ」がその好例でしょう。さもないと「青い魔院」の如き失敗に終つてしまひます。この事について他日言及する事にして、ただ土路氏の一層の御努力に期待するにとどめます。先号にのつた近藤氏の時代物はやや心理的にムリで、せつかくの麗筆がアダになつた様に思ひます。氏の筆は、責められる女心の切なさを描いて天下一品と思ひますが、仮構の物語(言いかえればストーリーのある物語)の中にこれを生かしてほしいと思ひます。いろいろのべました。今日はこれにて擱筆します。(涙殺)

(涙殺)

緊縛時代映画スナップシリーズをどうかせよについて一言申し上げておきます。何故時代物が多くて現代物に少ないかなどひらき直おつた処で、愛誌奇ク即ち天星社が自主的に斯く申す映画を製作しない限り、その願望は恐らく駄目

ではないでしようか。小生がおこがましくも目下開拓中のスナップシリーズは開巻劈頭申上げた通り時代現代を問わず一カットや二カットの緊縛シーンではどうにもならないし、また小生の頭と腕即ち技術を乗り超して、新鋭のスナップ(映画館内で本場にカメラを使つて撮る人を指す)の一刻も早く誌上に現われることを望んでゐることは今も変わりありません。毎月のように大河原氏を初めとして新映画を紹介される方々のものを仮りに集計しても判る通り、現代物は極めて少数であり、また緊縛感に乏しい上に肝心のカット数が不足なのです。だからと言って現代物をシャットアウトしようと言うのではありません。ここで一寸私なりに理窟を言わせて貰うならば、時代物はそれ自体架空の世界であつて、多分に実在スターが昔の女になり切つた姿だと言つてよいでしよう。いかに拷問されようが磯付けに逢うが、何んら現代のスターを責めたことにはならない

女体『切腹風景十二態』

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円

モデル 大塚啓子嬢 略号(せふ)

◎女体切腹フォト◎

(略号こし)

「腰元白刃」

村井知可子嬢 大判判印画紙焼付 六枚一組 八百円

ここに或る種の心理的な回避があるものとすれば、いきおい緊縛シーンは時代物に多く傾注することは理の当然と考えますが如何なものでしょう？

兎まれ、要望は要望として、斯う言った新しい分野（何も緊縛に限らず）を続々と開拓しようではありませんか。私は最近テレビ映画緊縛シーンを集め始めました。愛機誠に御苦労さまながら他日公開させて頂く予定です。緊縛映画構成の責任者として敢えて申上げたことに御諒解と御声援を賜りますよう切に御願ひして擲筆させていただきます。
(東京・牧高志)

大塚啓子様。近頃になってやっと、あなたのフォート集の内「とか」を拝見しました。ほんとに、すばらしい肢体（姿態）をされていきますネ。その見事にまで偉大なヒップ、バスト、押せばぶっくりと、凹みそうな白いおとめの肌！僕は太のフアンになりました。一度は本誌から遠ざかっていた者ですが、あなたのおかげで又購読させていただきます。と、言ってもあなたより一つ年上の二十才になる者です。あなた自身では、どんなポーズを好まれますか？ あな

たのポートルートを見ながら、こんなポーズで写ってもらえたらと空想しています。それは、あなたが学生時代愛用された水着を着て踊ってるポーズ。むろん、着用したら、全身を強く締めつける位い小さい目の物です。又、水着でなく、パンティだけは、福岡の池田ふみ子さんにたのみます。やはりパンティも、小さい目のナイロン製の物で、体にびったりと喰いこみ、うんと切れ上った物が良いでしょうネ。どちらの時も、縄はつけず大胆なアクロのポーズで写ってもいい物が出ると思っています。
(因島市・岡野よしひろ)

○ 小生は貴誌創刊以来の愛読者で旧号のKKは殆んど目を通して来ました。今度久方振りに手にしたのですが、大分低姿勢のように見受けられ、世の推移と共にこれもまた当然のことと愚考される次第です。ただ羽村京子さんの文に接し懐かし、且、愉快に思われます。羽村さんは確か創刊初期からの投稿者であったように記憶します。これまで読んだKKの中では古川裕子さんのものには全く心打

新作『血紅使用切腹フォート』分譲

モデル 絹川文代嬢

(大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

絹川文代嬢が双肩ぬぎとなり雪よりも白く、豊かに息づく下腹の左脇へ、氷の刃をぐさり突き立て、鮮血が、みるみる傷口から、にじみ出てくるという光景から初まり、きりきりと臍下を切り開き、忽ち血汐が溢れ出る壮烈きわまりない女性切腹の姿態を血紅を使用して連続撮影した中の、クライマックス・シーンばかりを選んだ六枚のシリーズであります。

潔く、あらゆる衣服下着をかなぐり捨てて、今は生れたときと同じ姿になった文代嬢が、右手に握った短刀を、我と我が下腹へ突き立てて、激痛に悶え苦しむ姿態を、血紅によって、その傷口から迸り出る血汐をあらわし、女体切腹の得難い雰囲気であらゆる角度から狙った中から最も真に迫った傑作ばかり六枚を選んで、ここにマニア諸氏の高見に資する次第であります。

たれ一番印象に残っております。古川さんは今どうしておられるか知りたいものです。とまれKKは色々のアブ心理を、文章又は画、フォートによって昇華させ、鎮静さ

なき人生の友となり、プレーキの役目を果たすものと思う。何卒この人達のためにも編集同人の益々御奮斗を祈る次第です。
(兵庫・内山生)

すことに大きな社会生活のプラスがあると思われ。アブ心理は自らのものと、後天的のものとがあるが、先天的のものは重症であって、この人達に取ってKKはこよ

○ 十一月より本誌を愛読して居り他誌にない特色に今後毎月読んでゆく積りです。今まで何回も中年の男性を思い切り強く縛り上げ、

懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ 賞金 ☆

告白と手記と体験記

優作 一篇に付 一万円 若干篇

秀作 一篇に付 五千円 若干篇

佳作 一篇に付 二千円 若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

責めることが出来たらと思っております。しかし残念にも実現の機会もなく、もんもんの日を送つて来ました。本誌には男性ヌードや、マゾ、サドの写真が少く、その点、もの足りません。私は男性でありながら、女性ヌードには全然興味を持てません。是非本誌に男性ヌードを採り上げて頂くようお願い致します。

(大阪 T・O生)

○ 小生は男性の肉体美に非常なあこがれを持つ青年です。奇巧も将来もつと男性の裸体美をグラビヤ

に取入れて下さるようお願い致します。同好の士は山ほど居る筈です。そろそろ春がやって来ます。小生の裸体運動の季節です。健康増進の意味からも、この裸体鍛練は大変に効果のあるものです。小生は川とか海岸を利用して裸体体操を行っていますが、お蔭で相当に良い体格になり、絶対に風邪などにはひきません。野外で大らかに裸体鍛練を行う人の一人でも多くなることを希望してやみません。

(尼崎市・西山生)

○ 左記「アイデア」とも言えぬかも

しれませんが一言。正月映画第一週、新東宝映画「爆笑王座征服」の中で白虎隊が登場しますが、非常に優秀だと思えます。カラーでもあり、女優さんも美しく、切腹のシーンでも中央の美しい隊員が前肌を拡げての演技は必見のものです。処で御社のモデルさん達も優秀な方ばかりですから、是非一度この映画を観ていただいて参考とされたいと思います。(一)白虎隊一人でも結構です。服装は映画に準じます。モデルは絹川嬢が最適でしょう。衿をくつろげた場合、腹部を充分に露わす。切腹刀は真刀でない方が力が入れられるでしょう。血紅使用、刃先の当る部位は必ず下腹部のこと。表情は特に注意して姿勢は映画の如く力感のあるものにして頂きたい。(二)弁天小僧Ⅱ弁天小僧大詰の切腹場面。両肩肌ぬぎにて、片方の肩から腕にいれずみを描けば尚良し。血紅使用。この場合、晒を巻いたものと、ないものと両方とも可。刃はなるべく大刀が良いと思います。着衣は長襦袢のみ。但し禪使用のこと。禪は十分見えるように注意して、晒よりもガーゼでモッコ禪の如く造り、巾が自由になるものが良いと思います。

(三)最近、実演、映画等に見られるような、短刀が突刺さったまゝになる特殊刀を使用して、いろいろ変った情景が得られると思えます。一般に演劇人はその表情、姿態に真実的なものを見せるのが仕事で当然ですが、御社のモデルさん達も一層の御努力あられんとを切望致します。先般、誌上に切腹の際の切口を写実的に書いたものが載っていましたが、これは映画などでは既に一般の剣劇にも、ドローランその他で巧みに処理してあるのを見受けるので割合簡単なのではないのでしょうか。腹部血紅使用の際、もう少しドロリとした感じが欲しいと思います。(映画では黒白の場合、ソフトチヨコレートを使う由)又、腹切りの最初と最後の場面以外は、必ず両手で力をこめて刀を握り、演技して頂きたいものです。

(東京 N・S生)

【告知板】○私信の転送並に投稿者の住所照会などには一切応じておりません故御諒承願います。○発行所に対する直接の御訪問は用件の如何を問わず固くお断りいたします。用件はすべて通信にて御願ひ申し上げます。